入研協

大学入試研究の動向

第33号

特集１「大学入学者選抜の在り方について―学力評価のための新テストの導入を考える―」
平成２７年度入研協大会（第１０回）「公開討論会」

特集2－1「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試平成２７年度入研協大会（第１０回）「企画討論会①」

特集2－2「各大学の個別選抜改革・再考―大学の主体性と個性をいかに反映させるか―」
平成２７年度入研協大会（第１０回）「企画討論会②」

特集３「大学入試と高校生の学習行動」
平成２７年度入研協大会（第１０回） 大会関連行事「大学入試センターセミナー」

平成28年２月

全国大学入学者選抜研究連絡協議会
独立行政法人大学入試センター

ISSN:2187-4441　ISSN-L:0289-8160

目　　次

はじめに　　・・・・・・ 全国大学入学者選抜研究連絡協議会
企画委員会委員長　川嶋　太津夫

○特 集 1
「大学入学者選抜の在り方について　―学力評価のための新テストの導入を考える―」・・・5
平成２７年度入研協大会（第１０回）「公開討論会」
日　　時：平成２７年５月２８日（木）９：３０～１２：３０
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　丹羽ホール
司　　会：大津　起夫（大学入試センター研究開発部長・教授）
古谷　涼秋（東京電機大学　工学部教授）

パネリスト及びサブテーマ：
橋田　裕（文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長）
「高大接続改革における大学入学者選抜の改革について」
大塚　雄作（大学入試センター教授／試験・研究統括官）
「新テストの円滑な導入に向けて　～段階的戦略を考える」
山内　薫（東京大学大学院理学系研究科教授／国立大学協会入試委員会専門委員）
「新テストを活用するために　～大学教育の視点から」
宮本　久也（東京都立西高等学校長／全国高等学校長協会会長）
「新テストの可能性と課題　～高校教育の視点から」

○特集2－1
「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
平成２７年度入研協大会（第１０回）「企画討論会①」
日　　時：平成２７年５月２８日（木）１４：００～１６：３０
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　1205・1206 セミナー室
司　　会：川嶋　太津夫（大阪大学教授）

パネリスト及びサブテーマ：
吉田研作（上智大学言語教育研究センター長）
「英語資格・検定試験の入学試験への活用促進に関する最近の動向と活用例」
青山　彰（白梅学園高等学校校長）
「グローバル化に対応した英語教育の改革に、高等学校はいかに取り組むか」
根岸雅史（東京外国語大学教授）
「英語の資格・検定試験の大学入試への活用：可能性と課題」

○特集2－2
「各大学の個別選抜改革・再考　―大学の主体性と個性をいかに反映させるか―」・・・・・95
平成２７年度入研協大会（第１０回）「企画討論会②」
日　　時：平成２７年５月２８日（木）１４：００～１６：３０
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　丹羽ホール
司　　会：真鍋　芳樹（香川大学教授　アドミッションセンター）
大久保　敦（大阪市立大学教授　大学教育研究センター）

パネリスト及びサブテーマ：
河添　健（慶応義塾大学教授　総合政策学部長）
「AO 入試の 25 年　―慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの試み―」
倉元　直樹（東北大学准教授　高度教養教育・学生支援機構）
「東北大学における入試のトータルプランニング
―AO 入試成功のカギを握る一般選抜個別試験の設計戦略―」
林 篤裕（九州大学教授　基幹教育院）
「思考力・表現力・協働性の評価を目指して　―九州大学 21 世紀プログラムの場合―」

○特 集 ３・・143
「大学入試と高校生の学習行動」
平成２７年度入研協大会（第１０回）大会関連行事「大学入試センターセミナー」
日　　時：平成２７年５月２７日（水）１５：００～１７：００
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　丹羽ホール
司　　会：山村　滋（大学入試センター研究開発部・教授）
報 告 者：濱中淳子（大学入試センター研究開発部・准教授）
ゲ ス ト：水石明彦（埼玉県立いずみ高等学校・校長）

はじめに

「大学入試研究の動向」第３３号をお届けします。

独立行政法人大学入試センターは、平成１８年４月から、それまでの国立大学に加えて、公立大学、私立大学に参加を呼びかけ、大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査及び研究に関し、研究交流の一層の推進に資するために、大学入試センターの重要な事業の一つとして国公私立を含めて我が国の大学入試の改善に資するために全国大学入学者選抜研究連絡協議会（入研協）を開催してきました。

入研協では、毎年５月から６月にかけて大会を開催し、研究会、公開討論会、企画討論会を開くとともに、「大学入試研究ジャーナル」、「大学入試研究の動向」の刊行物の編集・刊行等の活動も行って参りました。

平成２７年度大会（第１０回）は、東京電機大学と共催で入研協大会及び関連行事を平成２７年５月２７日(水)～２９日(金)の３日間、東京電機大学東京千住キャンパス（東京都足立区）にて開催しました。昨年の第９回大会に比べ参加大学、参加者とも大幅に増加しました。今回の大会では、企画討論会を、①「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試」と、②「各大学の個別選抜改革・再考」の二つのテーマで開催し活発な議論を行いました。

また「公開討論会」は、大学入学者選抜の在り方について－学力評価のための新テストの導入を考える－をテーマにしたことにより、高校関係者など７８名の一般参加を含めて、参加人数全体は６０２名にのぼりました。

共催大学である東京電機大学には、公開討論会をはじめ、大会の企画・運営に多大なご尽力をいただきました。同大学のご協力に感謝いたします。

本号の刊行に当たり、企画討論会、公開討論会及び大学入試センターセミナーでパネリストや司会を担当され、テープ起こしの校正等に御協力いただいた皆様、大学入試センター事務局等の方々に、改めて心から御礼を申し上げます。

なお、平成２８年度の入研協大会（第１１回）は、平成２８年６月２日(木)～３日(金)の２日間、立命館大学との共催で、立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催する予定です。また、大会前日の６月１日（水）には同所にて大学入試センターによるセミナーも予定されております。

多数の皆様方の参加をお待ちしております。

全国大学入学者選抜研究連絡協議会
企画委員会委員長　　川嶋　太津夫
（大阪大学未来戦略機構　教授）

特集１

平成２７年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第１０回）公開討論会

「大学入学者選抜の在り方について　―学力評価のための新テストの導入を考える―」

日　　時：平成２７年５月２８日（木）９：３０～１２：３０
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　丹羽ホール
司　　会：大津　起夫（大学入試センター研究開発部長・教授）
　　古谷　涼秋（東京電機大学　工学部教授）

パネリスト及びサブテーマ：

橋田　裕（文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長）
「高大接続改革における大学入学者選抜の改革について」
大塚　雄作（大学入試センター教授／試験・研究統括官）
「新テストの円滑な導入に向けて　～段階的戦略を考える」
山内　薫（東京大学大学院理学系研究科教授／国立大学協会入試委員会専門委員）
「新テストを活用するために　～大学教育の視点から」
宮本　久也（東京都立西高等学校長／全国高等学校長協会会長）
「新テストの可能性と課題　～高校教育の視点から」

○司会（古谷）

私は、東京電機大学の入試センターのセンター長をしております古谷と申します。大学入試センターの大津先生と一緒に、本日の司会を承りました。よろしくお願いいたします。

今回の公開討論会の趣旨について説明いたします。中央教育審議会の答申で、高大接続改革の一環として、学力評価のための大学入学希望者学力評価テスト（仮称）及び高等学校基礎学力テスト(仮称)の導入や、大学に対して能力、意欲、適性などを多面的、総合的に評価する大学入学者選抜への転換が求められました。現時点の予定ではありますが、高等学校基礎学力テストが平成 31 年度、大学入学希望者学力評価テストが平成 32 年度に予定されていると伺っております。このような状況を踏まえ、新テストの内容、科目型だとか5科目型、総合型、あるいは実施方法はもとより、大学の個別試験における受験性の能力、適性、意欲をどう多面的、総合的に評価するのか、高校だけでなく大学も強い関心を寄せているのが現状であります。

本討論会には、事前予約として430名の方に予約いただき、非常に興味がある話題だったと思っております。本討論会では、新たな大学入学者選抜についての検討の経緯を整理し、新テストの実施方法及び問題の内容についての検討状況を踏まえ、これらの新テストの大学入学者選抜における活用方法について議論していきたいと考えております。今後の大学入学者選抜を改善する契機となれば良いと考え、企画いたしました。

本日は、そのために、4 名のパネリストの講師の先生方をお願いしております。4 名の先生方をご紹介してまいります。公開討論会の封筒のほうにパネリストのお名前を書かせていただいております。上から橋田様、山内先生、宮本先生、大塚先生という順番になっているんですが、その後お話しになるテーマなどを考えたときに、お話の順番としましては、橋田様、大塚先生、山内先生、宮本先生の順番のほうが良いということで、少し順番を入れ替えさせていただいて、お話をいただくということにしてございます。ただ、ごらんのように、前にお並びいただいている順番はプログラムの順番で並ばれておりますので、ご紹介のほうにつきましてはプログラムに従ってご紹介していきたいと考えております。

まず、演壇の中央のほうから、文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長の橋田裕様です。今回は、高大接続改革における大学入学者選抜の改革についての整理をお願いしてございます。よろしくお願いいたします。

次に、東京大学大学院理学系研究科教授、国立大学協会の入試委員会の専門委員でもあられます山内薫先生です。大学入試を実際に実施する立場から、「新テストを活用するために」というテーマでのご講演をお願いしてございます。

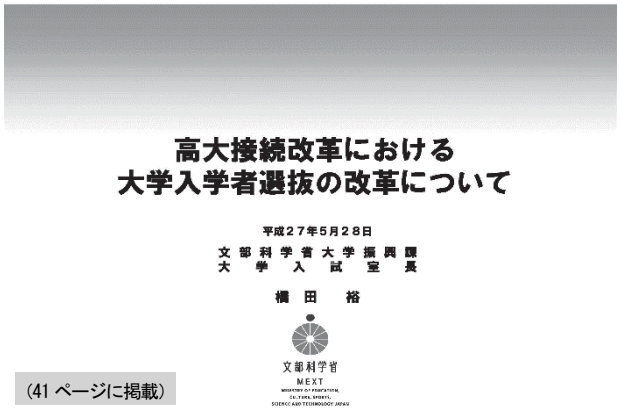
その隣が、今度は高校側の立場から、東京都立西高等学校長、全国高等学校長協会会長の宮本久也先生です。新テストを受ける、あるいは新テストに向けて高校生を指導するという立場から、「新テストの可能性と課題」というテーマでご講演をお願いしてございます。

一番外側になりますけれども、大学入試センターの試験・研究統括官の大塚雄作先生です。「新テストの円滑な導入に向けて」という題で、新テストの内容、実施方法などについての検討状況をご報告いただくことといたしております。

最後になりますけれども、公開討論会の封筒の中に、今回お話しになられますパワーポイント(暫定版)を、事前資料として配付させていただいております。パワーポイントは橋田様、宮本様、大塚様の分がございます。また、質問票がございますので、質問事項が何かございましたら、休憩時間に回収しまして、休憩後の討論のときに使わせていただこうと思いますので、ぜひご記入いただければと思います。

ご講演は約25分ずつ、4名のパネリストの方にお願いしておりまして、その後休憩を挟みまして、質疑応答という段取りで進んでいきたいと思います。では、約3時間の長い時間ですけれども、よろしくお願いいたします。

それでは、講演に移りたいと思いますので、準備をして橋田室長にお願いしたいと思います。



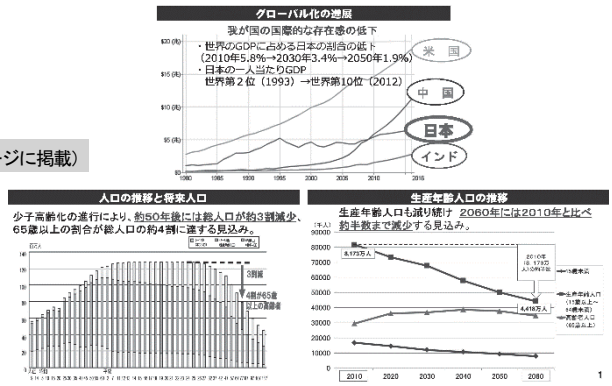
（41 ページに掲載）

○橋田室長

私のほうからは、今回の討論会の前提といたしまして、今の高大接続改革の経緯ですとか、答申の内容、プラン、今の議論の状況のところをお話しさせていただきたいと思っております。今回は、学力評価のための新たな二つのテストの議論が中心になると思いますけれども、この二つのテストがどういう全体状況の中で位置づくものなのかというところを中心にお話しさせていただければと思います。既に皆さん御案内の内容も多々盛り込まれているところでございますけれども、前提条件の少し確認というところで私のほうからお話しさせていただきます。

今、向き合わなければならない我が国の状況

(41 ページに掲載)



今の社会情勢を見てみますと、今後向き合わなければならない我が国の状況ということで、まず一つには、グローバル化の進展ということで、今後の我が国の国際的な存在感の低下が見込まれているということで、こちらのほうは世界の GDP に占める日本の割合ということで、今後の見込みの推計でございますけれども、アメリカ、中国、この発展に比べますと、日本の相対的な位置づけが低下していくということがデータとしては出てきているという状況でございます。また、人口の推移、将来人口ということで、約 50 年後には総人口が 3 割減といったような見込みのデータも出てきております。これに伴いまして、生産年齢人口ということで、2060 年には約半数まで生産年齢人口も減少していくのではないかといったような状況にもなってきております。

子供たちの未来

今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い

マイケル・A・オズボーン氏（オックスフォード大学准教授）

子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く

キャシー・デビッドソン氏（ニューヨーク市立大学大学院センター教授）

また、こちらのほうは諸外国の研究者の推測という形にはなりますけれども、子供たちの未来ということで、今後 10 年から 20 年程度で約半分の仕事が自動化される可能性が高いといったような研究、指摘ですとか、また、子供たちの 65%は、大学卒業後今存在していない職業に就くといったような指摘もなされているといったような状況でございます。

社会で自立して活動していくために必要な力

○これまで

「ゆとり」か「詰め込み」か

⇒どちらも知識量に重きを置いた考え方
⇒終わりのない二項対立

○これから

社会で自立して活動していくために必要な力

①知識・技能の習得

②知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力
（「思考力・判断力・表現力）

③主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度
（「主体性・多様性・協働性」）

3

こういった中、子供たちにいわゆる社会で自立して活動していくために必要な力を身につけさせていくということで、これまではいわゆるゆとり化、詰め込み化といったような、どちらかといいますと知識量に重きを置いた考え方、これに基づいていわゆる二項対立的な議論がなされてきていたわけでございますけれども、これからは社会で自立していくために必要な力ということで、知識、技能の習得はもちろんのこととして、先ほど御紹介したような今後の社会の変化も踏まえながら、知識、技能を活用して自ら課題を発見し、その解決に向けて探求し、成果等を表現すると、そういったような思考力、判断力、表現力といったようなもの、また、主体性を持ちながら、多様な人々と協働しながら学習する態度と、大きくこういった三つの力が重要になってくるのではないかということで、今回の中教審答申につきましても、こういった状況、あるいは力ということで答申がなされております。

高大接続改革をめぐる中央教育審議会の審議経緯

- 平成24年８月に文部科学大臣から中央教育審議会に対し諮問が行われ、高大接続特別部会を設置。同年９月から審議を開始。
- 平成25年10月31日に教育再生実行会議が第四次提言を取りまとめた後は、第四次提言を踏まえた検討課題について審議。
- 平成26年３月25日に「審議経過報告」を取りまとめ公表するとともに、パブリック・コメントや関係団体からの意見照会を実施。
- 平成26年12月22日の中央教育審議会総会において、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について　～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」を文部科学大臣に答申。

※「高等学校基礎学力テスト（仮称）」については平成31年度から、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」については、平成32年度（平成33年度大学入学者対象）から段階的に実施することが提言。

4

中教審答申につきましては、平成 24 年 8 月の大臣からの諮問を受けまして、この間教育再生実行会議の提言の内容等も踏まえまして、12 月に取りまとめられたというところでございます。この中で、高等学校基礎学力テストにつきましては平成 31 年度から、大学入学希望者学力評価テストについては平成 32 年度から段階的に実施するということが提言されたというところでございます。

中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」（平成26年12月22日）
～主なポイント（要旨）～

○ 今回の答申は、教育改革における最大の課題でありながら実現が困難であった「高大接続」改革を初めて現実のものとするための方策として、「高等学校教育」「大学教育」及び両者を接続する「大学入学者選抜」の抜本的改革を提言するもの。

若者の多様な夢や目標を支える高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜への刷新

○ 生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに速く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。そうした変化の中で、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに育むことはできない。

○ 現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性をもって多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評価されていない。

6

この中での答申のポイントの要旨ということでまとめさせていただいておりますけれども、先ほど冒頭の挨拶の中でも少し触れさせていただきましたけれども、高大接続改革の議論というのは、歴史的にも節目、節目で議論がなされてきたというところでございます。なかなかこれまでの提言事項は必ずしも実現できてこなかったという面もございます。当然実現されてきたところもございます。ただ、全体としては、なかなかその部分は実現困難ではなかったかというところで、今回高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜、この 3 者の抜本的な改革を提言するものというところでございます。

この中でも、現状の 3 者の状況といたしまして、どちらかというと知識の暗記、再生に偏りがちではないかというところで、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性にかかわる真の学力が十分に育成、強化されてないのではないかといったようなことが指摘されております。

○ この状況を、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の改革による新しい仕組みによって克服し、少年少女一人ひとりが、高等学校教育を通じて様々な夢や目標を芽吹かせ、その実現に向けて努力した積み重ねを、大学入学者選抜においてしっかりと受け止めて評価し、大学教育や社会生活を通じて花開かせるようにする必要がある。

○ このため、高大接続の改革は、単に大学入学者選抜の在り方にとどまらず、高等学校教育、大学教育、両者を接続する入学者選抜の三つを連続した一体のものととらえ、改革するもの。

○ これらのことから、高大接続の改革は、「大学入試」のみの改革ではない。その目標は大学入試の改革を一部に含むものではあるが、高等学校教育と大学教育において、十分な知識・技能、十分な思考力・表現力・判断力、及び主体性を持って多様な人々と協働する力の育成を最大限に行う場と方法の実現をもたらすことにある。

○ また、高大接続改革は、知識・技能の習得を無視する改革ではないという点も重要である。「知識・技能」「思考力・表現力・判断力」「主体性・多様性・協働性」のすべてを十分に向上させることを目指したものであり、改革によって高校生・大学生が身に付けられるようになる力は、十分な水準の知識・技能はもちろんのこと、自分で目標を持って他者と協力しながら新しいことを成し遂げていく力までを含むものである。

6

一人一人が将来の夢、目標、そういったものの実現に向けて努力した積み重ねを、大学入学者選抜においてしっかり受け止める。その上で、大学教育、社会生活を通じて花開かせるようにする必要があるといったようなことが指摘されております。

また、高大接続改革といいますのは、単に入学者選抜のあり方にとどまらない。つまり、高等学校教育、大学教育、両者を接続する入学者選抜、この三つの連続した一体的なものとして捉えるものがあるというところでございます。つまり、今回の高大接続改革は、どうしても入試のところが焦点化されがちではあるんですが、大学入試のみの改革ではないというところで、先ほどの 3 者の一体的な改革をどう進めていくかというところが一つポイントでございます。

また、よく今回の改革は知識、技能をおろそかにするのかといったようなところもございますけれども、知識、技能は前提としつつ、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性、この全ての要素を向上させていくという観点で提言がまとめられているというところでございます。

高大接続改革のポイント

①高等学校教育改革

◆ 生徒が、国家と社会の形成者となるための教養と行動規範を身につけ、夢や目標をもって主体的に学ぶことのできる環境を整備するため、学習指導要領を抜本的に見直し、アクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図る。
また、教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」を導入。

②大学入学者選抜改革

◆ 大学入学者選抜で、大学で学ぶための力のうち、特に「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するため、大学入試センター試験に代えて、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を導入。

◆ 個別選抜については、多面的な選抜方法をとるものとし、多様な背景を持った学生の受け入れが促進されるよう、アドミッション・ポリシーにおいて明確化。このため、アドミッション・ポリシー等の策定を法令上位置付ける。

③大学教育改革

◆ 学生が、高等学校までに培った力をさらに発展・向上させるため、大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントを確立、アクティブ・ラーニングへと質的に転換。

7

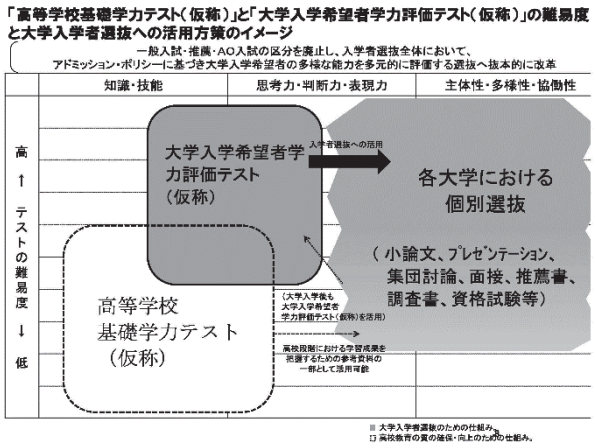
高等学校教育につきましては、指導要領の見直し、アクティブ・ラーニング、また、教育の質確保の向上、生徒の学習意欲改善に役立てるという観点で、高等学校基礎学力テストの導入が提言されているというところでございます。

大学入学者選抜の改革につきましては、特に思考力、判断力、表現力を中心に評価するという観点で、大学入試センター試験に代えて大学入学希望者学力評価テストを導入していくというところでございます。大学入試センター試験は、これまで高等学校の生徒の基礎学力の把握、向上に大きな役割を果たしてきたというところで私どもも認識しておりますけ

れども、よりこれから求められる思考力、判断力、表現力、この部分を共通テストの部分でどう見ていくかというところが課題になっているというところでございます。個別選抜につきましては、学力の三つの要素を評価できるよう多面的、総合的な選抜方法を取るということで、アドミッション・ポリシーの明確化ですとか、法令上の位置づけ、財政支援といったようなことが盛り込まれております。

大学教育改革につきましては、カリキュラムマネジメントの確立、アクティブ・ラーニングの飛躍的充実といったようなことが盛り込まれているというところでございます。

（42 ページに掲載）

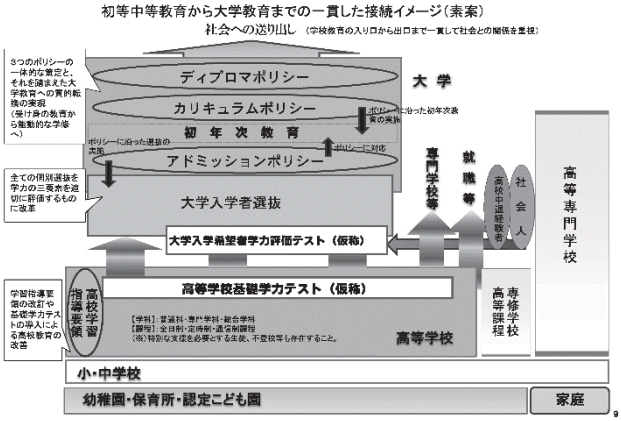


この二つのテストと個別選抜の関係性というところで、こちらのほうを少しお示しさせていただいておりますけれども、これも答申の参考資料として付けられていたものでございます。高等学校基礎学力テストにつきましては、比較的ボリュームゾーンのところから、いわゆる学力にいろいろ課題を抱えている層を対象にして、知識、技能を見ていく。当然思考力、判断力、表現力の面も一部見ていくといったような内容、レベルになっております。大学入学希望者学力評価テストにつきましては、知識、技能を前提としつつ、思考力、判断力、表現力を中心とするようなもの。また、選抜性の高い大学でも活用可能な程度の難易度のものも出題するということが言われております。

各大学の個別選抜につきましては、大学入学希望者学力評価テストも活用しながら、小論文、プレゼンテーション、集団討論、面接、調査書、資格試験等さまざまな方法がございますけれども、そういったものを各大学の判断で組み合わせていただきながら、主体性、多様性、協働性の部分を中心に、学力の三つの要素をどう評価していくかというところが課題になっているというところでございます。

また、高等学校基礎学力テストにつきましては、第一義的には学習の改善等に用いられるものでございますけれども、高等学校段階における学習成果の把握のための参考資料の一部として活用可能であるというような整理になっております。これが全体のイメージでございます。

（42 ページに掲載）



こちらのほうは、幼稚園段階から社会への送り出しということで、初等中等教育、大学教育までの一貫した接続のイメージ図というところでございます。社会への送り出しの部分を視野に入れつつ、大学におきましてはディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、それを踏まえたアドミッション・ポリシーということで、この三つのポリシーの一体的な策定、大学教育の質的転換が求められてくるというところでございます。また、それを踏まえて、個別選抜につきましては、学力の三つの要素を適切に評価するようなものに変えていく必要があるということでございます。高等学校教育につきましては、指導要領改訂の議論もございます。また、基礎学力テストの活用等による高校教育の改善といったようなところで、この全体像の中でそれぞれ取り組んでいく必要があるというのが今回の課題であります。

高等学校教育改革　①学習指導要領の改訂

中央教育審議会総会「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（平成26年11月20日）

審議事項（抜粋）

教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた、新しい時代にふさわしい学習指導要領等の基本的な考え方

○ これからの時代を、自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力の育成に向けた教育目標・内容の改善

○ 課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の充実と、そうした学習・指導方法を教育内容と関連付けて示すための在り方　など

高等学校教育

◆ 高校生が、国家・社会の責任ある形成者として、自立して生きる力を身につけることができるよう、例えば以下のような課題についてどのように改善を図るべきか。

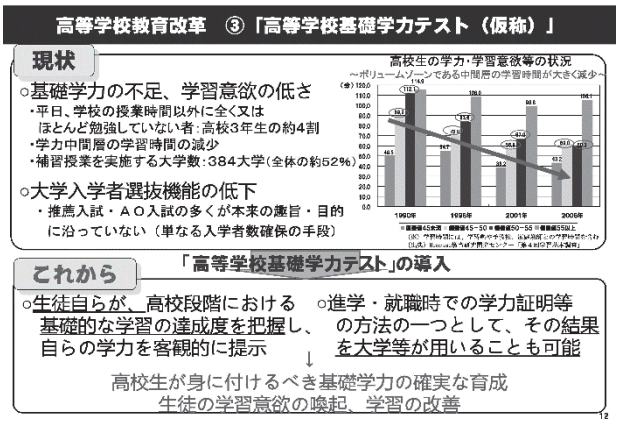
（1） 今後、国民投票年齢が満18歳以上となることなども踏まえ、国家・社会の責任ある形成者となるための教養と行動規範や、主体的に社会に参画し自立して社会生活を営むために必要な力を、実践的に身に付けるための新たな科目等の在り方
（2） 日本史の必修化の扱いなど地理歴史科の見直しの在り方
（3） より高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための新たな教科・科目の在り方
（4） より探究的な学習活動を重視する視点からの「総合的な学習の時間」の改善の在り方
（5） 社会的要請を踏まえた専門学科のカリキュラムの在り方など、職業教育の充実の在り方
（6） 義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための教科・科目等の在り方　など

その上で、高等学校教育の部分について少し紹介させていただきます。昨年の 11 月の中教審に、教育課程の見直しの諮問がなされております。今の学習指導要領の構成といたしましては、どちらかといえば内容の部分が中心になりがちなんですけれども、新しい時代に求められる資質、能力を踏まえた教育目標、内容、それを踏まえた学習指導方法、学習評価のあり方を一体として捉えた学習指導要領の基本的な見直しというところで、この諮問の議論が始まっております。

その中で、高等学校教育の関係では、高校生が国家、社会の責任ある形成者として自立して生きる力を身につけさせることができるようにということで、この点については国家、社会の形成者としての教養と行動規範、あるいは主体的に社会に参画して、自立して社会生活を営むことができると、そういった力を身につけるための新たな教科、科目のあり方、また、日本史の必修化ですとか、地理、歴史の科目のあり方、総合的な学習の時間のあり方等が検討課題になっているというところでございます。

これらに加えて、より高度な思考力、判断力、表現力等を育成するために、新たな教科、科目のあり方が検討されております。先日の教育課程企画特別部会の中では、数学と理科、そういうものを合わせたような科目、いわゆる SSH における取り組みのような探求の取り組みを評価できるような科目のあり方といったようなものも少し議論されているというところでございます。

こちらのほうは、アクティブ・ラーニングの充実ということで、思考力、判断力、表現力、主体性、多様性、協働性の観点から、子供たちが学習の見通しを持って主体的、協働的に課題の発見、解決に取り組んでいくことが記載されております。最後には、学習したことを振り返るということで、いわゆる一斉授業だけではなくて、ペアで意見交換したり、ホワイトボードや付箋を使って話し合い活動をしたり、先生が説明するだけではなくて、生徒が説明したり、立場を決めて討論したり、ポスターセッションをしたりということで、かなりこの点については、小学校・中学校のほうではこういう取り組みが進んでいるんだけれども、なかなか高校では進んでいないのではないかといったようなことが指摘されております。当然のことながら、各高校の努力によりまして探究的な活動、いわゆる言語活動、アクティブ・ラーニングのような活動はかなりしっかり取り組んでいるところもあるとは思いますけれども、全体的な傾向としては、まだなかなか高校になるとこの点が弱いのではないかといったようなところが指摘されております。 （43 ページに掲載）



また、高等学校教育の課題といたしましては、なかなか基礎学力の不足、また、学習意欲の低さということで、特にボリュームゾーンの学習時間が減少しているのではないかと指摘されております。結局大学に受け入れても、補習を実施したりしないといけないといったようなことも指摘されております。また、大学入学者選抜機能の低下ということで、推薦、AO 入試が本来の趣旨、目的に沿っていないところもあるのではないかといった指摘もあります。どうしても経営的な観点から入学者数の確保の手段になっている大学もあるのではないかといったような課題も指摘されております。

高等学校教育改革　③「高等学校基礎学力テスト（仮称）」について

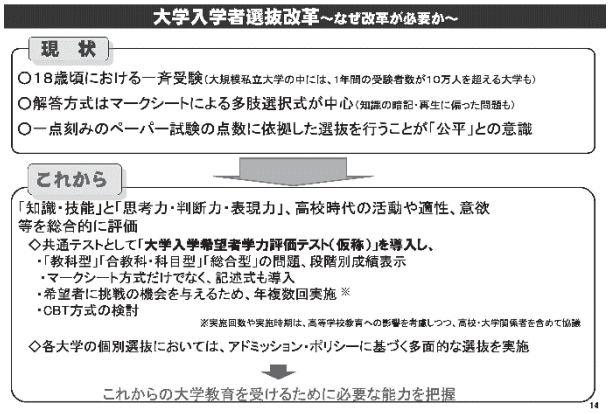
対象者	○希望参加型
内容	○実施当初は「国語総合」「数学Ⅰ」「世界史」「現代社会」「物理基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」等の高校の必履修科目を想定（選択受検も可）。 ○「思考力・判断力・表現力」を評価する問題を含めるが、特に「知識・技能」の確実な習得を重視。 ○各学校・生徒に対し、成績を段階で表示
解答方式	○多肢選択方式が原則、記述式導入を目指す。
実施方法	○在学中に複数回（例えば年間２回程度）高校２・３年での受験を可能とする。 ○実施時期は、夏～秋を基本。※ ○ＣＢＴ方式での実施を前提に開発を行う。 ○英語等については、民間の資格・検定試験も積極的に活用。
イメージ	全国学力・学習状況調査のＡ問題（主として知識に関する問題）及びＢ問題（主として活用に関する問題）の高校教育レベルの問題を想定

（43 ページに掲載）

※学校現場の意見を聴取しながら検討

13

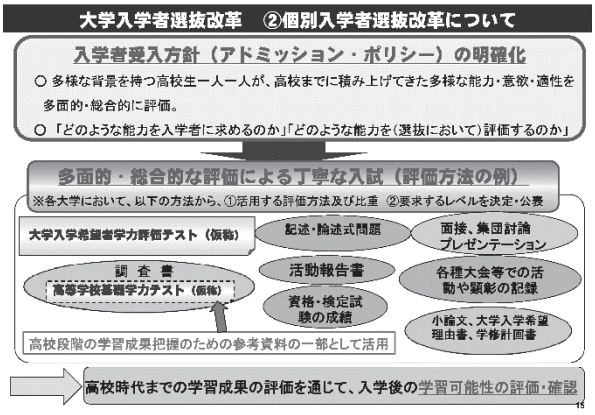
そういった中で、高校生が自ら高校段階の基礎的な学習の到達度を把握しまして、その学力を客観的に提示していく、また、その成果を大学が用いることも可能にしていくということで、高校生が身につけるべき基礎学力の確実な育成、学習意欲の喚起を狙っているというところでございます。そういう意味で、高等学校基礎学力テストでございますけれども、希望参加型ということで、そういう意味では全部義務化するというイメージでは考えてないところでございます。実施当初は国語、総合、数学Ⅰ等必履修科目が想定されているというところでございますけれども、ここのところは最初からこれを全部やるかどうかというのはまた議論になるというところでございます。その他、記述式の導入ですとか、複数回実施、CBT の実施、資格検定試験の導入ということも言われているというところでございます。



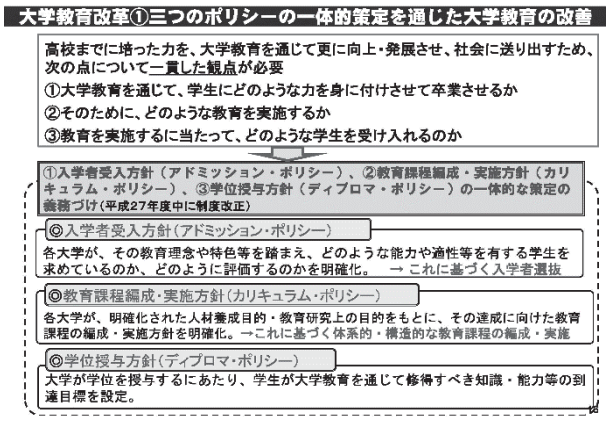
大学入学者選抜改革につきまして、これは個別選抜、センター試験を含めて全体的な状況ということで、あくまで答申の考え方を踏まえて整理したものということで、個別の大学の状況と必ずしも一致しないところがあるかもしれませんけれども、少し紹介いたします。

答申での関心事項といたしましては、現状の課題といたしまして 18 歳ごろの一斉受験になっているということで、大規模私学の中では年間受験者数が 10 万人を超えるような大学もございます。回答方式は、マークシートによる多肢選択になっている面があるのではないか、知識の暗記、再生に偏った問題も見られるのではないかというところでございます。この点については、国立大学を中心に当然記述、論述式でかなり高度な思考力、判断力、表現力を問う問題もあろうかと思います。また、私学の中には、最近の出題の改善という中で、記述式を導入したりというところもございますけれども、どうしても多くの受験生をさばかないといけないようなところを中心に、こういう傾向が見られるのではないかというところでございます。

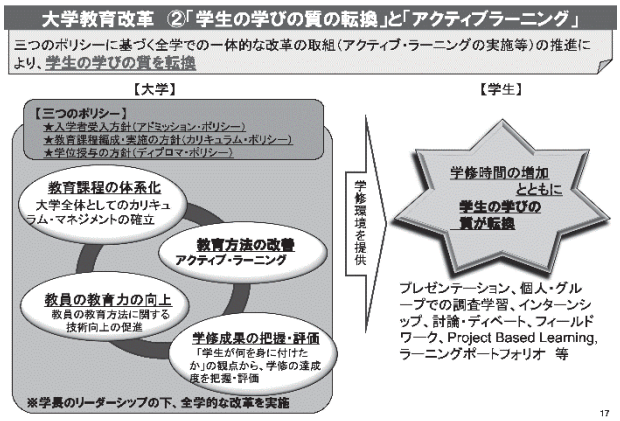
また、1 点刻みのペーパー試験の点数に依拠した選抜を行うということが公平なんだといったような、教育関係者だけではなくて国民一般にそういう意識があるのではないかという中で、これからの課題といたしましては、知識、技能、思考力、判断力、表現力、また、高校時代の活動、適性、意欲という中で、主体性、多様性、協働性の部分を含めて総合的に評価していく必要があるという中で、共通テストの大学入学希望者学力評価テストを新たに導入していこうというところでございます。その中では、教科型、5 教科科目型、総合型の問題、段階別成績表示、記述式の導入、年複数回実施、CBT 方式の導入といったようなことが提言されているというところでございます。



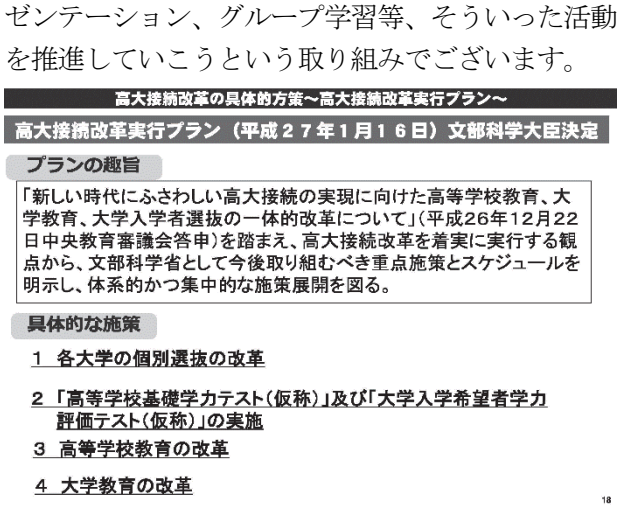
また、各大学の個別選抜におきましては、アドミッション・ポリシーに基づく多面的な選抜の実施ということで、こういったものを通じて大学教育を受けるために必要な能力を把握していこうというところでございます。入学者の受け入れの段階においては、アドミッション・ポリシーにおきまして、どのような能力を入学者に求めるのか、評価するのかというところでございます。評価方法の例もさまざまな選択肢がございます。新テストにかかわる内容だけではなくて、記述、論述式問題、ここで言うところは主に自分の考えに基づいて論を立てて、それを実証するというところで、そういった学力評価のあり方の問題を想定しておりますけれども、それ以外にも面接、プレゼンテーション等を含めて多面的、総合的な評価をするという観点での評価方法、比重、要求するレベルを決定、公表していこうというところでございます。そういうものを通じて、入学後の学習可能性の評価、確認をしていこうというところでございます。



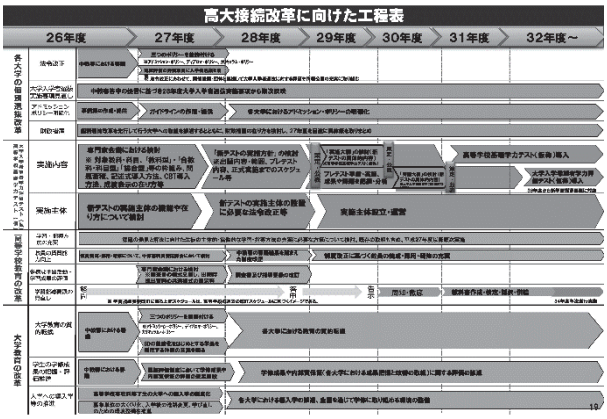
アドミッション・ポリシーに加えまして大事なのは、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーというところでございます。こちらについては、一体的な策定の義務づけをするという観点での制度改正を平成 27 年度中に行う予定にしているというところでございます。



また、大学教育改革につきましては、アクティブ・ラーニングの推進ということで、大学の場でもプレゼンテーション、グループ学習等、そういった活動を推進していこうという取り組みでございます。

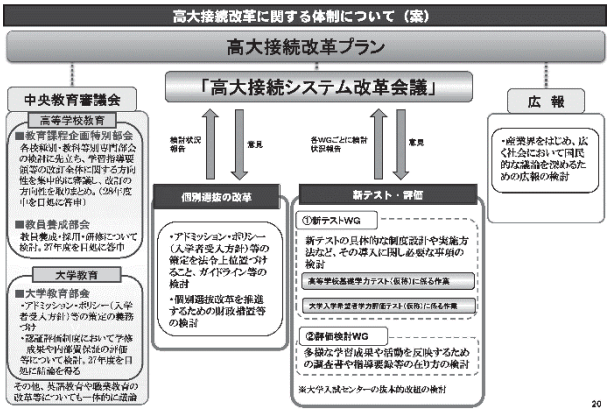


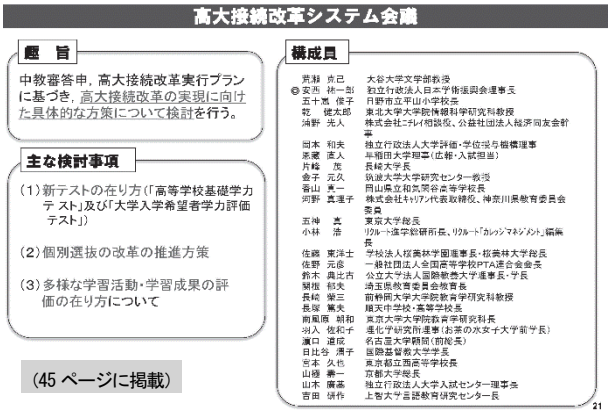
（44 ページに掲載）



高大接続改革実行プラン、これは１月に策定しておりまして、工程表のほうを示させていただいております。こちらのほうは、個別選抜改革、新テスト、高等学校教育、大学教育の改革ということで、それぞれ今後中長期、今後の試験導入も見据えまして、工程表を示しているものでございます。いわゆる担当者が代わっても、政権が代わっても、この改革は実現していこうという観点で、この工程表が示されているというところでございます。

（44 ページに掲載）

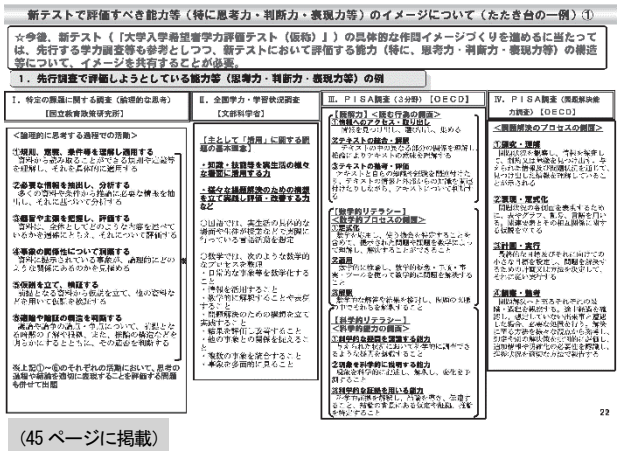




（45 ページに掲載）

今後の検討の体制でございますけれども、今高大接続システム改革会議が立ち上がっておりまして、新テストのあり方については、今ワーキンググループも設置して専門的に議論いただいているというところでございます。また、評価のあり方につきまし

ても、今後おそらく夏以降になると思いますけれども、評価のあり方に関するワーキングを立ち上げて、具体的な検討を進めていきたいという状況でございます。また、個別選抜の改革、特に夏に向けては概算要求がございます。そういう意味で、財政措置のあり方を含めて検討いただいて、中間まとめに盛り込んでいきたいというところでございます。また、中教審のほうでは、学習指導要領の見直し、教員養成、大学教育の議論がなされているというところでございますので、そういった大学教育、あるいは初等中等教育の動きとも連動しながら、この検討を進めていくというところでございます。

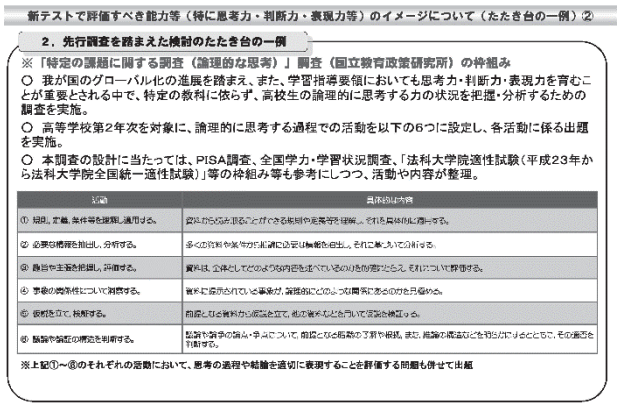


（45 ページに掲載）

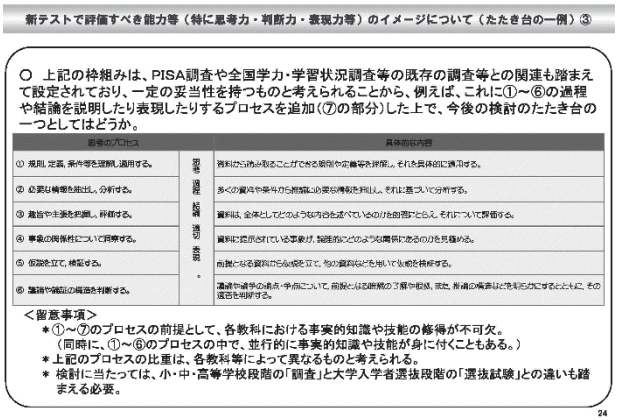
新テストで実際どういう能力を評価していくのかという観点で、こちらのほうは、システム改革会議でたたき台の例という観点で少し紹介させていただいたところでございます。思考力、判断力、表現力の観点、能力論の観点から申しますと、OECD の PISA 調査のほうでかなり能力論の整理がされているというところでございます。全国学力学習状況調査につきましては、PISA 調査の枠組みも踏まえながら、知識、技能を実生活の場面に活用する力ですとか、さまざまな課題解決のための構想を立て、実践し、評価、改善する力といったような観点で、小中学校が今取り組まれているというところでございます。

一番左隅のところになりますけれども、今国立教育政策研究所のほうで特定の課題に関する調査というのをやっておりまして、これは平成 24 年にまとめられたものでございますけれども、思考力、判断力、表現力の評価の観点から、特定の教科によらない形で高校生の論理的に思考する力の状況を把握、分析する調査をしております。その中では、論理的に思考するプロセスを以下の六つに設定いたしまして、出題をしているということで、規則等を理解し、適用するですとか、事象の関係について洞察する、仮説を立て検証する、議論や論証の構造を判断するといったようなこと、またこういった活動について、思考の過程、結論を適切に表現するといったようなことも併せて出題されているというところでございます。

（46 ページに掲載）



（46 ページに掲載）



こちらのほうは、先ほどの PISA 全国調査、また、法科大学院の適性試験の枠組みも参考にしつつ整理がされているというところで、例えばこういった活動の過程に表現するといったようなプロセスも追加した上で、一つのたたき台にはできないかといったようなところで、当然ここは知識、技能の習得ですとか、各教科等によっても内容が異なってくるというところでございます。また、皆様にとっては一番関心としてあるのは、調査と入学者選抜は違うだろうというところがございますので、そういう意味で、入学者選抜の段階でどういう思考力、判断力、表現力を見ていくのか。その内容をまずは明確にして、また、作問をどうするのかといったようなところを、今内部的に議論を進めているというところでございます。

お手元の資料のほうには、私のプレゼン資料の後にシステム改革会議の配付資料といたしまして、基本的な考え方と主な課題、また、多面的、総合的な評価の改善のための改革に係る主な論点ということで、少し紹介させていただいております。(48-52 ページに掲載)

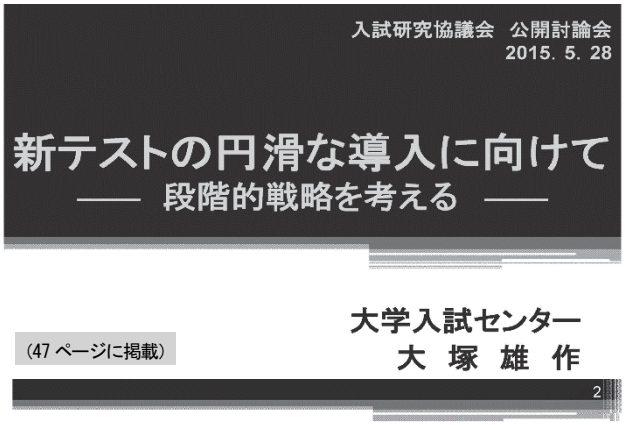
またこちらのほうは後ほど御参照いただければと思います。

私からは以上でございます。（拍手）

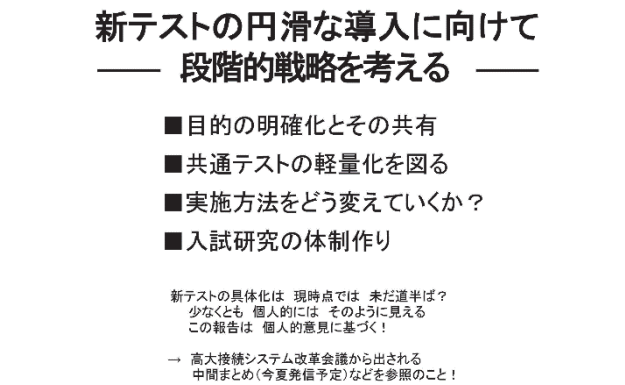
○司会（古谷）

橋田室長、ありがとうございました。

続きまして、大学入試センター試験・研究統括官の大塚雄作先生から、「新テストの円滑な導入に向けて」というテーマで、「段階的戦略を考える」というサブタイトルが付いてございます。それでは、大塚先生、よろしくお願いいたします。



（47 ページに掲載）



○大塚試験・研究統括官

大学入試センター試験・研究統括官の大塚と申します。よろしくお願いいたします。

今、橋田室長のほうから、高大接続改革の大きな流れを中心にご説明がありました。私のほうからは、私どもが担当していくことと答申にも書かれております新テストにつきまして、具体的な課題をお示しして、それにどう対応していったらよいと考えているのかということをお話ししていきたいと思っておりますが、この議論はいろいろな立場があって、ここにも小さく書いておきましたけれども、新テストの具体化は現時点ではいまだ道半ばというところで、私どももどういう形で新テストが行われるのかという具体的なイメージを持ち切れないでおります。私の立場上、入試センターを代表して話題提供できればよいのですが、そういう状況もあって、この報告は個人的意見に基づくということで、実際の新テスト自体は、結果的に今日の話と大分変わっていく可能性を含んでいると言うことをご了解いただければと思っております。

いずれにしましても、高大接続システム改革会議から、夏頃には「中間まとめ」が発信されると思います。そこに多少なりとも具体的な方向性が規定されてくると思いますので、そちらを改めてごらんいただければと思います。実は、入研協の企画委員会で検討しておりましたときには、今ごろはかなり具体的な方向性についてここでご紹介できるのではないかと想像していたんですけれども、そこまで具体的に提示できる段階には至っていないということでありまして、実際に入試改革の議論を始めると、難しい点が多々出てきてしまうというあたりを共有していただければと思います。

また、私の話では、試験の技術論的な部分での課題を多く取り上げることになると思いますので、皆さん方からも技術的にこんな方法もあるよということがありましたら、ぜひ共有させていただいて入試改革に活かしていければと思います。私自身、こんな感じで新テストをやってみてはどうかというアイデアは個人的にはいろいろ思いつく部分もありますが、それを人に話してみると、いや、そこはそうじゃないんじゃないかとか、こんな方法があるんじゃないかといった、違う視点からの見え方を知る機会にもなり、そういう機会を経るたびに、私自身の考え方も変わってきているという部分もありますので、そういう意味で、いろいろな立場からの意見をぶつけ合わせるということが大事ではないかと思っております。

（47 ページに掲載）

中教審答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（2014.12.22）』別添資料3より（一部要約等）

総　称	学力評価のための新たなテスト（仮称）	
実施主体	大学入試センターを、新テストの実施・方法開発や評価に関する支援を行う組織に抜本的に改組。	
個別名称	高等学校基礎学力テスト（仮称）	大学入学希望者学力評価テスト（仮称）
目的・活用方策	○生徒自らの高校における学習達成度の把握。 ○生徒の学習意欲の喚起、学習改善。 ○結果を高校での指導改善。 ○進学・就職時の基礎学力把握（調査書に結果記入など）	○「知識・技能」のみならず、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等」を中心に評価。
対象者	○希望参加型 ※できるだけ多くの生徒参加の方策を検討	○大学入学希望者 ※社会人等を含め、誰でも受験可能。
内　容	○実施当初は高校の必履修科目（「国語総合」「数学Ⅰ」「世界史」「現代社会」「物理基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」等）。 ○「知識・技能」の習得を重視。「思考力・判断力・表現力」も評価（高難度から低難度まで広範囲に）。 ○各学校・生徒に対し、成績を段階で表示 ○各自の正答率等も併せて表示	○「教科型」に加えて、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせて出題。（将来は「合教科・科目型」「総合型」のみによる総合的な評価を目指す） ○広範囲の難易度。特に、選抜性の高い大学が入学者選抜に活用できる水準の高難易度の出題。 ○段階別表示による成績提供
解答方式	○多肢選択方式が原則、記述式導入を目指す。	○多肢選択方式だけでなく、記述式を導入。
検討体制	○ CBT の導入や両テストの難易度・範囲の在り方、問題の蓄積方法、作問の方法、記述式問題の導入方法、成績表示の具体的な在り方等について一体的に検討。	
実施方法	○在学中に複数回（例えば年間 2 回程度）、高校 2・3 年で受験可能。 ○実施時期は夏～秋を基本。（学校現場の意見を聴取しながら検討） ○ CBT 方式での実施を前提に開発。 ○英語等は、民間の資格・検定試験も活用。	○年複数回実施。 ○実施回数・時期は高校・大学関係者と協議。 ○ CBT 方式での実施を前提に開発。 ○特に英語は、四技能を総合的に評価できる問題の出題や民間の資格・検定試験を活用。（他の科目等の民間の開発・活用を検討）
作問のイメージ	全国学力・学習状況調査の A 問題（知識問題）及び B 問題（活用問題）の高校教育レベルの問題を想定	知識・技能を活用する PISA 型の問題を想定

この表は、中教審から出ました学力評価のための

新たなテストということでまとめられているものでありまして、皆さんもごらんになっているかと思います。答申に付けられていた表は縦長でしたので、パワーポイントの幅に合わせて広げたり、一部省略したりもしておりまして、私自身が改編したものですが、赤線を引いたところあたりがポイントになるところかと思っておりまして、それをまとめたのが次のスライドになります。ここでは、今のセンター試験に代わるということで、大学入学希望者学力評価テストを中心にお話ししたいと思います。

4

●大学入学希望者学力評価テスト（仮称）に求められていること

1. 知識・技能の活用力、思考力・判断力・表現力等の測定
2. 大学入学希望者対象（社会人等を含む）
3. 「教科型」＋「合教科・科目型」「総合型」
4. 広範囲の難易度（選抜性の高い大学が入学者選抜に活用）
5. 段階別表示による成績提供
6. 記述式の導入
7. 年複数回実施
8. CBT方式での実施前提の開発
9. 英語の4技能の総合的評価
10. 民間の資格・検定試験の活用

ここにありますように、先ほど橋田室長からもありましたが、新テストでは、「知識・技能の活用力」が強調されております。昨年インテンシブに議論が進められておりました高大接続特別部会の議論の中で主として使われておりましたのが「知識の活用力」という言葉でありましたが、最近はそれに代えて「思考力・判断力・表現力」という言い方になっておりまして、それを測定する新テストにしていくという方向性が出されているということです。

それから、「大学入学希望者」とわざわざ呼んでいるのは、これは今のところはあまり議論もされていないんですけれど、これからの生涯学習社会を見据えて、高校３年生のみならず、社会人等も受験生として想定されているということかと思います。

その他、新テストに関しては、ここに挙げておりますように、「思考力・判断力・表現力」等の測定ということに関係して、教科型の試験だけではなくて、それに加えて合教科・科目型、総合型という試験を工夫してみようということが言われております。

それから、「広範囲の難易度」をカバーすることが求められておりまして、これは、選抜性の高い大学も個別試験で学力試験を別途実施しなくても十分に学力の面で識別力を持ったテストにしてはどうかということも提案されております。

あと、５番目に記されております、「段階別表示による成績提供」ということも言われております。この話は今日は私、入れ込むのを忘れたんですけれども、こういったことも提案されております。

それから、「記述式の導入」、「年複数回実施」、「CBT 方式での実施」などが挙げられております。CBT というのは、Computer-Based Testing の略で、コンピューターを利用したテストということです。略称は得てしてわかりにくいのですが、「CBT」というのも最近はかなり通ずる範囲が広がってきたなという印象がありますが、これも実施前提の開発を進めていくことが提言されています。

さらに、午後に企画討論会のテーマにもなっておりますけれども、英語に関しては４技能の総合的評価をしていこうということで、民間の資格検定試験も活用したらどうかというようなことも出てきているところです。

5

■目的の明確化とその共有

- 新テストは何のために？
  その目的を明確化し共有することがまず大切

- 時代の要請は何か（おそらく大差のない共有事項？）
  グローバル化　ユニバーサル化
  高度情報化（サイバーデジタル化）
  → 新たな状況を切り拓く力をもった人材養成
  ＝ 主体的に自ら新たな問題を設定し
  自らそれを考え解決していく力（？）

新テストを開発していくに当たって、まず強調しておきたいことは、「目的の明確化とその共有」ということです。実は、四半世紀の積み重ねを経て、センター試験がこれだけ定着してきているのに、今なぜ新テストに変えていかなければいけないのか、その辺が必ずしも共有されてない部分があると思います。答申を読みますと、それなりの流れで新テスト導入が必要だということも書かれておりますけれども、大学側の教員はじめ関係者の中にも、また、高校側の関係者の中にも、何で今変えなきゃいけないんだろうという疑問を持つ人がむしろ多いようにも感じております。それだけに新テストの目的を明確化し、それを共有していくということがないと、新しい方法に変えていこうという行動にまで結局は至らないで終わってしまうという部分もあるかと思います。

この点については、橋田室長からも話がありまし

たけれども、時代的に今は、グローバル化、ユニバーサル化という言葉で大括りで言ってしまっていますけれども、そういった流れの中で、新たな状況を切り開く力を持った人材を作っていかなければいけないという根本的な部分については、日本の中にいれば大差ないニーズになってくるんだろうと思います。そのために、主体的に自ら新たな問題を設定し、それを自ら解決していく力をつけていかなければならないという点に関しては、おおむねコンセンサスが得られやすいところだろうと思います。

6

●「高大接続」と 学力テストの意味

- **新時代に必要な力の育成のために**
  - → 高校までの教育 ＝ 学習指導要領に体現
    高校生活（課外活動なども含めて）の充実
  - → 大学の教育 ＝ 主体的に学び
    新たな知を創造・共有
  - → 大学入試 その流れを断ち切らないことが肝要
    そのような力を持っている人材の選抜ではない
- **学力テストの意味**
  - → 高校までの積み重ねが最も反映可能な形態
    大学教育への適応の予測がよいツールの一つ

その点が大事だということはよく分かるんですけれども、では、そういった人材養成をどうしていくかということが次に問題になっていきます。ですから、高校までの教育については、これも先ほど橋田室長からも指摘されておりましたけれども、「アクティブラーニング」というような言葉が、新しい学習指導要領の改訂の諮問の中には随分入り込んできていますし、昨日のセミナーにもありましたが、高校生活は課外活動も含めて充実させていくということが強調されていくことになるだろうと思います。一方、大学の教育においても、「主体的な学び」ということが 2012 年の大学教育の質転換答申などでも強調されておりましたし、そういった学びを通して新たな知を創造し、それを共有していくということが強調されてきています。これは、教育の面で人を育てていくということを考えていくときのベースになっていくことかと思います。

しかし、大学入試においては、そのような力を持っている人材を直接選抜するということが目的にはなり得ないということは、ここは共有しておく必要があるだろうと思います。入試で、「主体的な学び」のできている人を選抜するということは簡単なことではなくて、むしろ、そういう人材を育てるための高校教育から大学教育への一貫した流れを断ち切らないような試験にしていくということが私は大切ではないかと思っています。

7

●共通テストの役割は何か

- **学力テストによる入試の課題**
  - ➢学力偏重による 望まれる高大接続の分断
  - ➢大量受験者対象の選抜に関わる諸課題

  etc.
- **共通テストの役割**
  - ➢適切な学力試験の模索 ← 難問・奇問・知識問
  - ➢多様な受験生の共通部分・基盤の確保 ＝ 思考力等
  - ➢個別試験の自由度と多面的評価の確保

  etc.

そういう観点からすれば、現行の入試で中心となっている「学力テスト」というのはどう位置づけられるのかということをふりかえっておく必要があります。長い歴史を持つ入学試験において、学力テストがこういったようにずっと使われ続けてきているということは、日本特有の試験に関する公平性の原則というのがあって、答申では、その入試観を変えていかなければならないということが書かれていましたけれども、それにしても、「学力テスト」は頑張れば何とかなるという、高校生にとっては、昨日のセミナーでもそういう話も出ていましたけれども、「頑張れば何とかなる」という感覚を持ちやすい対象ではあるんだろうと思います。逆に、今の答申で言われているような、例えば学習意欲を見ようなどということになったときに、それに対してどう頑張ればいいのか、どう準備したらいいのかということが、高校生にとっては目に見えない部分もあって、そうなると頑張りようもないということにもなりかねないと思います。そういう意味で、学力テストというのは、高校生にとっては、具体的にこう頑張ればいいという部分が分かりやすいということが一つあるかと思います。もちろん、どう頑張ればいいかは、学力テストでも実はいろいろなやり方があって、丸暗記型の学習がいいかどうかは微妙ですし、よりよい学習方法が見えていない生徒が多いといった課題もあることは十分に留意しておく必要のあることではありますが。

それから、何といっても、大学教育における授業では、学生に十分な学力をしっかり持って来てもらうということが、授業を円滑に進めていくときの一

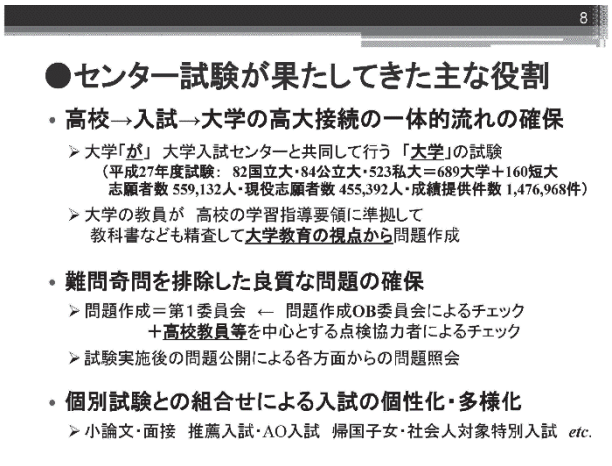
番のポイントになるということは、大学の先生方皆さんが感じていることであろうと思います。だからこそ、学力テストが使われてきているんだろうと思います。ただ、学力テストが入試でこれだけ中心的になってきますと、学力偏重ということが問題になり、過度の頑張りにつながることにもなりますし、それこそ、高大接続の部分が分断されてしまうという問題点も指摘されてきているわけです。また、ユニバーサル化の時代ですから、受験者の幅や数など、質的にも量的にも受験生が多様化・拡大化してきている中で、選抜試験にかかわるさまざまな課題が噴出してきているということも事実だろうと思います。

その中で、共通テストというのがどういう役割を果たしてきたかということをまとめておきたいと思います。

まず、共通一次などが入れられるときにも言われていたことですけれども、各大学の試験に難問・奇問が見られるようになってきて、そういった問題を排除していく必要があるという点に共通テストへの期待がありました。この点に関しては、共通一次以来、共通テストにおける問題作成体制をしっかりと構成することで、一定の効果が見られたと言われております。

それから、共通テストというのは、多様な受験生の基盤の部分を見ていくということで、高校の学習指導要領に即して実施されてきています。学習指導要領は、高校生のある意味でミニマムリクワイアメントを定めているもので、当然、「知識」のみならず、「思考力」の育成ということも含められていますので、共通テストでは「思考力」に関しても、その測定が試みられてきているはずです。

また、基盤の部分を見るべき共通テストがあるからこそ、個別試験の自由度が保障されるわけで、それぞれの大学に即した多面的評価なども試みていくことができます。個別大学での選抜方法の工夫の余地を作り出すための試験として共通テストは位置づけられてきましたし、実際に、さまざまな入試方法が個々の大学で広がってきたという事実もあるわけです。



共通試験としてのセンター試験が、具体的にどういう役割を果たしてきたかということを整理してみたものがこのスライドです。

まず、センター試験も、高校・入試・大学という高大接続の一体的な流れというものを常に意識して実施されてきているということは再認識しておく必要があろうかと思います。入試センター法の中にも明確に書かれておりますけれども、センター試験というのは入試センターが作った試験を大学側が受け身的に利用するということではなくて、「大学が」と大学が主語になっておりまして、大学「が」大学入試センターと共同して行う「大学」の試験であると定義されております。入試センターはむしろ大学が共同する試験を支援する立場に位置づけられているということをしっかりと共有したいと思います。

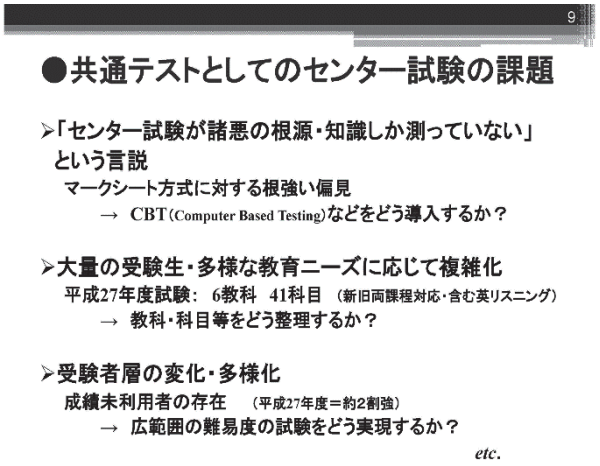
この 1 月に行われた平成 27 年度試験でも、ここにありますように、689 大学、160 短大で利用されているということで、センター試験に参加する大学数もここまで増えてきております。志願者も 50 万人を超えております。大学の出願、成績提供件数というのも 147 万件を超える数に上っております。この数の問題というのが、新しい共通テストを考えていくときの一つのポイントになろうかと思います。

大学が行う大学の試験であるということはどういうことであるかと言いますと、先ほど高校の学習指導要領に準拠すると申しましたが、あくまで、センター試験は、大学の試験問題ということで、大学の先生方が問題を作成しているということです。高校の学習指導要領に準拠するということで、すべての教科書を精査して、ほとんどの教科書に書かれていることを問題にするという原則で問題を作っておりますけれども、それは高校の問題ということではな

く、高校の教科書、あるいは学習指導要領の内容を大学教育の視点から切り取ってきて、大学教育の視点から問題を作成するというところにセンター試験の意義があるということです。そこに、高校教育と大学教育との接点といいますか、交差する部分があるという位置づけになろうかと思います。

問題作成の委員会は、今年は 23 の部会が構成されておりまして、500 人以上の大学の先生が来て問題を作成してくださっております。問題作成を直接担当する委員会を第一委員会と呼んでおりますが、その第一委員会が作成した問題を、第一委員会を経験した OB 委員会、第二委員会と言いますが、第二委員会が非常に細かくチェックしてくださいます。問題作成 OB 委員会と書いてありますけれども、これが第二委員会と呼ばれている委員会です。それから、高校教員等と書いてありますけれども、高校の先生が直接問題を見るというのは、授業で受験生に問題がさらされる可能性が大きくなりますので、実際には教育委員会などに出向されている先生方、それを高校教育関係者と我々は呼んでおりますけれども、そういう先生方にも来ていただいて、高校教育の視点から個々の問題が適切であるかどうかというチェックもしていただいております。

それから、試験実施後、センター試験は問題が公開されますので、その問題は日本中の人が見てくださっております。そのために、試験終了後も、いろいろな問題照会が来ております。昨日も、2004 年度の英語の試験の問題について今ごろになって文句が来たりしておりまして、さすがに 10 年前のことを持ち出されてはと閉口する部分も正直ないわけではなく、問題照会の受付の期間を定めないといけないと思っているところでありますけれども、少なくとも、そういったように、試験問題が社会の目にさらされるということで、試験問題をブラッシュアップしていくプレッシャーを常に感じられる立位置にいるということはありがたいことだとも思います。難問・奇問を排除した良質な問題が確保されてきているという評判も毎年聞くことではありますが、その背景には、問題作成の何重にもわたるチェック体制や、問題公開による社会からの目といったものがあるのだろうと思います。



ただ、もちろんセンター試験にもいろいろな課題があります。新テストに向けて、どういうところに改善すべき課題があるのかというところを見極める必要もあると思います。まず、私もしばしば聞くことで悔しい思いをしばしばしている点なのですが、「センター試験が諸悪の根源、知識しか測っていない」という言説があります。その種の言説は、問題内容を精査して出てきたことというよりも、マークシート方式に対する根強い偏見からきているものと思われます。マークシートを利用しているというだけで、知識しか測っていないというような言説が出回ってしまっていて、それが主体的な学びなどを実現していく際にそれを阻むような諸悪の根源として言われてしまっているのだろうと思います。ただ、そこが今の高大接続改革の議論の原点になってしまっているということは、我々としてはとても心外なことでありますし、何より問題作成に取り組んで下さっている多くの大学の先生方に申し訳ない限りです。マークシートの代替として出てきているのが CBT（Computer Based Testing）といったことになるわけですが、そういった試験の媒体の変化を簡単に実現することができるのか、また、それによって実際に知識偏重の入試を超えていくことができるのかどうかといったことが一つのポイントになると思います。

それから、大量の受験生が、50 万人を超える受験生が毎年受験しますので、それこそ受験生は非常に多様化してきています。また、多様化してきていることに応えるために、27 年度は新旧両課程の対応ということもありましたので、英語のリスニングを含めて 41 科目の試験を作ったということもありました。そういったことで、本当に何度も何度もシミュレーションを繰り返して、それこそ大学が共同して

実施して下さったということが大きいのですが、無事にセンター試験を実施することができました。大学の試験を担当してくれた先生方、職員の方々にまずもって感謝しなければならないことでありますけれども、試験がこのように複雑化していく中で、共通テストの意義を原点に立ち返ってもう一度考えてみて、もう少し軽量化していく可能性はないのかといったことを考えていく必要もあるのだろうと思います。

それから、受験者層の変化ということも現実に見えてきております。これは受験生の多様化に伴って必然的に生じてくることなんですけれども、例えば、意外な受験者層として、センター試験成績未利用者がかなりの数いるということに驚かされます。つまり、センター試験は受けたけれども、それを大学出願に全く利用していない受験者ということですが、平成 27 年度の今年の試験でも、そういう受験生が約 2 割もおります。50 万の 2 割ですから 10 万人の受験生が、受験したものの大学出願に使っていないということです。センター試験の結果を出願のときに利用しなくていい大学を受けているのだろうと思いますが、それだけ受験生の幅が広がってきていて、例えばその 2 割の受験者層というのは、明らかに得点の分布も下のほうにずれておりまして、おそらく今のセンター試験でさえすごく難しくてとても歯が立たないという層ではないかと思います。そういったような受験者層の多様化ということにどう対応していくのがよいのか、この点も検討していくべき重要な課題になっていくだろうと思います。

10

■共通テスト軽量化を図る

- **目的を単純化する**
  選抜目的 or 指導目的 ・・・
- **対象となる受験者層を絞り込む**
  ターゲットとなる受験者層において
  識別力・テスト情報量の高い試験の構成を目指す
- **対象となる特性を限定する**
  多次元的測定を目指す場合には
  それぞれを別の測定ツールに分割する
- **コストとリスクをできる限り縮減する**
  現行のセンター試験は国からの運営費交付金はゼロ
  でやれている ＝ 受験料だけで運営できている
  → CBT、記述式採点などは 現段階では
  共通テストの場合 大きなコストとリスクが想定される

以上のような課題にどう対応するかということを考えてみるときに、まず、共通テストは、軽量化を図るところからやっていかなければいけないのではないかと思います。

例えば、試験の目的を単純化する、対象となる受験者層をできるだけ絞り込むといったことになるでしょうか。ただ、受験者層を絞り込むということは現実的には簡単にできることではないでしょうから、ある対象者にはこのテストといったような形で試験を分けていくというようなことを考えていく必要があるのではないかと思っているところです。

また、「対象となる特性を限定する」ということも軽量化する際の一つのポイントになります。何でもかんでも一つの試験に詰め込まないということです。

それから、「コストとリスクをできる限り縮減」した試験にしていくということです。まず、少なくとも現行のセンター試験は国からの運営交付金は 0 で、受験料だけでやれています。そういう効率性が得られるように積み重ねができてきているわけですけれども、CBT とか記述式採点ということが言われていますけれども、共通テストの場合には、現段階の技術では大きなコストとリスクがかかってくることですので、その辺を慎重に進める必要があるだろうと思います。

11

●対象とする受験者層をどう定めるか？

- **広範囲の学力レベルを一つの試験の対象とすることの困難性**
  限られた試験時間の中で出題できる範囲も限られる
  → 適応型テスト（adaptive testing）の可能性は？
  学力は内容領域のバランス（内容的妥当性）が問題とされ、それに関わる思考力等の複雑な特性も一次元的な能力を仮定することは難しい → IRT（Item Response Theory）は適用可能ではあるがかなり強引な近似となる。また、多次元全体の適応型テストのシステムを構築するにはそれなりの時間、コスト、労力を要すると共に、必ずしも試験時間の節約にはつながらない可能性が大きい。
- **個別試験等も含めて一つひとつの試験の役割分担を明確に規定していく**

対象とする受験者層ですけれども、広範囲の学力レベルを一つの試験の対象とするということは、技術的にはかなり困難なことです。選抜性の高い大学からボリュームゾーンの大学まで、全てを一つの試験で識別力を持った形で作るというのは大変なことです。それに関して、CBT を入れれば、ある問題に正答すればより難しい問題を次に出すといったようなシステムも組めるので、それは適応型テストと呼ばれていますが、それを導入できれば、広範囲の学力レベルを対象とすることの困難さという問題は解決するのではないかということも言われております。ただ、学力試験の場合は、そのための出題範囲があって、その範囲自体が広範にわたりますので、例えば数学であったとして、図形の問題もあれば三角関数の問題もあれば整数の問題もあるといったように、

そういったいろいろな領域からバランスよく問題を出題するということが要請されることになるわけです。試験問題全体が、出題すべき範囲を的確にカバーしているかどうかということは、内容的妥当性と呼ばれる重要な検討の観点に挙げられることですが、その点からすると、適応型テストもそう簡単ではないことが容易に想像できます。ある受験生には、解答のパターンに応じて、例えば三角関数の問題ばかりになってしまったということにならないように、システムもまた問題のデータベースも整備していく必要があるということです。もちろん、難易度の違う出題範囲をカバーするような問題群を用意して、あるレベルの学生にはこの問題群をやってください、それに何点以上であれば、次はこのレベルというように、個々の受験生ごとに、能力判定が効率的にできるような柔軟なシステムを組むことがコンピューター的にはできないことではないだろうと思います。いずれにしても、適応型テストをやったからといって、短時間の決められた時間の中でその人の能力がどのレベルにあるかということを推定するのは必ずしも容易ではないということが、学力テストという多次元的な、複雑なものに関してはつきまとうということもおさえておかなければならないことです。この辺は技術的な課題であって、研究開発によって一定程度解決していくという可能性はあると思いますが、少なくとも当面の新テストには全ての機能を入れるのではなくて、個別試験等も含めて一つ一つの試験の役割分担を明確にしていくということが大事になっていくのではないかと思っております。

12

■実施方法をどう変えていくか？

- **複数回受験ということ**
  - **複数回の得点等化が必須となる**
    - → **試験問題の非公開**
      - ⟷ **センター試験問題公開の風土**
    - 棄て難い試験問題公開の教育的意義
    - 問題の質の確保
  - 受験生の心理的負担が縮減するか？
    - → 複数回受験による得点レベルの全体的上昇
    - 高校生活（部活等）のリズムが保てるか？

➢**複数回は選抜の資格試験化等の制度変更が必要？**
➢**CBTの導入可能性も前提要件の一つ？**

それから、実施方法に関して見ていきたいと思います。複数回受験ということが言われておりますが、複数回受験の場合には回が異なる試験の間の得点等化ということが必須になります。また、そのためには問題を非公開にしてデータベースに蓄積するということも必須になります。センター試験は今まで問題を公開してきておりますけれども、そういう風土を日本は持っている中で、また、先ほども言いましたように、試験問題を公開するということの教育的な意義は、存外捨てがたい効果があるということを体験してきておりますので、そういったことも含めて、試験問題を非公開にすることは、日本の風土に合っていることなのかどうかという点はもう一度考えてみる必要があると考えております。

複数回受験できたら、受験生の心理的負担が減っていくということも言われていますが、選抜ということがある以上、複数回受けて高い点数をというのは受験生の心理ですから、そうすると、合否水準が上がっていくということにもなりますので、これは必ずしも受験生の心理的な負担が縮減するということにもならないのではないかとも思います。複数回の入試がそういった形で入ってくると、部活等の高校生活のリズムが崩れてくるということも当然出てくることです。複数回を実現させるためには、選抜試験ではなくて、入試を資格試験化する必要があるだろうと思います。今は、MOOCS など、インターネットなどでも授業を受けられる時代にもなってきていますから、定員なしで受け入れられる人は受け入れる、その代わり卒業は厳しいというような制度にするとか、そういう資格試験化ということが、共通テストの複数回実施実現のための一つの条件になるのではないかと思います。

13

●CBTをどう導入していくか？

- **CBT（Computer Based Testing）の可能性**
  - ➢ 受験生の入出力媒体のデジタル化は必至
  - ➢ コンピュータのマルチメディア特性を活かしたオーセンティック（現実場面に近い）な出題等が可能
  - ➢ 記述型・パフォーマンス型の出力のハンドリングが容易 → 自動採点システム等の導入の可能性（← 反応のパターンやバラエティに関する情報収集の要）
- **CBT導入の問題点**
  - ➢ **CBTへの慣れの個人差**（adaptationの問題）
  - ➢ 機械系導入時のリスク
    - *Cf.* リスニングのICプレーヤーの不具合
      - 不具合申し出件数 0.1%弱 内機械に不具合が認められなかった件数 8割強
    - → より精巧なコンピュータの場合 不具合申し出件数は格段に多くなると予想される
  - ➢ セキュリティの課題（*ex.*タブレットの保管・維持・*etc.*）

→「調査」などで試行段階における情報収集機会を得る工夫
それに基づいて選抜への利用の段階的導入を図る

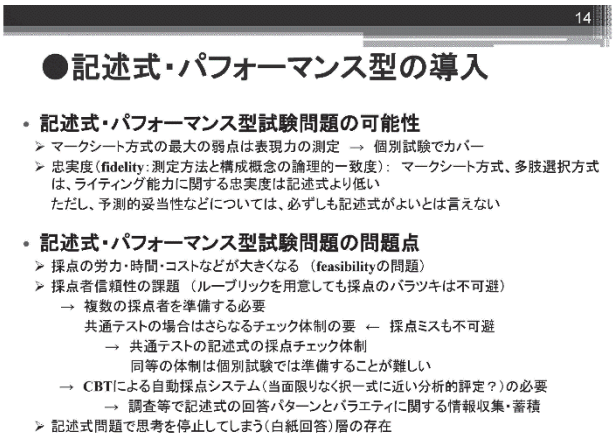
また、CBT を導入すると言うことも提言されておりますが、複数回の試験は、CBT が導入できればその可能性も増すということはあるかと思います。電車などに乗っておりますと、周りの若い人たちがみなスマホを見事に操っているのを見て、いまだにガラケーの私は肩身の狭い思いをするわけですけれど

も、そういったメディアの時代がもうそこまで近づいてきているということは私も認識しているところでありまして、CBT というメディアに入試が変わっていくというのは必至のことだろうと思います。複数回のみならず、コンピューターのマルチメディア特性を生かして音声や動画を利用することもできますし、よりオーセンティックな、現実場面により近い問題設定も可能になるといった広がりも期待できます。

また、記述式であれば、デジタル情報として入力できますし、パフォーマンス型、例えば、スピーキングなどでも、音声を吹き込むといったことも可能になり、その解答がデジタル化されているということで採点などの際のハンドリングも容易になりますので、今の試験に比べてもさまざまな利点を我々は手にすることができます。

ただ、逆にいろいろな問題点も出てくるわけでありまして、それほどスマホなどが普及してきて、そういった機器による入出力も自在になってきている一方、今のところはまだ、そういうメディアへの慣れという点での個人差がどうしても出てくるということがあります。スマホなどを利用していない子供たちもいるということでありまして、そういったメディアに関しての「アダプテーション（adaptation）」という言葉を使っておりますけれども、この問題をどういう形で解消することができるかということは一つの課題になるだろうと思います。PISA などでは、数学などでも CBT を利用した調査が行われていますが、数式などを記述式で回答させるようなところでは、入力で戸惑ってしまう優秀な生徒が結構いるというようなことも聞いたことがあります。

それから、機械系導入時のリスクについても慎重に準備をしておく必要があります。今、英語のリスニングに利用している、あの単純な IC プレーヤーでも、不具合を訴える件数は、50 万人いると 0.1%弱、これはかなり低い率と言えるのではないかと思っておりますけれども、50 万人の受験者がおりますと 500 人オーダーで必ず出現しております。0.1%弱の不具合のうち 8 割は受験生のほうが心理的に何かおかしな操作をしてしまった結果ということで、機械自体に不具合はなかったという検証結果も出ておりますが、CBT になりますと、コンピューター自体が頑健に作られていたとしても、IC プレーヤーよりも複雑な操作が求められることになると想定されますので、おそらくそういったことで機械を操作しているときにパニックに陥る受験生の率も増えてくるだろうと思います。CBT を導入するためには、そういうことも含めてフィージビリティ調査などで試行段階においていろいろな情報を収集する必要があるだろうと考えております。



記述式、パフォーマンス型の問題に関しては先ほど簡単に触れましたが、この点は新テストに強く求められていることの一つですので、改めてまとめてみたのがこのスライドです。マークシート方式の最大の弱点は「表現力」に関する測定が難しいということで、センター試験では、「表現力」に関わる問題も工夫して作ってくれておりますけれども、最近は教育測定学の領域でも、「フィデリティー（fidelity）」、「忠実度」という概念がしばしば使われるようになっておりまして、ある構成概念、測ろうとしている力、例えば「学力」というのも一つの構成概念になりますけれども、それを試験にするときに直接的に測れている方法が、フィデリティーが高いという言い方をします。マークシート方式とか多肢選択方式というのは、例えば「書く力」、「表現力」などについてはフィデリティーが低いということになります。記述式で実際に書かせる問題の方が、「書く力」のフィデリティーは高いということになります。CBT はそのマルティメディア特性を利用してオーセンティックな問題が可能ということを先ほど申しましたが、それはまさにフィデリティーが高いということを意味するということです。ただ、フィデリティーの高さというのと、それが本当に測りたい力を測れているかどうかというのは、必ずしも一致しているわけではありませんので、いわゆる測定の妥当性や信頼性については、いずれにしても研究の余地が残されているということは是非おさえておいていただきたいと思います。

また、記述式とかパフォーマンス型の試験は、今の段階では、CBT などが導入されればまた違ってくる可能性もありますが、採点に多大な労力がかかるというフィージビリティ面での問題、また、採点者の信頼性の問題という課題がどこまでもつきまといます。都立高校入試で問題になったような採点ミスは、ミスを犯した採点者の個人的な責任に帰すことはできない、測定に関わる不可避の問題です。特に、大規模な試験などでは、そういったリスクもあるということはしっかりと共有した上で準備していく必要があるだろうと思います。

15

●思考力等を問う問題をどう作り続けていくか？

- **「合教科・科目型」問題作成の課題**
  - **信頼性**：各教科・科目に対応する項目数が減る → 部分得点の信頼性低下 → 総合得点の信頼性低下（個々に信頼性の高い問題作成は容易ではない）。
  - **妥当性**：異なる次元の学力の総合得点（特に科目融合型試験）が何の力を反映することになるのか不明。また、内容的妥当性（問題の代表性vs.偏り）が担保しにくい → 妥当性の検討、及び、実施時間・問題量などの検討が必要。
  - **識別力**：科目融合型など、問題自体が複雑になることで、難易度が比較的高め（問題が複雑化しがち）になりやすく、識別力は高くなりにくい。
  - **実行可能性**：合教科・科目の組合せ（問題領域）は膨大でどう組み合わせるかのコンセンサスは得にくい。また、科目**融合型**などの問題作成は容易でなく、科目**混在型**になってしまう。→「理科総合」などの学習指導要領レベルでの整備が前提
  - **インパクト**：多くの科目の受験準備が必要となり、高校での選択科目の幅が狭まる（望ましいことかもしれないが）

→ **教科型の問題において他教科の要素を取り入れたり、日常の文脈を取り込む形の問題作成を心がけるところから始める**

あと、思考力等を問う問題をどう作り続けていくかということも課題になります。もう時間もありませんので、ここは省略していきます。

16

■入試研究の体制作り

- 入試は、その手法や問題の適切性の分析、追跡研究などが必要不可欠。そのために、入試に関わる研究体制を、個々の大学、拠点などで充実させていくことが肝要。

ex. 新テストの効果を検証する仕掛けは今から仕込んでおく必要がある！

✓ 入学試験の信頼性・妥当性の最低限の確認
✓ 問題作成と維持・管理の必要性
✓ 高大接続の課題・学習指導要領改訂などの情報共有
✓ 不断の追跡研究の必要性

→ 研究組織を定常的に保有していくことが肝要

また後でご質問があれば触れたいと思いますが、そういったいろいろな技術的な課題もある中で、入試研究ということを、この大会も入試研究の協議会ということですけれども、その体制作りというのは全国的に整備していく必要があるだろうということを強調させていただきたいと思います。そういう研究組織を定常的に保有していくということが、本当に入試改革を根づかせていくときの一つのポイントになっていくだろうと思います。

17

●入試に関わるFDの必要性

- **教員・事務職員等の研修機会の設定**
  - ✓ 入試方法を変革しても、教員の方で、その趣旨が共有されていなかったりすることで、自分の授業で躓く学生が増える現象を見て「学力低下」が安易に唱えられたりする傾向が窺える。
  - ✓ 入試に関わる大学の教職員を対象としたFD・SDの充実が望まれる。
  - ✓ 入試に関わる大学院の専攻を設立するなど、専門家の養成が望まれる。
- **センター試験の問題作成は大学教員のFDの場！**

（*Cf.* 入試問題公開の教育的意義・・・複数回受験との矛盾）

→ **日本の風土に合った 生徒・学生の視座に即した 入試改革を！**

また、研究に携わる人、周りでそれをサポートする人、また、実際に教育に携わる人たちが、そういう入試のことも知っていくような FD、SD の機会なども充実させていく必要があると思います。

そういった入試を取り巻く一つひとつの取り組みの積み重ねを通して、最近は特に、入試とか教育改革に関しては、欧米でやっていることがそのまま当てはめられようとしていることが多いように感じておりますけれども、日本の風土に合った、生徒・学生の立場・視座に立った改革を我々も志していきたいと思っております。

18

ご清聴
ありがとう
ございます

了

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会（古谷）

大塚先生、ありがとうございました。では、続きまして、3 番目になりますけれども、東京大学大学院理学系研究科教授であられます、国立大学協会入試委員会の専門委員である山内薫先生に、「新テストを活用するために」というテーマでお願いしてございます。

○山内教授

ご丁寧なご紹介をありがとうございます。東京大学の山内でございます。私はプレゼン資料を使わないでお話をさせていただきます。

私のほうからは、「新テストを活用するために～大学の立場から」ということでお話をさせていただくことになっておりますけれども、今橋田室長のほうからも、なぜこのような入試改革をしなければならないのかという話があり、それから大塚先生からは、どのような問題点があり、それが大学入試センターの試験に取って代わるときにどのような点に気をつけなければならないのかということでお話がございました。

これまでさまざまな改革にご尽力された方々は、より良い教育システムを作るためにどのようにすればよいかという観点でご議論をされてきたことと思います。私自身も、大学入試センターの先生方、職員の方が非常に良くご努力していらっしゃることは知っておりますし、非常に良い大学入試センターの試験のシステムをなぜ今変えなければならないのか分からないというお話があるのは、十分良く理解できることでございます。問題も非常に奥深いものを作っていらっしゃいまして、大学の一教員から見ても、単に幾つかの選択肢から選択すればいいというような問題ではなくて、しっかりと解かないと答えが見つからないように、大変良い問題を作っておられます。実際、選抜性の高い大学を受ける学生さんには少し易しい、それから、そうでない学生さんたちには少し難しいというところに照準を当てられているので、大変よいシステムであるというふうに私自身は理解しています。

ただし、このままで良いのかということに関して言えば、いろいろ考えなければならないということがあると思います。と言いますのは、大学で学生さんを引き受ける立場からすると、我々は、大学に入学した学生さんたちを鍛えて、それから社会に出していくという、そういうミッションを持っているわけでございますが、学生さんたちがどのように選抜されてきても、大学でしっかりと教育をして差し上げないと、せっかくのそこまでの高等学校の先生方のご努力が無駄になってしまいます。ですから、そういう意味では、大学側が高等学校の先生方、あるいは中学校の先生方と協力しながら良いシステムを作っていくという、このような流れは大変重要なものでございます。

先ほど日本の国力がという話がございまして、国際的なプレゼンスが低くなるということがございました。それは、これから私たちが人材を育成するために極めて問題なポイントでございます。それをどうすればよいかという話であると思います。1つは、国際的な場で活躍できる人材、それを人はグローバルな人材と最近言うようですけれども、そういう人をしっかりと育てて行くということが重要です。一方、人口の減少に歯止めがかからないということも現実の問題としてございます。国際的なプレゼンスを維持するというのは、国力も維持しなければいけない訳ですが、そのためのマンパワーが足りるかという問題をもう少し我々は深刻に直視しないといけない。

そのときに、日本にいる若手だけを大学で鍛えて行けば良いのか、あるいは、日本にいる中学生、高校生を育てて行くだけで良いのかという観点もそろそろ考えないと、我々の今の豊かな社会は維持できない。50年後は、このまま人口が減少していくと相当深刻なことになりかねないと思います。大学入学者の数が減り、大学の運営が立ち行かなくなり、多くの大学の教員がポジションを失うというような、そういう問題が起こる可能性がありますから、大学としても非常に深刻な問題でございます。

今日の私の話は、大きく分けると、何が問題なのかという話、それからもう一つは、大学の入試は今の場合ですと基礎のテストと発展のテストということになるかと思いますけれども、それでできることは何であるのということ、そして、我々はこれから先どうすれば良いのということを話させていただきたいと思っています。

今日は、私自身日本語で講演するというのは珍しいことでございます。私自身は、多くのプレゼンテーションはほとんど英語で行うことばかりでございます。国内の学会でも英語で講演いたしますし、それから、大学の講義も全部英語でやっておりますので、日本語で話すのは珍しいということでございます。私のこれからの話の中で、私が今なぜそういうことを申し上げているかがお分かりいただけるかと思います。

人材育成ということを考えますと、次世代の人類が平和でともに仲よく存続して、社会を作っていく人材を育てて行くということでございますから、日本だけの話ではないと思います。特に資源が有限であり、地球はそれ程大きくないということを考えると、自然科学、あるいはエンジニアリング、そういう分野での深い知識を持った人材を輩出していかな

いと、日本としても大変問題であるということになります。そのような人材育成の責任はどこにあるのかというと、もちろん高等教育の最後は大学、あるいは大学院でございますので、そこでしっかり教育しなければならない。ですから、大学に入る前の入試改革をいかにしようと、何回テストをしようと、どんなに工夫した問題を作ろうと、大学の教育がしっかりしていないと良い人材は作れない訳ですから、我々大学側の責任は極めて重いということが言えます。

国際コミュニティーで活躍していく人材を作っていくということが、私としては非常に重要だと思っています。私自身も国際的な場でいろいろ話をすることが極めて多く、先週は杭州という上海の近くにおりましたし、また、その1週間前はフランスにおりましたし、2週間前はロンドンに居りました。昨晩は、夜8時から11時半まで、終電ぎりぎりまで、テレコンで21人の海外の先生方とパソコンの前で話をするということをしていました。

我々はさまざまな国際委員会に参加したり、学術のディスカッションをしたりしますが、それがどのような効果を生むのでしょうか。私に多くの友人たちが世界各国にいます。北米やヨーロッパの研究者たち、そして、日本との関係がぎくしゃくしている中国や韓国の研究者たちとも大変仲が良く、皆、友達です。このような国を超えたフレンドシップを確立していくということは、そして、そういうことができる人材を育成していくことは、ひいては、日本の国力にも、あるいは経済にも非常にプラスになるというふうに思います。このような大学間の交流等も含めた民間の交流の場で活躍する人を作っていくことが重要です。我々が教育の場をより国際的にしていかないと、将来国際的な場に出ていって英語でコミュニケーションできる人が育たないことになりますので、これは極めて深刻な問題でございます。

東京大学に入る学生さんというのは、入試をパスして来るわけですけれども、平均的には彼らの英語の実用的運用能力は決して高くはありません。最近の学生さんは昔に比べて英語がよくできるということでは無いようです。私どもは、学部の教育も英語で行うべきであると思っておりましたので、東京大学理学部では3年生から海外の大学の2年を終わった学生さんたちを編入学させるグローバルサイエンスコースを昨年秋より始めました。これも東京大学への入学でございますので、秋入学で海外からの学生さんたちを数名受け入れるということを始めました。このグローバルサイエンスコースでは講義は全て英語で行われています。

我々はこのコースを海外からの編入学生たちのためだけに始めた訳ではありません。留学生のための特別なコースでは講義が英語で行われているという場合は、珍しくはないと思いますが、それでは日本人の学生が英語の環境に十分に触れることができないという問題があるように思います。そこで、我々は日本人の内部生と、海外から来た編入学生の両方を対象として、同じ教室で一緒の場で、全部英語で講義をするということをしています。その効果は非常に顕著でございまして、講義中に、内部進学の学生さんたちは、編入学生がすぐそばにいて、同じ教室で前のほうに座って質問しているのを見て、自分たちも質問しなくては、と思ってくれるのか、英語でしっかりと質問をしてくれます。海外からの編入学生たちは、このように、内部進学の学生たちに非常によい刺激を与えてくれています。グローバルサイエンスコースは今2年目を迎えようとしています。今年は知名度が上がったために、世界各国からの応募が増え、編入学は4倍の倍率となりました。

もう一つ、我々大学側として取り組んでいることには、MOOC というオンラインの授業の発信がございます。私も、今年の4月に学部レベルの基礎的な内容の講義を MOOC で配信したところ、世界中から多くの受講者がありました。このような学部レベルの基礎的な講義を英語でオンライン発信していくことは、これから日本の大学が組織的に取り組んでいくべき課題です。このような取り組みは、日本の大学に進学したいという海外の学生さんの数を飛躍的に高くすると思います。

私は東京大学の理学系研究科で、国際対応の担当であるため、海外の大学から訪問される先生方や事務方のお相手をすることが多いのですが、東京大学と交流したいという希望をもって訪問される方々の多くが最初に驚かれることは、東京大学において英語で行われている講義が少ないという事実です。良く聞かれるのは、「英語で講義していなかったのですか。だったら学生を送り込めません」、あるいは「英語で開講されている講義が少ないので、学生を派遣するのは難しい。」、「この学科では英語で講義を行っているのですね。それならば学生を派遣したいと思

います。」などのご意見です。英語で講義をする環境をいかに用意するかは、国際的な力をつけた学生を育てる責任のある、国際交流力のある大学の重要なミッションでございまして、今回の入試改革も、国際的にグローバルに活躍できる人材の育成にプラスになるような方向で考えていただけるとありがたいと思っています。

昨今は、学生さんたちに、ディベート力をつけさせる、議論する力をつけさせることが重要であるといわれます。それはすでに高等学校でも、それから中学校でも行われていることかもしれませんが、ある模擬的な問題に対して議論するということがどれだけ学生さんたちのモチベーションを上げるかということに関しては、実は結構疑問なところがあるように思います。実際の問題に直面し、それをいかにして解決していくかという場面で、ディベート力、交渉力、相手を説得する力等が身についていくのであって、架空の問題を学生さんたちに与えたときに、それにどれだけ学生さんたちが本気になってくれるかは、甚だ疑問であると思っています。

例えば、英語の力をつけさせたいというときに、架空の問題を学生さんたちに与えて、それについて英語で議論をさせてはどうか、という話しが出てくるかも知れませんが、実効性が上がる方法は、普段の教科の授業を英語で行うことであると思います。つまり、理科や社会などの授業を英語で行うのです。そうすれば、普段から英語を使いますから、英語で理解することも無理なくできるようになると思われます。語学というのは普段から使わなければ身につかないので、普段から使うツールとして、学生さんたちに英語を学ぶことの意義をよく理解させるということが重要であると思います。

そうすると、当然、英語で講義のできる先生が必要になります。英語のできる外国人の先生を探せば良いのでしょうか。そうではなくて、今いらっしゃる先生方が自らの英語の力をつけて、学生さんたちに英語で講義をされるのが良いと思います。そのときに、完璧な英語を使う必要はないのです。我々がヨーロッパの人と話をするときに、イギリス人は別ですけれども、イギリス以外の国の人たちは、フランス人にしてもイタリア人にしても、あまり正確でない英語を平気で使っていますが、皆しっかりと議論をします。我々はどうも完璧な英語を話さなければならないと思いがちですが、英語の能力を、たとえブロークンであっても、ともかくちゃんと意思疎通をするだけのレベルのところまでは持っていくということが、高等学校でも大学でも、教員の側に要求されるものだと思います。

さて、ここまでは、国際的な面、語学の面から大学での取り組みをお話ししながら、何が問題であるのか点について、一つの側面をお話ししました。

それでは、基礎学力テストと、それに、発展テスト、つまり、大学入試センターに取って代わるところの試験で何をできるかということをお話したいと思います。つまり、知能活用力、要するに知識だけではなくて、それを活用する思考力、判断力、表現力をいかに学生さんたちにつけてもらうか、そして、それをテストで測ることができるかという問題です。

実は、思考力、それから判断力、表現力というのは、短い時間で解かせる試験でしっかりとした数値として出すのは極めて難しい指標です。つまり、我々がいろいろな場で交渉をしたり、議論をしたり、交流をしたりするときに何が必要になるのかというと、まさに、思考力、判断力、表現力が必要になります。しかし、これらの能力は、On the Job Training、つまり現実の場で経験を積みながら少しづつ高めていくものであって、表現力がAランク、Bランク、Cランクというようなことを、入試の試験答案の記述に基づいて公平性の高い形で数値で評価することは、私はプラクティカルには極めて難しいと思っています。

つまり、答案を採点する側が、十分に高い能力を持っていないと、公平な評価が困難になると危惧されます。確かに、思考力、判断力、表現力を評価するというと、聞こえは良いのですが、それは1点刻みが公平かどうかという問題とはまた別の、公平な評価を一体どのようにすれば良いのか、という問題があり、問題作成や答案の採点に当たっては十分に気をつけていかなければならないと思います。実際には、一つ一つの現実の問題に直面しながら少しずつ、それは切りのない作業ですけれども、少しづつ鍛えられて行くものが思考力であり判断力であり表現力です。ですから、高校生の持つそれらの能力がどのレベルで良いのだと判断すること自体が、実は極めて難しいと思います。

私自身の個人的な意見をずっと述べさせていただいて申し訳ありませんが、若いときに叩き込んだことは忘れないものですので、語学とか数学とか基本

的な教科については、若いときに徹底的に鍛えなければなりません。したがって、詰め込みと言われようが、学生さんたちのために十分な教育環境を用意して、できるだけ多くのことを学ばせてあげる、つまり、学生さんたちを鍛えるということが、大学においても、中学校、高等学校においても我々の務めです。もちろん、基礎的な教科の学習だけでなく、学生さんたちに文化の理解や自然の理解の場を提供することも重要ですので、充実したさまざまな教育環境を用意して提供することが必要です。

その場合、アクティブラーニングは確かに良いかもしれません。ただし、高等学校の教科書は大変よくできていて、学生さんの理解を確認し深めるために節末問題や章末問題が用意されています。それらの問題については、先生が授業をなさった後、学生さんに解いておけよと宿題とされる場合もあるでしょうし、授業の際に先生がお解きになる場合もあると思いますが、そのレベルの問題については既にいろいろな補助教材やアプリがありまして、学生さんたちはそれこそスマホを見ながら問題を解いている場合もあるようです。要するにアクティブラーニングは既に導入されていて、高等学校の先生方は既にそれを教育の中で活用しておられるようです。

一方で、アクティブラーニングやｅラーニングに重点を置きすぎてしまうと、先生は授業の場に来ました、教室に来ました、「君たち、今日はアクティブラーニングの時間だ。じゃあ、パソコンを開けてくれたまえ。自分で問題を解いてね」といって先生はまたどこかへ行ってしまったり、あるいは、教室にいるのだけれど別の仕事をしている、というようなことになってしまいます。それではまずいわけですね。先生方ご自身の経験と力を学生さんたちに直接伝えるのが授業であり講義ですから、そういう場を失うような形でアクティブラーニング的なものとかｅ ラーニングというものが入ってくるとすると、それは非常に気をつけなければならないと思います。寺子屋での教育がそうであったように、先生方が直接教えるという方式は教育の基本であり、それを忘れてはいけないと思います。アクティブラーニングやｅラーニングがいけないと言っているわけではありません。それはそれで良いのですが、それが補助的なものであるということを十分に理解しながら進めなければならないと思います。

大学側として、大学に入学してくる学生さんたちに求めたいもの、つまり、入学試験でしっかりと測ってもらいたいもの、あるいは、測りたいものは、基礎学力に尽きます。また、それに加えて、できることなら、国際的な感覚を持っている人に大学に入ってもらいたいと思います。

時間もないので、最後に、この国際的な感覚、つまり、国際性をどのように学生さんに身につけさせるのかという話をしたいと思います。私は今日、既にこのことについて述べさせていただいていますが、まず、高等学校で、少しずつ英語で授業をするということに取り組んでいっていただけると良いと思います。英語の授業をするということではなくて、英語で授業をするということを申し上げています。英語はツールなので、英語で授業をするという流れを高等学校において、取り入れて頂けると良いと思います。もちろん、すでにそのような取り組みをしておられる高等学校はあるのだろうと思いますが、多くの高等学校ではそうではないと思いますので、英語で授業をする、そして英語で講義をする先生方を育てていくということに取り組んでいただけるとありがたいと思います。

それは、海外の日本の友人たちを増やしていく、つまり、日本が大好きなアジアの国々の人たち、あるいは欧米の人たちを増やしていくことにつながると思います。日本の高等学校の多くが、授業を英語で行っているということになれば、海外からより多くの学生さんが来てくれるようになると思います。そして、先ほど申し上げた日本の人口の減少に歯止めをかけることに貢献できる可能性もあります。今は国が奨学金を用意しても多くの高校生が海外から来ることは望めません。なぜならば、多くの高等学校で、授業を英語で行っていないからです。将来、十分な数の人口を確保し、日本の国力を維持することを意識して、入試改革を設計していただけると大変ありがたいと思っています。

入試を改革することは重要なことですが、それが単なる技術論の議論にならず、何のための技術論かというところを忘れないで進めていっていただきたいと思います。

最後になりますけれども、一つ申し上げておきたいことがございます。学生さんたちにとって、中学校、高等学校のころというのは、勉強だけしていればよい、いわゆる教科の学習だけしていればよいという時代ではありません。友人たちと部活動やサー

クル活動をしながら、そして、さまざまな意見を述べ合い、楽しく会話をしながら、スクールライフをエンジョイして、学ぶ場が楽しいということを認識する時代です。そのときに、あまり早い時期から試験にチューンした学生さんを育てることにこの入試改革が加担してはいけないと思います。高等学校に入った途端に、学力テストのための勉強を始めなければならないということになってしまうと、スクールライフにも深刻な影響を与える可能性があります。このことを十分に注意して行かないと、これからの元気な若者を育てていくことができなくなってしまいます。

幾つも勝手なことを申しましたけれども、入試の改革の方向としては大変よい方向だと思うのですが、技術論になる前に、どういう人材を育てていくべきか、そのために高大接続テストがどのように働けばいいか、本当に判断力とか思考力とか表現力が測れるものかどうかということももう一度よく考えていただきたいと思います。そして、大学入試センターの今の問題の出題のどこが良くないのかということもよく吟味して、その上で改革をしていただきたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会（古谷）

山内先生、ありがとうございました。それでは、最後になりますけれども、東京都立西高等学校長、全国高等学校長協会会長の宮本先生から、「新テストの可能性と課題」という題でお願いいたします。

新テストの可能性と課題
～高校教育の視点から～

東京都立西高等学校長
宮本　久也

○宮本校長

ただいまご紹介いただきました、東京都立西高等学校の宮本でございます。

今回私が依頼されたのは、「新テストの可能性と課題」について高校教育の視点から話をしてほしいということですが、実際に高等学校の現場では、具体的な情報というのは本当に少ないです。マスコミで発表された状況しかよく分からない。そういう中で、どこまで話ができるのか、お話をいただいてから非常に悩んできたわけです。そこで、多くの校長先生方がどういうことを感じているのかということを、少し古いデータになりますが、調査をしたものがあるので、そのデータを紹介しつつ、新しい2つのテストの可能性、あるいは期待することと、それから課題、心配をしていることについて簡単にお話をさせていただきたいと思います。

アンケート調査より

■ 全国普通科高等学校長協会
大学入試研究委員会

実施時期　　平成26年8月
実施校数　　全国 470校
（各都道府県　10校）
進学校、進路多様校　各５校

2

これは、全国の普通科の校長先生方で組織しております全国普通科高等学校長協会という中に、大学入試に関する研究委員会というのがあります。ちょうど高大接続の議論が進んでいる中で、2 つのテストがある程度方向性が見えてきたところで調査をしました。去年の 8 月ですので、今から 9 カ月前になります。したがって、調査の段階では最終的な答申の中身とは少し違ったものにはなっていますけれども、大まかな傾向は見れるのではないかと思っています。

アンケート結果は、各都道府県 10 校の普通科高校を抽出して実施しています。進学校 5 校、それから進路多様校、つまり大学だけではなくて就職、あるいは専修学校等に行く生徒のいる学校、そういう 2 つのグループに分けて、全部で 470 校の学校に対して調査をかけていきました。

アンケート調査より

■ 導入効果について

	基礎テスト	発展テスト
期待できる	28.4%	21.9%
期待できない	16.8%	48.9%
どちらとも いえない	52.7%	26.2%

3

まずは、2 つのテストが期待できますかという内容です。どちらとも言えないというのが両方とも非常に多いですけれども、基礎テストについては、2 つを比べると期待できるというふうに答えている校長先生方のほうが多いわけです。先ほど 2 つのグループに分けて調査をしましたということで、基礎テストに期待できるという質問に対して進学校の校長先生方で期待できると答えた方は 24%です。これに対して、進路多様校の校長先生方の回答が 32%ということで、進路多様校、いろいろな生徒がいる学校の校長先生の中では、この段階で 3 分の 1 ぐらいの先生がこれは期待できるかもという回答を寄せています。これに対して、発展テストの場合は、期待できると応えているのは、進学校の校長先生は 19%、進路多様校の先生方が 24%ということで、これを見てみると、傾向がはっきりと見えてきているように思います。

このとき議論されていた基礎学力テストというのは、高等学校教育改革の高校の質の保証という議論の中から生まれてきていて、今高校生の学力の問題が非常に大きな課題になっていますから、学力を担保する、あるいは学力をつけていくためには、基礎テストの導入ということはあってもいいのかなというふうな思いで回答されている校長先生方が多かったからだと思います。

アンケート調査より

■ 複数回実施について

	基礎テスト	発展テスト
賛　成	33.8%	18.1%
反　対	36.3%	65.0%
どちらとも いえない	27.4%	15.1%

4

それから、複数回実施についてですけれども、これもはっきりと評価が分かれています。基礎テストについては、比較的賛成という方は多い。逆に、発展テストに関しては、反対という人がこの段階で既に 3 分の 2 います。つまり、学力を把握して、そして学力を上げていくということを考えたときには、複数テストがあってもいいのかなという考えが、基礎テストに対して比較的賛成の方が多いという背景にあるのではないかと思っています。逆に、発展テストは選抜のためのテストという側面が強いわけですから、何回もやられると困るなというのがおそらくこのときの校長先生方の反応だったのではないかと思います。

アンケート調査より

■ 実施時期について

（基礎テスト）

1 学年	5.6%
2 学年	32.1%
3 学年	59.3%

5

次に、実施の時期ですが、基礎テストはそうはいってもできるだけ後ろのほうがいいなと思いつつも、3 分の 1 の先生は複数やるならば 2 年生からやってもいいのかなというふなお答えになっています。

アンケート調査より

■ 実施時期について

（発展テスト）

2 学年	4.5%
3 学年 1 学期	14.7%
3 学年 2学期	46.8%（12月）
3学年 3学期	30.3%

6

逆に、発展の場合は基本的には複数やってもらうのは困るという声が圧倒的ですけれども、どうしてもやるのであれば今のセンターテストのせめて 1 月ぐらい前かなという意味で、3 年の 2 学期、12 月という答えが多かった。でも、これは決して 12 月にやってくれということではなくて、どうしてもやるのであればという条件がついているということだと思います。

アンケート調査より

■ 合教科、総合型について

（発展テスト）

賛　成	4.5%
反　対	51.7%
どちらとも いえない	21.3%

7

次に、5 教科、総合型について、これは発展のほうですけれども、これに対しては反対が半分、どちらとも言えない、あとは無回答ですから、少なくとも積極的に取り入れてほしいという意見は非常に少ないというのがこの結果から読み取れるところだと思います。

アンケート調査より

- **発展テストに比べ基礎テストに対する肯定的評価が高い**
- **実施時期はできるだけ遅く**
- **発展テストの合教科、総合型は否定的評価が高い**

8

さて、そういう中で、このアンケートの調査から見えることですけれども、繰り返しになりますけれども、2 つのテストを比較すると、基礎テストに対する肯定的な評価が高いというのが調査から出てきます。繰り返しになりますけれども、あくまでもこれは学力をつける、学力を伸ばすという意味合いでという前提の中での評価ですので、最終的な答申で出てきた一部選抜にも使えるということになると、少し話は違うかなというふうには思っています。また、実施時期は当然できるだけ遅くしてほしいということ。それから、5 教科、総合型については、どちらかというと否定的な評価が高いという、このような結果が出てきています。

さて、そういう中で、この後中教審の答申が出てきて、具体的な 2 つのテストについての方向性が見えてきました。これについては、全部の校長先生方からアンケートを取るなどいろいろなことはまだできていませんけれども、様々な場所で話をしていく中で、2 つのテストをどういうふうに見ているのかということを簡単にお話しします。

基礎学力テスト

【評価】

学力を客観的に把握し、学力向上、教育改善に役立たせる

＊定着状況を見るのであれば複数回実施についても理解

9

1 つは、基礎学力テストについての評価としては、学力を全国同じ物差しで客観的に把握して、それを使って生徒一人一人の学力を高めること、あるいは学校の教育改善に使うということであれば、いいのではないかという声は比較的多いです。そして、定着の度合いを見ていくということであれば、複数やるということも、1 回目に比べて 2 回目はこれぐらい力がついたのかということが見えてくるわけですし、1 回目から 2 回目の力のつき方が弱いのであれば、どうしようかということで、さらに指導の改善ということに役立てることができる。そういう意味では、プラスの評価もできるかなというふうに考えています。

基礎学力テスト

【課題】

1　2年生のテスト結果の扱い

2　テストの難易度

3　3年生のテスト結果の扱い

10

しかし、課題も当然指摘されてきているわけで、前に私のほうからは 3 つ課題を挙げさせていただきました。まず 1 つは、複数回ということで、早ければ 2 年生の秋ぐらいから、夏から秋にと言っていますけれども、問題はここで行ったテストの結果をどう使うのかということです。つまり、途中段階の結果ですから、これをそのまま選抜、あるいは就職等の判断の材料にするということは避けていただきたいということです。繰り返しになりますけれども、高等学校の途中段階の結果を選抜資料にするということは、いかがなのかということです。つまり、そうなってしまうと、就職試験や、あるいは大学入学試験が実質的に 2 年の途中で行われるということと等しくなってしまいます。幾ら複数回といっても、当然最初から受けたほうがいいという判断が出てきますので、そうすると非常に困ります。

先ほどもありましたように、高校生の 2 年の夏から秋というのは、例えば多くの学校では文化祭がある時期であり、部活動にとっても 3 年間で一番力が充実をしていくという時期です。つまり、高校生の人間形成において非常に大事な時期が 2 年生の夏から秋にかけてということになるわけです。ここで彼らはさまざまな活動をしていく中で、それこそ自主

性とか協調性とか社会性とか、あるいは思考力や判断力や表現力、あるいは精神的な強さ、そういったこれから生きていくために必要な力が育つ時期でもあるわけです。そこに例えば入試のようなものが入ってくると、当然そういう力を十分伸ばすということに力を集中できないという状況になってしまう。そうすると、本当に高等学校のよさが失われてしまうのではないかと、多くの校長先生方が危惧をしています。

それから2つ目は、このテストの難易度、どのぐらいの程度の問題になっていくのかということです。ご承知のように、今中学卒業生の98%が高校に入っています。つまり、高校入学時点で相当学力差があるということです。もうそのまますぐに大学の入学試験を受けても合格できるぐらいの力のある子もいれば、小学校の高学年の学習もなかなか厳しいという生徒もいることは事実です。それでもほとんどの学校は、入ってきた子供を少しでも伸ばしたいという形でさまざま努力をしています。しかし、入学の時点で相当差がついているということですね。

したがって、難易度の設定によってはいろいろな課題が起きてきます。かなり高いレベルに難易度が設定されてしまうと、到底そこまで行くのは厳しいという生徒を多く抱える学校は厳しい状況に置かれます。でも、そこをクリアできないと、就職や進学に支障が出るとなれば、どういうことが起こるかというと、それこそ繰り返し、繰り返しほかのことを犠牲にしてでもそこに力を注がなくてはいけないという状況になりかねないということになります。ですから、難易度の設定については十分な配慮をぜひお願いしたいと思います。

それから、3年生のテストの結果の扱いですけれども、あくまでも進学時や就職時の基礎学力の証明や把握方法の一つとして用いるというところの共通理解を是非していただきたい。つまり、これだけで学力を測ってもらっては困るということです。つまり、判断材料の一つというところは書かれていますけれども、そこはぜひ守ってもらいたいということが正直なところです。

大学入学希望者学力評価テスト

【評価】

これからの時代に求められる能力（思考力・判断力・表現力等）を中心に評価するという方向性は理解

11

続きまして、大学入学希望者学力評価テストですけれども、先ほどからお話がありますように、これからの時代に求められるような力を中心に評価するという方向性については、理解できます。

大学入学希望者学力評価テスト

【課題】

1　複数回実施
2　合教科・合科目、総合型入試

＊現行学習指導要領下では困難

12

ただ、問題が幾つかあると思っています。1つは、複数回実施ということで、1回目の実施の時期の問題です。私の学校も中高一貫ではありません。3年制の学校です。高校3年から初めて学習するという科目も実際あります。例えば数Ⅲなんかは高校3年から始めるわけです。あるいは理科でも、物理は本校ではそうです。3年から始めても、今はセンター試験が1月にありますので、そこに何とか間に合わせなくちゃいけないということで、9カ月間にぎゅっと縮めて大急ぎで授業を行って、ようやくセンター試験に間に合わせているという状態です。1月中旬の試験に間に合わせるのがぎりぎりです。ところが、もっと前に試験を行ってしまうと、到底間に合わなくなってしまうということになってきます。ですから、その辺のところの時期については十分考えていただきたい。

中高一貫校は、逆に有利だと思います。6年あるわけですから、そこの中で早く学習内容を教えることができますけれども、私どものような学校はなかなか厳しいです。全国的に見ればほとんどが3年制の高校です。ですから、高校でしっかりと学習した成果を入試で見てもらいたいと思うわけですけれども、そこが見れるような時期というのはどこなのかということをぜひお考えいただきたいなというふうに思います。

それから、合教科・合科目、総合型の入試ということです。旧来の知識を問う問題から、学力の3要素を問うという問題の移行については理解ができるわけですけれども、これもそう簡単にはいかないのではないかというふうに思います。高等学校は小中

学校と違って、全ての教科を学習しているわけではありません。当然理科や地歴公民とか幾つかの科目は選択をしています。合教科ってどうやって組み合わせるのか。例えば本校の理科の教育課程は地学を置いていません。

ところが、合教科の試験問題で地学と数学とかがくっついた問題が出てきたときには、これはどうなのということですね。つまり、学習指導要領上必履修、必ず学ばなくちゃいけないという科目も設定されていますけれども、あとは選択でいいですよというふうになっています。地歴公民でも、世界史は必修ですが、場合によっては地理をやっていない、あるいは日本史をやっていないということは現実にあるわけです。

そういう中で、じゃあ合教科といったときに、どうやってやるのでしょうか。今でもセンター試験では科目を選んで受験することができますから、自分が高校で学習した科目を選べるわけですけれども、合教科・合科目と言われたときに、そこをどうしていくのというのが本当に高校の先生方の素朴な疑問です。それは中学校までの知識で問うとか、そういうようなことなのでしょうかというようなお話ですけれども、例えばそういう課題も出てくるということです。

それから、知識の活用ということ、あるいは知識を統合する力を見るといっても、先ほども申しましたように、現状ではその前提となる基礎的な知識の定着で精いっぱいという学校がたくさんあります。ですから、その辺のところもぜひ考えていただきたい。例えば今学習指導要領の改訂が進められていますけれども、こういった形に大学入試を変更するのであれば、前提となる知識の量をもう少し少なくしてもらいたい。そうではなく、今の上に上積みされていくと、高等学校では対応し切れないということが実際に起こってくると思っています。

新テストに対する不安の声

- **教育課程、教育内容の大幅な見直しが必要**
- **受験一辺倒になり人格教育や特色ある教育活動ができない**
- **部活動、学校行事への影響が大きく、特別活動が停滞**
- **テスト受験に対する費用負担**

さて、このように、2 つのテストに対してさまざま不安な声が出てきています。今も随分お話をしてきたように、方向性については十分理解できますけれども、今もし公表されているようなテストが行われるとなれば、学校の教育課程、あるいは教育内容の大幅な見直しというのが必要になってきます。つまり、今のシステムの中では、十分対応できなくなる。特に試験の内容、あるいは試験の時期によれば、先ほども山内先生から受験一辺倒になってはだめだというお話があったのですが、まさにそういった状況になってしまいます。結局試験に対応するための高校教育に変質してしまうと、本当に大事な人格を育てるという教育や、あるいは現在多くの高校で進められている特色ある教育ができにくくなっていきます。そうなってしまうと、高等学校の役割というのが変わってしまうのではないかという心配をしています。

それから、当然部活動や学校行事への影響も大きくなります。例えば大学入試希望者学力評価テストが 10 月に行われるとなれば、3 年生は部活をやっている場合じゃないです。もう 2 年で引退です。あるいは、3 年生は体育祭や文化祭も希望者だけ参加するというふうになったときに、どうなってしまうのか。でも、試験があるから、その準備をしたいという気持ちは当然あるわけで、複数回あるから後ろで受ければいいじゃないかと言う人もいますけれども、いやいや、複数あるんだったら最初から受けようというのが多くの人の心理ですから、そうなってくると、色々なところにひずみが出てくるのではないかと思います。

今学校教育の中で、様々な力を育てるということをしています。学力は主として教科を通して育てていきますけれども、それ以外にも例えば社会性とか、あるいは公共に対する意識だとか、様々な力を育てていくということの役割がますます今重要になってきています。例えばもうすぐ選挙権の年齢が 18 歳に下がりますから、当然そうなれば、有権者となる高校生に対して必要な教育も今までの教育に加えて新たに学校でやっていく必要が出てきます。というふうに色々なことを高校でやらなくちゃいけないという中で、そういうことに対してしわ寄せが出てきてしまうと非常に困ると思っています。

そしてもう一つは、費用の問題です。今のセンター試験も当然無料ではありません。複数回試験があるということは、それだけ高校生の費用負担が増す

ということです。あるいは、英語でも外部の検定試験を導入すればいいと言われますけれども、外部の検定試験を導入するということは、その受験料もかかるわけです。今も見てみますと、安い試験でも7,000円から8,000円、高い試験は2万円近くなります。そういう試験を複数受けなさい、あるいは基礎のテストも複数受けなさい、大学入学希望者学力評価テストも複数受けなさいとなったときに、この費用負担ということも無視はできません。

現実に、今でもセンター試験を受けに行くのに、泊まって行くというような形で会場まで行っているという受験生は少なからずいます。私どもの東京にいる高校生は幸せです。会場がすぐそこにあるし、場合によっては自分の学校が会場になっていますから。ところが、離島だったり、あるいは地方で近くに会場がなかったりという受験生たちは、その試験のために泊まって、あるいは長い時間かけて、費用をかけて実際に試験に行っているわけです。新しいテストがどういう会場でどういうふうに行われるか分かりませんけれども、もし現在のセンター試験と同じような形で行われるのであれば、それに対する負担というものも少なからずあるということです。

私は今都立高校の校長ですけれども、地方にいて本当に色々な状況の中で一生懸命勉強している子たちもたくさんいるわけで、是非全ての高校生にとっていいような新テストにしていただきたいし、そういう中では、今期待よりは課題のほうが多くて、お話し申し上げましたけれども、そのあたりのところも丁寧に条件整備をして、みんながある程度納得できるような形にぜひしていただきたい。大学入試を柱にして高校教育、大学教育を変えるという改革の方向性は大賛成ですけれども、それをきちっと定着させていくためには、今私が述べたようなさまざまな課題、これが実際に高校の多くの校長先生方が皆さん持っている心配です。そのあたりを安心して新しいテストが受けられるような形に改善していっていただきたいと思います。

以上で私の話を終わります。ありがとうございました。（拍手）

○司会（古谷）

宮本先生、ありがとうございました。

では、4人のパネリストの先生方からご報告いただきましたので、ここで15分間休憩を入れたいと思います。壁の時計が今35分ですので、50分まで休憩とさせていただきます。その間、最初に申し上げましたように、質問票がございますので、ご記入いただき、係の者にお渡しいただければ回収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、50分まで休憩にさせていただきます。

－休　憩－

○司会（大津）

後半を開始させていただきます。大学入試センターの大津が後半司会を務めさせていただきます。

それでは、質問票を幾つかいただいております。全部は今この場で紹介できないので、一部に限定させていただきますことをお断りさせていただきます。まず、幾つか質問が来ているんですが、橋田室長に質問のものから先に紹介させていただきたいと思います。まず、簡単といいますか短い質問からですが、アドミッションポリシーに基づく入試を実質化するには、非常に柔軟な定員管理が欠かせないと思うのですが、この点についての議論はどのようになっているのでしょうか、橋田様のご意見も伺いたいということで、もう一つ続けてご紹介します。新テストはセンター試験の改善版としてイメージされているのでしょうか。それとも、米国のTOEFL、SAT、CATですか、に近いものとしてイメージされているのでしょうか。CATはACTかなと思いますが、に近いものとしてイメージされているのでしょうか。まず、この2点お願いします。

○橋田室長

まず1点目でございますけれども、今後アドミッションポリシーの実質化等個別選抜の改革の支援方策、一つには概算要求に向けて検討していかないといけないという状況でございます。その中では、基盤的経費の取り扱い、競争的資金の取り扱いをどうするかというのは、まず一つは議論になるところでございますけれども、あわせて、いろいろ大学の方々のお話を伺っておりますと、もっと定員管理を弾力化できないかというお話も伺っております。ただ、入れた後どう教育をしていくのか、また、その後の全体としての定員の取り扱いをどうしていくかというかなり大きな話になってまいりますので、そこのところは今後の検討の中でどれぐらい整理できるかというのを詰めていく必要があるかなと思っております。

あと、新テストのイメージですけれども、これまでの入試センター試験のよさ、この部分は引き継ぎ

ながらも、新しい要素としてより深い思考力等を問うような問題が工夫できないかということで、記述式を含めて今検討しているというところでございます。少し諸外国の状況ですとかいろいろな作問形式を参考にする形にはなると思いますけれども、そこのところは、結論としては今のセンター試験のよさも引き継ぐところは引き継ぎながら、より深い思考力を問う問題としてどういう工夫ができるかというのを検討していきたいというところでございます。

○司会（大津）

ありがとうございました。それから、引き続き橋田室長、それからその他の方も含めてということなんですが、少し長い質問がありますので、それを紹介させていただきます。まず最初のものですが、新しいテストは年複数回とのことですが、基礎学力テストなら夏、秋との言及もあります。夏、秋というかなり短い期間での実施に思われます。この時期の問題は、高校との兼ね合いが最も難しいと思いますが、高校総体や甲子園など部活関係の兼ね合いをどうお考えでしょうか。

それから、基礎学力テストの作問レベルは、中下位層が弁別できるものをお考えでしょうか。特に下位は、小中学校での義務の範囲がそもそもできない状況を考えた場合、CAT、これ Computer Aided Test という意味ではないかなと思うんですが、等にせざるを得ないのではないかと思います。

それから 3 番目として、履修主義から到達主義へのカリキュラムの考え方の変化が次期課程では大きなポイントかと思いますが、高校卒業の基準の厳格化等をお考えでしょうかということです。

1 点目が要するに夏、秋という短い期間と高校の部活等の兼ね合い、2 番目が作問レベルに関する質問、3 番目が履修主義から到達主義への考え方が何かあるのかということです。

○橋田室長

実施の時期ということで、答申の中では夏から秋というふうに言われております。ただ、この点については、当然高校の活動等の影響、高校教育、部活動等の影響を十分勘案しながら、検討を進めないといけないと思っております。そういう意味で、中間まとめの中でどれぐらいの方向性が打ち出せるのか、また、中間まとめはまだ最終まとめではない形になりますので、おそらくここからの見込みですけれども、中間まとめが出た後に、そこのところはまた高校関係者等の意見交換等を含めて調整、相談していく必要があるのではないかなと思っております。

2 番目の中下位層のところでございますけれども、ボリュームゾーンを想定しながらも、そういった下位層の部分を視野に入れてというところでございますので、そうしたときに、どういう方式で実施していくのが適用かというのは、今内部的にも少し整理が必要になってくるかなと思っております。

3 点目の履修主義から到達主義という高校の教育課程の部分でございますけれども、次の学習指導要領の改訂に向けましては、教育目標、内容、学習指導方法、評価、これを一体的に検討していくというところでございます。その中で、今回評価の側面もどういう形でやっていくか、今は観点別評価でやっておりますけれども、そこの評価のあり方そのものも見直しを視野に考えてはいるところです。ただ、それは実際到達主義のような形で整理されるのかどうか、そこは今後の中教審の教育課程部会での議論も見守りながら検討を進める必要があるかなと思っております。

○司会（大津）

どうもありがとうございました。あと、では、橋田室長に対する質問はまだあるんですが、ここで大塚先生への質問がありますので、先に紹介させていただきます。2 件あります。最初のご質問が、スライドの 6 枚目に「新時代に必要な力の育成のために」の中で、大学入試がそのような力を持っている人材の選抜ではないとはどのようなことでしょうかという質問がありました。

それからもう一つは、2 つのテストとも基礎的な学力の測定の重要性は認められています。一方、活用力、思考力、判断力は全体的、包括的に測ることは技術的、実際的に難しいとされています。比較的導入しやすい能力試験方法が作れるものに限定して、残りは大学の個別試験に委ねるような方向は検討されていますか。これは 1 名の方のご質問です。

もう一名の方の質問ですが、新たなテスト、すなわち高等学校基礎学力テスト、大学入学希望者学力評価テストを CBT で実施するとして、設備を有する場所、試験会場を確保できるのかということが問題になると思います。いかがでしょうかということです。

最初の方は、要するにスライドに関する質問です。それからもう一つは、活用力、思考力、判断力等を測れるのか、試験で測る内容を限定しないのかというようなご質問。2番目の方は、CBTの場所に関するご質問です。お願いします。

6

●「高大接続」と 学力テストの意味

- **新時代に必要な力の育成のために**
  - → 高校までの教育 ＝ 学習指導要領に体現
    高校生活（課外活動なども含めて）の充実
  - → 大学の教育 ＝ 主体的に学び
    新たな知を創造・共有
  - → 大学入試 その流れを断ち切らないことが肝要
    そのような力を持っている人材の選抜ではない
- **学力テストの意味**
  - → 高校までの積み重ねが最も反映可能な形態
    大学教育への適応の予測がよいツールの一つ

○大塚試験・研究統括官

ありがとうございます。まず、スライドの6枚目にあります、入試は人材の選抜ではないというところの意図はどういうことかという点です。今、社会で求められている人材像は、今まで想定されないような状況において、自ら問題を見つけ出し、主体的な学びを通してそれを解決していく力をもつような人材ということになっているかと思います。それは教育を通して養成していくべき人材像であって、入試でそういう人材を選抜すればよいということではありませんし、そういった選抜機能を入試だけに背負わせることはできないという趣旨です。そういう人材を育てるための教育に適合しているという面から、効率的に選ぶということはあり得るかと思いますけれども、社会が求める人材を直接選ぶのが入試ではないということです。そういう人材を養成していくために何が必要とされるのかということで、例えばそれが「学力」ということに絞れるかもしれません。わざわざ「主体性」とか、目指すべき人材像に直接関わる面まで入試で見ていく必要があるのかどうなのかということは、議論の余地があるところだと私は思っているということです。

そういう意味で、センター試験に代わるべき新テスト、大学入学希望者学力評価テストに、あらゆるもの、あらゆる部分を測定することが求められる流れに議論がなっていっているのではないかと心配されることがよくあります。スライドにも明記しましたけれども、個別試験との役割分担というのを明確にしていく必要があるということを改めて強調しておきたいと思います。50万人という対象を考えますと、新テストではその対象がいくつかに分かれて、50万が30万になるかもしれませんし、そういったような変動はあるかもしれませんが、いずれにしても大規模な試験で、例えば記述式の採点などがきちんとできるかどうなのかということを考えたときに、そういった「表現力」に関わる部分は、個別試験のほうでしっかり見ていくとか、そういった役割分担を意識して、試験設計に当たっていく必要があるというのが私自身の考え方です。

それから、CBTを導入したときの試験会場ということですけれども、これもいろいろな場合を我々の中では議論しておりまして、例えば「基礎テスト」のほうですと、今は各高校にもコンピューターが設置されていますから、それを利用するような方式がまず考えられます。コストパフォーマンスを考えると、それが割安になるわけですが、ただ、その場合にセキュリティーの問題なども出てきます。そこで、今は問題冊子を配付しますけれども、その代わりにタブレットを配付して、今と同じような形で、大学の教室などで実施するということも考えられます。これに近い形は、入試センターではセンター試験当日にモニター調査を並行してやっていますけれども、そこで年に100名前後の被験者でCBTによる試験もやっておりまして、そういったような方式も有力な方法であると思います。

ただ、もちろんタブレットを全員に配るということがどのぐらいのコストがかかるのか、そういうコスト計算も必要になってきますし、また、タブレットなどにしたときの故障率の問題、不具合率の問題、そういったようなことも含めていろいろな検討の余地がありますので、試験会場などに関することは、まだ現時点ではこうだという結論をお示しすることはできない段階です。

以上です。

○司会（大津）

もう一方のCBTに関する質問が含まれていますので、引き続き大塚先生にお願いします。それから、制度のことに関して橋田室長に質問がありますので、紹介させていただきたいと思います。

CBTに関するものですけれども、新テストにおけ

る記述式の導入と CBT 方式は両立するのでしょうか。筆記した回答をコンピューターが判定する技術の開発が可能であるとお考えでいらっしゃいますか。これはおそらく大塚先生に対する質問だと思います。

それから、もう一つの質問は、中教審の答申では英語4技能を測るため外部試験の導入がうたわれておりますが、1月16日の高大改革接続実行プランでは、この点について触れられていないようです。現時点において、英語の外部試験の導入は各大学の個別入試改革に限定されているのか、新テストでは導入を断念されたのか、特に大学入学希望者学力評価テストのほうという意味だと思いますが、お尋ねいたします。また、新テストでの導入を進められている場合、現行のような英語試験との併用となるのか、それとも全面導入になるのか、見通しをお尋ねしますということです。

まず、大塚先生のほうからお願いします。

○大塚試験・研究統括官

ありがとうございます。後のほうの英語の4技能に関しましては、結論は全く出てない段階ですので、どういう方向で進んでいくのかは全く分かりません。私の個人的な感覚からすると、今でもセンター試験がある部分肥大化してきていて、非常に複雑になっているということが言われていますし、特にリスニングの試験などは大学の試験監督を担当した先生方から大変だということもしばしば伺っている中、センター試験の枠組みの中で4技能全てをやっていくということは、あったとしてもかなり先の話になるかと私自身は思っております。

ただ、先ほど少し触れさせていただきましたけれど、いわゆる「フィデリティー」という言い方が出てきておりまして、山内先生の話にもありましたけれども、実際に英語をコミュニケーションのツールとして利用していくような状況というのが日常的になってきたときに、話す力というものを直接測定する測定方法に対するニーズが高まっていくと思いますし、着実にそういう流れになってきていると私も認識しています。しかし、現状で、50万人というオーダーの対象にそういった試験ができるかどうかというと、かなり大きなハードルがありますので、そこは、資格試験等の利用という形で逃げざるを得ないのではないかと私自身は感じておりますが、その辺はまだ具体的にどうなるか分かりません。

英語などに関しては、外部の資格・検定試験の活用ということが強調されておりまして、それらの外部試験は学習指導要領にも対応している部分はかなりありますけれども、それぞれの試験の目的はさまざまですし、高校教育が円滑に動いていくためにも、学習指導要領に準拠した部分は少なくともペーパー試験の形で新テストの中にも含めていく必要はあるかなと思います。特に、先ほども話が出ましたけれども、ボリュームゾーン、あるいはいわゆる下方の学力層を対象として考えたときに、外部の資格・検定試験というのは、相当にレベルが高い部分があると思いますので、その辺も含めて新テストでの対応の仕方ということを考えていく必要はあるだろうと思います。ということで、新テストから全く英語がなくなるということは考えにくいかなと、あくまで個人的な考えですけれど、私はそのように考えております。

この点に関しては、CBTがこれからどういう具合に導入されていくのかということは、4技能の問題にも非常に絡むことですし、また、先ほどの質問にもありましたけれども、記述式の課題も含めて、一つのポイントになっていくことだろうと思います。英語の場合には大学入試センターでも、CBTによるサンプル問題を作っておりまして、例えば、マイクを通じて英語による会話の応答を吹き込んで、それを採点するというような方式なども試みられております。とにかく回答がデジタル化されれば、何らかの形でそれを採点していくということは可能です。

今の段階では、人がそれを採点するということになると思いますけれども、例えば記述式であれば、テキストマイニングなどの方法が発展してきていますので、50万件の回答を得たときに、それを例えば1,000パターンぐらいに分類ができて、その1,000パターンに対して人によって点数を付けるというようなことができるようになれば、多少フィージビリティは増すだろうというようなことも検討されております。機械と人間との採点を併用するような形はあり得ないかということも、検討課題の一つにあげられているということです。

コンピューターによる自動採点ができれば簡単なのでありますけれども、それは簡単ではないと認識しています。今でも、カラオケなどでは自動採点のシステムもあるわけで、我々があれでいいよということが共有できるのであれば、自動採点のシステムも比較的簡単に導入できるということはあると思い

ます。カラオケの自動採点システムも、そう馬鹿にはできないアルゴリズムを組み込んでいるとは思うんですけれども、この前も五木ひろしと氷川きよしが「自分の持ち歌をカラオケで歌って、80 点ぐらいしか点が出ないのには腹が立つね」という会話をテレビでやっていたのを見まして、「個性が大事」ということを彼らは言っておりましたが、自動採点というのは分析的に扱える範囲に今は限られるんだろうと想像しております。

入試センターの研究開発部にも自動採点に関する研究をしている研究者もおりますので、私自身は詳しく知りませんけれども、そういったシステムが個性的な部分まで対応することができるのかどうなのかという点に関しては疑問な部分が残りますので、人と機械とが協働して採点する形の中でどのぐらい合理的、効率的に採点できるのかという技術的な問題がクリアできれば、かなり現実味が帯びてくるということはあるんだろうと思います。少なくとも現時点では、私自身はその辺のところまでは見えていないので、記述式とかスピーキング、ライティングというようなことは、個別試験のほうで分担をしてもらうということ以外ないのではないかというのが本音です。

以上です。

○司会（大津）

橋田室長に、英語外部試験のことについてお願いします。

○橋田室長

実行プランの中では新テスト全般のことしか触れてなくて、英語は明示的には書いておりませんけれども、当然英語の検討は進めていかないといけないという前提で、改革会議の論点の一つにもなっております。

英語の関係で申しますと、大学、高校、民間団体の関係者による連絡協議会というのを設けまして、CEFR というヨーロッパの参照基準がございますけれども、それとの対照表的なものを整理いただいたりですとか、あるいはその成果を踏まえて、3 月には大学での現行の今の取り組みの中での外部試験の活用の促進という通知も出させていただいたりということはしております。

ただ、実際新しいテストの中で資格検定試験をどう活用していくのか。もし本当にこれを活用していくとすれば、どういう団体を対象にして、例えば複数団体を活用するとすれば、換算表を本当に作れるのかどうか、また、仮にそういうシステムが作れたとして、費用負担の問題等をどういうふうにしていくかという、クリアすべき課題がございますので、そこの点を整理した上で、民間資格検定試験を活用したシステム設計のあり方を検討していきたいというところでございます。

○司会（大津）

ありがとうございました。では、次の質問ですが、宮本先生にです。基礎テストの入試への関連づけについての質問で、基礎テストの利用について、全教科、科目一律でなく、例えば社会科の各教科については全科目を必修科目的に取り扱い、その代わりに大学入試で選択科目として高度な知識を問うのではなく、基礎テストで履修度を確認して、それを大学出願の基礎資格とするといった設定はできないでしょうか。各科目ごとに 1 年次、2 年次で完結する授業の課程を設定すれば、高 2 の夏、高 3 の夏等で複数の基礎テストを実施するのも可能となるように思いますがという、基礎テストの使い方に関するご質問です。

○宮本校長

確かに今ご質問の方のお考えは分かりますけれども、例えば 1 年生で学習した科目をそこで測ったからそれでいいというと、そうではないわけです。つまり、知識というのは定着させていくという形になっていくわけですから、そういう意味で、複数試験をやっていくということは多分必要なのだろうと思います。

ですから、私は、さっきも言いましたけれども、基礎テスト自身を全く評価していないということじゃなくて、使い方の問題だと思うので、今の方向性の中でも実施科目は必履修科目となっています。つまり、高校生が等しく学ぶ科目についての基礎的な学力の定着状況を見るというふうな形になっていますので、ただ、そうはいっても、結局 1 年生でやったことを 2 年生でやって、それはそれでいいのかということじゃないと思うんですよね。ですから、定着していないところはもう一回やらせて、そして再度受けてというふうな形になっていくので、そのあたりをどういうふうに使っていくのかというのは、さまざまこれから議論していっていただく必要があると思います。

以上です。

○司会（大津）

ありがとうございました。あと、また橋田室長に質問ですが、調査書に関する質問です。平成 28 年度には調査書及び指導要録の改訂が予定されているが、議論の内容がほとんど外に出ていないように感じています。本来そこが最も大切なところなのではないでしょうか。高大接続という観点から、選抜の指標としてどの程度活用することを想定されているのか教えていただければと思いますということです。お願いします。

○橋田室長

今高大接続システム改革会議の中では、まず新テスト、個別選抜改革の議論をやっておりますけれども、当然調査書は調査書として専門的にこちらのほうも議論していく必要があるかなと思っております。その点については、今後行く行く改革会議の下でも専門的に検討するようなワーキングチームを設けて詰めていきたいと思っておりますけれども、高校時代の多様な学習成果をどう評価していくのか。今の記載欄の中でも、当然部活動ですとか高校のさまざまな学習活動を評価する欄はあるんですけれども、ここの欄の取り扱いをどういうふうにしていくのか。あるいは、どうしても欄になると書く欄が限定されてしまうので、それ以外の参考資料的なものとしてどういう体裁の資料を求めるのかというところを今後詰める必要があるかなと思っております。そこのところは、新テストのあり方、個別選抜改革の全体のスキームの中で、調査書をどう位置づけるかというところと併せて議論していきたいなと思っております。

○司会（大津）

ありがとうございました。あと、先生方皆さんへの質問なんですが、質問の内容です。各大学における個別選抜をどのようにすればよいかがイメージできません。例えば本学では 4,000 人以上の受験者がおりますが､それだけ多くの受験者に対して主体性、多様性、協働性のレベルを評価して選抜できるかは疑問です。結局新テストの結果によって選抜されることになってしまうのではないでしょうか。効果的な個別試験の方法についてお考えがあれば教えてくださいということです。質問者は回答者を特定されていないんですが、これに関して山内先生、もしご意見があればお願いします。

○山内教授

それは各大学のアドミッションポリシーでお考えいただくことですね。しかし、例えば先ほどの自主性とか、あるいは思考力、判断力、表現力を、今行われようとしている統一の試験で判断できるのかどうかということに対しては、私は先ほど懸念を申し上げた通りです。したがって、そこでは判断できていないという前提で大学側が自らしっかりと判断していくべきだろうというふうに理解しています。

つまり、思考力、判断力、表現力については、短い時間の試験や面接では、正確には評価できないと私は思っています。例えば企業が入社試験の一環として面接をするのが普通ですが、最近は、面接で非常にプレゼン能力の高い人、表現力の豊かな人を採用する傾向があるようです。しかし、採用してみると、会社に入ってからは、期待したほどは良く働いてくれないというようなことがあるそうです。最近はリクルート関連の業者の方が、いろいろな指導をされるようで、短い時間のプレゼンに特化した訓練をしてくる学生も多いようです。そうすると、そのような訓練を行わずに面接に臨み、中身がすばらしく良いのにしどろもどろしてしまう学生さんはそこで負けてしまいます。そして、その結果、企業側が良い人材を採り損なう場合があるようで、企業側も非常に反省しているということを企業の人事や研究所の方がおっしゃるのを良く聞きます。それぞれの大学で行う個別テストにおいて面接を行う場合も、短い時間でのプレゼンテーション能力のようなものでは、学生さんたちの能力は判断できないということも理解しなければならないと思います。

今回の入試改革で、大学入試において思考力、判断力、表現力に重点を置くという考え方は分かりますけれども、筆記試験でそれらの能力が正確に評価できるわけではないので、各大学のアドミッションポリシーの中で、そこの部分をさらに精緻にしっかり判断したいというお考えがあるのは当然のことであると思います

○司会（大津）

ありがとうございました。あと、大体最後になるかなと思うんですが、また橋田室長、それから宮本先生も含めての質問です。丁寧で多様な入試を実施する場合、特に大規模私学の場合には、選抜実施時期の延長、拡大が不可欠の条件になります。英米の実情を踏まえると、例えば 3 年次 7 月までには条件付き合格を出し、夏以降は高校での学習を深めても

らい、1 月に実施される学力評価テストで条件以上の成績を出すことで、正式合格とするという方式が考えられます。こうした時期の拡大について、文部科学省内で検討されていますかと、これは橋田室長への質問です。また、高校側ではこうした取り組みの可能性をどう評価されますかという、宮本先生へということです。

橋田室長、お願いします。

○橋田室長

おそらくこの話というのは、大学入学者選抜実施要項で試験区分ですとか、また、試験期日等を定めているところともかかわってくるかと思います。中教審答申、また、改革会議の動きを踏まえまして、その理念を実現するために、また、特に大規模私学さんとの関係でいろいろ改革を進めていただく上でも、実施時期の観点は一つの論点になるかなと思っておりまして、私どもとしてもその取り扱いについては内部的に検討はしているところでございます。ただ今の時点でこういうふうにしますというところはなかなか言えないところがあれなんですけれども、そこのところは来年度以降の要項、あるいは大幅な当然改訂をするときには2年前予告という話にもなってきますので、そことのタイミングも踏まえて検討していきたいなと思っております。

○宮本校長

今のお話ですけれども、選考の早期化につながらないかなということが非常に懸念されます。例えば3 年の夏からということであれば、そこまでに自分の行きたい大学、行きたい学部まで決めないとだめだということですよね。そうすると、例えば本校なんかは、1～2 年生は全員必修です。文系、理系の分けは3 年からです。こういうような学校はどうするのかということです。つまり、早めに、早めに進路指導をしていくという必要が当然出てくるということになってきますね。ですから、その辺のところはまた別の意味で高等学校教育に対する影響が出てくるのではないかなというふうに懸念をいたします。

○司会（大津）

ありがとうございました。質問をたくさんいただいたんですが、必ずしも全てをご紹介できなくて申し訳ございませんでした。今回の……。

○山内教授

1 つだけよろしいですか？

○司会（大津）

はい。どうぞ。

○山内教授

今議論されてないことが1つあるような気がします。例えば英語の TOEFL や英検などの外部試験を導入した場合には、それには費用がかかります。その費用は誰が負担するのかという問題が気がかりです。例えば、非常に財政が豊かな私立の高等学校では、すべて高等学校の負担でその試験を学生さんたちに受けさせることができるかも知れませんし、裕福なご家庭のご子息はご両親がその費用を出せるかも知れません。

しかし、そのような経済支援を受けることができない学生さんの場合は、選別される側としての資格を失ってしまうことになりかねません。これは、家庭の経済的な状況が教育を受ける機会に影響を与えることになり、教育の機会を均等に与えるという大原則を維持できなくなってしまうことを意味しています。したがって、大学入試に資格試験を導入する場合には、その与える影響を十分に検討しておかないと、結果として深刻な問題に直面することになるように思います。

それから、英語の話をいろいろと申しましたが、まず、第一に、読むと書くということが非常に重要でございます。もっと若いときからであれば話しは別ですが、聞くと話すというのは、実は第2外国語の学習においては、その後で身につけて行くということで差し支えないと思います。やはり、読むと書くということをしっかりと叩き込む、英文法をしっかりたたき込むということが重要であって、普段使わない言語の音声でのコミュニケーションを入学試験に導入し、学生さんの言語能力評価に使うことは危険であると私は思います。英語を普段から使うようになれば、話せるようになれるし、聞けるようになるのです。話し言葉としては、通じればよいのです。

先ほどもカラオケの話がありましたけれども、我々が音声言語でコミュニケーションするときは何回も言い直します。相手が分かるように、相手の反応を見て、場合によっては間を置いたりして発言します。そのときに、自動採点マシンで評価したら、多分、0 点になってしまいます。一方、言いよどむことも無く、全く間違い無くしっかりときれいに発音する学生さんたちは、高得点を取ることができるでしょう。しかし、実際の交渉の場では役に立たな

い能力を高く評価することになりかねません。もし、スピーキングやヒヤリングの実技を入学試験で採用することになる場合には、このような側面も余程良く考えて導入しなければなりません。

○司会（大津）

時間になったんですが、今非常に重要な論点が山内先生から出されましたので、特に資格検定試験の費用のことに関して、橋田室長、現在の段階でのことで結構ですので。

○橋田室長

費用負担の観点というのは非常に重要ですし、これは基礎でやる場合も同様ですけれども、特に大学評価テストのほうでやる場合には選抜にもかかわりますので、ここのところは場合によっては、そういう団体を活用する場合には、できるだけ低廉な形、適切な形での価格設定につながるような形で団体とも交渉する必要があると思いますし、国としてそういう支援ができるのかどうかというのは、なかなか今の国の財政事情は厳しいところがございますけれども、そこのところの財政的な観点、また、受験者の費用負担の観点、機会均等の観点を踏まえて検討していく必要があると思っております。

○司会（大津）

ありがとうございました。いろいろな論点とか問題点が、今回の 2 つの新しく構想されているテストについて指摘されたと認識しております。私のほうも、もし実際にテストを実施する場合になったら、それをマネジメントする立場ですので、十分実施可能、問題がないように計画を進めるよう考慮させていただきたいと思っています。

本日は、長い時間どうもありがとうございました。それでは、4 人の先生方に拍手で終わらせていただきたい。（拍手）

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成２７年度入研協大会（第１０回）「公開討論会」

「大学入学者選抜の在り方について」

―学力評価のための新テストの導入を考える―

当 日 ス ラ イ ド （ 抜 粋 ） 拡 大 版

橋田　裕（文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長）
大塚　雄作（独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官）

高大接続改革における
大学入学者選抜の改革について

平成２７年５月２８日

文部科学省大学振興課
大学入試室長

橋田　裕

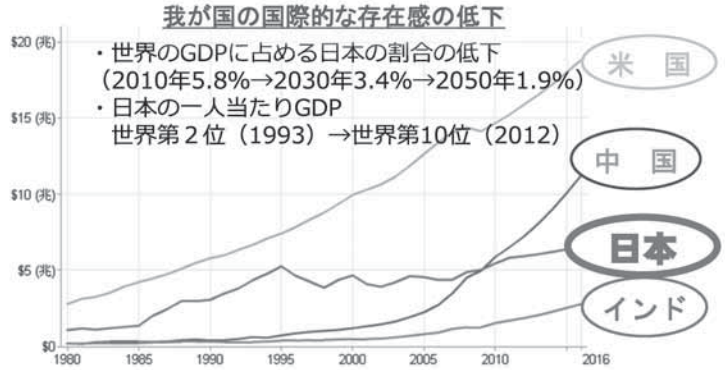
文部科学省
MEXT
MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

今、向き合わなければならない我が国の状況

グローバル化の進展

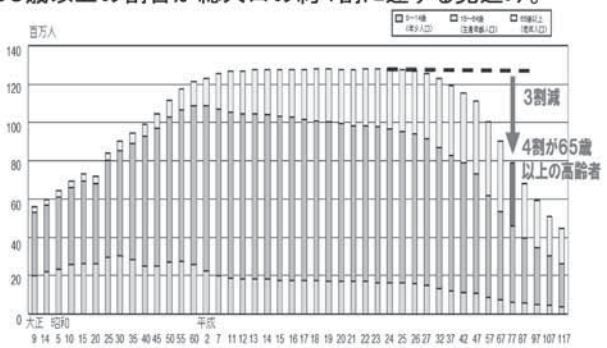
我が国の国際的な存在感の低下

・世界のGDPに占める日本の割合の低下
（2010年5.8%→2030年3.4%→2050年1.9%）
・日本の一人当たりGDP
世界第２位（1993）→世界第10位（2012）



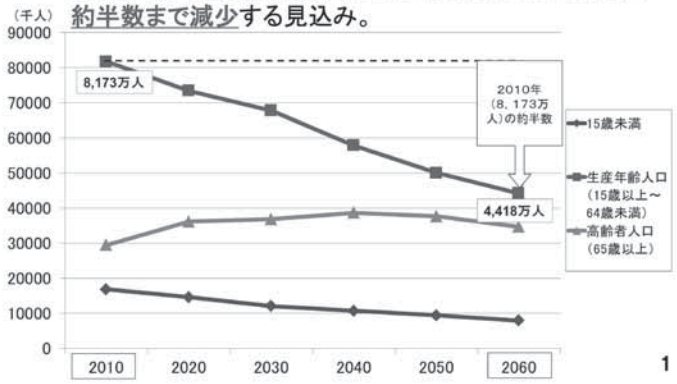
人口の推移と将来人口

少子高齢化の進行により、約50年後には総人口が約3割減少、65歳以上の割合が総人口の約4割に達する見込み。



生産年齢人口の推移

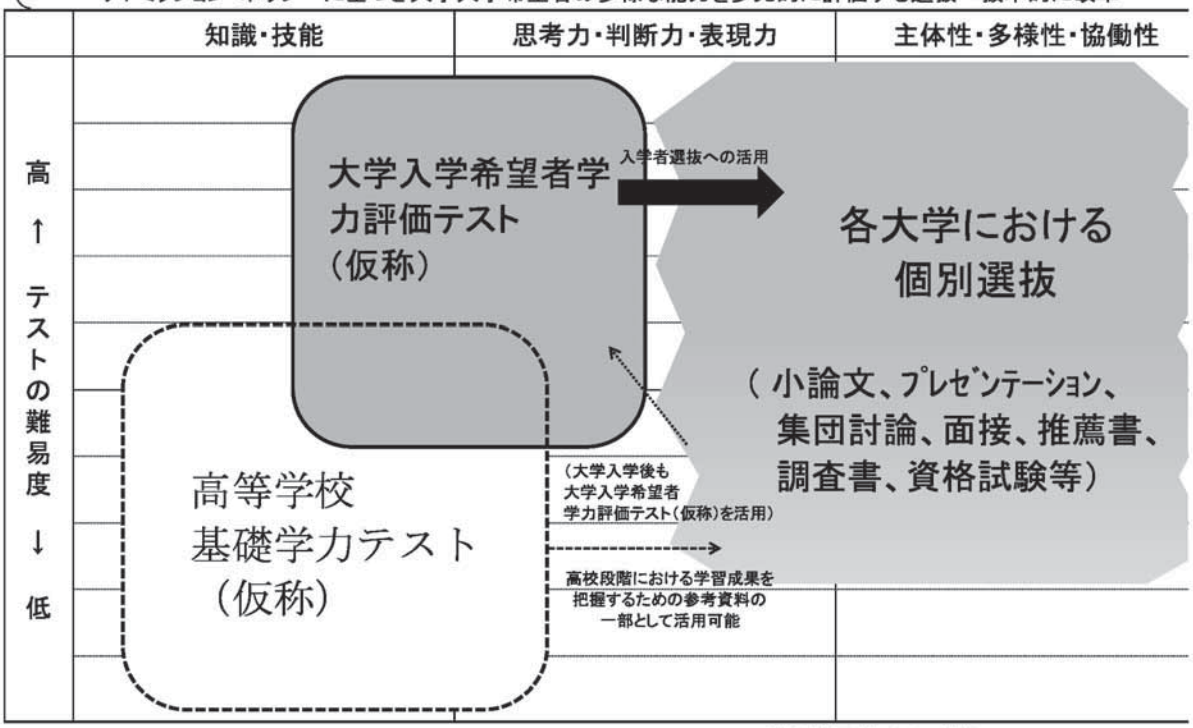
生産年齢人口も減り続け　2060年には2010年と比べ約半数まで減少する見込み。



1

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の難易度と大学入学者選抜への活用方策のイメージ

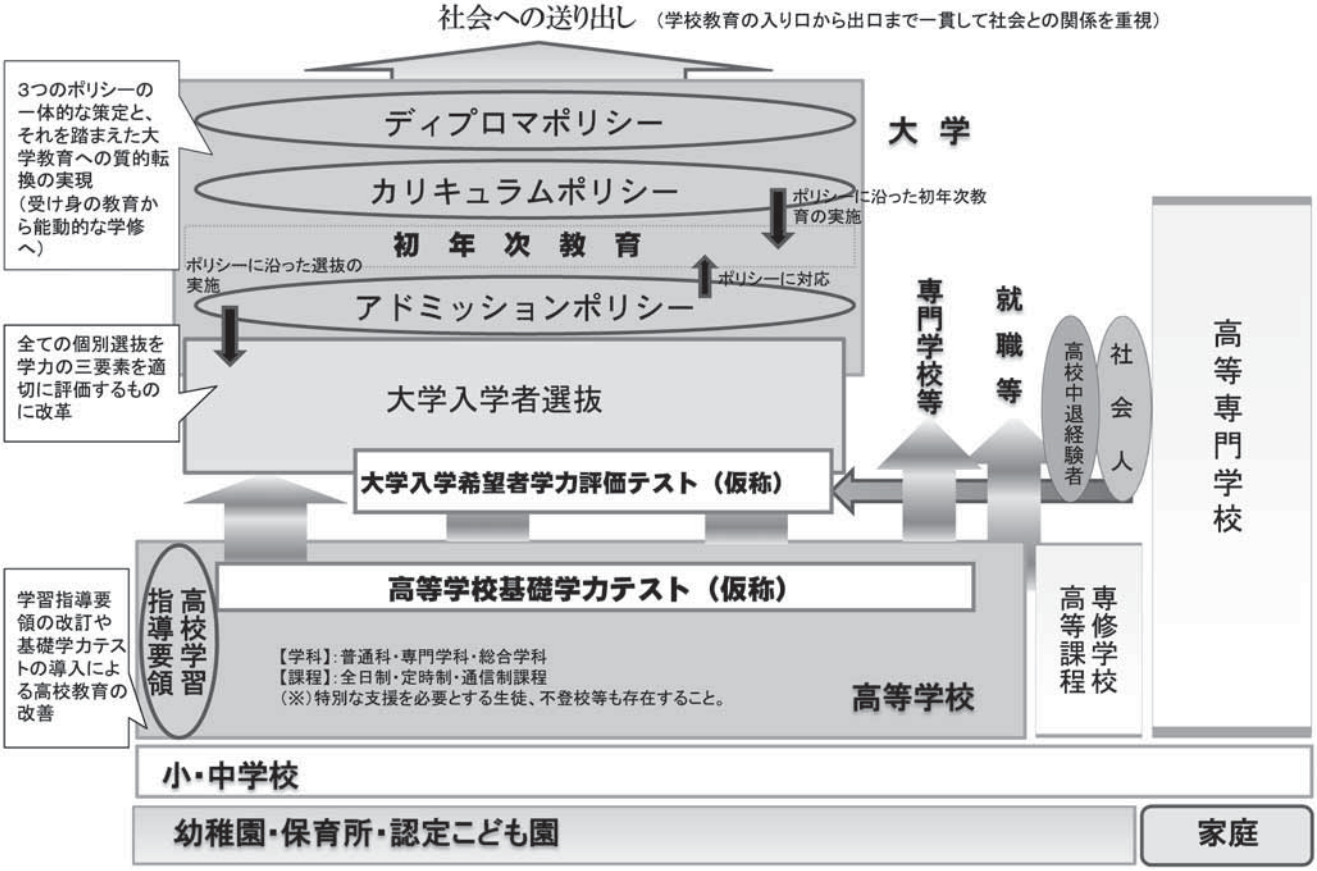
一般入試・推薦・AO入試の区分を廃止し、入学者選抜全体において、
アドミッション・ポリシーに基づき大学入学希望者の多様な能力を多元的に評価する選抜へ抜本的に改革



■ 大学入学者選抜のための仕組み。
⁝ 高校教育の質の確保・向上のための仕組み。

8

初等中等教育から大学教育までの一貫した接続イメージ（素案）



9

高等学校教育改革　③「高等学校基礎学力テスト（仮称）」

現状

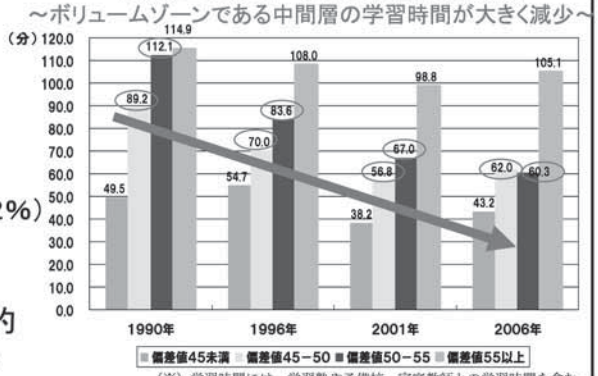
○基礎学力の不足、学習意欲の低さ

・平日、学校の授業時間以外に全く又は
　ほとんど勉強していない者：高校3年生の約4割
・学力中間層の学習時間の減少
・補習授業を実施する大学数：384大学（全体の約52%）

○大学入学者選抜機能の低下

・推薦入試・ＡＯ入試の多くが本来の趣旨・目的
　に沿っていない（単なる入学者数確保の手段）

高校生の学力・学習意欲等の状況
～ボリュームゾーンである中間層の学習時間が大きく減少～



（※）学習時間には、学習塾や予備校、家庭教師との学習時間を含む
（出典）Benesse教育研究開発センター「第４回学習基本調査」

「高等学校基礎学力テスト」の導入

これから

○生徒自らが、高校段階における基礎的な学習の達成度を把握し、自らの学力を客観的に提示

○進学・就職時での学力証明等の方法の一つとして、その結果を大学等が用いることも可能

↓

高校生が身に付けるべき基礎学力の確実な育成
生徒の学習意欲の喚起、学習の改善

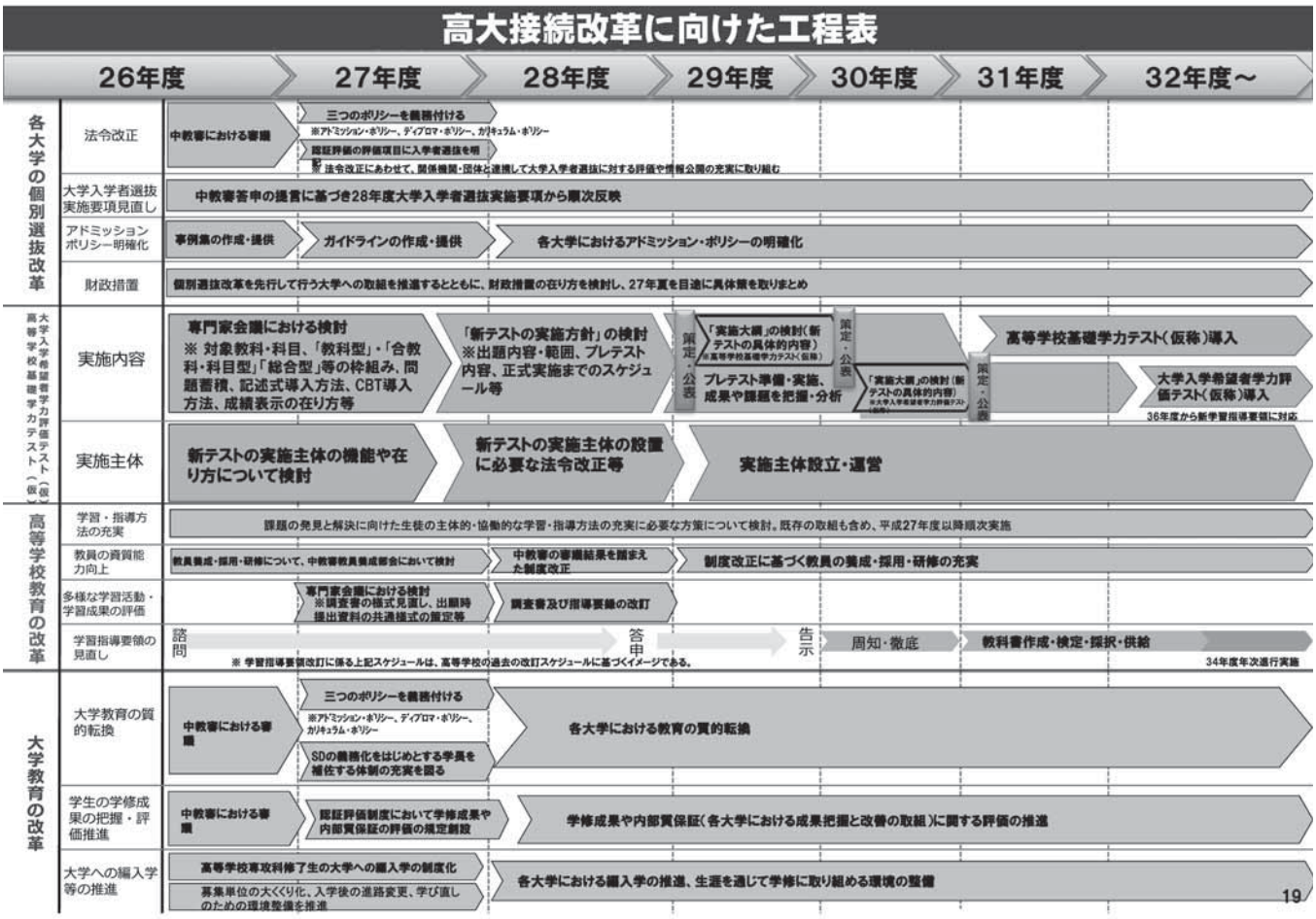
12

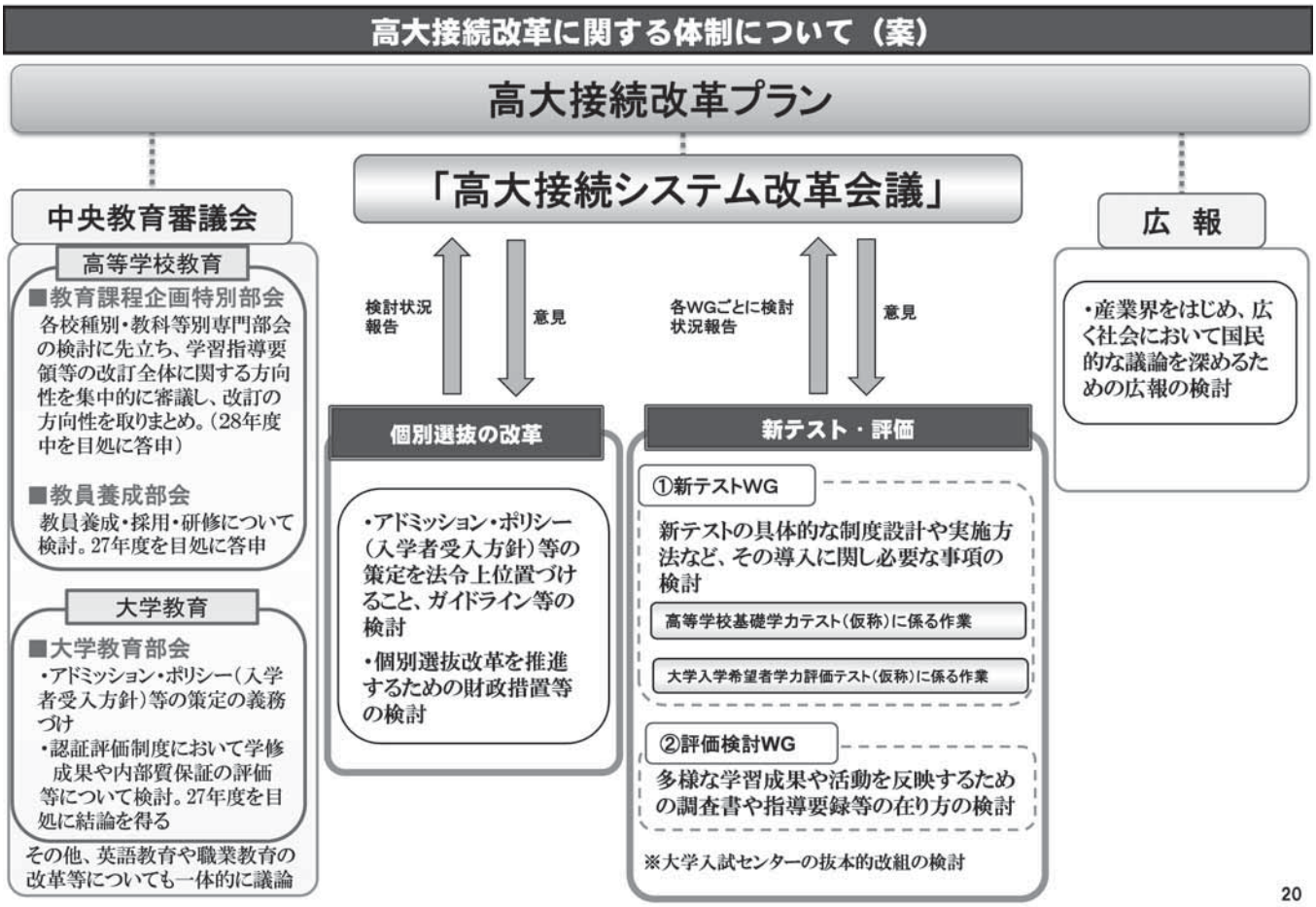
高等学校教育改革　③「高等学校基礎学力テスト（仮称）」について

対象者	○希望参加型
内容	○実施当初は「国語総合」「数学Ⅰ」「世界史」「現代社会」「物理基礎」「ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ英語Ⅰ」等の高校の必履修科目を想定（選択受検も可）。 ○「思考力・判断力・表現力」を評価する問題を含めるが、特に「知識・技能」の確実な習得を重視。 ○各学校・生徒に対し、成績を段階で表示
解答方式	○多肢選択方式が原則、記述式導入を目指す。
実施方法	○在学中に複数回（例えば年間２回程度）高校２・３年での受験を可能とする。 ○実施時期は、夏～秋を基本。※ ○ＣＢＴ方式での実施を前提に開発を行う。 ○英語等については、民間の資格・検定試験も積極的に活用。
作問のイメージ	全国学力・学習状況調査のＡ問題（主として知識に関する問題）及びＢ問題（主として活用に関する問題）の高校教育レベルの問題を想定

※学校現場の意見を聴取しながら検討

13


高大接続改革に向けた工程表
26年度
27年度
28年度
29年度
30年度
31年度
32年度～
各大学の個別選抜改革
法令改正
中教審における審議
三つのポリシーを義務付ける
※アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー
認証評価の評価項目に入学者選抜を明
※ 法令改正にあわせて、関係機関・団体と連携して大学入学者選抜に対する評価や情報公開の充実に取り組む
大学入学者選抜実施要項見直し
中教審答申の提言に基づき28年度大学入学者選抜実施要項から順次反映
アドミッションポリシー明確化
事例集の作成・提供
ガイドラインの作成・提供
各大学におけるアドミッション・ポリシーの明確化
財政措置
個別選抜改革を先行して行う大学への取組を推進するとともに、財政措置の在り方を検討し、27年夏を目途に具体策を取りまとめ
大学入学希望者学力評価テスト（仮称）
高等学校基礎学力テスト（仮称）
実施内容
専門家会議における検討
※ 対象教科・科目、「教科型」・「合教科・科目型」「総合型」等の枠組み、問題蓄積、記述式導入方法、CBT導入方法、成績表示の在り方等
「新テストの実施方針」の検討
※出題内容・範囲、プレテスト内容、正式実施までのスケジュール等
策定・公表
「実施大綱」の検討（新テストの具体的内容）
※高等学校基礎学力テスト（仮称）
プレテスト準備・実施、成果や課題を把握・分析
「実施大綱」の検討（新テストの具体的内容）
※大学入学希望者学力評価テスト（仮称）
策定・公表
高等学校基礎学力テスト（仮称）導入
大学入学希望者学力評価テスト（仮称）導入
36年度から新学習指導要領に対応
実施主体
新テストの実施主体の機能や在り方について検討
新テストの実施主体の設置に必要な法令改正等
実施主体設立・運営
高等学校教育の改革
学習・指導方法の充実
課題の発見と解決に向けた生徒の主体的・協働的な学習・指導方法の充実に必要な方策について検討。既存の取組も含め、平成27年度以降順次実施
教員の資質能力向上
教員養成・採用・研修について、中教審教員養成部会において検討
中教審の審議結果を踏まえた制度改正
制度改正に基づく教員の養成・採用・研修の充実
多様な学習活動・学習成果の評価
専門家会議における検討
※調査書の様式見直し、出願時提出資料の共通様式の策定等
調査書及び指導要録の改訂
学習指導要領の見直し
諮問
答申
告示
周知・徹底
教科書作成・検定・採択・供給
※ 学習指導要領改訂に係る上記スケジュールは、高等学校の過去の改訂スケジュールに基づくイメージである。
34年度年次進行実施
大学教育の改革
大学教育の質的転換
中教審における審議
三つのポリシーを義務付ける
※アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー
SDの義務化をはじめとする学長を補佐する体制の充実を図る
各大学における教育の質的転換
学生の学修成果の把握・評価推進
中教審における審議
認証評価制度において学修成果や内部質保証の評価の規定創設
学修成果や内部質保証（各大学における成果把握と改善の取組）に関する評価の推進
大学への編入学等の推進
高等学校専攻科修了生の大学への編入学の制度化
募集単位の大くくり化、入学後の進路変更、学び直しのための環境整備を推進
各大学における編入学の推進、生涯を通じて学修に取り組める環境の整備
19


高大接続改革に関する体制について（案）
高大接続改革プラン
中央教育審議会
高等学校教育
■教育課程企画特別部会
各校種別・教科等別専門部会の検討に先立ち、学習指導要領等の改訂全体に関する方向性を集中的に審議し、改訂の方向性を取りまとめ。（28年度中を目処に答申）
■教員養成部会
教員養成・採用・研修について検討。27年度を目処に答申
大学教育
■大学教育部会
・アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）等の策定の義務づけ
・認証評価制度において学修成果や内部質保証の評価等について検討。27年度を目処に結論を得る
その他、英語教育や職業教育の改革等についても一体的に議論
「高大接続システム改革会議」
検討状況報告
意見
個別選抜の改革
・アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）等の策定を法令上位置づけること、ガイドライン等の検討
・個別選抜改革を推進するための財政措置等の検討
各WGごとに検討状況報告
意見
新テスト・評価
①新テストWG
新テストの具体的な制度設計や実施方法など、その導入に関し必要な事項の検討
高等学校基礎学力テスト（仮称）に係る作業
大学入学希望者学力評価テスト（仮称）に係る作業
②評価検討WG
多様な学習成果や活動を反映するための調査書や指導要録等の在り方の検討
※大学入試センターの抜本的改組の検討
広　報
・産業界をはじめ、広く社会において国民的な議論を深めるための広報の検討
20

高大接続改革システム会議

趣　旨

中教審答申，高大接続改革実行プランに基づき，高大接続改革の実現に向けた具体的な方策について検討を行う。

主な検討事項

（1）新テストの在り方（「高等学校基礎学力テスト」及び「大学入学希望者学力評価テスト」）

（2）個別選抜の改革の推進方策

（3）多様な学習活動・学習成果の評価の在り方について

構成員

荒瀬　克己　大谷大学文学部教授
◎安西　祐一郎　独立行政法人日本学術振興会理事長
五十嵐　俊子　日野市立平山小学校長
乾　健太郎　東北大学大学院情報科学研究科教授
浦野　光人　株式会社ﾆﾁﾚｲ相談役、公益社団法人経済同友会幹事
岡本　和夫　独立行政法人大学評価・学位授与機構理事
恩藏　直人　早稲田大学理事（広報・入試担当）
片峰　茂　長崎大学長
金子　元久　筑波大学大学研究センター教授
香山　真一　岡山県立和気閑谷高等学校長
河野　真理子　株式会社ｷｬﾘｱﾝ代表取締役、神奈川県教育委員会委員
五神　真　東京大学総長
小林　浩　ﾘｸﾙｰﾄ進学総研所長、ﾘｸﾙｰﾄ「ｶﾚｯｼﾞﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ」編集長
佐藤　東洋士　学校法人桜美林学園理事長・桜美林大学総長
佐野　元彦　一般社団法人全国高等学校PTA連合会会長
鈴木　典比古　公立大学法人国際教養大学理事長・学長
関根　郁夫　埼玉県教育委員会教育長
長崎　榮三　前静岡大学大学院教育学研究科教授
長塚　篤夫　順天中学校・高等学校長
南風原　朝和　東京大学大学院教育学研究科長
羽入　佐和子　理化学研究所理事（お茶の水女子大学前学長）
濵口　道成　名古屋大学顧問（前総長）
日比谷　潤子　国際基督教大学学長
宮本　久也　東京都立西高等学校長
山極　壽一　京都大学総長
山本　廣基　独立行政法人大学入試センター理事長
吉田　研作　上智大学言語教育研究センター長

21

新テストで評価すべき能力等（特に思考力・判断力・表現力等）のイメージについて（たたき台の一例）①

☆今後、新テスト（「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」）の具体的な作問イメージづくりを進めるに当たっては、先行する学力調査等も参考としつつ、新テストにおいて評価する能力（特に、思考力・判断力・表現力等）の構造等について、イメージを共有することが必要。

1．先行調査で評価しようとしている能力等（思考力・判断力・表現力等）の例

Ⅰ．特定の課題に関する調査（論理的な思考）【国立教育政策研究所】

＜論理的に思考する過程での活動＞

①規則、定義、条件等を理解し適用する
資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し、それを具体的に適用する

②必要な情報を抽出し、分析する
多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し、それに基づいて分析する

③趣旨や主張を把握し、評価する
資料は、全体としてどのような内容を述べているかを適確にとらえ、それについて評価する

④事象の関係性について洞察する
資料に提示されている事象が、論理的にどのような関係にあるのかを見極める

⑤仮説を立て、検証する
前提となる資料から仮説を立て、他の資料などを用いて仮説を検証する

⑥議論や論証の構造を判断する
議論や論争の論点・争点について、前提となる暗黙の了解や根拠、また、推論の構造などを明らかにするとともに、その適否を判断する

※上記①～⑥のそれぞれの活動において、思考の過程や結論を適切に表現することを評価する問題も併せて出題

Ⅱ．全国学力・学習状況調査【文部科学省】

【主として「活用」に関する問題の基本理念】

・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力

・様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力など

○国語では、実生活の具体的な場面や生徒が授業などで実際に行っている言語活動を想定

○数学では、次のような数学的なプロセスを整理
・日常的な事象等を数学化すること
・情報を活用すること
・数学的に解釈することや表現すること
・問題解決のための構想を立て実践すること
・結果を評価し改善すること
・他の事象との関係を捉えること
・複数の事象を統合すること
・事象を多面的に見ること

Ⅲ．ＰＩＳＡ調査（3分野）【ＯＥＣＤ】

【読解力】＜読む行為の側面＞

①情報へのアクセス・取り出し
情報を見つけ出し、選び出し、集める

②テキストの統合・解釈
テキストの中の異なる部分の関係を理解し、推論によりテキストの意味を理解する

③テキストの熟考・評価
テキストと自らの知識や経験を関連付けたり、テキストの情報と外部からの知識を関連付けたりしながら、テキストについて判断する

【数学的リテラシー】
＜数学的プロセスの側面＞

①定式化
数学を応用し、使う機会を特定することを含めて、提示された問題や課題を数学によって理解し、解決することができること

②適用
数学的に推論し、数学的概念・手順・事実・ツールを使って数学的に問題を解決すること

③解釈
数学的な解答や結果を検討し、問題の文脈の中でそれらを解釈すること

【科学的リテラシー】
＜科学的能力の側面＞

①科学的な疑問を認識する能力
与えられた状況において科学的に調査できるような疑問を認識すること

②現象を科学的に説明する能力
現象を科学的に記述し、解釈し、変化を予測すること

③科学的な証拠を用いる能力
科学的証拠を解釈し、結論を導き、伝達すること、結論の背景にある仮定や証拠、推論を特定すること

Ⅳ．ＰＩＳＡ調査（問題解決能力調査）【ＯＥＣＤ】

＜問題解決のプロセスの側面＞

①探究・理解
問題状況を観察し、情報を探究して、制約又は障壁を見つけ出す。与えられた情報及び問題状況を通じて、見つけ出した情報を理解していることが示される

②表現・定式化
問題状況の各側面を表現するために、表やグラフ、記号、言語を用いる。関連要素とその相互関係に関する仮説を立てる

③計画・実行
最終的な目標及びそれに向けての小さな目標を設定し、問題を解決するための計画又は方法を決定して、それに従い実行する

④観察・熟考
問題解決へと至るそれぞれの段階・過程を観察する。途中経過を確認し、想定していない出来事と遭遇した場合、必要な処置を行う。解決に至る方法を様々な観点から熟考し、想定や別の解決策を批判的に評価し、追加情報や明確化の必要性を認識し、進捗状況を適切な方法で報告する

22

新テストで評価すべき能力等（特に思考力・判断力・表現力等）のイメージについて（たたき台の一例）②

2．先行調査を踏まえた検討のたたき台の一例

※「特定の課題に関する調査（論理的な思考）」調査（国立教育政策研究所）の枠組み

○ 我が国のグローバル化の進展を踏まえ、また、学習指導要領においても思考力・判断力・表現力を育むことが重要とされる中で、特定の教科に依らず、高校生の論理的に思考する力の状況を把握・分析するための調査を実施。

○ 高等学校第2年次を対象に、論理的に思考する過程での活動を以下の6つに設定し、各活動に係る出題を実施。

○ 本調査の設計に当たっては、PISA調査、全国学力・学習状況調査、「法科大学院適性試験（平成23年から法科大学院全国統一適性試験）」等の枠組み等も参考にしつつ、活動や内容が整理。

活動	具体的な内容
① 規則, 定義, 条件等を理解し適用する。	資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し, それを具体的に適用する。
② 必要な情報を抽出し, 分析する。	多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し, それに基づいて分析する。
③ 趣旨や主張を把握し, 評価する。	資料は, 全体としてどのような内容を述べているのかを的確にとらえ, それについて評価する。
④ 事象の関係性について洞察する。	資料に提示されている事象が, 論理的にどのような関係にあるのかを見極める。
⑤ 仮説を立て, 検証する。	前提となる資料から仮説を立て, 他の資料などを用いて仮説を検証する。
⑥ 議論や論証の構造を判断する。	議論や論争の論点・争点について, 前提となる暗黙の了解や根拠, また, 推論の構造などを明らかにするとともに, その適否を判断する。

※上記①～⑥のそれぞれの活動において、思考の過程や結論を適切に表現することを評価する問題も併せて出題

23

新テストで評価すべき能力等（特に思考力・判断力・表現力等）のイメージについて（たたき台の一例）③

○ 上記の枠組みは、PISA調査や全国学力・学習状況調査等の既存の調査等との関連も踏まえて設定されており、一定の妥当性を持つものと考えられることから、例えば、これに①～⑥の過程や結論を説明したり表現したりするプロセスを追加（⑦の部分）した上で、今後の検討のたたき台の一つとしてはどうか。

思考のプロセス		具体的な内容
① 規則, 定義, 条件等を理解し適用する。	思考過程結論適切表現。	資料から読み取ることができる規則や定義等を理解し, それを具体的に適用する。
② 必要な情報を抽出し, 分析する。		多くの資料や条件から推論に必要な情報を抽出し, それに基づいて分析する。
③ 趣旨や主張を把握し, 評価する。		資料は, 全体としてどのような内容を述べているのかを的確にとらえ, それについて評価する。
④ 事象の関係性について洞察する。		資料に提示されている事象が, 論理的にどのような関係にあるのかを見極める。
⑤ 仮説を立て, 検証する。		前提となる資料から仮説を立て, 他の資料などを用いて仮説を検証する。
⑥ 議論や論証の構造を判断する。		議論や論争の論点・争点について, 前提となる暗黙の了解や根拠, また, 推論の構造などを明らかにするとともに, その適否を判断する。

＜留意事項＞

＊①～⑦のプロセスの前提として、各教科における事実的知識や技能の修得が不可欠。
（同時に、①～⑥のプロセスの中で、並行的に事実的知識や技能が身に付くこともある。）

＊上記のプロセスの比重は、各教科等によって異なるものと考えられる。

＊ 検討に当たっては、小・中・高等学校段階の「調査」と大学入学者選抜段階の「選抜試験」との違いも踏まえる必要。

24

入試研究協議会　公開討論会
2015. 5. 28

新テストの円滑な導入に向けて
―― 段階的戦略を考える ――

大学入試センター
大　塚　雄　作

中教審答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（2014.12.22）』別添資料3より（一部要約等）

総　称	学力評価のための新たなテスト（仮称）	
実施主体	大学入試センターを、新テストの実施・方法開発や評価に関する支援を行う組織に抜本的に改組。	
個別名称	高等学校基礎学力テスト（仮称）	大学入学希望者学力評価テスト（仮称）
目　的・活用方策	○生徒自らの高校における学習達成度の把握。 ○生徒の学習意欲の喚起、学習改善。 ○結果を高校での指導改善。 ○進学・就職時の基礎学力把握（調査書に結果記入など）	○「知識・技能」のみならず、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等」を中心に評価。
対象者	○希望参加型 ※できるだけ多くの生徒参加の方策を検討	○大学入学希望者 ※社会人等を含め、誰でも受験可能。
内　容	○実施当初は高校の必履修科目（「国語総合」「数学Ⅰ」「世界史」「現代社会」「物理基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」等）。 ○「知識・技能」の習得を重視。「思考力・判断力・表現力」も評価（高難度から低難度まで広範囲に）。 ○各学校・生徒に対し、成績を段階で表示 ○各自の正答率等も併せて表示	○「教科型」に加えて、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせて出題。（将来は「合教科・科目型」「総合型」のみによる総合的な評価を目指す） ○広範囲の難易度。特に、選抜性の高い大学が入学者選抜に活用できる水準の高難易度の出題。 ○段階別表示による成績提供
解答方式	○多肢選択方式が原則、記述式導入を目指す。	○多肢選択方式だけでなく、記述式を導入。
検討体制	○ CBT の導入や両テストの難易度・範囲の在り方、問題の蓄積方法、作問の方法、記述式問題の導入方法、成績表示の具体的な在り方等について一体的に検討。	
実施方法	○在学中に複数回（例えば年間 2 回程度）、高校 2・3 年で受験可能。 ○実施時期は夏～秋を基本。（学校現場の意見を聴取しながら検討） ○ CBT 方式での実施を前提に開発。 ○英語等は、民間の資格・検定試験も活用。	○年複数回実施。 ○実施回数・時期は高校・大学関係者と協議。 ○ CBT 方式での実施を前提に開発。 ○特に英語は、四技能を総合的に評価できる問題の出題や民間の資格・検定試験を活用。（他の科目等の民間の開発・活用を検討）
作問のイメージ	全国学力・学習状況調査の A 問題（知識問題）及び B 問題（活用問題）の高校教育レベルの問題を想定	知識・技能を活用する PISA 型の問題を想定

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成２７年度入研協大会（第１０回）「公開討論会」

「大学入学者選抜の在り方について」

―学力評価のための新テストの導入を考える―

当 日 配 布 資 料

橋田　裕（文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長）

平成27年3月5日（木）11:00～13:00
高大接続システム改革会議（第1回）資料5

高大接続改革の実現に向けた基本的な考え方と主な課題について

１．高大接続改革の実現に向けた基本的な考え方

○　これからの時代に社会に出て、国の内外で仕事をし、人生を築いていくためには、一人一人が十分な「知識・技能」に加え、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」や「主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度」を身に付けることが必要。

○　このためには、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革が必要。その観点から、高等学校における学習・指導方法の充実や学習指導要領の見直し、大学教育の質的転換や認証評価制度の改革、個別選抜（各大学が個別に行う入学者選抜をいう。）の改革の推進、多様な学習活動・学習成果の評価、高等学校基礎学力テスト（仮称）」及び「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の実施、「公平性」をめぐる意識改革等が連動する「システム改革」の実現に取り組む。

２．高大接続改革の実現に向けた主な課題

Ⅰ　高等学校教育改革

○ 課題の発見と解決に向けた生徒の主体的・協働的な学びの推進
○ 高等学校教員の養成・採用・研修　※中教審教員養成部会において審議中
○ 多様な学習活動・学習成果の評価＜後掲＞
○ 学習指導要領の見直し　※中教審教育課程企画特別部会において審議中
○「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入＜後掲＞

Ⅱ　大学教育改革

○ 大学教育の質的転換と、その支援の在り方（学長を補佐する体制の充実、アクティブラーニングの導入等）
○ アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）の一体的な策定の義務付け等を通じた大学教育の質の向上
　※中教審大学教育部会において審議中
○ 認証評価制度における学修成果や内部質保証の評価
　※中教審大学教育部会において審議中

Ⅲ　個別選抜の改革の推進方策

○ アドミッション・ポリシーの一層の明確化
○「多面的・総合的な評価」として求められる選抜の在り方
○ 個別選抜の試験問題の改善（より深い思考力・判断力・表現力等を問う問題への転換等）の促進方策
○アドミッション・オフィスの整備・強化の在り方
○個別選抜の改革を行う大学への財政措置等の在り方

Ⅳ　多様な学習成果・学習活動の評価

○ 生徒の多様な学習成果や学習活動を評価を反映するための調査書や指導要録等の在り方

Ⅴ　新テスト

１.「高等学校基礎学力テスト（仮称）」について

（１）対象教科・科目、作問等の在り方

○ 対象教科・科目、出題範囲設定の在り方（英語については、四技能（読む・聞く・書く・話す）を問う試験を目ざすための方策）

○ 求められる作問のイメージの明確化

○ 難易度の設定の在り方（多様な生徒が高等学校に進学している中で、基礎的な学習達成度を把握するとともに、高難度から低難度まで広範囲を測定することをふまえた在り方）

（２）CBT導入の在り方、テストの実施回数等の設計の在り方

○ 複数回かつ広範囲の難易度を実現するための CBT の導入方法や問題の蓄積方法

○ 記述式導入の方策、効率的な採点方法

（３）試験実施方法（実施場所・回数、時期等）・実施体制

（４）成績表示等の在り方

（５）評価の活用方策

○ 指導改善への活用方策

○ 進学・就職時における活用方策の在り方

（６）高等学校卒業程度認定試験との関係についての整理

２.「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」について

（１）対象教科・科目、作問等の在り方

○ 対象教科・科目、「教科型」「合教科・科目型」「総合型」に関する具体的枠組み（英語については、四技能（読む・聞く・書く・話す）を問う試験を目指すための方策）

○ 求められる作問のイメージの明確化（特に思考力・判断力・表現力等を問う問題）

○ 難易度の設定の在り方（共通テストとしての役割や選抜性の高い大学における活用等を踏まえた在り方）

（２）CBT方式の導入の在り方、テストの実施回数・時期等の設計の在り方

○ 複数回かつ広範囲の難易度を実現するための CBT 方式の導入方法や問題の蓄積方法

○ 記述式問題の導入方策、効率的な採点方法

（３）成績表示等の在り方

平成 27 年 4 月 23 日（木）10:00～12:00
高大接続システム改革会議（第 2 回）資料 4

各大学における個別選抜を「多面的・総合的な評価」に改善するための改革に係る主な論点（案）

１．アドミッション・ポリシーの法令上の位置付け、各大学における内容の明確化

○　アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）を、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）と一体的なものとして法令上位置付けることについて。

○　アドミッション・ポリシーに関するガイドライン（「高大接続改革実行プラン」（平成２７年１月１６日文部科学大臣決定）に基づき平成２７年度中に策定予定）において、各大学のアドミッション・ポリシーに具体的に盛り込むよう促す内容について。

（例）

・大学として具体的にどのような力を持つ学生を受け入れたいのか。

・「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（平成２６年１２月２２日中央教育審議会答申）において学力の要素として特に重要と指摘されている以下の三つの要素について、具体的にどのような能力をどのレベルで求めるのか。

　ア　知識・技能

　イ　思考力・判断力・表現力等（知識・技能を活用して、自らの課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力）

　ウ　主体性・多様性・協働性（主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度）

・上記の三つの要素を適切に評価するため、以下に示すような方法の中から何を選択し、どのようなレベルを要求し、どのような比重を置いて評価するか。

　ア　「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」

　イ　記述式や論述式の問題

　ウ　高校時代の学習・活動歴に関する資料

　　調査書（「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の結果を含む。）

　　活動報告書（ボランティア・部活動等）

　　各種大会や顕彰等の記録

　　資格・検定試験

　　推薦書等

　エ　エッセイ、大学入学希望理由書、学修計画書

　オ　面接、集団討論、プレゼンテーション

２．多様な背景を持つ者を受け入れるための多元的な尺度による評価の促進

○　例えば、次のような多様な背景を持つ者が、より適切に評価される多元的な選抜の仕組みを作ることについて。

・科学や芸術などの特定の分野で卓越した才能を有する者
・地域に貢献したいとの意欲を有する者
・専門高校から大学への進学を希望する者
・高等学校の中退者や学び直しをしたい社会人など再チャレンジを志す者
・帰国生徒・外国人生徒
・特別な支援を必要とする者

○　生徒の多様な学習成果や学習活動の評価を反映するための調査書等の改善の在り方について。

３．個別選抜の手法の改善（より深い思考力・判断力・表現力等を問う手法への転換等）の促進方策

○　個別選抜について、より深い思考力・判断力・表現力等を評価する観点から、記述式や論述式などを重視した手法への改善を図ることについて。

○　個別選抜の手法や意図等を公表するなど、各大学が入学希望者や広く社会に対して説明責任を果たすことについて。

４．アドミッション・オフィスの整備・強化の在り方

○　多面的・総合的な評価を行うためにアドミッション・オフィスに求められる機能について。

○　アドミッション・オフィサーをはじめアドミッション・オフィスに求められる専門的人材とその育成方法等について。

○　面接等の手法や評価方法の開発のための方策について。

５．個別選抜の改革を行う大学への支援の在り方

○　新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向け、個別選抜の改革に主体的に取り組む大学にとってインセンティブとなる支援の在り方について。

（参考１）

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（平成 26 年 12 月 22 日中央教育審議会答申）（抄）

◆　各大学が個別に行う入学者選抜（以下「個別選抜」という。）については、学力の三要素を踏まえた多面的な選抜方法をとるものとし、特定分野において卓越した能力を有する者の選抜や、年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等にかかわらず多様な背景を持った学生の受け入れが促進されるよう、具体的な選抜方法等に関する事項を、各大学がその特色等に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化する。このために、アドミッション・ポリシー等の策定を法令上位置付けるとともに、大学入学者選抜実施要項を見直す。

◆　さらに、各大学が、新たな大学入学者選抜実施要項に基づく新たなルールに則って改革を進めることができるよう、大学にとって改革のインセンティブとなるような財政措置等の支援を行う。

（１）各大学のアドミッション・ポリシーに基づく、大学入学希望者の多様性を踏まえた「公正」な選抜の観点に立った大学入学者選抜の確立

大学入学者選抜の改革を進めるに当たっては、「大学入試センター試験」の抜本的改革が必要であるが、それは全体の改革の一部にすぎない。

何よりも重要なことは、個別選抜を、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を問う評価に偏ったものとしたり、入学者の数の確保のための手段に陥らせたりすることなく、「人が人を選ぶ」個別選抜を確立していくことである。「人が人を選ぶ」個別選抜の確立とは、高等学校教育で身に付けた「生きる力」「確かな学力」をいかに大学教育で発展･向上させ、社会へと送り出していくかという観点から、大学の入り口段階で求められる力を多面的･総合的に評価するという、個別選抜本来の役割が果たせるものにすることである。

また、そうした評価に転換するためには、大学入学者選抜を含むあらゆる評価において、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を問い、その結果の点数だけを評価対象とすることが公平であると捉える、既存の「公平性」についての社会的意識を変革し、それぞれの学びを支援する観点から、多様な背景を持つ一人ひとりが積み上げてきた多様な力を、多様な方法で「公正」に評価するという理念に基づく新たな評価を確立していくことが不可欠である。

その際、画一的な一斉試験による大学入学者選抜だけを取り上げて「公平性」を論ずるのではなく、一人ひとりの人間の生涯を通して見た時に、多様な背景を持った学習者一人ひとりの能力が最大限に磨かれるように教育の機会が均等に与えられるという意味での「公正性」を確立していくべきであり、その一部として大学入学者選抜における「公正性」を理解すべきと考えられる。

①　各大学の個別選抜改革

（アドミッション･ポリシーに基づく個別選抜の確立）

各大学は、求める学生像のみならず、各大学の入学者選抜の設計図として必要な事項をアドミッション・ポリシーにおいて明確化することが必要であり、高等学校及び大学において育成すべき「生きる力」「確かな学力」の本質を踏まえつつ、入学者に求める能力は何か、また、それをどのような基準･方法によって評価するのかを、アドミッション･ポリシーにおいて明確に示すことが求められる。

現行法令上、アドミッション・ポリシーの策定が明確に規定されていない点も課題であり、法令上の位置付けを検討する必要がある。

アドミッション・ポリシーの策定に当たっては、各大学の強み、特色や社会的役割を踏まえつつ、大学教育を通じてどのような力を発展・向上させるのかを明らかにした上で、個別選抜において、様々な能力や得意分野、異なる背景を持った多様な生徒が、高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのかを明示する必要がある。

また、「確かな学力」として求められる三要素を総合的に評価する視点を担保するため、どのような評価方法を活用するのか、学力の三要素全てを評価の対象としつつ、特にどういった要素に比重を置くのかを、大学入学希望者に対して明確に示していくことが求められる。

具体的な評価方法としては、下記②に示す「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の成績に加え、小論文、面接、集団討論、プレゼンテーション、調査書、活動報告書、大学入学希望理由書や学修計画書、資格・検定試験などの成績、各種大会等での活動や顕彰の記録、その他受検者のこれまでの努力を証明する資料などを活用することが考えられる。「確かな学力」として求められる力を的確に把握するためには、こうした多元的な評価尺度が必要である。各大学はその教育方針に照らし、どのような評価方法を組み合わせて選抜を行うかを、応募条件として求める「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の成績の具体的提示等を含め、アドミッション・ポリシーにおいて明確に示すことが求められる。

その際、英語については、高等学校教育において育成された「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」四技能を、大学における英語教育に引き継いで確実に伸ばしていくことができるよう、アドミッション・ポリシーにおいても四技能を総合的に評価することを示すこととし、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」における英語の扱いも踏まえつつ、四技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進すべきである。

具体的な評価の在り方について、特に、スーパーグローバル大学等をはじめとする、国内外で活躍できる次世代リーダー等の育成を目指す大学においては、リーダーとして活動するために必要な力とは何かを明確に示し、大学の使命としてその育成を目指すとともに、多様な学生が切磋琢磨する環境作りが不可欠である。特にこうした大学を含め、選抜性の高い大学の学生については、これまでのように知識・技能やそれらを与えられた課題に当てはめて活用する力に優れていることは必要ではあるが、それらだけではまったく不十分であり、「主体性・多様性・協働性」や「思考力・判断力・表現力」を含む「確かな学力」を、高い水準で評価する個別選抜を推進することによって、年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等にかかわらず、多様な背景を持った学生の確保に努める必要がある。

また、選抜性が中程度の大学における大学入学者選抜の現状を見てみると、個別選抜で二科目前後の特定科目を課す形態が多いが、大学独自の作問が負担となっていることの影響などから、知識量のみを問う問題となっていることが多い。今後は、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を積極的に活用しつつ、思考力・判断力・表現力等を含む「確かな学力」を総合的に評価する個別選抜へと転換する。

ＡＯ・推薦入試が本来の趣旨・目的に沿ったものとなっていないなど、入学者選抜が機能しなくなっている大学においては、下記（２）に示す「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の結果を含めた高等学校の学習成果を、調査書の活用等により確実に把握することや、活動報告書の提出や面接の実施等により、大学教育に求められる水準の学力を担保する。

なお、個別選抜全体の中では、アドミッション・ポリシーを踏まえて、多面的・総合的な能力を有する者のみならず、科学や芸術などの特定の分野において卓越した能力を持つ者が、適切に評価される仕組みも重要である。各大学の教育方針に応じて、そうした才能が適切に評価されるよう、アドミッション・ポリシーにおいて、科学オリンピックや各種大会等での活動や顕彰の記録をはじめとした高等学校段階までの様々な活動履歴等も含めて評価することを明確にした上で、大学教育での更なる成長につなげられるような個別選抜の在り方が確保されるべきである。そうした観点から、特に優れた資質を持つ高校生に、大学において高度な指導を受けてさらなる挑戦をする機会が与えられるよう、大学への飛び入学制度について、高等学校の卒業程度認定制度の創設を含め、さらなる活用が図られるべきである。

専門高校についても、主体的に自分の目標を持って専門性を育み、専門科目について高い知識・技能を獲得している生徒が、広範囲の教科・科目の知識が求められる選抜性の高い大学に進学できない場合もある。教育の場に多様性をもたらすためにも、こうした生徒に対応した個別選抜が、高等学校の進路指導や大学入学後の教育課程の多様性の尊重に向けた質的な転換とともに実施されるべきである。

また、上記のような改革の方向性と、「生きる力」「確かな学力」の本質を踏まえた上で、各大学のアドミッション・ポリシーに基づき、下記②に示す新テストに加え、思考力・判断力・表現力を評価するため、自分の考えに基づき論を立てて記述する形式の学力評価を個別に課すこともあってよい。

（多元的な評価に向けた意識改革と、新たな評価手法の蓄積・共有）

個別選抜における評価に当たっては、画一的な一斉試験で正答に関する知識の再生を問い、その結果の点数のみに依拠した選抜を行う従来型の「公平性」「客観性」と、多数の受験生に対して短時間で合否判定を行うための効率性を重視するあまり、面接、集団討論、小論文、調査書、その他による多元的な評価を重視しない傾向がある。この点に関しては、客観性とは何かについての意識改革と併せて、個別選抜を行う側が、自らの都合のみにより選抜する方法ではなく、一人ひとりの入学希望者が行ってきた多様な努力を受け止めつつ、入学者に求められる能力を「公正」に評価し選抜する方法へと意識を転換し、アドミッション・ポリシーに示した基準・方法に基づく多元的な評価の妥当性・信頼性を高め、説明責任を果たしていく必要がある。

こうした多元的な評価に対応した具体的な手法としては、主として複雑な課題に知識・技能を活用して探究し表現することを求める「パフォーマンス評価」、そうした複雑な課題の達成度を数段階に分け、達成度を判断する基準を示す「ルーブリック」、様々な学習過程や成果の記録等を蓄積して学習状況を把握する「ポートフォリオ評価」等が着実に開発されているところである。今後、高等学校教育及び大学教育におけるそうした評価の導入を積極的に推進するとともに、初等中等教育関係者と大学関係者とが協力して具体例を蓄積し共有し、新たな手法も研究・開発していく必要がある。さらに、入学後の学生の成績や活動実績、留年・中退率、卒業後の進路等について追跡調査を行い、評価基準・方法の妥当性を検証していくことも必要である。

こうした評価には事務的な負担が伴い、高い評価能力が要求されることから、国は、評価のノウハウを集約したセンターにおいて、多元的な評価に対応した資料の蓄積・共有、新たな手法の研究・開発を行うとともに、各大学におけるアドミッション・オフィスの強化や、評価の専門的人材の育成、教職員の評価力向上に対する支援を行うことが急務である。

（参考２）

高大接続改革実行プラン（平成 27 年 1 月 16 日文部科学大臣決定）（抄）

１　各大学の個別選抜の改革

【改革の方向性】

多様な背景を持った学生の大学への受入れが促進されるよう、大学入学希望者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価する大学入学者選抜の改革を行う。

特に、各大学の個別選抜において、それぞれの大学の教育カリキュラムや教育改革と連動した入試改革を進めるため、各大学の教育理念やアドミッション・ポリシーに基づき、学力の三要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」）を踏まえた多面的・総合的な選抜方法をとることを促進する。このため、新たな大学入学者選抜のルールを構築するとともに、各大学の入試改革に対する評価の推進や支援の充実を図る。

（１）個別選抜改革を推進するための法令改正

各大学の入学者選抜の設計図であるアドミッション・ポリシーの充実や個別選抜改革の取組に対する評価の推進を図る観点から関係法令を改正する。

○アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）、ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針）の一体的な策定を義務付ける等により各大学の取組を推進する。【中央教育審議会での議論を経て平成２７年度中を目途に改正】
○認証評価に関する省令を改正し、認証評価の評価項目に入学者選抜を明記する。【中央教育審議会での議論を経て平成２７年度中を目途に改正】

（２）大学入学者選抜実施要項の見直し

適切なルールの下での入学者選抜全体の多面的・総合的な評価への転換を図るため、一般入試、推薦入試、AO 入試の区分を廃止した新たなルールを構築するために、大学入学者選抜実施要項を見直す。

○平成２６年１２月２２日中央教育審議会答申を踏まえて、以下の観点を含む大学入学者選抜実施要項とする方向で見直す。
・アドミッション・ポリシーに求められる観点
・アドミッション・ポリシーに基づいた個別選抜の具体的な方法や選抜時の評価に活用する資料の種類等の受験者への明示
・個別選抜の実施時期
・「大学入学希望者学力評価テスト（仮称)」の積極的な活用と、出願要件として求める成績の具体的な提示等の活用方法の明示
・高等学校生活への影響にも十分配慮した「高等学校基礎学力テスト（仮称)」の活用方法の明示
・学力の三要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」）を踏まえた評価
・特定の分野において卓越した能力を有する者の選抜や、年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等にかかわらず多様な背景を持った学生の受入れ
・入学者の追跡調査等による、選抜方法の妥当性・信頼性の検証
○上記の見直しの方向性に基づく検討結果を踏まえ、可能なものから大学入学者選抜実施要項に段階的に反映する。【平成２８年度大学入学者選抜実施要項以降順次反映】

（３）アドミッション・ポリシーの明確化

（１）の法令改正とあわせて、各大学の個別選抜改革の始点であるアドミッション・ポリシーの明確化を支援する取組を推進する。

○アドミッション・ポリシーに関する先行する多様な取組事例を収集した事例集を作成し、各大学に提供する。　【平成２６年度中に事例集を作成】
○専門家による検討も踏まえながら、アドミッション・ポリシーに盛り込むことが求められる事項に関するガイドラインを作成し、各大学に提供する。【平成２７年度中にガイドラインを作成】

（４）認証評価等の推進

（１）の法令改正とあわせて、関係機関等と連携して、認証評価等の具体の取組を推進する。

○認証評価機関と連携して、見直し後の大学入学者選抜実施要項を踏まえた評価による新たなルールの遵守状況の評価、各大学の独自の取組を促す評価（アドミッション・ポリシーと選抜方法との整合性や個別選抜の工夫改善の取組状況）を推進する。【大学入学者選抜実施要項の見直し後に認証評価機関に要請】
○大学ポートレートを稼働して、各大学の入学者選抜等に関する情報公開を開始するとともに、関係団体と連携して、情報公開の内容の充実に取り組む。【関係団体と連携して平成２６年度中に大学ポートレートを稼働】

（５）財政措置

中教審答申や本プランの改革の方向性等を踏まえ、各大学における多面的・総合的な評価を重視した個別選抜改革や新たなルール（法令改正、大学入学者選抜実施要項の見直し等）に則った改革を速やかに推進する。

○個別選抜改革を先行して行う大学の取組を推進する＜別紙参照＞【平成２６年度以降順次実施中】
○各大学におけるアドミッション・オフィスの整備・強化や、アドミッション・ポリシーの明確化をはじめ、個別選抜改革が速やかに実現されるよう、基盤的経費の配分における要件化や加算化、各種の大学改革のための補助金の応募条件における要件化の工夫など、主体的に改革に取り組む大学にとってインセンティブとなるような財政措置の在り方を検討し、具体策を取りまとめる。【平成２７年夏を目途に取りまとめ】

特集２－１

平成２７度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第１０回）企画討論会①

「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試」

日　　時：平成２７年５月２８日（木）１４：００～１６：３０
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　1205・1206 セミナー室
司　　会：川嶋　太津夫（大阪大学教授）

パネリスト及びサブテーマ：

吉田研作（上智大学言語教育研究センター長）
「英語資格・検定試験の入学試験への活用促進に関する最近の動向と活用例」
青山　彰（白梅学園高等学校校長）
「グローバル化に対応した英語教育の改革に、高等学校はいかに取り組むか」
根岸雅史（東京外国語大学教授）
「英語の資格・検定試験の大学入試への活用：可能性と課題」

○司会（川嶋）

今日の企画討論会①「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試」をこれから始めたいと思います。今回会場は2つの教室を連結しておりますので、広いように見えて実は皆さん方窮屈な座席になっているかもしれませんけれども、譲り合って席に座っていただければと思います。

最初に、今回の企画討論会の趣旨を簡単にご紹介させていただきたいと思います。封筒の表書きに書いてあるとおりでございまして、今年度の入研協自体、既にお気づきのことかと思いますけれども、高大接続改革という国の大きな政策動向を受けまして、午前中の公開討論会ではマクロな立場で高大接続改革、特に大学入試改革についてそれぞれ識者の方からご意見を伺いました。

午後の企画討論会は、今年度は2つ企画いたしまして、個別入試で今後の入試改革にどう対応していくかというのが1つのテーマで、もう一つのテーマは本会場でございまして、特に今求められているグローバル人材育成という社会からの要請に対して、高校教育、大学教育、そしてその間をつなぐ大学入試でどのように英語の力を評価していくかということで、今回の企画討論会を考えたということでございます。したがいまして、英語という教科に限定しておりますが、実は高校教育改革、大学教育改革、そしてその2つを結ぶ入試ということのあり方について、英語を題材にして皆さんとともに考えていきたいというのが本企画討論会の趣旨でございます。

それでは、まず本日のご報告者の方を簡単に紹介させていただきます。発表の順番で、まず私のすぐ左に座っておられますのが、上智大学言語教育研究センター長の吉田研作先生です。吉田先生は、ご承知かと思いますけれども、TEAPの開発にかかわられたり、英語の資格・検定試験等の活用に関する協議会、あるいは高大接続システム会議のメンバーとしてご活躍の先生でございます。

そのお隣が、白梅学園高等学校校長の青山彰先生でございます。青山先生は、この3月まで都立国際高校の校長を務められ、また、それまで全国高等学校長協会の会長もお務めになられております。今日は、高校教育の立場から英語の力をどう育成するのか、あるいはひいては大学入試でどういうふうに評価してほしいかといったような観点からお話をしていただきたいと思います。

最後になりますけれども、東京外国語大学教授の根岸雅史先生でございます。根岸先生は、最近つとに聞くようになりましたCEFRの枠組みを日本に導入するに際して、大きな貢献をされたというふうに聞いております。

最後になりましたが、私は司会を担当させていただきます、入研協の企画委員会の委員長も務めております大阪大学の川嶋です。何かと不手際もあろうかと思いますけれども、皆様の協力を得て実りある討論会にしていきたいと思いますので、何とぞご協力のほどお願いしたいと思います。

本日の予定を簡単にご説明させていただきますと、まず3人の先生方に25分ずつそれぞれのプレゼンをしていただきます。それぞれの先生方のプレゼンの資料は、お持ちの封筒の中に入っておりますので、もし欠けているものがございましたら、センターの係員までお申し出いただければと思います。その後、予定では15時20分から10分休憩を取りたいと思います。その際、封筒に質問用紙がございますので、どの先生に対する質問かということを明記していただいて、それぞれご質問を書いていただきたいと思います。この休み時間の間に係員が回収しますので、そのときにお渡ししてください。予定では15時30分から後半のパネルディスカッションに入りたいというふうに思っておりまして、最終の予定時刻は16時30分、定刻を予定しておりますので、皆様のご協力のほどお願いしたいというふうに思っております。

また、あらかじめ申しておきますけれども、もう一枚アンケートが入っておりますので、今日お帰りの際アンケートに記入して、またこれも係員のほうにお渡しいただければというふうに思います。どうかよろしくお願いします。

では、早速吉田先生のほうからご報告をお願いしたいと思います。

（87 ページに掲載）

Sophia University

英語資格・検定試験の入学試験への活用促進に関する最近の動向と活用例

吉田研作
yosida-k@sophia.ac.jp
http://pweb.sophia.ac.jp/1974ky

○吉田センター長

どうもこんにちは。吉田です。よろしくお願いいたします。今川嶋先生からご紹介がございましたけれども、文科省のほうの入試関係を含めた会議でいろいろ議論をさせていただいています。別に結論というようなものがまだ出ているわけではないですけれども、現状からして大体こんなようなことかなという立場から、大学が今後外部試験だとかそういうものを入れていったときに、どんなことを考えて導入されるのか、その辺について少し今日はお話しさせていただきたいと思います。

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申案）のポイント

（2）グローバル化に対応したコミュニケーション力の育成・評価

○ グローバル化の進展の中で、言語や文化が異なる人々と協働していくため、国際共通語である英語力の向上と、我が国の伝統文化に関する深い理解、異文化への理解や躊躇せず交流する態度などが必要である。

○ なかでも、真に使える英語を身に付けるため、「読む」「聞く」といった受け身の技能だけではなく、積極的に表現するための「書く」「話す」も含めた四技能を総合的に育成・評価することが重要である。

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」においては、四技能を総合的に評価できる問題の出題（例えば記述式問題や面接など）や民間の資格・検定試験の活用を行う。また、高等学校における英語教育の目標についても、小学校から高等学校までを通じ達成を目指すべき教育目標を、四技能ごとに一貫した指標の形で設定するよう、学習指導要領を改訂する。

まず最初は、これが高大接続部会のほうの答申が出たときの内容ですね。12 月だったと思います。全部読むことはしませんけれども、グローバル化に対応したような、そういう外国語によるコミュニケーション能力をどうやって育成し、また、評価していけばいいのかというような議論がなされ、そして、2 つ目の丸のところにあるように、英語に関して言うならば、とにかく今まで中心に置かれていた読むということ、そして、時にはたまに聞くという能力は測られていたわけですけれども、こういう受け身的な能力だけではなくて、もっと積極的に自らの考えなどを表現していく書く、話すという、そういう能力を含めた 4 技能の総合的な能力の育成、評価が必要であろうということが言われたわけです。

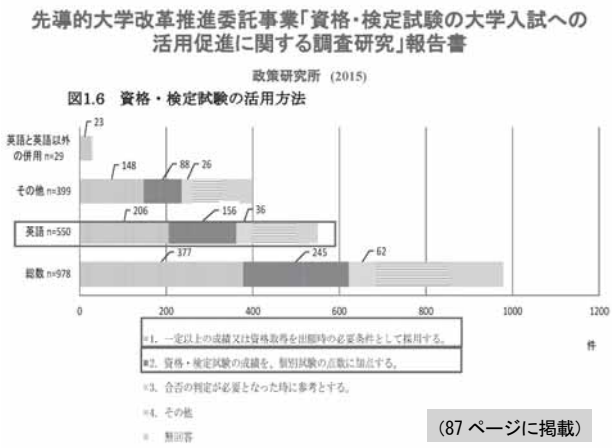
そのために、国としても何らかの方策を取らなきゃいけない。そのために、ここに仮称ということで、午前中にもこの話は出ていたと思うんですが、大学入学希望者学力評価テストというものを一つ作るという、そういう方向で官民一緒になって考えていきましょうというような方向性が示されています。4 技能を総合的に評価する、そういう問題を出題して、官民で一緒に何らかの形で問題を作れればいいなというのと同時に、センター試験は今でもそうですけれども、あらゆる全ての大学が必修というわけではありませんので、こういうテストができたときに、それを選択する大学が出てくるだろうというふうに考えられるわけですが、それ以外にもっと民間の TOEFL であるとか IELTS であるとか、あるいは TEAP であるとかっていう、そういうテストのほうが向いているというような判断がなされれば、そういう民間のテストを活用するということも当然出てくるであろう。ただ、とにかく国として何もしないというわけにはいかないので、とにかく一生懸命 4 技能テストの開発はやりましょうという方向で提案がされたわけです。

今後の英語教育の改善・充実方策について（報告）～グローバル化に対応した英語教育改革 の五つの提言～

生徒等の英語力を客観的に把握するため、
（1）国による資格・検定試験団体と連携した生徒の英語力調査を進めるとともに、
（2）4技能を測定する資格・検定試験のうち、CEFRとの関連を考慮しつつ、
・国際的に広く受け入れられている試験
・国内で開発され広く受け入れられている試験
を、在学中の英語力の評価や入学者選抜において積極的に活用することを促進する

それで、じゃあどういうようなテストを開発していけばいいんだろうかということなんですけれども、1 つ大事なのは、日本という国の中で学習指導要領というのがあるわけですから、その考え方であるとか理念であるとか、そこで求められている目標ですよね、そういうようなものを反映したテストであるということは、中学、高校の教育と結びつけていくという観点からすると、必要になるであろうというふうに考えられるんですね。

また、できる限り、2 番のところに書いてありますけれども、国際的に広く受け入れられるような試験、1 つは、単に日本だけで満足していてはだめなので、ほかの国でも通用するような基準に基づいたテストでなきゃいけないだろう。これは後でまた根岸先生のほうから詳しく CEFR の話は出ると思いますけれども、そういう国際的な基準と照らし合わせた形のテストであることが必要だろう。と同時に、今学習指導要領の話をしましたけれども、国内で開発されて、広く受け入れられる、そういうテストである必要があるのではないだろうか。日本という国なわけですから、そこを頭に入れたテスト作りをしようと。ですから、文科省が今作ろうとしているテストもそういう観点が必要であるというふうに考えられているわけです。

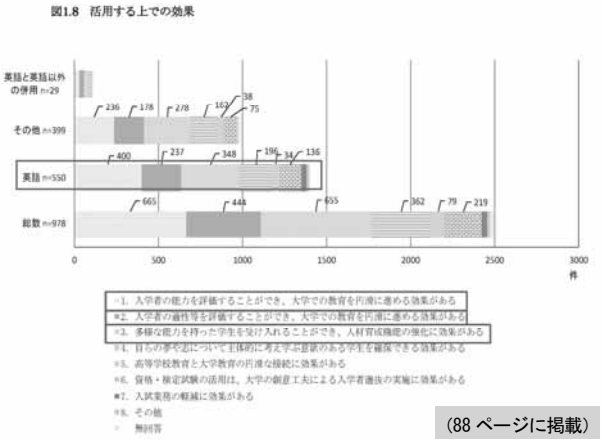


（87 ページに掲載）

そこで、各大学が現在までのところ、また、これから外部テストというものをどのような目的で、どれぐらい活用しているのか、また、活用しようとしているのかということについて、少しデータをお見せしたいと思います。これは、政策研究所のほうでほぼ 1 年間かけて、各大学が、いろいろな種類の外部テストがあるわけですね、英語だけじゃありませんので、漢検もあれば簿記もあったり、いろいろな形の外部テストというのが、資格テストがあるわけですけれども、そういうものが果たしてどれぐらい利用されていて、何のために利用されているのか、どういう目的で大学がそれを採用しているのかという調査を 600 以上の大学に対して行ったわけです。

これをここに出した理由は何かというと、今日までに報告書が出ていると僕は思っていて出しちゃったんだけど、出てないですよね。いいのかなとちょっと僕は今心配になってきたんですけど。というのは、私もこのメンバーをずっとやっていて、今月の初めですよ、もう 1 カ月ほど前に最終版ができまして、これをチェックしてくださいと言われたので、チェックして出したら、まだ出てないというので、ちょっと不安なところはあるんですが、でも、データは変わらないので、いずれにしてももうすぐ出ますから、ここで皆さんに中身だけは簡単にお話しさせていただきます。

ここをごらんになって分かるように、資格・検定試験で実際に使われているものというのは英語が圧倒的に多い。これはごらんのとおりだと思います。そこに色分けというか、斜線になって分かれていますけれども、左側と 1 番目、2 番目というんですかね、そこのところを見てみると、どういうような形で採用されているか。一定以上の成績または資格取得を出願時の必要条件として採用しているという、そういうような使われ方をしているのと、それから、2 番目のところ、資格・検定試験の成績を個別試験の点数に加点するという形で使っているところも幾つかあるようです。加点として使っているところのほうが、実際にはいろいろ話を聞いているとそれほど多くないように思います。ですけれども、こういう形で使っているところが今現在多いということです。



（88 ページに掲載）

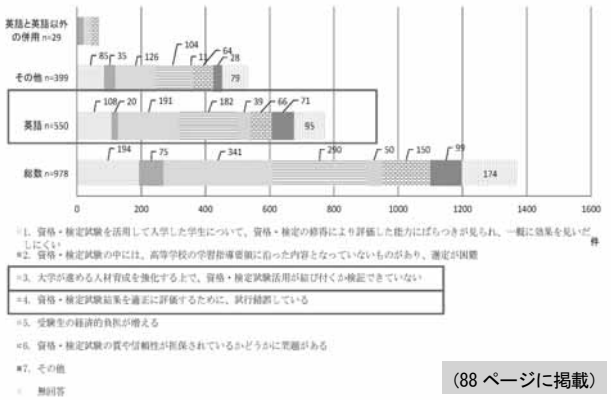
じゃあ、実際に活用していて何か効果があるのかということですね。活用しての効果について、これも 1、2、3 というところが一番回答が多かったので見てみますけれども、まず、例えば入学者の能力を評価することができて、大学の教育を円滑に進める効果があるということと、それから 2 番目に、入学者の適性等を評価することができて、大学での教育を円滑に進める効果がある。そして

3 番目としては、多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果があるというふうに書かれています。

ここで１つ気をつけてなきゃいけないかなと思う点があります。これは言ってみれば、大学のアドミッションポリシーのところなんですよね。入り口のところでこういう試験を採用して入れているわけで、これを見ていると、大学の教育に円滑に入った人たちが進んでいるように読めるわけですけれども、もしそうだとするならば、カリキュラムポリシーだとかそのあたりもちゃんとうまくいっているという前提がないとできないですよね。ところが、多くの大学の場合は、入り口のところはかなりしっかりと基準を高くしたりしているわけですけれども、入ってからそれを伸ばすためのカリキュラムがどこまでできているかということになると、結構まだ疑問が残るところがかなりあるんじゃないかなというふうに思うんですね。

今はスーパーグローバル大学だとか、そういう選ばれている大学が結構ありますけれども、そういうところでは英語で授業をやっていかなきゃいけないとか、英語で学位が取れるプログラムを作らなきゃいけないとか、留学生を増やしたり、日本人の学生を留学させたりとか、いろいろなことをやらなきゃいけないということを考えると、そのプログラムの一環として役に立っているというふうに考えることはできるかもしれませんが、全ての大学がそうかというと、そうではないですよね。ですから、そういう意味で言うと、本当に大学の教育に円滑につながっているかどうかということの判断というのは、大学に入ってからのプログラムとどれだけきちんとつながっているかという、カリキュラムポリシーとの接続の部分が非常に大事ではないかなというふうに思います。

図1.9　活用に対する課題



（88 ページに掲載）

それでは、今度は課題ですね。活用するときに課題としてどういうものがあるかということなんですが、これは３番目と４番目のところが回答数としては多いということで見てみたいと思うんですが、大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験の活用が結びつくかどうかの検証ができていない。これはまさに今お話ししたとおりで、カリキュラムポリシーとの間の検証ができていないということだと思うんです。ですから、逆に言うと、こういうテストで学生を入れたんだけれども、果たしてこのテストで入った学生が自分たちの大学のカリキュラムにぴったり合っているかどうかという検証自体、あまりできていないのかなと。

ここのところは非常に大学にとって大事じゃないかと思うんですね。何でもかんでも例えばTOEFLとかIELTSであればいいということではないだろうし、特殊な学部、学科によっては、例えば商業だとかそういう方向を目指しているのであれば、TOEIC のほうがいいかもしれないですよね。ですから、目的に応じて違ったテストというのは当然出てきていいはずなので、そのあたりの検証がまだできてないということがまず一つ課題として出ています。これは大学自体の問題だというふうに思います。

それから２番目として、資格・検定試験結果を適正に評価するために今でも試行錯誤しているという、これも同じですね。結局適正にちゃんとできているかどうかというのは、入ってからこの人たちはできるのかできないのかよく分からないとか、そのあたりのところはすごく問題かなと思うんですね。

１点だけ、こういう外部試験を入れるときに時々話題になるのが、みなし満点方式的な考え方と、それから資格としてある一定レベル以上あれば誰でも受け入れますよという、そういうのと、大きく分けて２つありますよね。上智大学は資格のほうでやっています。ということは、別にTEAPで満点を取らなきゃだめだというようなことはないし、どっちかというとうちはもともと外国語は強いというふうに言われていますけれども、外国語だけできても困る大学でもあるので、ほかの能力もちゃんとなきゃいけないということで、最低でも外国語の能力がこれだけあれば大学の授業は

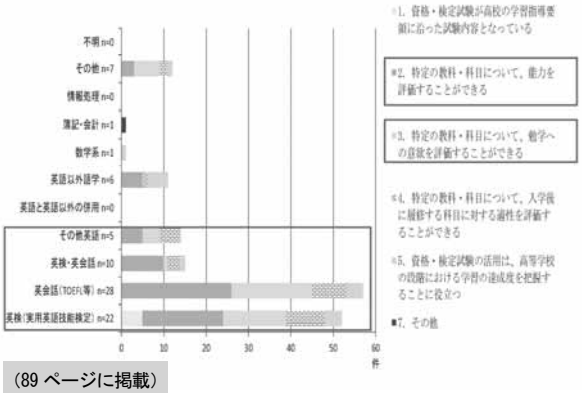
ちゃんとついていけるし、あとは大学で伸ばしてあげられますよという、つまり、うちの中の英語のカリキュラムはCLILという方法で全部今やっていますけれども、現実問題として結構学生たちの評価は高いんですね。高いし、それなりに伸びてきていると思うので、だとしたら、最初から満点を取る必要は要らないという。

むしろ大事なのは、英語の基礎はきちんとできていて、その上で例えば社会だとか歴史だとかほかの能力、あるいは知識がきちんとある人間のほうがいいだろうと。うちの場合のTEAP入試という場合は、例えば公民だとか歴史とかいう社会科の科目はかなり筆記問題を入れているんですね。つまり、思考を試そうという、単なる選択肢だけではなくて、実際に物を考える力があるかどうかを見ていこう、そっちのほうが大事じゃないかという部分はうちの大学の場合はあるので、ある一定の水準があれば英語はいいですよ、あとは入ってから伸ばしてあげます、そういうプログラムがちゃんとあるから大丈夫ですよ、だから、逆に物を考える力がないと、入ってから勉強についていけませんよというような、そういうメッセージを送ろうとしているわけですね。

だけれども、例えばAO入試なんかで本当に特殊な能力を持っている人が欲しいといった場合は、みなし満点のほうがいいかもしれない。英語に特化していたらあなたは入れてあげますよという。ほかの教科は別に要らないかもしれないけれども、とにかくそういう人が欲しいんだというのであれば、それはそれでいいかもしれないけれども、逆に考えなきゃいけないのは、英語はほぼ満点に近い力で入ってきた学生に、ちゃんと教育できるような英語の、外国語のプログラムは大学にあるんですかという質問が出てきますよね。

ですから、入学のときのアドミッションポリシーとカリキュラムポリシーというのはどうしても切り離せないので、大学さんによってどういう目的でどういう人材を入れるか、それが分かっていれば、どういう基準で何をするかというのは決まってくると思うんですね。ですから、ここで課題として皆さんが悩んでおられるというのはよく分かります。非常によく分かるし、ここのところできちんとした大学なりの一つの姿勢というか、解決を出さないといけないというふうに思います。

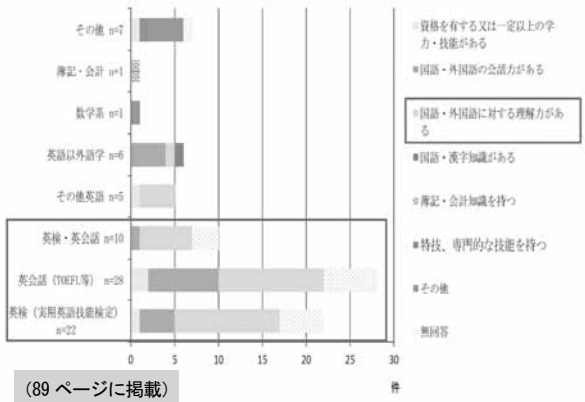
図1.11　平成27年度から資格検定試験活用を考えている理由（n=80）



（89ページに掲載）

次ですけれども、今後27年度から資格・検定試験の活用を考えているといった場合、その理由は何ですかというと、ここも2番、3番というので一応赤で囲ってありますけれども、特定の教科、科目について能力を評価することがそれによってできるから、あるいは、特定の教科、科目について勉学への意欲を評価することができるというふうに言っておられます。これも私は、表面は表面、入ってから大変ですよ、ちゃんと中身も考えておかないと、本当にその後続かなかったら、結局入口でおしまいになってしまうんじゃないかなという心配をすごくします。

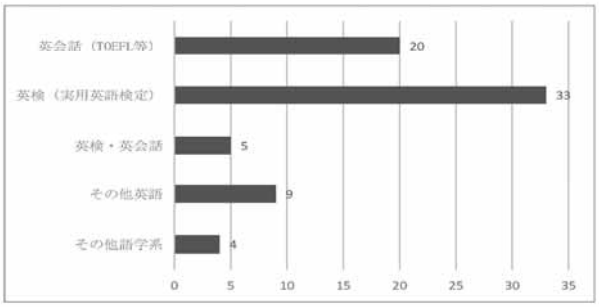
図1.12　平成27年度から活用予定の資格・検定試験の評価する能力



（89ページに掲載）

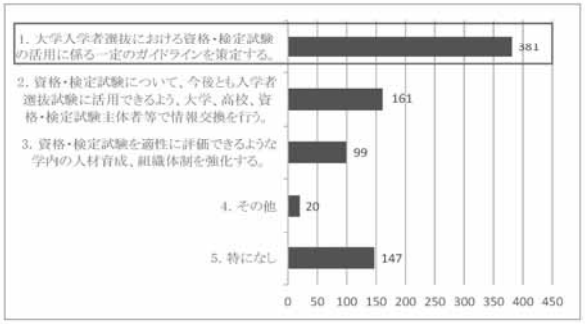
それから、その次ですけれども、平成27年度から活用予定の資格・検定試験の評価する能力はどんなものですかと。これは先ほどとも関連しますが、ここにあるのは国語、外国語に対する理解力というふうに書いてありますね。どっちかというと単なる外国語だけの問題じゃなくて、言語力というふうに考えてもいいかもしれません。そういうことが評価できるんじゃないかというふうに考えている。

図1.13　今後活用予定の資格・検定試験(n=71)



じゃあ、どういうようなテストを採用することを検討していますかというので、この調査をやり始めたときというのは、残念ながら TEAP はまだ入試に使われていませんでしたので入っておりませんが、主にここでは英検と、それから TOEFL という結果が出ています。

図1.13　大学入学者選抜への活用拡大方策(n=685)



それから、外部試験が今後大学の入学選抜で拡大する方策として、何が必要だろうかということで一番言われているのが、資格・検定試験の活用にかかわる一定のガイドラインを策定しなきゃいけない。これは、国がやってくれないとという部分がすごくあると思うんです。

（大学）入試に4技能英語能力判定テストの結果を導入する際の問題点等を検討し、大学や中高などに情報を提供するための協議会の設置

- 学習指導要領に沿った4技能の能力との親和性と測定可能性
- 評価の妥当性（語彙レベル、使用言語領域、出題意図等）
- 多様な生徒・学生の能力への適合性
- 妥当な換算方法（例：出願要件、みなし満点、点数換算等）
- 受験のしやすさ（経済的状況に配慮した受験料・支援、地域バランスに配慮した実施体制、CBTを含めた試験形態、受験回数等）
- 適正・公正な試験実施体制（試験監督、情報管理等）

それを実際に私たちは国として文科省のほうでやったわけですね。協議会を作って、この協議会で、いろいろな外部テストがあるわけですけれども、そういう外部テストを 7 つほど集めて、できる限りその間で共通の認識を持っていけるような形でデータを整理したりしたわけです。

（90 ページに掲載）

ここに載っているものを全てお話しするわけではありませんけれども、これは協議会の一つの産物として、英検さんにホームページ、サイトをお借りして、7 つの外部試験のデータというか、それをホームページで全部 1 カ所で検索できるような、そういう一つのフォー・スキルズ用のサイトを立ち上げることができました。ですから、ここに一つ行っていただくだけで、少なくとも 7 つの外部テストの情報が得られるということです。

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945* S&W 360*
B2	FCE (160-179)	準1級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785* S&W 310*
B1	PET (140-159)	2級 (1790-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550* S&W 240*
A2	KET (120-139)	準2級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225* S&W 160*
A1		3級-5級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120* S&W 80*

英検：日本英語検定協会 http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/
http://www.eiken.or.jp/association/info/2014/pdf/0901/20140901_pressrelease_01.pdf
TOEFL：米国ETS Webサイトに近日公開予定
IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より
TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部検査活用に関する検討会 吉田研作教授資料より
Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/
http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/
※各試験団体の公開資料および文部科学省において作成
GTEC：ベネッセコーポレーションによる資料より
TOEIC：IIBC http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html
「L&R」または「S&W」は配慮が無い場合の4技能の合計点

（90 ページに掲載）

次の点が一番問題点です。これは何かというと、いろいろなテストがあるわけですよね。うちの大学もそうなんですけれども、ほかの大学さんを見ても、いろいろな外部試験を使って、TOEFL ならば何点とか、TOEIC ならば何点とか、英検なら何級とか、TEAP なら何点というので横並びに入学の基準というものを決めておられるわけです。今のところはほとんどこれをやっているのは推薦入試であるとか AO 入試なので、厳密に 1 点刻みで点数を測る必要がないので、それほど大きな問題はないのかなと思いますが、一般入試にこれを当てはめると大変ですよね。一般入試では 1 点の違いが合否に影響することになってしまいますから。

そこで、じゃあどうするんですかと。これを対応できるような表はあるのかという、基準はあるのかということなんですが、はっきり言ってそれぞれのテストは違う目的のためにできているので、全く同じ能力を測れているということは言えっこないんですよね。現実的に。後でもこの辺は根岸さんに詳しいことは言っていただけるんじゃないかと思うんですが。ですから、唯一今できているのは何かというと、どこのテストも一応国際的な基準に照らして、自分たちのテストのスコアはどの程度かというのを示すことはやっています。その国際的な基準が CEFR なんですね。CEFR の下の A1 から上の C2 まで、そこには A1 とはこういうことができることですよとか一応書いてありますので、とりあえずそれに合わせてそれぞれのテストの点数を当てはめて、大体このぐらいであろうというふうに言っているわけです。

でも、これも別に誰かが客観的に検証したわけではないので、同じ人が 7 つのテストを全部受けてどれだけ点数を取るかということをやっていませんから、しかも、受けるたびに眠たかったり疲れていたりしたら絶対同じ点数は出ませんので、そんな簡単にできるようなものじゃないですよね。ですから、はっきり言って本当に客観的な基準としては使えてないと思います。ただ、先ほど言いましたように、特別入試ですよね、推薦入試であるとか AO 入試であるとか、1 点刻みの点数というものが求められないような場合は、これ以上あればいいんですよというふうに言うのであれば、それなりに私は活用の仕方が十分あると思うし、それなりの妥当性というかはあるのかなというふうに思っています。一般入試には、とにかくこのままではとても使えそうな気はしません。

英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針

……生徒学生が生涯にわたり主体的に英語学習に取り組む態度を育成するとともに、英語力については、入学者選抜や入学から卒業に至るまで、「聞く」「話す」「読む」「書く」の技能(以下、「4技能」という。)の初等中等教育から高等教育を通じた総合的な評価が行われることが重要である。

……生徒学生の4技能の総合的な育成及び評価の観点から、英語力の評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用の在り方、有効性及び留意すべき点について協議会として具体的な指針を申し合わせ、各学校及び各団体における英語4技能の資格・検定試験活用を奨励する。

そこで、協議会の結果ですね。こういう文書を各大学さんにもお送りさせていただきました。これは基本的に何かというと、2 つ目のパラグラフのところは、最初は 4 技能の話をしているだけですから、生徒、学生の 4 技能の総合的な育成及び評価の観点から、英語力の評価及び入学者選抜における資格・検定試験の活用のあり方、有効性及び留意すべき点について協議会として具体的な指針を申し合わせ、各学校及び各団体における英語 4 技能の資格・検定試験活用を奨励するということで一応文書を作って、皆さんに回したわけです。ですから、基本的にとにかく 4 技能を、試験を何らかの形で使ってくださいよということなんですね。

Using Proficiency Tests（examples）

1. TOEFL/IELTS
2. TOEIC/BULATS
3. TEAP
4. 英検 (STEP)
5. GTEC for Students
6. TOEFL Junior
7. Cambridge 英検

15

その中の 7 つ、私たちが見たのはこういうテストになるわけです。これは先ほどのテストサイトの中に全部載っていますので、後でごらんいただければと思います。

TEAP採用大学の活用例
2016年度

地域	大学名	利用学部	入試形態
関東	上智大学	ー	特別入試 (カトリック高校対象)
		全学部全学科 (国際教養学部を除く)	TEAP利用入試 (一般入試)
	立教大学	・異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 ・経営学部経営学科 ・国際経営学科	自由選抜入試
		全学部	一般入試 グローバル方式
	中央大学	経済学部、法学部	・英語運用能力特別入学試験
		商学部	・英語運用能力特別入学試験 ・海外帰国生等特別入学試験
	青山学院大学	文学部 英米文学科	←一般入試(個別学部日程)C方式 ・自己推薦入試
		総合文化政策学部 総合文化政策学科	←一般入試(個別学部日程)B方式
		地球社会共生学部 地球社会共生学科	←一般入試(個別学部日程)B方式 ・全国高等学校キリスト者推薦入試 ・自己推薦入試 ・海外就学経験者入試
	東京理科大学	・経営学部ビジネスエコノミクス学科	・グローバル方式入試
	獨協大学	・外国語学部交流文化学科 ・国際教養学部言語文化学科 ・経済学部経済学科、経営学科、国際環境経済学科 ・法学部法律学科、国際関係法学科、総合政策学科 ※外国語学部ドイツ語学科・英語学科・フランス語学科は対象外。	←一般入試A方式「外部検定試験導入型」

（91 ページに掲載）

（91 ページに掲載）

中部	中京大学	国際教養学部、文学部、心理学部、法学部、経済学部、経営学部、総合政策学部、現代社会学部、工学部、スポーツ学部	・A方式英語基準型
	南山大学	全学部・全学科	・全学統一入試 ・外国高等学校卒業者等入学試験 ・外国人留学生入学審査 ・編入学・転入学試験
関西	関西大学	外国語学部	・アドミッション・オフィス入学試験（AO入試） ・スポーツ・フロンテア入学試験（SF入試） ・指定校推薦入試 ・併設校卒業見込者特別推薦入学試験
	関西学院大学	全学部	・センター利用入試
中国	エリザベト音楽大学	音楽学部	・一般入試 ・奨学生入試
九州	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部 国際経営学部	・AO入試　活動実績アピール方式
	西南学院大学	一部学部	・推薦入試（予定）

1 つだけその中で、上智大学と英検で共同で開発したのが TEAP という英語能力テストなんですけれども、これは昨年度初めて一般公開試験をやり始めました。最初は 2 技能だけでしか去年はやっていませんが、今年からは 4 技能全部やっています。初年度は、全部で 3 つか 4 つの大学が 2 技能で特別入試などに採用しましょうということを言っておられたわけですが、1 年たって今 4 技能が始まったところですが、ごらんのように関東圏だけでも 7 つの大学で、あとは中部、関西、四国、九州などの大学も何らかの形で TEAP を導入したいということで、去年の 3 倍から 4 倍の大学が今既に TEAP を何らかの形で利用というふうにしています。

この中で、一般入試、先ほど言いました 1 点刻みということが多少かかわってくるような入試をやっているのが上智大学の TEAP 入試という一般入試です。ただし、これがうまく作動する理由は何かというと、TEAP というテストしか使っていないから。ほかのテストは TEAP 入試で使ってないんです。1 つのテストだけの点数でやっていますから、公平性が保てるんですね。そこのところがほかの特別入試なんかと違うところです。ですから、上智大学でも特別入試、推薦入試などにおいては、TEAP もあれば、TOEFL もあれば、英検もあれば、IELTS もあればと幾つもあるんですね。これは特別入試ということで、1 点刻みの要求がないような、そういうテストの場合はやっています。

というようなことで、国のほうとしても一つの指針となるような、こういうような 4 技能試験が大事なんですよということを示したい。そのために、官民で一緒に協働して何か作っていきたい、そのものを何か示したいというので今頑張っていますけれども、既にこういう外部試験をいろいろなところで活用はされています。それぞれ目的は多少違うと思いますけれども、先ほど言いました、入ってからのカリキュラムポリシーとの関係が私は一番大事かなと。そこで皆さん悩んでおられる。本当にこのテストでいいのかな、入ってきた学生はこれで満足するのかなというような点ですね。そこのところは、我々大学の人間としてはしっかりと考えておかなきゃいけないんじゃないかと思います。

（92 ページに掲載）

References

TEAP　http://www.eiken.or.jp/teap/
「国際共通語として英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（平成23年7月13日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm
文部科学省（2013）外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定に関する検討会議（第7回）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/092/shiryo/1330903.htm
文部科学省（2015）英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針
文部科学省（2014）今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm
文部科学省（2014）慌しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申案）のポイント
教育研究所（2015）先導的大学改革推進委託事業「資格・検定試験の大学入試への活用促進に関する調査研究」報告書

ということで、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会（川嶋）

吉田先生、どうもありがとうございました。英語の外部試験でしたけれども、入試と入学してからの教育を一体的に考えなければいけないという非常にジェネラルに今の改革に結びつくようなご提言と、あとは、複数ある英語の外部試験を今後一般入試にまで導入した場合の問題点を指摘していただいたと思います。ありがとうございました。

それでは、引き続きまして青山先生に、高校の現場で英語教育をどのように取り組んでおられるのか、あるいは入試での英語の検定試験の活用についての問題等をお話ししていただきたいと思います。よろしくお願いします。

平成27年5月28日
入研協企画討論会

グローバル化に対応した英語教育の改革に、高等学校はいかに取り組むか

白梅学園高等学校
青山　彰

○青山校長

よろしくお願いいたします。私は、前回岡山でこの大会がありましたときに、公開討論会に参加させていただいたことがあります。あれからもう 4 年以上たっているわけですけれども、たしか岡

山大会開催の前に佐々木委員会の報告書が出て、高大接続テスト（仮称）について提言がなされたという時期だったと思います。そして今日こういう形で高校の立場で話をさせていただくわけですけれども、この4年間は非常に動きとしては大きなものになったと思います。

今高校も、それから大学も、私から見ますと一つの高原状態に入ったというふうに思います。少し模様眺めを皆さんされている。つまり、国から、あるいは中教審が今具体的な作業部会を作ってデザインを進めているわけですけれども、どういう具体的なデザインが出てくるのかというのを待つ時期にきたというふうに思います。今日私は、高校の立場でこのようなタイトルを作らせていただきました。内容としてはかなり大雑把な枠組みで作ってありますので、ゆったりと聞いていただければと思います。

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問の概要

（平成26年12月4日初等中等教育分科会教育課程部会資料より）

- **「何を教えるか」**

  自立した人間として多様な他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力に向けた教育目標・内容の改善

- **「どのように学ぶか」**

  課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の充実

- **「どのような力が身に付いたか」**

  育成すべき資質・能力を育む観点からの学習評価の改善

昨年の12月4日の教育課程部会の資料を見てみますと、ポイントとして「何を教えるか」、それから「どのように学ぶか」、「どのような力が身についたか」という項目が置かれています。何を教えるかというのは、これまでも高校では教育課程を編成して、学習指導を行ってきていることではあるのですけれども、今回、大切になってきているのは、教育目標や内容を改善して、そこから具体的な指導に下ろしてくることです。そして今回は、何を達成させるかというところで、資質、能力について具体的に取り組んでいかなければならないということが示されています。

そのために、コンテンツ自体よりも、それをどのように学んでいくのか、学ぶ姿勢を身につけるのかというところが重要になってきているということが高校に課せられている課題になっています。主体的、協働的に学ぶ学習、これをきちんと実現できるのかということが求められています。さらに、どのような力が身についたかということで、学習評価を確実に行わなければならない。現在日本の高等学校で一番弱いのはこの部分です。学習評価の改善を行わなければならない。義務教育の段階までは、何らかの形で評価というものが指導の中に組み込まれているわけですけれども、高等学校に入ったところで緩くなるというのが現実であると申し上げなければならない現状です。

育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の在り方や、教育内容の見直し例

グローバル社会で求められる力の育成
（特に英語の能力）①

（1）小学校～高等学校

- 達成を目指すべき教育目標を、「英語を使って何ができるようになるか」の観点から四技能に係る一貫した具体的指標形式で示す

（2）小学校

- 中学年～　外国語活動開始⇒音声に慣れ親しませる
- 高学年～　学習の系統性の観点から教科化
  ⇒身近で簡単なことについて互いの考えや気持ちを伝え合う能力を養う

その次に、グローバル社会で求められる力の育成というところから、各校種はどうなのかということを見ていきたいと思います。小学校から高等学校まで一貫して言えることは、4技能にかかわって一貫して具体的な指標形式で示していかなければならないということです。これが今後、形作られていくものになるわけですが、小学校については、皆様ご案内のとおり、外国語活動について中学年に下ろされること、高学年では教科化が行われていくということになりました。

育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の在り方や、教育内容の見直し例

グローバル社会で求められる力の育成
（特に英語の能力）②

（3）中学校

- 授業は英語で行うことを基本
- 身近な話題について互いの考えや気持ちを伝え合う能力を高める

（4）高等学校

- 幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高める

中学校に目を移しますと、これまではそうではなかったのかとお思いになるかもしれませんけれども、現実問題として英語の授業を英語で行うと

いうのは、徹底して行われてきていませんでした。高等学校をまず先にやって、それから中学校に下ろしてということになったわけですが、なぜかといいますと、中学校の場合には言語活動のところでゲームなどを中心にして英語を使うということは行われていましたが、断片的な様相を呈し、もう少し幅の広い、あるいは内容を深めてというところでの指導については、まだまだ十分ではなかった。そこで、高等学校と同様に English classes in English という形での指導を行うことで、充実を図らなければならない。コミュニケーション能力を高めていかなければならないということが求められることになったわけです。

高等学校は、ご案内のとおり平成 25 年の 4 月から English classes in English ということで行われているわけですが、報道などをご覧いただくと、達成率という点ではまだ十分でないということが言えます。学校によって取組にばらつきがあり、コミュニケーション英語の中で英語で授業が行われているかということを問われますと、100%それができているとはまだ言えない状況があります。今回求められているのは発表、討論、それから交渉などを行う能力を高めるということです。発表、討論については、高等学校ではある程度、科目の中で指導が行われていますけれども、さて、交渉というステージになりますと、その機会を得ること、指導に当たる部分でやや難しいところがあり、切り分けなければならない状況があると思います。

新学習指導要領実施後の変化

【「高大接続に関する調査」(ベネッセ教育総合研究所)から】

	「増加」	「変化なし」
・「習得」にあたる学習や活動	32. 9	65. 0
・「活用」にあたる学習や活動	40. 2	57. 9
・「探究」にあたる学習や活動	34. 4	63. 8
・言語活動	64. 8	33. 6
・キャリア教育	51. 8	46. 3
・アクティブ・ラーニング	62. 9	45. 3
・宿題	18. 9	79. 4
・補習	22. 9	75. 2

(※「増加」=「かなり増えた」+「少し増えた」)

ベネッセ教育総合研究所から高大接続に関する調査の結果が発表されましたけれども、その中から特筆するところをまとめてみました。言語活動についてはどうかといいますと、学校では取組みが増加しているという回答がこのような形で数値となって表れています。それから、アクティブラーニングについては、アクティブラーニングの定義をどう位置づけているかということにもよりますけれども、学校現場としては増加しているという認識を持って指導に当たっているということがこの数値で表れていると私は理解しています。後ほどこれについて、私の経験などを申し上げたいと思います。

多面的な評価について

【「高大接続に関する調査」(ベネッセ教育総合研究所)から】

	α	β	α+β
・現在の高校では多様な能力を評価するスキルが十分にない	16. 4	56. 4	72. 8
・評価が大変で高校教員が多忙になる	29. 9	50. 3	80. 2
・客観性に乏しく、評価の公平性が担保できなくなる	23. 5	46. 1	69. 6
・論理的思考力などの汎用的能力を伸ばす受験指導は難しい	20. 9	54. 9	75. 8

(※ α:とてもそう思う　β:まあそう思う)

先ほどの学習評価というところにかかわってくるのですが、私はこれを見たときに、なるほどそうかと合点がいきました。2 つ目の項目、評価が大変で高校教員が多忙になるというところで、80%そうだという回答をしています。実際にやってみて、もう一度分析するという必要があるだろうと思いますので、回避する意識で回答するのではなくて、実践してみて、そして回答する必要があると思いました。

世界が注目する「21世紀スキル」とは

(「世界でいきるチカラ」(坪谷ニュウエル郁子著)より)

カテゴリー1:「考え方」
①創造性と革新性
②批判的思考、問題解決、意思決定
③学び方の学習、メタ認知

カテゴリー2:「働き方」
④コミュニケーション
⑤協働(チームワーク)

(出典:ACT21s「The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills」)

さて、ここから少し能力の部分に行きたいと思いますが、皆様もご案内のとおり、21 世紀スキル、これはアメリカの出典をそこに書かせていただきましたが、カテゴリーが 4 つに分かれていて、そ

れぞれのカテゴリーについての項目立てになっています。カテゴリー1とカテゴリー2については、実は高校でも日常の授業の中で触れていたり、あるいは教員も考えながらそれを話題にして指導に当たっているというところでありますので、この実現性というのは非常に具体的であるというふうに思います。

世界が注目する「21世紀スキル」とは

（「世界でいきるチカラ」（坪谷ニュウエル郁子著）より）

カテゴリー3：「仕事や学習のツール」
- ⑥情報リテラシー
- ⑦ICTリテラシー

カテゴリー4：「世界に生きる」
- ⑧地域と国際社会での市民性
- ⑨人生とキャリア設計
- ⑩個人責任と社会的責任

（出典：ACT21s「The Assessment and Teaching of 21st-Century Skills」）

その次、カテゴリー3については、仕事や学習のツールということで、情報リテラシー、ICTリテラシーが定義づけられておりまして、これについても具体的に意識として持つことができると思いますが、最後のカテゴリー4に入ってきますと、この部分については非常に重くなってまいりますので、これを実施していくためには個々の教員のレベルではなくて、学校の組織の中で、あるいは例えば学校を支える教育委員会、このレベルまで行って、具体的できちんとしたプログラムで走らせていくことができるかがポイントとなり、それによって生徒に対する意識づけというものも具体化が進んでいくことになるだろうというふうに思います。

国際バカロレアが目指す
10の学習者像

探究する人
知識のある人
考える人
コミュニケーションができる人
信念のある人
心を開く人
思いやりのある人
挑戦する人
バランスのとれた人
振り返りができる人

そこで、国際バカロレアについて少し触れさせていただこうと思います。国際バカロレアを研究されている皆様も多いと思いますけれども、国際バカロレアの核になっているところは10の学習者像、Learner Profileとなります。国際バカロレアの中ではMYP、PYP、DP、一貫して10の学習者像に学習者自身が近づいていくことを目標として持たせて、そして、それを達成するように常日ごろから督励するということが大変重要な指導の内容となっています。これは、学習者もそうですし、それから教授者も共有しているものであります。ぜひ、皆様にも一度チェックをしてみていただけるとありがたいと思います。

英語教育の改革への取組（1）

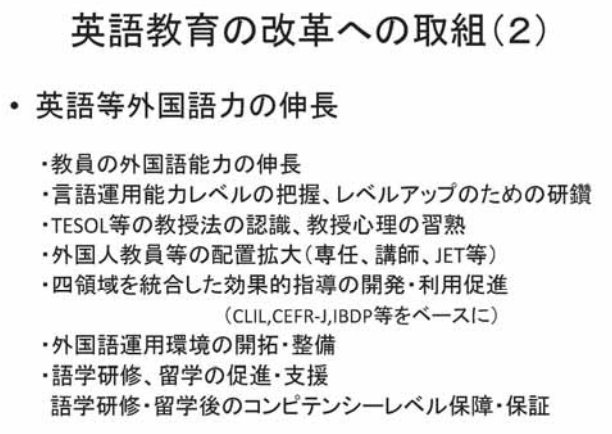
- **SSH、SGHの取組内容、成果の普及・啓発**
  - ・発表、海外研修、留学を組み合わせたアウトカムの重視
- **国際バカロレアDP校の効果的な拡大**
  - ・大学入試におけるIB資格の保証
  - ・高等学校教育課程の改革（目的の可視化、過程と評価）
- **アクティブ・ラーニングにおける高大の連携**
  - ・生産的初年次、二年次教育に整合する高等学校アクティブ・ラーニングの構築
  - ・レイト・スペシャリゼーションに耐える基礎スキルの構築と教養の涵養

最後に、高校の具体的な取り組み、今後どんな取組みができるかというところを雑駁ですけれどもまとめてみました。1つ目は、これまでも国の政策で全国の高等学校の一部で取組みが進んできているものでありますけれども、SSHやSGH、これらはパイロットプログラムですが、これらのプログラムで高等学校の教育が充実してきていることは確かだと思います。その前段にはSELHiというものがありましたけれども、SELHiを包含した上で、SSH、SGHでの成果が表れています。これらがさらに高等学校教育全体に浸透することで、例えば英語での4技能を含めて生徒の能力を高めていくことが必ずできると思います。

それから、国際バカロレアのディプロマプログラムの学校について、効果的な拡大が必要だということをまとめさせていただきました。国際バカロレアは特殊な教育プログラムではないということをしっかりと受け止めた上で、カリキュラムの編成ですとか、学習指導の開拓を進めていくことが重要だと思います。これは、大学の教育にも必ず直結していく、プラスの成果を出していくものだと思います。何よりも可視化が進んでいくということで、全員がきちんと共有して、そして個々

の力を伸ばしていくことができるプログラムであると私は考えています。

それから、アクティブラーニングにおける高大の連携です。アクティブラーニング自体は大学から始まっています。ですので、高等学校が大学のアクティブラーニングを学び、高等学校のレベルを上げるということになりますけれども、大学の初年次、2 年次の教育にシームレスにつないでいくことができるように、整合させることができるアクティブラーニングを高等学校教育の中で実現していくということが必要であると思います。



英語等の外国語力の伸長ということで思いつくところをまとめました。教員の外国語能力の伸長ということがありますが、英語科の教員はもちろん、教育に従事する全教科の教員の外国語能力の伸長というものが必要になってくると考えます。これは、教員の採用にも当然かかわってくるところだと思います。そこを今後、完成していくことができるかということが課題であると思います。

TESOL 等の授業法の認識、教授心理の習熟というようなところも書かせていただきました。

外国人教員の配置の拡大、国際バカロレアの場合は特にこの部分が重要であるわけですが、今、国で進めている DP（日本語デュアルプログラム）の場合には、日本人の教員で指導を行うことができますが、外国人教員の確保・拡充は今後避けられないものだと思います。

4 領域を統合した指導については、先ほど吉田先生からも触れていただきました。CLIL、あるいはこの後根岸先生から触れていただく CEFR、そして私自身も手掛けてまいりました IBDP、これらが効果的に連携し、それぞれ良さを発揮する中で、高等学校教育にそれらが取り込まれ、高等学校教育が覚醒し、活性化していくということが重要であると思います。

最後に、生徒の語学研修、留学等でありますけれども、各県でプログラムが次第に充実しております。今後ともそれらを支えて、規模を大きくしていく必要があると思います。

高等学校もいろいろなことをやり始めています。生徒のかなりの部分が上級学校、大学に進学していくという事実がありますので、高等学校が今後さらに大学との連携を十分に取り、そして高等学校の教育自体をレベルアップしていくということに今後とも取り組んでいきたいと思います。

以上、私からの発表を終わらせていただきます。

（拍手）

○司会（川嶋）

青山先生、ありがとうございました。まず、今後の学習指導要領改訂のポイントとなる 3 つの要素である、内容と学習方法と評価というものについて、英語について言えば内容は 4 技能、それから学習方法としてはアクティブラーニングを活用するということ、そして評価に関してはアウトカムアセスメントといいますか、キャンドゥで確認するということが今後の方向性としてはあると。その中で、SSH、SGH、あるいは国際バカロレア等の取り組みが、今の 3 つの要素の統合的な運用ということで先駆的ではないかというご指摘でした。ただ、最後に指摘していただきましたように、かなり解決しなければならない課題がたくさんあるということのお話だったと思います。またご質問があるかと思いますが、後で質問用紙に記入して提出していただければと思います。

最後の報告になりますけれども、根岸先生のほうからは、英語の資格試験等を入試に活用する場合のプロとコンといいますか、明るい側面と問題の側面について整理していただいたようですので、ご報告をお願いしたいと思います。どうかよろしくお願いします。

英語の資格・検定試験の大学入試への活用：可能性と課題

根岸雅史（東京外国語大学教授）

○根岸教授

こんにちは。タイトルは可能性と課題ということなのですが、基本的な考え方は、「可能性をすごく感じていて、ここに期待したい」ということです。ただ、発表の用意しながら、課題ばかり思いついてしまったので、結果的な印象が「やめたほうがいい」とかってならないようにしなきゃいけないなと自分で注意しているところです。

全体の構成は、なぜ4技能型の外部試験を入れるということになってきたのかという私なりの見立てが1つ。それから、日本の入試制度とか4技能型の試験そのものの導入の問題、そして、最後に自分の希望、期待みたいな感じで構成されています。

日本の英語教育の評価

- 9割近くが「学校英語教育」に不満
- 「受験英語」と「実用英語」の乖離
- 「受験英語」の指導には感謝？
- 「実用英語」の指導には不満
- 「実用場面」にさらされるグローバル化時代

これは、楽天リサーチというところが数年前にやったものです。すごく単純な聞き方で、こういう単純なものほど怖いんですが、日本の英語教育に満足していますかと10代後半から60歳ぐらいの日本人に聞きました。正確に言うと9割もいってなくて86.6%なんですが、ほとんどの人が不満というのは結構珍しいですよね。何かに満足していますかといっても、これほど不満というのはなかなかありません。我々英語教育にかかわる者としては、かなりのだめ出しというふうに感じざるを得ません。例えば皆さん日本で英語教育を受けたとすると、10人に1人しかまあまあみたいな人はいないということで、あとはみんな不満ということです。

それから、高校3年生の英語力を調べた英語力調査の結果がこの間の3月に出ました。先ほどから何度か出ているCEFRというヨーロッパの共通する枠組みで、A1、A2、B1、B2、C1、C2という6つの段階から成り立っています。この間の結果は、高校生の7割5分以上が全ての技能でA1だった。A1はスタートのところなので、6年間たってそこを出なかったということなんですが、これはかなり大きなショックだったかもしれません。

楽天の調査の中にも出ているんですが、受験英語と実際の英語、実用英語みたいなものが乖離しているというところに不満が一番ある。おそらく大学入試に向けての指導には満足していた。先生は英語をすごくよく面倒を見てくれて、大学に受からせてくれた、そこの部分は満足なんですが、悲しいかな高校の先生たちはそこまでしか見てないんですね。ですから、感謝されて終わっているんですが、その後は9割が不満というふうになってしまう。ここが多分大きいですね。受験勉強が向かっている方向と、実際に世の中に出て求められるものというのは、かなり乖離しています。

最近さらに厄介なのは、グローバル化で、いろいろな場面で実用場面にさらされています。私の時代であれば、一生懸命受験勉強して大学に入ってやれやれで、使うことはほとんどの人がなかったので、使えないということになかなか気づかなかったんですが、最近はすぐ観光旅行でも何でも行っちゃうし、外国人の人がその辺を歩いていて何か聞かれたりとかってあるので、すぐやっぱりだめだということが分かっちゃいますね。テレビの英会話教材のコマーシャルなんかも本当に典型的で、あそこで話されているのは中2ぐらいの英語ですよね。でも、それができたらうれしいとみんな思ってしまう。そのくらいの英語教育の成果だったということかもしれない。

日本の英語教育政策の歴史

- 英語教育に放たれる無数の矢
  - 「文法教科書」の廃止
  - ALT導入
  - 「実践的コミュニケーション能力」の育成
  - オーラル・コミュニケーション
  - 大学入試センター試験にリスニングテスト導入
  - 英語の授業は英語で
  - 小学校外国語活動開始、等々
- 無数の矢をはねつける「信念と慣習」の壁

じゃあ、歴史はどうか。どんなことが行われたか。こういう状況を文科省も決していいと思っていなかったので、さまざまな政策を打ってきました。文法の検定教科書は私が大学生のころなくなりました。ALT が入った。それから、学習指導要領に実践的コミュニケーション能力という言葉が入ったり、オーラルコミュニケーションという科目が入ったり、大学入試センター試験にリスニングが入ったり、学習指導要領の中には「英語の授業は英語で」という文言が入ったり、小学校の外国語活動が入ったり、さまざまな政策を打っています。SELHi（Super English Language High School）というプロジェクトもあります。

私はフランス大使館に呼ばれて、日本の英語教育政策についてインタビューされたんですけれども、そのときに、日本は英語教育にこんなにお金を使っているのかとすごくびっくりされましたね。SELHi 一つだけでもすごくびっくりされました。フランスも日本も英語教育がうまくいっていないのは同じぐらいなんですが、こんなにお金を使っていてそんなにだめなんだみたいな感じで、うらやましがられたのか同情されたのかよく分からないんですが、不思議な気持ちになりました。

私もだし、多分文部科学省の人たちの思いを代弁すると、さまざまな政策を打っても、ほとんどはね返してくる。それは、多分先生自身が受験の中で身につけたさまざまな信念とか学習習慣みたいなのがあって、それがノーと言っているというような気がいたします。

高校英語教育を語る キーワード

表	裏
英語の授業は英語で	英語の授業は訳読で
言語活動中心	言語活動は飛ばす
4技能を総合的に指導	もっぱらリーディング
技能統合	文法は文法問題集 単語は単語集
パフォーマンス・テストなどの多様な評価方法	パフォーマンス・テストの不在
CAN-DOリストによる学習到達目標の設定	大学入試結果による目標設定

表で打ってきた政策をキーワードで語ると、英語の授業は英語で、言語活動を中心に言葉を使う活動を授業中にやろうということですね。それから、ただ単にリーディングじゃなくて、4 技能を総合的にやりましょう。技能統合も必要ですよね。それから、評価に当たっては、パフォーマンステストなんかも入れて多様に見てください。それから、CEFR 絡みでもありますが、CAN-DO リストによる目標を設定しましょうみたいなことを言ってきたと思います。

しかし、実際は裏ですね。もちろんこれを本当に真に受けてというと変だけど、このようにやられた少数の孤立した先生たちはいますが、右側は非常に根深いですね。1 つは、英語の授業は訳読。皆さんも自分で経験されたと思うんですが。それから、言語活動ってないと検定が通らないので教科書にあるんですが、ないかのごとく飛ばしますね。本文から本文へみたいな感じですね。それから、リーディングしかやらない。それから、文法は文法問題集を買わせる。単語は単語集で、統合も何もないですね。ばらばらですね。それから、パフォーマンステストはほとんどやったことがない。うちの学生とかでも、スピーキングテストを高校 3 年間のうちに受けたことは一度もありませんとか、授業で話したことは一度もありませんという実態です。それから、目標設定というのが大学入試になっている。よく高校のホームページは、自分たちの学校の教育の実績として入試の結果が挙がっていたりするような気がします。

じゃあ、この裏はどこから来ているのかというのは、入試じゃないかなということですね。

「裏」の英語教育はどこから？

裏の英語教育の出所

裏	入試
英語の授業は訳読で	和訳と英訳の出題
言語活動は飛ばす	伝統的テスト形式
もっぱらリーディング	リーディングの圧倒的比重
文法は文法問題集 単語は単語集	文法問題の存在 語彙問題の存在
パフォーマンス・テストの不在	テストは訳と文法・語彙

簡単に裏の出どころの入試を見ると、多くは和訳、英訳。英訳というところは和文英訳ですね。多くはないけどまだありますし、テスト形式はというとかなり伝統的な形式が採択されていると思います。それから、リーディングの比率が 8 割ぐらいというふうにおっしゃる人もいます。それから、文法問題、語彙問題が存在します。独立した形でですね。パフォーマンステストはもちろんないわけです。パフォーマンステストというのは、この場合は話すテストとかインタビューとかディスカッションのテストなどを言うわけですけれども、そういうものは不在です。その代わり、訳とか文法とか語彙のテストが行われています。

「信念と慣習」の壁を破るために 4技能入試の導入

表	4技能入試
英語の授業は英語で	和訳・英訳のない出題
言語活動中心	オーセンティックなタスク
4技能を総合的に指導	4技能をバランスよく
技能統合	目標言語使用場面に基づく技能統合
パフォーマンス・テストなどの多様な評価方法	パフォーマンス・テストの存在

これを入試で何とかしたいということであります。入試問題を 4 技能型に変えた場合は、こういうようなある程度対応関係が生じるのではないかというふうに考えられます。もしかしたら楽観的に過ぎるかもしれません。しかし、目指そうとしているのはこういうところです。4 技能をバランスよく出してほしいということであるとか、タスクもただ単にテストタスクじゃなくて、実際に例えばレクチャーを聞いてやりそうなタスクであるとかという問題形式にしてほしいということがそこにあります。

入試制度に関する問題

- 多様な入試問題が抱える問題
  - 間接的なインパクトと媒介者の語り
  - 模擬試験の問題
- 1点刻みでない入試は可能か
  - 大学の定員の問題
- 入試は高校のものか大学のものか
  - 入試と学習指導要領

この後は、入試にかかわる人たちが多いと思うので、問題点を考えてみました。まず、入試制度に関してですが、1 つは多様な入試問題が抱える問題があります。日本の入試問題が年間に幾つ行われていると思いますか。ある調査によると 20,000 です。英語はほとんどその中に入っていますから、少なく見積もっても多分数千の英語の問題が毎年作られています。しかも、その問題は大学だけではなく学部の中でも全く違います。例えば早稲田大学の英語の問題を見ていただければ分かりますが、学部によって全く違います。それが何千もあるわけですね。

こうなると、結局大学入試とはこうだという語りがかなり恣意的なものになってきます。例えば中国や韓国は大学入試は 1 個しかない。だから、目指す英語の入試がどんなものか誰でも分かる。だけど、仮にどんなに低く見積もっても 1,000、あるいはもっと、100 でもいいです。100 個のこんな違った種類があったら、実際入試はどうなんだというのはかなり難しい語りになってしまいます。

そんな状況にもかかわらず、模擬試験というのがあったりするんですね。京都大学と東京大学を比べただけでも全く違いますからね、英語は。こ

んなに違うのに、模擬試験は１つで万能薬なような、健康ドリンクみたいな感じですね。何に効くのかよく分からないけど､大体効きますみたいな、試験がある。そうすると、それが実態化してきちゃったりするわけですね。高校１年生のときからずっとこれを受けています。こうした問題が一つ日本の場合あります。

それから、1 点刻みでない入試は可能かということです。よく最近の議論で１点刻みでなくとかって言うんですが、私たち大学の側からすると、特に国立大学は、私立も同じですかね、定員というのがあって、定員を欠いていたらお金を取られちゃったりして、増えても別に自己責任みたいな感じなんですが、でも、いっぱいまで取らなきゃいけないというのがありますから、例えばうちの小さなところだったら 30 人なら 30 人という定員、あるいは英語とかは 70、80 人という定員のところのぎりぎりのところは、どうしても結局何で測っていても最後は 70 番目と 71 番目のところは切らなきゃいけないですね。だから、1 点刻みでなくと言っても、結局定員がある限りは全く実態は変わらないんじゃないかというのがあります。

それからもう一つは、先ほど吉田先生の中にも出ていたこととも関係しますが、総点主義ですよね。日本の場合は、いろいろな教科の点数を全部足している。だから､例えば英語はすごく得意で、できの悪い世界史の分を英語で取り返して、全体として帳尻を合わせて合格してくるみたいなことが起こります。逆も起こりますね。そうすると、一応合格しているんだけど、何でこんな学生がいるんだろうというような学生が例えば英語の授業とかでいたりしますが、それは英語が足りていたという保証はあまりなくて、全体としてカバーして入っているということが起こってきます。それが総点主義ですね。

それに対して、基準点というのは、TEAP なんかは出願基準スコアってホームページにも書いてありますけれども、ここの学部は、あるいはここの学科はこの点数です、これがあったらもうオーケーですというふうになっています。なので、どっち型で使われるのかみたいなのは、結構大きい違いです。どっちがいいという話でもないですが、論点としてはあるかなと思います。

それから、大学入試改革を考えるときにかなり厄介だなと思うのは、入試というのは、大学マターであるようでありながら高校マターでもある非常に重要なイベントですね。組織的には多分大学入試という限りは大学の話なんですが、高校の先生にとっても非常に大きいイベントです。そうすると、大学のほうだったらあまり学習指導要領は関係ないじゃないかとも極論すれば思えなくはない。うちの大学としてはこういう学生が欲しいんだみたいな。アドミッションポリシーというのは多分そういう話なんですが、高校側からすると、そんなの学習指導要領と関係ないじゃないかという議論も成り立ったりします。ここら辺も難しい部分としてあるかなと思います。

4技能入試に関する問題

- スピーキング・テストの実施は可能か
  - 50万人受験のロジスティックス（試験室・待機室）
  - 一斉実施か否か
  - 試験官・機器は揃えられるか
  - 機器トラブル（答案データの喪失等）

4 技能入試でどんな問題があるかを考えてみました。まず、4 技能のうちスピーキングですね、これを実施が可能なのか。センター試験受験者は英語で 50 万人ちょっといると思うんですが、これをどうするのと。試験室、待機室、一斉にやるのかやらないのか、試験官とか機器はどうするんだ。それから、機器のトラブル、人間のトラブル……、人間が起こすさまざまなトラブルですね。突然病気になったとか、いろいろ普段でもあります。

すごく単純な試算をしてみました。1 人の試験官が受験者 1 人に 10 分のスピーキングテストをやるとします。そうすると、8 時間、お昼休みを取ったとして、1 日で 48 人できるんですね。50 万人受験者ですから、1 万人を超す試験官、それから 1 万人を超す部屋が要るということですね。その間受験者はどこにいるんだ。帰っちゃっていいのか。帰っちゃうと、今日はこんなトピックで話させられたよみたいなので携帯で連絡して。そうすると予備校でまたすごいトレーニングして、4 時間後かなんかには完璧な状態で行くみたいなことが起こらないためには、ずっと閉じ込めておくのかとか、かなり厄介ですね。

4技能入試に関する問題

- 発表技能(SW)の入試の採点は可能か
  - 50万人受験者の採点は可能か
  - 50万人受験者の採点にどれだけ時間がかかるのか
  - 自動採点の精度の問題
  - 人間がやればいいのか
  - ハイステイクス・テストでの発表技能の採点結果の納得度
  - 複数システム導入の可能性

それから、今度は採点。採点は 50 万人分あります。SW というのは話す、書くですが、自由に書いたり自由に話したりしたものの採点は可能なのか。それから、時間的にスケジュールが間に合うようなタイミングで結果が返ってくるのかということですね。そこで、これ自体が大きなトピックですが、自動採点は今言語テストの世界ではよく議論されています。ある程度精度は高まってきていて、言い方が正確かどうか分からないんですが、普通の人間並みの採点ができるようになってきています。人間も結構いいかげんですから、機械が精度がいまいちでも大体それと同じぐらいのできではあります。でも、人間がやるべきじゃないかという議論もあるでしょう。

ただ、極度に重要なテストの場合、人間がやった主観的な採点に対してみんな納得するのか。書いたときに、こっちの方が説得力がある、こっちは説得力がないとか、構成はこっちがいいとか、フィギュアスケートの印象点みたいなもので、こっちのほうが芸術点が高いんじゃないのみたいなことは起こってしまいますね。機械の場合は、そこら辺のロジックは説明可能なので、もしかしたらよりすぐれているかもしれません。人間の頭はより厄介ですよ。「何でこっちのほうが説得力があるんですか」、「いやいや、それは分かんないの？これ見て、普通こうだろう」、「いやいや、どういう頭でそうなっているんですか」みたいなことに1個1個なっちゃったら、50万件をセンターはどうするのかよく分からないんですが、大変なことになってしまう。多くの場合は人間と機械を組み合わせてみたいなのが今現実的なところではありますが、でも、人間が絡む限りは相当な手間と労力がかかわるので、複数のシステムで1つの結果を出すというのはどうだろうかと私は思っています。

英語の資格・検定試験の活用促進に関する問題

- 異なる試験
- 求められる対応表
- ニーズはあるが…

英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針

(4)入学者選抜における妥当な活用方法等

[学校関係者]

○ 各学校において資格・検定試験の成果を活用する際は、具体的な活用方法(例えば、入学者選抜において、当該資格・検定試験の結果を用いる場合の出願要件、みなし満点や点数加算などの得点の換算の方法等)を明確にする。

[英語4技能資格・検定試験関係団体]

○ 各学校が資格・検定試験を活用するに当たり、生徒学生の英語力について、適切な評価が行われるよう、当該試験の結果の確認方法、試験間の比較に関する情報等の提供を積極的に行うよう努める。また、生徒学生の英語力の現状及び学習の目的を踏まえた資格・検定試験の開発、活用の在り方、世界的な参照基準などの関係性に関する更なる検証が期待される。

これは先ほど出たので簡単に飛ばしますが、異なる試験が実施され、候補に挙がっていて、これを使ってくださいということなので、対応表が求められます。実際こういう中にも、得点換算の方法とか試験官の比較に関する情報提供とかってあるんですが、いろいろ調べてみるとおもしろいですね。大抵のテスト機関は、公式の換算表って出してないんですね。だけど、ウィキペディアに行くとあるんですね。でも、ウィキペディアは別にオーソライズされたものではありませんが、世の中のニーズは圧倒的にあるということですね。どっちが点数が高いんだみたいな。だけど、機関としては出せないわけですね。

英語の資格・検定試験の活用促進に関する問題

- 異なる試験の対応表作成の問題
  - 技術的問題：そもそも技術的に可能か
  - 商業的問題：商業的に何が起こってきたか
- 日本の入試の公正性に外部試験は耐えられるか
  - 従来の日本の入試の原則は守られるか
    - 問題作成者、採点者、監督、データ入力・処理担当者等々に関わる厳格な規定

英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針

(6) 適正・公正な試験実施体制(試験監督、情報管理等)

[英語4技能資格・検定試験関係団体]

○ 資格・検定試験関係団体は適正かつ公正で透明性の高い試験を実施するため、試験実施体制、受験手続(本人確認、不正行為の防止策を含む)等について、分かりやすく公開することが求められる。また、これらについて学校等関係者の間で共通理解を図ることに努める。

○ 公正性の観点から、試験部門と教育部門の両方を有する資格・検定試験関係団体は、部門間の情報管理を行うことが求められる。

それは、1 つは技術的な問題があります。先ほど吉田先生がおっしゃったように、異なるコンセプトで異なる能力を測ろうとしてそれぞれが開発されています。だから、それが置き換え可能であるわけがない。置き換え可能だったら、自分のテストは要らなくなっちゃいますからね。なので、そもそも無理。

それから、商業的問題ということですが、これは何が起こってきたか。例えばイギリスの例で、イギリスは移民で行く場合に、さっきの CEFR でどの職業をするにはどのレベルを取らなきゃいけないみたいなのが書いてあるんですね。私サッカー好きなんですけど、サッカーだと A1 というのを取らないとサッカー選手としてプレーできないですね。そういう基準に達するのに幾つかのテストがあります。そうすると、何が起こってきたかというと、得点のダンピングですね。それぞれがどんどん易しくしていく。易しいほうが受けてくれますから、簡単に自分が達成するレベルを証明してくれるほうにどんどん流れてきたというのがあります。これは、テスト学会で表立っては議論してないですが、裏で結構このことは話題になっていますね。歴史的にちょっとずつ、ちょっとずつ下がっているという傾向はあります。これは危険なことです。

それから、もう少し具体的に見た場合が次です。世の中のテストの多くは級型というのとスコア型があります。英検とか、あとはケンブリッジのテストとかは級型ですね。級は自分で選ぶんですよね。私この辺だから 2 級受けようとかです。だけど、スコア型は、受けるのは受けて、結果あなたはここでしたということがスコアで言われるだけです。

この級型のテストに最近スコアが与えられるようになってきました。これが入試で使われた場合、上の級を受けたほうが得なのか、下の級を受けたほうが得なのかということですね。上の級で落ちるんだけど、上の級で落ちてもらうスコアのほうが得だったりすることはないのか。私はここ数日いろいろ実験的にやってみましたが、どうもそういうことが起こっているかもしれないですね。どっちの級を受けたほうが自分が望む点数が取れるかということで、受験産業などは多分お前無理でもいいから上の級を受けろとかいう話になったりするかもしれません。それは多分今後の問題として出てくると思います。

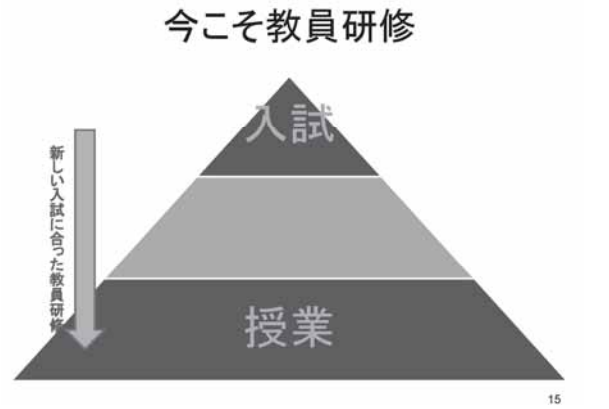
じゃあ、スコア型がいいかというと、スコア型も完全でもありません。もともとは目的がはっきりしています。TOEFL だったら、向こうに留学する人たちとかっていうことをイメージしていますから、そこのところのレンジが強いということですね。だから、先ほど吉田先生が出した協議会の資料だったと思いますが、見ると、CEFR で言うと TOEFL なんかはもともと A1 とか A2 のところはお呼びでないという感じなわけですね。留学対象じゃない。だけど、先ほど言ったように、日本の 7 割 5 分の高校生はここから下ですから、そのレベルの弁別はあまり得意じゃないということですね。もちろんここで勝負になる大学もあるかもしれないですが。レンジの話は結構厄介な話です。

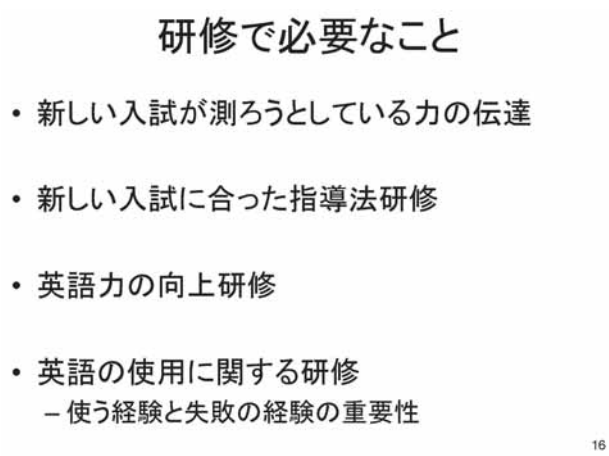
あと、意外と語られていないかなと思うのは、皆さんも入試にかかわると分かると思うんですが、自分の子供が例えばセンター試験受験をするときはセンター試験にかかわれないとか、例えばうちの大学とかだと、もちろん子供が受けるときは出題委員になれないとか、当たり前のことが起こっていますね。だけど、外部試験というのはそこら辺は何にも今規定がないんですね。外部試験を作っている中に、受験生を持つ人もいるかもしれないんですね。今の厳しさからすると、そこに関しては何もないので、ちょっと不安。データ入力する人とか統計処理をする人とか、今統計処理なんかはセンターがやっているのかもしれないですけど、内部でやるときなんかもかなり厳しくやっています。

それから、本人確認。これは、イギリスで ETS

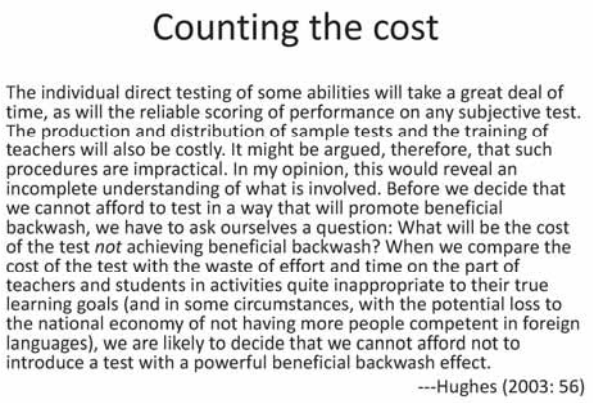
のテストの非常にひどいカンニングが見つかったことがありましたね。代理受験とか。そういったことが起こらないとは限りません。これも解決しなきゃいけない難しい問題かなと思います。

最後です。波及効果。入試を変えてよくしようということですが、楽天的には、入試が変わったら、英語教育よくなるねということですが、悲観的なシナリオももちろんあって、入試が変わってもやっぱり変わらなかった、ここまで変わってもやっぱり変わらなかったということも起こり得ます。例えば中国で TOEFL を受験する人たちが、スピーキングのために何をやっているのか調べた研究があるんですが、トップ 10 は、全部一人でできることをやっている。音読とか暗唱とか、模範答案を暗記するとか。それでもやらないよりいいかもしれないですが、必ずしも狙っていたとおりではないということです。





最後に一言。入試から授業を変えるみたいなときに、研修が必要かなというふうに思っています。先ほど青山先生の中にも出ていましたが、先生方は今度多分成功体験はないんですね。自分でこの受験を成功してきたという、そういうものではないので、どういう力を測ると伝えていくのか、そういう力をどうやって伸ばしたらいいのかみたいなことを研修する必要があるだろうと思います。



最後です。これはアーサー・ヒューズという先生の著書からの引用です。ちょっと長いので要点だけかいつまみますが、こういう 4 技能型のテストとかっていうのは、導入するとすごくお金がかかる、手間もかかる、面倒くさい、だからやめようということになっちゃうかもしれないけど、いい波及効果を達成しないことのコストを考えようと。今まですごく失ってきましたよね。日本人って英語は決して勉強しないわけじゃなかったけど、何か違う方向に思い切り労力を費やしてきた。そんなことできないんじゃないのというのが最後の一言ですね。

ということで、問題点は指摘したんですが、最終的に自分はどっちかというとどんな問題があってもやったほうがいい。やって初めてやるためにできるようになってくるということもあると思うので、ぜひやったほうがいいと思うんですが、超えなきゃいけない問題がある。そして、それは文科省が今予定しているスケジュールに間に合うのかというのがかなり大きい問題かなと思います。ありがとうございます。

○司会（川嶋）

どうもありがとうございました。英語教育の改善に多大なる努力とリソースを傾注してきたにもかかわらず、A1 ショックがあったと。そこで、A1 ショックの元凶は何かということで、入試にあるのではないかと。入試が、しかし、変われば、また教員の研修をきちんと施すことによって教育のあり方、学習成果も変わってくるのではないかというお話で、必ずしも英語だけでなくて、ほかの教科、科目にも通ずるようなお話でした。

余談ながら、先ほど出た語学力の級やスコアの

設定の問題との関連で、要するにどれを選択するのかは、かなり大学の戦略や戦術に関わることだと、感じました。というのも、これは国立大学だけの話なのですが、今3類型で各大学どこを選ぶのかという、地域貢献型なのか、ナショナルセンターなのか、グローバルセンターなのかって、この3つの中でどこか選ばなきゃいけないんですけど、今おっしゃったとおりで、上のほうを選ぶと評価が厳しくなる。じゃあ、緩いほうに行くのかとなると大学の評価も下がる。非常にジレンマというか、英語の試験も同じような状況かなというふうなことを思いました。

3人の先生方はきちんと時間を守っていただいて、予定どおり進行しておりますので、冒頭に申したとおり、お手元にある質問票に、ご質問がある方は、どの先生に対する質問かということと質問を書いて、出口のところに係員が箱を持って待機しておりますので、そこに入れていただければと思います。

それで、ちょっと押していますけれども、この時計で35分ですかね、10分少々休憩に入りたいと思います。それでは、また時間が来ましたらこの会場にお戻りください。どうもありがとうございました。

－休　憩－

○司会（川嶋）

再開したいと思います。何点か報告者の先生方にご質問をいただきましたので、順次お答えいただいて、その後時間がありましたらまた報告者の方々、あるいはフロアの方々とのディスカッションをしたいと思います。

それで、順不同になるかもしれませんけれども、幾つかご質問がありますので、順番に報告者の方にお聞きしたいと思います。まず、吉田先生に対して、先ほどご紹介があったように、7つのテストとCEFRとの対照表は、同じ人が何種類もテストを受けて出た結果ではないので客観性が低いというお話がありましたが、この辺は私もよく知らないところですけれども、EUはEUの基準に従って対応づけのプロセスをきちんと公開しているものとそうでないものがあります。したがって、全部が全部客観性がないという結論にはならないのではないかというご意見ですけど、いかがでしょうか。

○吉田センター長

ありがとうございます。ヨーロッパのテストなんかの場合は、ALTEなんかを見ても、もともとCEFRを基にして、それを基準として問題作りをやっている場合は、今おっしゃったことが分かるんですけれども、結構ほかのテストというのは後付けで多分これはこうだろうというのが多いんですね。そこが一番大きい問題じゃないかなというふうに思います。

○司会（川嶋）

それから、少し試験の内容、根岸先生のところでもご指摘があったように、吉田先生、根岸先生にお聞きしたいんですけれども、学習指導要領と外部試験との問題で、現在の大学入学試験は学習指導要領を逸脱しない範囲で、午前の討論会でもありましたけれども、大学教育に必要な観点から入試問題を作成しているという大塚先生のご報告がありましたけれども、外部試験の中の幾つかは日本国内のみならず国際的なテストでありますので、学習指導要領の範囲外の問題も出ていると。今後外部試験を導入する際には、学習指導要領というのを考えなくていいのか。そうしないと、なかなか外部試験は導入しにくいのではないかというご意見ですけれども、まず吉田先生のほうからいかがでしょうか。

○吉田センター長

センター試験は、確かに学習指導要領をすごくよく吟味された上で作られているという、そういう意味で非常に親和性があると思いますし、日本でできている例えば英検であるとか、TEAPもそうですし、それからGTECもそうだと思いますが、一応日本で作られているテストの場合は、結構学習指導要領の内容を考えた上で問題ができているので、今後大学入学資格者の試験というものをもし作っていくというふうになった場合も、日本で作られているテストのノウハウというものを生かして、学習指導要領に沿ったものに私はなるというふうに考えています。

○根岸教授

そうですね。センター試験というのは、自分が出題委員だったときも、確かに学習指導要領をチェックしながら作っていました。しかし、個別試験でそれほど学習指導要領との対応を考えて作っているかというと、必ずしもそうではないかなと

思います。

それからもう一つ、一番大きいことは、先ほどの議論の中にもあったんですが、学習指導要領は4 技能を総合的にというふうに書いてありますので、そういう意味では、全く学習指導要領に沿っていないとも言える。学習指導要領は4技能を総合的にやれと言っていて、大学入試は学習指導要領に基づいて作るということであれば、ほとんどの技能がテストされていないという時点で、言語材料的に超えているとか超えてないとかということ以前に、大きくずれているということが問題かなと思います。

あともう一点だけ言うと、センター試験がよく守っていると言われてはいますが、英語はちょっと特殊です。言語材料の文法は大体チェックして、逸脱するものはないし、大体高校までだとみんな文法は出てくるんですが、語彙は結構規定が曖昧で、学習指導要領そのものは3,000語程度でしたっけね、というものがざっくり数字として決まっているだけです。これがその3,000語ですというのがないので、それこそ全部の教科書に出ている単語というのは、本当に中学校でやる単語とあまり変わらないぐらいのものしか共通の語としてはないんですね。ですから、絶対的にこれが学習指導要領を逸脱しているか逸脱していないかということは言えない。語彙という意味では逸脱してないとも言えるし逸脱しているとも言える。自分たちで数えて3,000語の異なる単語の中で収まっていれば、これが3,000語なんですということさえ言えてしまうので、英語の場合は語彙がかなり難しい。レベルで語ることはできるんですけれども、学習指導要領は具体的には書いてないので、そこはちょっと難しいかなと思います。

○吉田センター長

根岸先生がおっしゃった統合型の科目に今なっていますよね。ですから、4 技能ともに英語ⅠにしてもⅡにしても全部入ってはいますが、個別大学の入試なんかを見ても全然それは関係なく、無視されている。実際にはリーディング中心ですから。今度新課程の高校3年生は、コミュニケーション英語というのが基本ですよね。そうしますと、コミュニケーション英語は4技能全部統合的に、しかも総合的に教えましょうと書いてあるわけで、それが本当に各大学の入試なんかに反映されているかというと、全くそれは根岸先生がおっしゃったとおり含まれていませんね。ですから、そうなってくるとどうすればいいのか。現段階では4技能が試せるような、学習指導要領にできるだけ親和性のあるようなテストを探してくるしかないような状況が現在はあるのかなというふうに思いますね。

○司会（川嶋）

新しい入試制度になったときに、今は外部試験の活用を促進するようにというレコメンデーションが出ている一方で、高大接続のほうの答申等を見ますと、非常に曖昧に書かれていますが、新しい共通テストでも4技能を測定するようなテストを作るのか、外部試験に任せてしまうのかというようなところが見られます。それで、ご質問は、4 技能の外部試験の活用が普及した場合、個別入試でも英語の入試、あるいは英語のテストは必要なのかどうかという質問。

それから、今の吉田先生のご質問にもありましたけれども、外部試験が普及した場合、個別で英語の試験をする際には、外部試験にスピーキング、ライティングは依存してしまって、個別試験を実施するとしたら、リーディングとかグラマーを中心としたテスト内容になるのではないかというようなご懸念もあるんですが、英語の外部試験の活用と個別試験の関係、それから共通テストの関係、さらにもし個別試験でも英語を課すとしたら、それぞれ共通テスト、あるいは外部検定試験との内容の切り分けですね、このあたりはどういうふうに考えたらいいのかというご質問だと思うんですけれども。

○吉田センター長

かなり複雑な話になっているような。先ほどもお話ししましたけど、一応文科省のほうで大学入学資格者のためのテストを作りましょう、先ほどもお話ししましたように、国と民間の協力で何か一つ作りましょうというような、言ってみれば現在のセンター試験に取って代わるようなものを、国として責任持って何か作る必要があるだろうという気持ちはございます。

ただ、そのときもお話ししましたように、例えば上智大学はセンター試験を利用してない、別にセンター試験は100%全員が利用しなきゃいけないテストではないということで、新しく出てきた

試験にしても、先ほど根岸先生からもし 50 万人受けたらどうするんだという話がありましたが、多分 50 万人は受けないと思うんです。もともと。しかも、これが年に複数回実施されるテストということで今現在考えられていますから、分散する可能性が非常に高い。これが例えば上智大学みたいにある一定のレベルを突破すれば、あとは英語は要らないというふうになれば、何度も何度も受ける必要はなくなる。

これがみなし満点になると最後まで、年に 3 回 TEAP なんかはありますけれども、これは高校 2 年から受けられて 6 回あるわけですよね。6 回とも受けてやっとなんていったらかわいそうですよね。受験ばかりやっているみたいな、そんなことになっちゃいますから、そうでない、高校 2 年の最初で 250 点取ったと、4 技能で、上智大学のどこどこ学部はこれでいいと言っているといったら、もうそこでいいわけですよね。基本要するに、最低能力が保証されればいいというのが大学側の立場なわけです。ですから、そういう形で例えば国が作るテストももし利用されるとするならば、受験生の数は毎回毎回 50 万人ではない、また、もっと減る可能性はあるかなと。ただ、どれだけ減るか、実質的に処理できるような数になるのか、それは全然分かりませんけれども。

ですから、もう一つは、それ以外に外部試験をうちはこっちのほうがいいんだというので採用する大学が当然あると思いますので、そのあたりで多少は軽減できるのかな。実質的にそんなに効果はないかもしれませんが、そういうことは多分考えられているかなと思うんですね。

それからもう一つは、うちの場合、TEAP 入試で来年度の入試は 4 技能を課す学科が 9 学科あります。英語学科ももちろんそのうちの一つです。今までは、英語学科というのは 2 次試験でライティングとスピーキングをやっていたんです。ですから、一般入試ではライティング、スピーキング、リスニングを 2 次試験でやっています。1 次試験は基本的に筆記テストで、リーディングとあとは語彙だとか、そういうものしかやってなかったわけですね。だから、どうしても 2 次試験が必要だったわけですが、TEAP4 技能、TEAP 入試を受けた学生は 2 次試験がなくなるんです。つまり、TEAP の中にリスニングもあれば、ライティングもあれば、スピーキングもあるので、いちいち 2 次試験をやる必要がないという判断です。ですから、そういう形で見ようと思っているものが TEAP によって測れるのであれば、もうやめようという形にしています。

ただ、大学さんによっては、でも、うちの場合は基本的な能力は例えば TEAP であろうが英検であろうが何かで測れますと。だけど、うちの学科はもうちょっと特殊なので、こういうような英語が必要なんだと。訳読がなかったらうちの学科ではやっていけないというふうになってきた場合、プラスアルファでその部分だけをさらにテストされるというケースは当然出てきてもおかしくないのではないかなと思います。これもどういう学生を求めているか、入ってから何を学生に求めようとしているかによって決まってくるのではないかなと思います。

○司会（川嶋）

大学入学希望者学力評価テストですか、非常に長い名称で、まだ仮称が付いたままですなんですけど、もうちょっと簡単な名称にしていただきたいと思うんですけれども、そこでの英語の 4 技能を測るテストを官民共同で開発するというような意見が出てきた背景には、午前中にもありましたが経費の問題とか、外部試験ですと受験会場が偏在しているということで、こういう官民共同でのテストの開発が必要じゃないかというふうに聞いているんですけれども、青山先生、高校側としては、外部検定試験、それから共通試験、そしてアドミッションポリシーによっては個別でも英語の学力試験を課すということについては、どういうふうにお考えでしょうか。

○青山校長

先ほどの資料の中で、外部試験団体のそれぞれの試験についての一覧表が出ているわけですけれども、これまで日本の生徒たちへの、これら試験団体に対する情報がどの程度インプットされているかということを考えた場合に、私は学校文化という点から考えて、生徒たちが成長していく中で無意識のうちに刷り込まれていく状況があると考えます。

そういう視点で見ると、英検や、後発ではありますけれども GTEC、これらは生徒たちは嫌でも耳にするものだと思います。さらに、留学を志向

する生徒たちは、例えばTOEFLを受験するなど、必要に応じて選択していくことになります。そういう点で、なじんでいるもの、なじんでいないもの、これは必要だというものを適切な時間をかけて示され、それに慣れていく時間を確保していけば、学校の中で準備は進んでいくと思います。

TEAPについて吉田先生からお話をいただきました。TEAPが必要な生徒たちは、TEAPについて必須の情報を入手して、その準備をすると思います。個別の大学で外部の試験を取り入れて、こういう形で使いますというのは、それぞれの大学に具体的に示していただき、生徒たちが準備できる時間を確保していただかないと、生徒は戸惑います。高等学校も、1つ1つ対応するということはなかなか厳しいと思います。ある意味では共通した形で示してもらって、それで基礎的なところをクリアして、あとは個別の形に持っていってもらったほうがすっきりするのではないかと思います。いずれにしても、午前中の公開討論会で全高長の会長がお話をしていましたけれども、負担感が高校現場にあるということは間違いないことだと思います。

○司会（川嶋）

それで、吉田先生は共通試験に英語4技能を導入した場合でも、今の50万人は全員受けないので、代替のほうに流れるというお話で、50万人も受験者は英語に限ってみればいないのではないかということでしたけれども、ずばり根岸先生、先ほどいろいろコストとか手間暇を50万人の場合でシミュレーションしていただきましたけれども、結論から言ってどうなんでしょう、実際にフィージビリティーというのはどのあたりにあるのかということをお聞きしたいというご質問なんですけれども。

○根岸教授

私の結論は、どんなひどいテストでもやろうというのが結論ではあるんですが、難しいところはいっぱいありますね。

それで、例えば大抵吉田先生の主張には賛同するんですが、先ほどのシミュレーションはちょっと楽観的かなと思ってしまいます。もし複数の受験が可能というふうになったときに、皆さんが受験者だと仮定してください。自分が上智大学を目指していれば、上智大学は多分いろいろなランキングで上のほうにありますから、そこを達成したら大体全て達成したというふうになるかもしれないんですが、そうでない場合は、今ここなんだけど、もうちょっと上がったらここに行けるかもっていうふうに思うとすると、後ろに行けば行くほど受験者が増える。

学力は下がることはない、あまり勉強しなければ別ですが、通常は上がるので、最後になったらもっといけるかもっていうふうになって、多分高校の先生も、お前何で頑張らないんだみたいな、受験申し込みを出さないと何で受けないんだみたいなふうに言われるぐらいのことが起こると、これは最悪のシナリオですが、50万人は出てしまう可能性はあるかなと。最後に受けようなんていうのもあるかもしれないし、途中までは模擬試験みたいなので似たものでいって最後受けようとか、あるいはちょっと怖いから一回受けておいてもう一回受けようとか。なので、50万より逆に増えてしまうのではないかというのは怖いシナリオですね。

でも、皆さんの納得度ですが、機械で実施して機械で採点してというものは、皆さんがどのぐらい納得するか。それから事故に対して、みなさんがある程度寛容であれば選択肢としてはありかなと。でも、多分50万人という受験者をこのような形でやるのは世界でもあまり例がないことなので、青山先生の中にもありましたように、定着させる準備とか時間というのは本当はもっと要るのかなというのは思いますね。

打ち合わせのときに、何で2020年なんだっていうのは出ていました。確かに切りがいいし覚えやすいんですが、4年、5年というところで実施というのは…。私ちょうど共通一次が始まる直前に大学に入学したんですが、同級生は試行テストみたいなのを受けさせられたりしていました。私は行かなかったんですけど。それは3年ぐらい前からあったと思うんですね。でも、4技能でやるなら、もっともっといろいろな試行錯誤をやって、ネットワークが切れちゃったとか、データを誰かなくしちゃったとか、試験官が現れなかったとか、いろいろな失敗を積み重ねていく必要があるので、それには時間的に足りないかなというのは思いますね。

○司会（川嶋）

吉田先生に伺いたいんですけれども、外部試験と今度の共通試験で役割分担したとしても、外部検定試験のベンダーさんたちは、7 つのテストで例えば10万人とか20万人のオーダーが外部検定試験を受けたときに、それは可能なというような話にはなっているんでしょうか、協議会等で。

○吉田センター長

協議会ではそういう話はしていませんね。例えばGTECなどのスピーキングは間接スピーキングですので、全員が同時に録音をして、それを採点するのは別のところでやらなきゃいけない。ここは人はどうしたって介在するので時間がかかりますけれども、試験を受けるという時間そのものはそんなに8時間待つ必要のないような、そういう形でできる可能性はありますよね。

ただ、IELTS だとか TEAP だとか、あるいは英検というのは直接面接という形を取っていますね。そうすると、どうしたって先ほど根岸先生がおっしゃったように、1人10分かかればあれだけの時間がかかるわけですから、当然ながらものすごい人数のインタビュアーが必要になります。データは後でいいかもしれませんが、インタビュアーは少なくとも直接被験者と話をするわけですから、それだけ必要になる。

そうすると、私も TEAP は面接官をやったりしていますが、朝 10 時から 4 時までやったら、4 時ごろになると頭がぼーっとしていますから。もっともインタビュアーがしゃべる言葉ってすごく決まっています。下手なこと言っちゃいけないので、逆に言うと。ですから、そういう意味では、多少疲れていてもできる。インタビュアーは一応できます。できますが、確かに疲れます。生徒は待っていて疲れていると思います。ですから、そういう意味でのいろいろな問題点が出てくるのは事実だと思いますね。だから、どこまで本当にできるのか今のところはっきりとした答えは出ないですけれども、場合によっては、機械採点でどこまでできるかによっては、組み合わせですよね、何らかの形で組み合わせをやっていくとか。

あともう一つ考えられているのは、テストセンターという可能性があります。ただ、これは今根岸先生がおっしゃったように、ネットがつながらなくなったらどうなんだという問題になるかもしれませんが、試験センターというところから要するに iPad なり何なりでスカイプのような形の面接をやるとか、技術的にはいろいろ可能性はあると思いますが、それでも実際に10分は10分かかりますから、難しい点はあると思います。だから、今後どういうふうに技術的なものでそれを解決できるかというのは考える必要があるかなと思いますね。

○司会（川嶋）

それで、高大接続の答申の中では、一般入試と AO と推薦の区分をなくすということで、外部資格テストを活用ということについて言うと、吉田先生がご指摘のように、今は AO とか推薦入試だけで活用されている状況ですけれども、3 つの区分がなくなって、数十万人が何らかの形で共通試験なり外部検定試験等を受験するようになると、いろいろな問題が起きてくるということですけれども、ご質問者は、しかし、それでも全面的に 4 技能の共通試験なり外部検定試験を活用する方向で動いてはどうかというご意見でしたけど、その辺は先生は励ましになりますでしょうか。

○吉田センター長

実際今現在 AO とか推薦入試で入っている学生の数というのは、ほぼ定員の50%なんです。これを全部戻して一般入試にするということは、果たして本当に現実的に可能なのかなというのは、私は非常に大きな疑問があります。それから、先ほど申し上げましたように、もしこれを本当に一般入試のような形でやるとしたら、複数のテストを使うのは非常に状況として難しくなるのかなというふうに思いますので、どういう形が今度取られていくか私も今現在では見当がつきません。

ただ、最終的にはそっちの方向でやりましょうというのが国の今の方針ですので、できないという回答はないんじゃないかなと。やらなきゃいけないという回答しか今はないのではないかなと。先ほど根岸さんがおっしゃったように、どんなにひどいものであっても、とにかくまずやってみなきゃ分からないというような段階に今現在は来ているのかなというふうに思います。

○司会（川嶋）

次は、少し具体的なご質問ですけれども、まず青山先生にお聞きしたいんですけれども、アクティブラーニングも高校で導入するということが強く求められている。しかし、SSH とか新たに始ま

った SGH のプログラムでは、課題研究等が導入されて、アクティブラーニングの実践も進んでいる。そういう点から、アクティブラーニング自体はむしろ大学教育の改革の中から出てきて、それを高校へも入れなさいというストーリーの中で出てきたんですけれども、そういう SSH とか SGH の、あるいは IB 等の実践を踏まえて、何か大学に対する示唆みたいなものがあれば教えていただきたいということですが、いかがでしょうか。

○青山校長

大学に対する示唆というよりも、正直申し上げて、高校が一番遅れていたということが言えると思います。アクティブラーニングという範疇の中に入れることができるのかどうか分かりませんけれども、自主的活動で促すという技術は、小学校、中学校の教育の中では日々行っているわけです。それが高校段階になったときに、アクティビティーとしてはそこで止まってしまっているというのが非常に課題です。そのため、高等学校でもアクティブラーニングというものを導入し、そして学習活動というものを活発にして、自主性を高めることが必要だというのが今回の指摘だと思います。次期学習指導要領は高等学校の改革が本丸であるというのは、高等学校の関係者としてしっかりと受け止めていかなければいけないというところです。もはや避けていくことはできません。

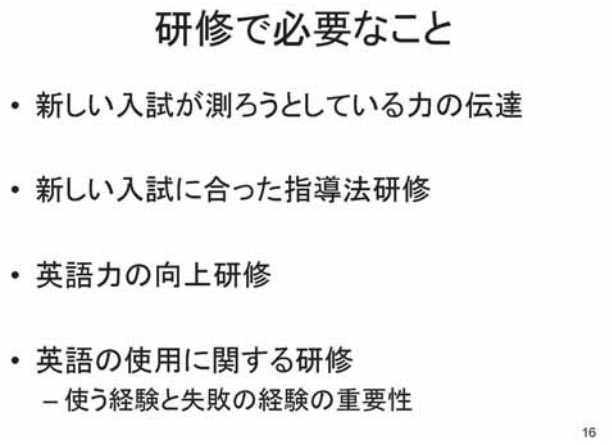
アクティブラーニングについては、高校が大学でどういうアクティブラーニングが行われているのかということを情報入手し、高校段階に下ろしてきて、高校の教育活動の中で膾炙して、高校バージョンでカスタマイズしていくということが高校にとって必要だと思います。それができない高校は、後れを取っていくことになります。その点でサンプルになるのは SSH であり SGH であり IB であり、既に手掛けている学校は少しずつ増えてきています。

例えば CLIL についても一例を申し上げますと、前任校の国際高校では、SELHi を経験し、CLIL を個人的に研究し、CLIL の研究団体に入って CLIL を実践し、そして国際高校で IB の導入の作業も横から見ながら助言支援した教員がいます。その教員は、東京都の若手教員派遣で 3 カ月アメリカのカリフォルニア大学アーバイン校で TESOL を学び直し、戻ってきて国際で授業指導に当たっています。大事なことは、トータルに指導経験を積んでいくということが高校の教員には必須だということです。

ですから、私は大学に、ぜひ高大連携の中でアクティブラーニングをご教示いただきたいと思います。教示していただいて、高等学校が高等学校として独自に充実させていくことが必要だと思います。

○司会（川嶋）

次の質問は、根岸先生のスライドの 16 ページの研修で必要なことを 4 項目挙げてありますけれども、一番下の英語の使用に関する研修というところで、使う経験と失敗の経験の重要性というふうに書いてありますけれども、これについてもう少し具体的にお話しいただけませんかというご依頼というかご質問ですけど、いかがでしょうか。



○根岸教授

実はさっきのスライドでは、失敗の経験のところは説明に時間が要るかなと思って削っちゃったんですが、お配りしたほうは失敗のことが書いてあります。なぜそんなことを書いたのかというと、英語力の研修とか、英語力を高めるとか、英検準 1 級が何%とか、ああいう数値も重要なんですが、英語習得とか英語学習に対してある程度健全な考え方を持つことが大切です。今、青山先生がご紹介くださった TESOL とかのコースで言語習得について学ぶというのも一つなんですが、多分先生自身が学習者として、そして言語使用者として実際に使ってみて、結構失敗しちゃうなとか、生徒に偉そうなことを言っていても間違っちゃうなとか、相手とコミュニケーションするときにこういうことは大切だよなとかっていうことを自身で経験するというのが、テストを作ったり指導を考え

たりするときの結構重要な側面で、それがないと、文科省のあらゆる政策の根幹にある考え方みたいなところを共有していない状態になってしまいます。そういう失敗の経験みたいなことが重要なのではないかと。

たまたま数日前 YouTube か何かで、TED ですかね、外国語学習をやる 5 つの方法みたいなのがあって、最初に挙げていたのが失敗をすることでした。つまり、使わないと失敗しないし、失敗しないと言語は習得できないということです。例えば即興で話させてうまくいかないなんていうことをやるっていうのは、結構重要なことだと思うんですね。常にプリペアードで絶対間違わない英語みたいなのは虚構でしかありません。多分先生方の研修の中でも使ってみるみたいなことと、使って失敗から学ぶみたいなことをやるのが意外と重要なのかなと。ただ単に英検の取得率を上げるとかだけではだめなのかなという、そういう意図でした。

○司会（川嶋）

研修についてはいかがですか。

○吉田センター長

今根岸先生がおっしゃったのはそのとおりだと思います。今週中には多分ネット上に上げられると思うんですが、1,800 人の ALT を対象にした調査研究をやったんですね。その調査の結果、中間報告が一応出ましたので、それをもうすぐ発表します。

その中で高校の先生のところで聞いていた質問が、根岸先生が今話題になっているものと同じで、ALT の人たちに日本人の先生は授業で英語を使って間違えるかというと、間違えると。かなりよく間違える。問題は、しかし、間違えたときに ALT はその間違いに対して何か指導しますかと。相手は先生ですよね。先生だと、大半が何もしない、無視するになっちゃうんですね。ということは、逆に言えば、今根岸先生がおっしゃったことを入れれば、ALT と一緒に授業をやるという研修を通して、より正しい言葉の使い方であるとか、そういうものについて生徒がいないところで、生徒がいると恥ずかしいかもしれないけれども、そういうところで研修を受けるというのも大事じゃないかなという気がするんですね。

それから、生徒たちは英語を授業で使っていて間違えるかというと、同じようによく間違える。でも、生徒たちの場合だとある程度直せる。ただ、時々そこでも出てくるのは、チームティーチングをやっていますから、日本人の先生を気遣って何も言わないというのがあるんですよね。だから、自分は ALT で入ってきているけれども、担任の先生は別にいるわけで、それが日本人の先生で、そっちのほうが言ってみれば偉いわけですよね。自分はアシスタントですから、試験問題も作れないし採点もできないわけですから。そうすると、遠慮しちゃっているところも実は回答の中から見られるところがあるので、ALT なんかと一緒に何か一つの模擬授業をやるという、そういうのが研修の中に入ってくると、私なんかは今根岸さんがおっしゃったことはすごくおもしろいんじゃないかなと、そういうふうに思いました。

○司会（川嶋）

根岸先生のほうがよろしいのかもしれませんけれども、ご質問は、中学、高校、大学のそれぞれの卒業時に到達しているべき英語レベルをどう考えているかという、英語力調査については根岸先生のほうがお詳しいですかね。いかがでしょうか。

○根岸教授

報告書を書くのは書いたのでお話をそれに絡めてしますと、経緯はこんな感じです。

平成 25（2013）年 12 月に出た「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、CEFR で高校卒業時は現状は A2 または B1 と書いてあったんですね。それを B1 または B2 に上げるというふうに書いてあったんですね。私は、現状が A2 または B1 を達成してないのに、何でまた上げちゃうんだと思ったんですが。多分財務省からお金をもらうには分かりやすく上がってないと、何でこんな予算使ってるのに上がらないんだみたいなことになっちゃうので上げちゃった。でも、実際は調べてみたら A1 だったということですね。もう一回言いましょうか。今までの高校卒業時の目標値は A2 または B1 だったのを、今度の新しいスキームで B1 または B2 にしましょうというふうに示しました。しかし、調べてみたら A1 だったという、というのが実態だと思います。

もう少し詳しく言うと、4 技能の中で読むことが A1 の 75％ぐらいで、これが一番よかった。25％

は A2 から上だったということです。ほかの技能はそれより下です。リスニングはもうちょっと山が下で、ライティングとスピーキングに至っては真っ平ですね。山がなくて、あるのは無答というか 0 点のところに山が、ライティングの場合 3 割ぐらいが山で、スピーキングの場合 1 割ぐらいが無答というのがあります。あとはほんとに真っ平ですね。山がない。だから、多分もうちょっと後ろまで、下まで測れば山があったのかもしれないですが、ここの尺度の 0 点までには山はなかったみたいな感じになっていました。それが高校卒業時ですから、中学卒業時はこれから今年やりますが、楽しみなようなちょっと怖いような感じです。

この調査でおもしろいなと思ったのは、先ほどから青山先生が何度も強調されている高校は評価がちゃんとできてなかったということと関連しているんですが、高校に限らず中学校もある意味同じです。教えたこと、教えた教科書をそのままテストして、それでできているかどうかというところだけを調べているので、先生自身は本当にどれぐらいできるかをあまりよく知らないんです。今回のように外部試験でちゃんと調べちゃうと、本当の意味での力がついてないということが分かってしまったという、これが私の印象を交えた報告です。いいでしょうか。

○司会（川嶋）

報告書が間もなく出る。

○根岸教授

出ています。

○司会（川嶋）

そうですか。分かりました。文部科学省のホームページに出ているんですかね。分かりました。興味のある方はまたごらんください。

実態はそうなんですけど、先ほど振興計画だと思うんですけれども、実際その辺はどうなんですか。目標値として中卒、高卒、大卒の、義務教育ではここぐらい、高校 3 年だったらここぐらい、大学 4 年までいけばこれぐらいのレベルになって、国際的に見てもなるべきだというような、そういう目安としてはいかがでしょうか。

○根岸教授

CEFR で語るとすると、CEFR というのは A、B、C というふうになっていて、下から A、B、C。C が上なんですが、B というのは別の言い方をするとインディペンデントユーザーというふうに言われるんですね。これはどういう意味かというと、その言語で大抵のことはできますよというレベルなんですね。C は単にできるんじゃなくて、うまく、格好よく大変な状況でもできますという、余計な感じなんですね。

だから、日本は多分 C はほとんどの人は要らない。もちろん趣味でそのぐらい行く人はいてもいいんですが、多分学校教育で保証するとなると、B にみんななったら、それこそ英会話教材なんか買わなくてもみんな満足みたいな感じに絶対なりますね。だけど、多分現実的なところは、最初に文科省が掲げていた A2 と B1 ぐらいに高校卒業時にみんながなれば、結構みんな満足な感じだと思うんですね。

あとは、ニーズに応じていくというのでいいと思うんですが、現状掲げている目標は、もしやるなら本当に相当覚悟してやらないとならないだろうと思います。お金も人的投資もしなきゃいけないかなと思います。その代わり、A2、B1 ぐらいだったら、4 技能において B1 が半分も日本の中にいるとなったら、多分外国の人が来て、街で人と会って、英語でコミュニケーションしたときに、日本はかなり通じるなみたいなふうに多分思うと思います。今はほとんど A1 ですから、やっぱりだめだというのが実態かなと思います

○司会（川嶋）

時間がなくなってきましたので、そろそろ残りの 1 つ、2 つぐらいにしたいんですが、1 つは、先ほど午前の公開討論会で東大の山内先生がご指摘なさっていた、英語の環境問題ですね。つまり、根岸先生はどんな悪い試験でもやらないよりはやったほうがいいというお話でしたけれども、試験だけではなかなか英語を頑張って勉強しようというかマスターしようというインセンティブにならないと思うんですが、英語を使う環境整備というんですかね、大学教育、高校教育との関係でどういうことが今後必要なんでしょうか。青山先生のスライドにも、環境整備が必要だと書いてありましたけれども、試験を変えるだけじゃなくて、入試を変えるだけじゃなくて、大学教育のあり方、英語教育でも、英語は英語で教えるというふうになっていくと、中学までもということもありましたけれども、それ以外に名案というか何か具体的

にご提案というのはありますでしょうか。どうですかね。吉田先生、いかがですか。

○吉田センター長

東京都はこの間イングリッシュビレッジの構想を出して、今有識者会議で具体的な案を少しずつ練り始めていますね。大学で有名なのは多分近畿大学ですね。関西では7年ほど前から、大学の中にイングリッシュビレッジを作っちゃって、いろいろな行事、イベントをやったりとか、いろいろな人を呼んできてやっていますし、それから、京都市立日吉ヶ丘高校も、今現在校舎の一部の 1 階部分を全部改築して、そこをイングリッシュビレッジにしようと。京都などの場合ですと留学生が多いですから、留学生などにもいろいろ来てもらって、そういう自由に英語が使える場を作ろうとか、あるいは、土日あたりは地域の人たちにもそれを使ってもらって、英語を活用する場にしようというので、個別の学校などもそういう努力を今し始めていると思うんですね。多分近畿大学が一番それが進んでいると思いますね。

あとは、例えば公文教育研究所が既に 10 年やっているイマージョンプログラムがあります。これは夏休みだけですけれども、10 日間 2 つに分けて、10 日以上ですかね。それのいいところは何かというと、立命館アジア太平洋大学に今留学している世界のいろいろな留学生がキャンプリーダーになって、小学生、今は 4 年生から 6 年生ですかね、の生徒たちとずっと英語で朝から晩までいろいろなことをやりながら過ごす。これを公文さんのほうはもっと広げたいという発想を持っています。

ブリティッシュヒルズなんていうのもいろいろありますけれども、そういうような具体的に英語を活用できる場をどれだけ設けるかということがまず一つあると思うのと、もう一つは、先ほどから青山先生もおっしゃっている CLIL のように、英語で何かを教える、英語で何かを学ぶという機会をどれだけ作れるかというのは、私、すごく大きいと思うんですね。というのは、上智大学は去年から私が今センター長をやっている一般外国語の英語を初級から上級まで全部 CLIL にしたんですね。出てきた結果は何かというと、何せ 2,500 名以上の学生を一遍に、あらゆる学部の学生を扱っているわけですが、5 点満点の授業評価で 4.1、全部合わせてですね。

それはそれですごいよかったなと思ったんですけど、もっとよかったのは、よく一般外国語って途中で学生が落とすじゃないですか。来なくなったりとか、F を取ったりとか。今まで上智も、再履修者クラスってたくさん設けなきゃいけなかったんですね。それが半分に減ったんです。同じようなことをやっているのに、再履修者の数が前年度から比べて半分に減ったというのは、それだけ学生たちにとって内容がおもしろかったんだと思うんですね。

ですから、そういうようなことを考えると、単に英語は英語ですよというので、英語だけを教えているんじゃなくて、英語で何を教えるの、何を学ぶのという、まさにアクティブラーニングの一環でもあるので、ディスカッションをやったり、あるいは発表したりとか、実際にペーパーを書いたりということも含めて CLIL の授業でやっていますけど、それを本当に初級から上級まで全部みんなやります。ですから、英語で何かほかのものを学んでいくという機会を増やすということも私は非常に大事じゃないかなと思います。

○司会（川嶋）

青山先生は最後に大きな宿題ということで飛ばして、根岸先生はいかがですか。

○根岸教授

このことを議論すると、大体こういう考え方に反対な人たち、先ほどのコメントもそうかもしれないんですが、日本はほとんど英語を使わないで済むということをおっしゃるんですが、ただ、ここで考えなきゃいけないのは、今のニーズという問題と、「今 10 代の子たち」、「これから 10 代になる子たち」が 10 年後、20 年後にどうか、我々の年齢になったときにどうかということを考えると、多分今でも大分国境がないようにいろいろつながっているんですが、それがもっとつながるようになる。そういう社会に生きる子たちにどういう経験が必要なのか、学習が必要なのかということを考える必要があるかなと思います。

最後に一つエピソードを紹介します。先日テレビを見ていたときに、富士山の頂上でやっているお土産屋さんを紹介していました。最近外国からの観光客が多くて、そのお土産屋さんは日本語はもちろんですが、中国語も覚え、韓国語も覚え、

最近はタイの人が結構多いのでタイ語も覚えて、もちろん政治の話をしたりするわけじゃないんだけれども、これはいく幾らだとか、これはこんなものだとかっていう説明をニーズに応じて4言語でやっているんですね。そうしたら、大道芸人の人も、タイの人が増えてきたからタイ語でも何かできるようにやっているんだみたいなのを、別の番組でやっていたりしましたね。高知に行ったら、高知は今度フランスからユズの注文が入っちゃってみたいなことを言っていました。前は東京の商社を通していたんだけど、直接この村のユズが欲しいとフランス語で来ちゃったみたいなことがありました。

これらは我々の若いころは全然なかったことですけれども、こんなことが普通に起きる子たちで、逆にもし外国語を使う能力がなかったり経験がなかったり、外国語学習に嫌な思いを抱いていたりした状態になっちゃうと、こういったことへのチャンスを利用することもできないし、コミュニケーションすることの喜びみたいなものも経験できなくなっちゃう。入試は単にきっかけだと思うんですけど、これをきっかけにいい形で外国語教育が変わったらいいなと思います。

○司会（川嶋）

それでは、時間も来ましたので、最後に青山先生に非常に大きな質問が来ております。先ほど青山先生ご自身もお話しされていましたけれども、全高長会長ということで入研協にもいろいろご協力いただきましたし、国の入試改革や高校教育改革等にも、あるいは入試センターにもいろいろかかわってこられたというご経験を踏まえて、高校と大学教育の接続、あるいはキャリアという観点から見て、先生が望ましいと思われる大学入試のあり方についてどのようにお考えですかというご質問で、非常に答えにくいかもしれませんが、これを最後にしたいと思いますので、先生のこれまでの思いの丈をお話しいただければと思います。

○青山校長

最後に大変大きな宿題をいただいた思いです。先ほどもお話の出た高校卒業程度の英語の力はどのレベルなのかというときに、自分の経験から申し上げますと、私自身、高校を卒業するときに英検の2級を受けました。そのときを思い出しますと、大体自分の周りも英検2級をクリアすれば高校での英語の力はついているのではないかということは、暗黙のうちに共有されていたと思います。

それは今もあまり変わっておらず、2級というものがB1というCEFRの基準に対応されていますけれども、2級、あるいは生徒によっては準1級ぐらいの間で、つまり、B1かB2のところで高校生の、特に大学に進学していこうとする高校生の英語の力というのは評価できるのではないか、評価して無理はないのではないかと思います。あとは、英検が例えば意図的に2級という内容を暗黙のうちに少し上げて、生徒たちの力が暗黙のうちに上がっていくということになれば、これは大変いいことではないだろうかと。それと他の団体の資格のレベルというものが整序されていくということはが、政策的にはできることなのではないだろうかと思います。

高校は、これまでどうしてもエクスキュースで大学受験、大学の入試問題がこうだから、自分たちは生徒に対してこうしなければならないという言い方でやってきたところがあったと思います。本来、高等学校は教育の一つの完成のレベルであり、その後、希望する生徒のみが上級の大学、高等教育に進んでいくというところで、高等教育に進んでいくためのサービスを高等学校として行う、それが進学指導という受け止め方であったことは事実だと思います。それが今度はアウトカムを求められて、出口のところでそれをクリアしなければならないという責任を高等学校が負ってきたことも事実だと思います。

ですから、大学入試と高校教育というのは、結果としては一体化しているという現実があったと思います。大学入試が変わっていって、それで高校の教育内容、あるいは指導方法も当然影響されてくるところだと思いますが、例えばアクティブラーニングというものを高等学校に入れるときに、どうしてもアクティブラーニングの断片、要するにアクティブラーニングもどきと言ってもいいかもしれません、アクティブラーニングのまねごとと言ってもいいかもしれませんけれども、そうならざるを得ない危険性もあります。フラグメント化していく物理的な制約があると思います。それは何かというと、科目数の多さにあります。

私が手掛けたIBは、6つのサブジェクトカテゴリーと、EEとTOKとCASという3つの柱で構

成されています。それしかありません。しかし、サブジェクトと EE、TOK、CAS が非常に有機的に一体化した形でつながっていて、相互に補完し合いながら、一つの完成した教育が行われるというシステムを取っています。

ですので、理想的には、教育課程の教科、科目が少なく抑えられることと、必履修教科、科目数が少なくなっていくことが必要ではないかと考えます。それによって、時間というものが生み出され、その時間の中で裁量が利いて、アクティブラーニング等を通じてトータルな、総合的な学習活動が展開できるという形になると、高校教育は充実し、大学教育との接続もスムーズにいくのではないだろうかと思います。

最後に、CLIL と IB というのは違いがないように思います。IB は日本のものではなく、IBO という国際バカロレア本部が最終的に認定をして、資格なども与えて、その資格を持って生徒たちが全世界の大学に進学し、高等教育を修めた後、社会に出て、社会に貢献していくプログラムですけれども、内容は CLIL で実際に実践されていることと共通する部分が多いということです。グローバル化、グローバルレベルの教育を目指す上では、それぞれの学校でその学校の CLIL を展開していくことがよろしいのではないかとも考えます。

お答えになっていませんが、以上です。

○司会（川嶋）

ありがとうございました。少し予定の時間を過ぎておりますので、まだまだご意見、ご質問、あるいはコメントがあろうかと思いますが、この辺で企画討論会を終わりとしたいと思います。改めて 3 名の先生方に感謝の意を込めて大きな拍手をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

アンケート用紙が入っておりますので、退出の際にはお渡しください。

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成２７年度入研協大会（第１０回）「企画討論会①」

「グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試」

当 日 ス ラ イ ド （ 抜 粋 ） 拡 大 版

吉田　研作（上智大学言語教育研究センター長）

Sophia University

英語資格・検定試験の入学試験への活用促進に関する最近の動向と活用例

吉田研作

yosida-k@sophia.ac.jp

http://pweb.sophia.ac.jp/1974ky

先導的大学改革推進委託事業「資格・検定試験の大学入試への活用促進に関する調査研究」報告書

政策研究所 (2015)

図1.6 資格・検定試験の活用方法

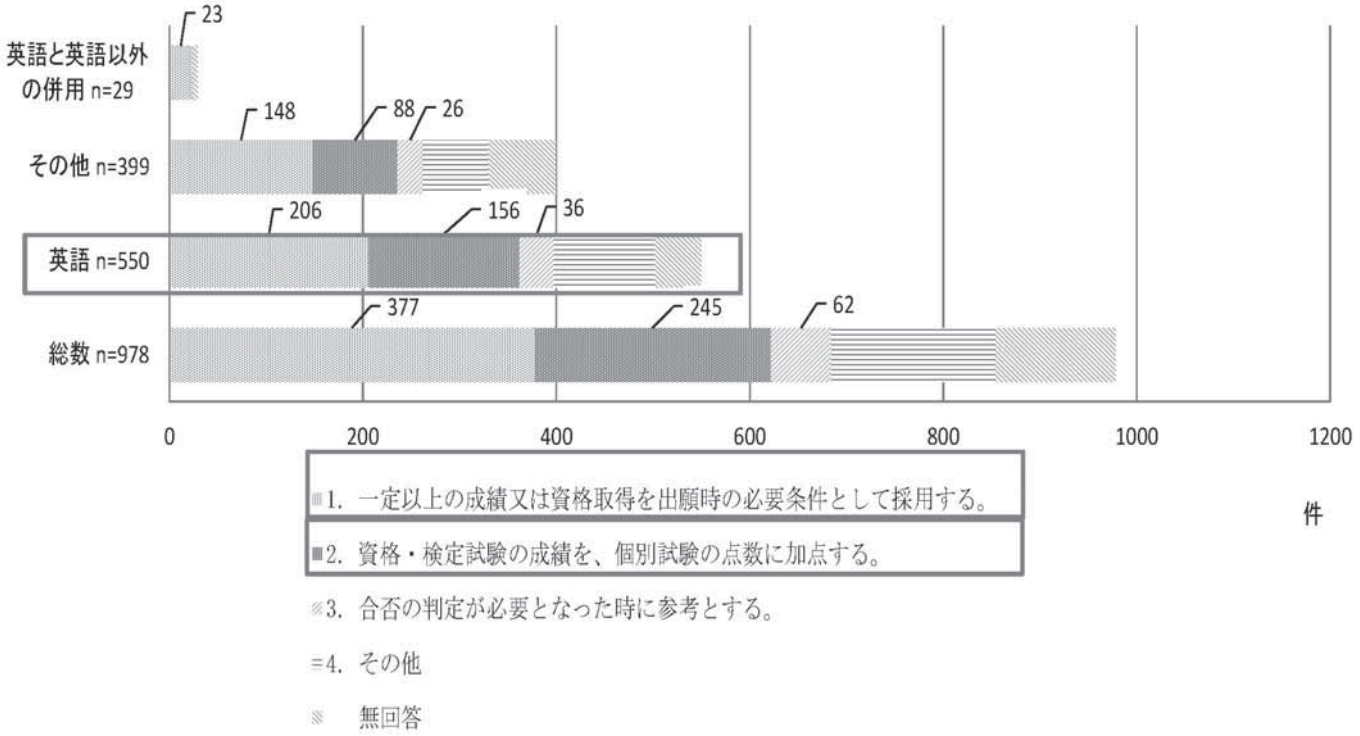
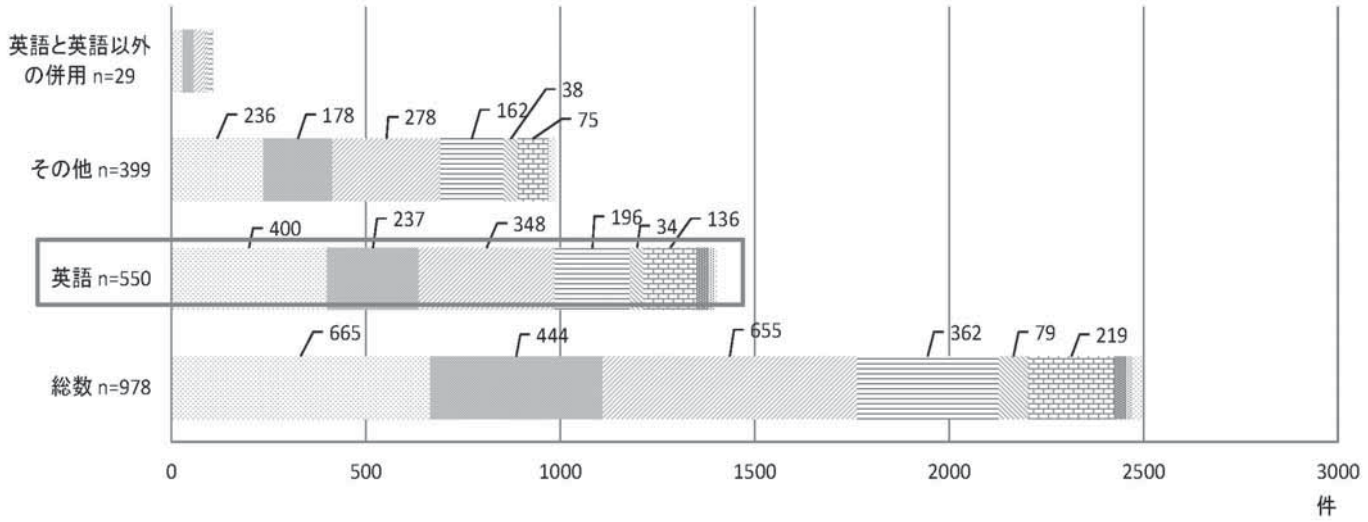
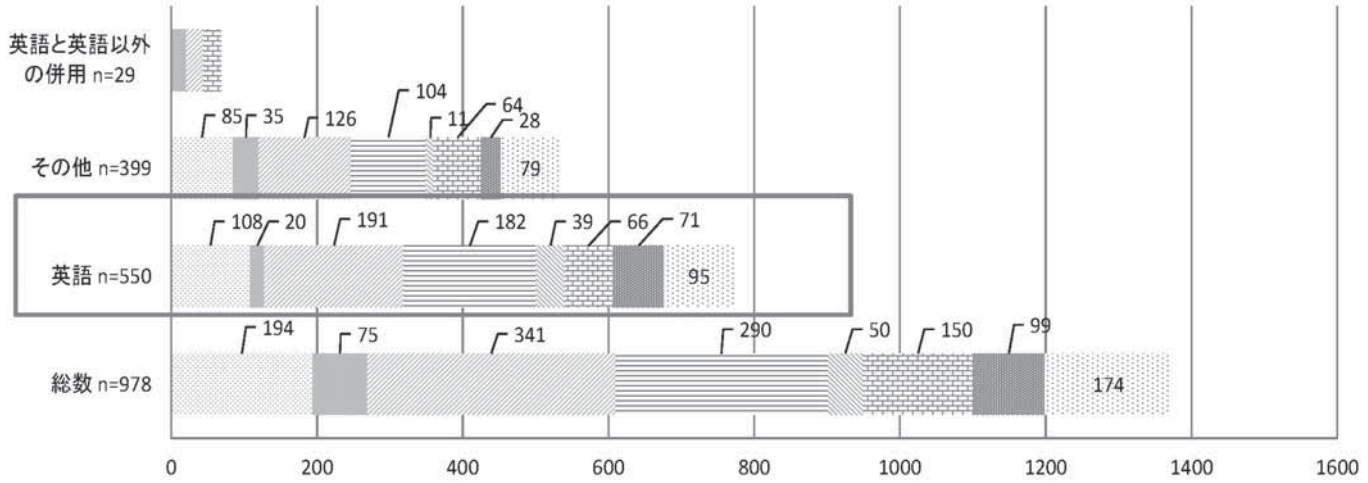


図1.8　活用する上での効果



※1. 入学者の能力を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある
■2. 入学者の適性等を評価することができ、大学での教育を円滑に進める効果がある
※3. 多様な能力を持った学生を受け入れることができ、人材育成機能の強化に効果がある
≡4. 自らの夢や志について主体的に考え学ぶ意欲のある学生を確保できる効果がある
※5. 高等学校教育と大学教育の円滑な接続に効果がある
≠6. 資格・検定試験の活用は、大学の創意工夫による入学者選抜の実施に効果がある
■7. 入試業務の軽減に効果がある
■8. その他
※　無回答

図1.9　活用に対する課題



※1. 資格・検定試験を活用して入学した学生について、資格・検定の修得により評価した能力にばらつきが見られ、一概に効果を見いだしにくい
■2. 資格・検定試験の中には、高等学校の学習指導要領に沿った内容となっていないものがあり、選定が困難
※3. 大学が進める人材育成を強化する上で、資格・検定試験活用が結び付くか検証できていない
=4. 資格・検定試験結果を適正に評価するために、試行錯誤している
※5. 受験生の経済的負担が増える
≠6. 資格・検定試験の質や信頼性が担保されているかどうかに問題がある
■7. その他
※　無回答

図1.11　平成27年度から資格検定試験活用を考えている理由（n=80）

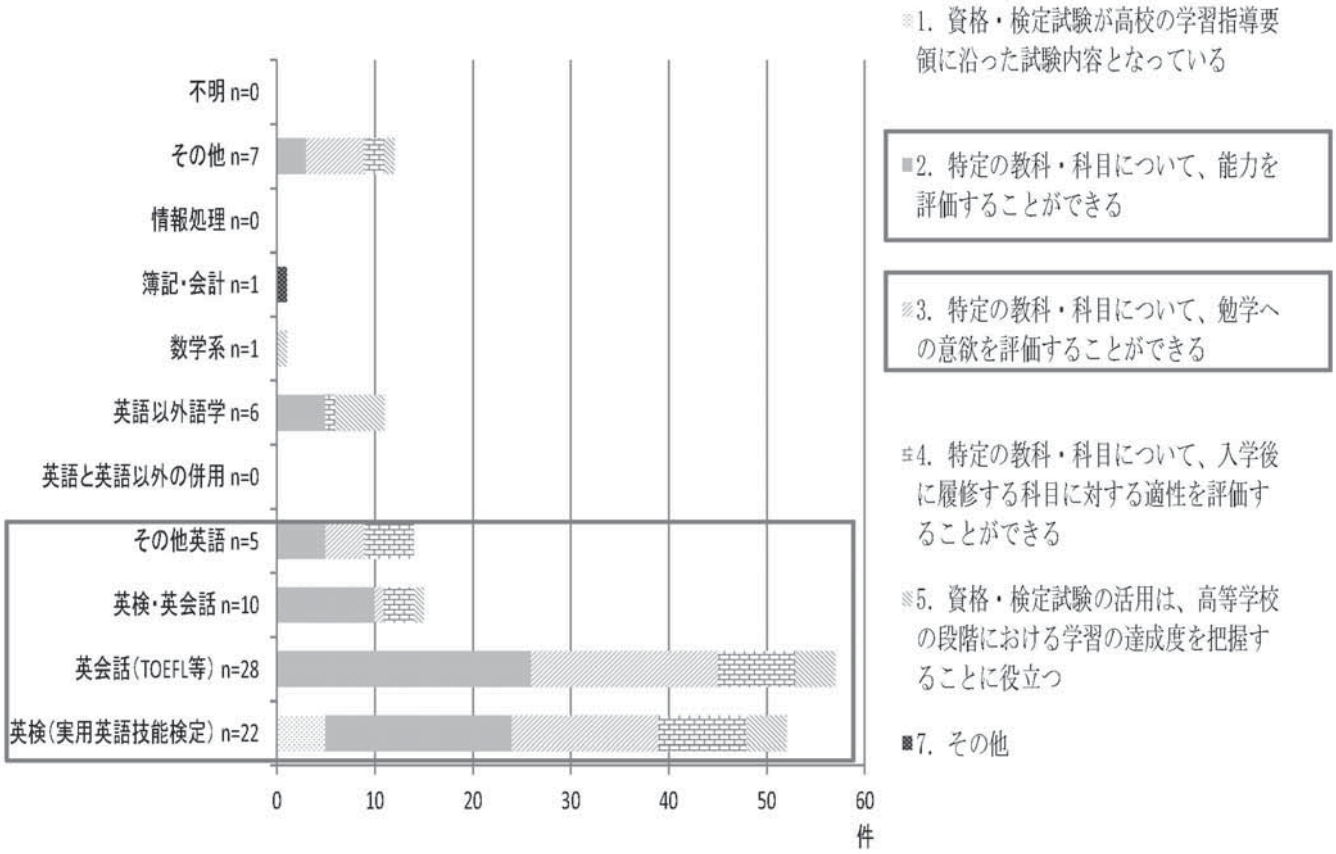
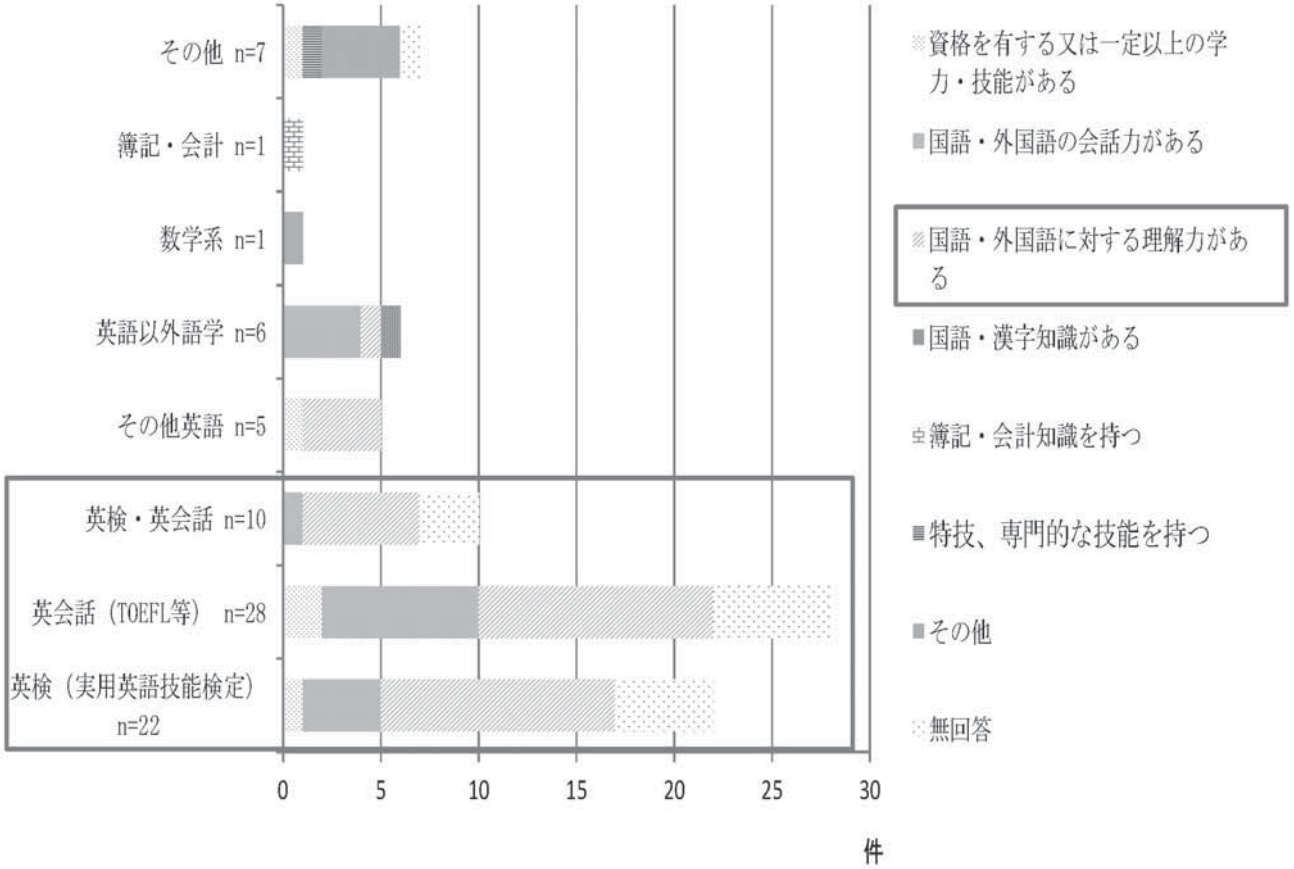


図1.12　平成27年度から活用予定の資格・検定試験の評価する能力



各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1780-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検： 日本英語検定協会 http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/
http://www.eiken.or.jp/association/info/2014/pdf/0901/20140901_pressrelease_01.pdf
TOEFL：米国ETS Webサイトに近日公開予定
IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より
TEAP： 第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より
Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/
http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/
※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成

GTEC ：ベネッセコーポレーションによる資料より
TOEIC ： IIBC http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html
「L&R」または「S&W」の記載が無い数値が４技能の合計点

TEAP採用大学の活用例
2016年度

地域	大学名	利用学部	入試形態
関東	上智大学	ー	特別入試 (カトリック高校対象)
		全学部全学科 (国際教養学部を除く)	TEAP利用入試 (一般入試)
	立教大学	・異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科 ・経営学部経営学科 ・国際経営学科	自由選抜入試
		全学部	一般入試　グローバル方式
	中央大学	経済学部、法学部	・英語運用能力特別入学試験
		商学部	・英語運用能力特別入学試験 ・海外帰国生等特別入学試験
	青山学院大学	文学部　英米文学科	・一般入試(個別学部日程)C方式 ・自己推薦入試
		総合文化政策学部 総合文化政策学科	・一般入試(個別学部日程)B方式
		地球社会共生学部 地球社会共生学科	・一般入試(個別学部日程)B方式 ・全国高等学校キリスト者推薦入試 ・自己推薦入試 ・海外就学経験者入試
	東京理科大学	・経営学部ビジネスエコノミクス学科	・グローバル方式入試
	獨協大学	・外国語学部交流文化学科 ・国際教養学部言語文化学科 ・経済学部経済学科、経営学科、国際環境経済学科 ・法学部法律学科、国際関係法学科、総合政策学科 ※外国語学部ドイツ語学科・英語学科・フランス語学科は対象外。	・一般入試A方式「外部検定試験導入型」

中部	中京大学	国際教養学部、文学部、心理学部、法学部、経済学部、経営学部、総合政策学部、現代社会学部、工学部、スポーツ学部	・A方式英語基準型
	南山大学	全学部・全学科	・全学統一入試 ・外国高等学校卒業者等入学試験 ・外国人留学生入学審査 ・編入学・転入学試験
関西	関西大学	外国語学部	・アドミッション・オフィス入学試験(AO入試) ・スポーツ・フロンテア入学試験(SF入試) ・指定校推薦入試 ・併設校卒業見込者特別推薦入学試験
	関西学院大学	全学部	・センター利用入試
中国	エリザベト音楽大学	音楽学部	・一般入試 ・奨学生入試
九州	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部 国際経営学部	・AO入試　活動実績アピール方式
	西南学院大学	一部学部	・推薦入試(予定)

References

TEAP　http://www.eiken.or.jp/teap/
「国際共通語として英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（平成23年7月13日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm
文部科学省(2013)外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定に関する検討会議（第7回）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/092/shiryo/1330903.htm
文部科学省（2015） 英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針
文部科学省（2014）今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm
文部科学l章（2014)新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申案）のポイント
政策研究所 （2015） 先導的大学改革推進委託事業「資格・検定試験の大学入試への活用促進に関する調査研究」報告書

特集２－２

平成２７度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第１０回）企画討論会②

「各大学の個別選抜改革・再考　―大学の主体性と個性をいかに反映させるか―」

日　　時：平成２７年５月２８日（木）１４：００～１６：３０

会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　丹羽ホール

司　　会：真鍋　芳樹（香川大学教授　アドミッションセンター）

大久保　敦（大阪市立大学教授　大学教育研究センター）

パネリスト及びサブテーマ：

河添　健（慶応義塾大学教授　総合政策学部長）

「AO 入試の 25 年　―慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの試み―」

倉元　直樹（東北大学准教授　高度教養教育・学生支援機構）

「東北大学における入試のトータルプランニング

―AO 入試成功のカギを握る一般選抜個別試験の設計戦略―」

林 篤裕（九州大学教授　基幹教育院）

「思考力・表現力・協働性の評価を目指して　―九州大学 21 世紀プログラムの場合―」

○司会（大久保）

開始の時刻になりましたので、これから企画討論会②を開催したいと思います。私は、大阪市立大学の大久保敦と申します。お隣の香川大学の真鍋芳樹先生とともに司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

これから趣旨とご登壇の先生方をご紹介させていただきますが、後半の討論にできるだけ時間を確保したいと考えておりまして、簡潔にさせていただきますことをお許し願います。

ところで、午前中の公開討論会にご参加の方も多いと思いますが、最後のほうである大学関係者の方から、「個別選抜のイメージがわかない、どう考えたらよいか」という質問が出ておりました。この企画討論会②のテーマというのは、まさにこの質問に答えるために企画されたと考えていいかもしれません。

さて、昨年 12 月に出ました中央教育審議会答申では、個別選抜における多面的評価の大半は個別の大学に委ねられております。しかも、同時に評価の客観性をどのように担保し、さらに大学の主体性とか個性を入試改革にどのように反映させていくかということも求められております。従いまして、各大学の負担はこれまで以上に大きくなると予想されます。一方、多面的な評価法に取り組んでいる大学は、既に相当数に達していると思われます。各大学は自らのアドミッションポリシーの下に具体的な取り組みを展開しているということは、明日以降の個別の研究発表でもたくさん出てまいりますように、ご承知のとおりでございます。

そこで、この企画討論会②では、前半の約 1 時間を使いまして、これまで多面的な評価法に積極的に取り組んでこられました大学より関係の先生方をお招きいたしまして、評価の客観性の担保、あるいは大学の主体性、個性といったものをどのように入試改革に反映させてこられたのか、また、入試改革を進める中で明らかになってきた課題、あるいは今後取り組むに当たり乗り越えねばならい壁は何なのか等々を紹介していただければと思います。その後、途中で 10 分間の休憩を予定しております。この間に、フロアの皆様にはお手元の質問票にご記入いただければと思います。休憩後、後半の残り時間におきまして、質問票にご記入いただきました内容も含めまして総合的に討論を行いたいと思います。このような手順で、問題の理解を深めることができればと思っております。

続きまして、今日ご登壇いただきます先生方をご紹介申し上げます。まず、我が国における AO 入試の先駆者として、四半世紀になると思いますが、長きにわたって取り組まれてきました慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスより、総合政策学部長の河添健先生でございます。多分この入研協大会では、慶応の AO 入試のことについてお話しいただくのは初めてのことではないかと私の記憶では思います。

続きまして、国立大学でいち早く AO 入試を導入されまして、東北大学型と呼ばれる学力重視の AO 入試に取り組まれてこられました東北大学より、高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹先生でございます。

最後に、21 世紀プログラムと呼ばれます入学後の学部横断型教育と連動させた AO 入試に取り組まれてまいりました九州大学より、基幹教育院の林篤裕先生でございます。

先生方、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、これから各先生方にお話をいただきたいと思います。最初に河添先生、よろしくお願いいたします。

（131 ページに掲載）

○河添学部長

ご紹介にあずかりました、慶応大学総合政策学部の河添と申します。このたびは、公開討論会の個別選抜のセッションでこのようなプレゼンの機会を与えていただき、ありがとうございます。

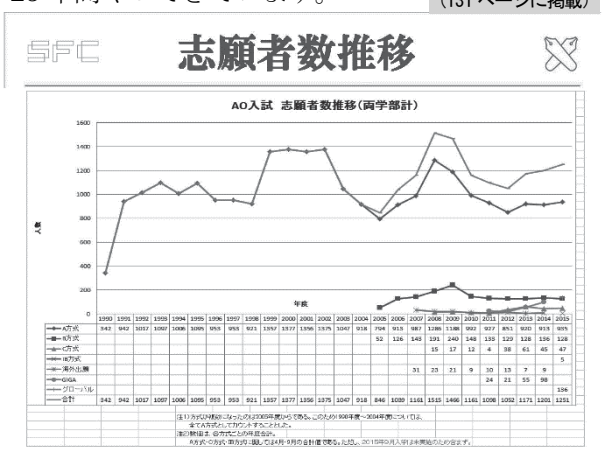
先ほどの紹介にありましたように、慶応大学の湘南藤沢キャンパス、通常 SFC と言っていますが、創立 25 年を迎えます。25 年前に、いわゆる

教育改革を旗印に新しい教育をやってみようということでスタートしたキャンパスになります。そのとき導入しましたのが AO 入試ということで、一応本家本元ということですので、この 25 年間どのように推移してきたかを少しお話ししたいと思います。

昨年、教育再生実行会議の方々がキャンパスの見学にいらっしゃいまして、25 年間どのような教育を行ってきたかというヒアリングを受けました。そこで AO の学生を紹介しました。非常に高い評価をいただきうれしく思っています。その後、12 月になりまして、中教審の答申があのような形で出て、内容は我々が 25 年間やってきたことを非常に色濃く受け継いでいただいているという印象を持ちました。あの答申をよく読むと、高大接続と大学の質的改革、そういったものを行う上で、入試はどうあるべきかという答申だと思います。どうもあの答申以降、入試改革ばかりが先行してしまい、どういう学生を育てるかという視点が欠けています。そうなると何のための改革か全く分からない。その辺を踏まえて 25 年間我々がやってきたことをお話ししたいと思います。

湘南藤沢キャンパスには 3 学部あり、そのうちの 2 学部の総合政策学部と環境情報学部がカリキュラムを共有しています。そこで 850 名の学生を毎年受け入れています。そのうちの 200 名を AO 入試の募集定員という形で公開しています。ところで、この 200 という数字は、もし 150 人しかいい学生がいなければ、150 人しか取らない。300 人いい学生がいれば、300 人取ろうということで、その帳尻合わせは 2 月に行う一般入試ですればいいということにしています。基本的には AO 入試でできるだけいい学生を取ろうというスタンスで 25 年間やってきています。

（131 ページに掲載）



	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
A方式	342	942	1017	1057	1006	1055	953	953	921	1357	1377	1356	1375	1047	918	704	915	987	1286	1138	992	927	851	920	913	955
B方式																52	126	143	191	240	148	133	129	128	135	128
C方式																			15	17	12	4	38	61	45	47
IB方式																										5
海外出願																		31	23	21	9	10	13	7	9	
GSA																						24	21	55	98	
グローバル																										196
合計	342	942	1017	1057	1006	1055	953	953	921	1357	1377	1356	1375	1047	918	846	1039	1161	1515	1466	1161	1096	1092	1171	1201	1251

（1）方式は1989年にスタートしたので1990年度からである。このため1989年度～2004年度については、
全てA方式としてカウントすることとした。
（2）開始年は、各方式ごとの年度を示す。
A方式・C方式・IB方式は、ともに4月・9月の合計値である。ただし、2015年の2月入学はB方式のみ開始のため皆無。

850 名のうちの 200 名を取るための AO 入試の志願者数の推移のグラフがこれになります。大体 1,000 から 1,200 ぐらいのあたりを動いています。この辺からぽんとはね上がる、こういうところには必ず理由があります。最初は出願資格に評定平均 4.0 以上という基準を設けていました。それを一度外してみようということで外したのが、このはね上がりになります。このときから高校の成績は提出してもらうけれども、出願要件で 4.0 という基準を一切なくしました。したがって、合格者の中には評定平均 2.0 とか 3 以下の生徒が結構いた記憶があります。その後、順調に推移しましたが、ここで落ちてきたのですね。これは、成績を見ない入試ということで、“一生懸命勉強しない生徒でも合格する”、そういうネガティブなイメージが浸透してきて、受験勉強をしている優秀な学生が減ったのではないか、というのがこの辺の減少だと思います。

現在は、A 方式、B 方式、C 方式、IB 方式、Admissions for Overseas Students の 5 つのカテゴリーを設けています。ほぼ 9 割が A 方式、今までやってきたのと同じ方式です。B 方式というのは評定平均が 4.5 以上だったらばそれをアピールしてくださいという成績重視のカテゴリーです。C 方式というのは、コンテストとかで優勝したような実績があれば、1 次の書類審査を免除する形ですね。それから、Admissions for Overseas Students は海外からの受け付けです。このようにある程度カテゴリーを示すことによって、我々がどういう生徒が欲しいかを明確にしています。この効果はグラフのこの辺に表れています。

一つのポイントは、25 年間やってきても、志願者数はあまり変わらないのですね。我々のスタンスは定員 200 と書いていますけれど、よければ 300 でも取ると言っているのだけれども、出願の人数は変わらない。多分、高校生のスタンダードな勉強の仕方では高校 1 年の終わりか 2 年の初めぐらいから文系と理系に分かれ受験のための勉強に入る、すると AO 入試を準備する時間がない。AO 入試は結構簡単なようでいて、ちゃんと合格しようと思うと高校 2 年ぐらいから問題意識を持って何かのテーマに取り組まなきゃいけない。したがって受験勉強をしつつも AO 入試にチャレンジするような生徒はなかなか増えない、今の日本の教育制度では AO 入試の志願者はこれ以上増えないのではないか、というふうに分析しています。

高大連携システム構築のための基礎研究 (2001)

AO入試の問題点

- **傾向と対策がとられる。**
  - 志望理由書がパターン化する。
  - はやり言葉がある。「国際」、「福祉」、「環境」
  - 同じアイデアの添付書類。
- **個性を重視するのに個性が見えない。**
  - 優秀な生徒会長が多く、多様性が減った。
  - チャレンジ精神が伝わってこない。
- **基礎学力が不安である。**

KEIO 150 Design the Future

15 年前に東北大学のアドミッションセンターで、『高大連携と AO 入試』というシンポジウムがありまして、次のスピーカーの倉元さんにお世話になりました。15 年ぶりの再会なのですけれども、そのときのスライドがこれなのですね。15 年前に、AO の入試の長をやっていたのでお話しの機会を得ました。そのときに用意したスライドがこれです。読み返してみると今日の話でも使えるので紹介します。

当時は、ちょうど AO を立ち上げて 10 年目になります。そのときの問題として、AO 入試は書類が主となるので、どうしても傾向と対策が取られる。また志望理由書には国際・福祉・環境といった決まり文句がいっぱい出てくる。これは 15 年前ですけれども、今は国際のところがグローバルという言葉に変わって、福祉のところが少子化とか高齢化社会とか、そういったものに変わっています。環境問題はいまだに人気がありますが、環境系ではスポーツ科学・脳科学とかいったはやり言葉が目立ちます。それから、個性を重視するのが AO 入試なのですけれども、15 年目のこの段階ですでにある程度パターン化が起こっています。当時は“私は生徒会長をやっていました”というアピールが結構多かったです。AO 入試はいろいろな多様性を受け入れるのが目的なので、あまりパターン化するのは好ましくないというのが当時からの我々の考え方です。また基礎学力が不安でした。評定平均の基準を外したので、大丈夫なのかという不安がありました。

高大連携システム構築のための基礎研究 (2001)

今後の問題点

- **面白い高校生は少ないのでは？**
  - 進路指導しすぎでは？
  - 入試合格以外のチャレンジ精神は無理か？
  - 文系、理系と分けすぎでは？
- 基礎学力の低下
- AO受験層の形成
  - 国公立、私立 → 国公立、私立、AO

KEIO 150 Design the Future

このスライドも 15 年前のものです。そのときの問題点として挙げたのが、チャレンジするような高校生が少ないのではないか。文系、理系と早い段階で分けて受験勉強することが高校生の夢をしぼめているのではないか。逆に世の中が AO 入試ばかりになってしまうと、受験層の中に AO 入試を最初から目的とする層ができて、ちゃんとじっくりと勉強するまじめな生徒に影響を与えて、全体的に学力を下げるのではないか。15 年前にこんなことを随分と懸念していたことを憶えています。

SFC

AO入試導入の経緯

1990年 湘南藤沢キャンパスに
総合政策学部・環境情報学部開設

AO入試導入へ：
SFCがめざす教育が従来の日本の大学教育の延長線上にないため新たな入試制度導入が不可欠

開設当初から入学者選抜方式の一つとして導入

次に AO 入試導入の経緯、すなわち何でこんな入試を始めたのだということを説明したいと思います。25 年前の大学教育というのはどういう教育だったかというと、知識を上から下へ伝える、先生が授業をすることによって、学生は知識レベルを上げる、これが 25 年前の多くの大学の教育だったと思います。私もだいぶ前に大学教育を受けましたが、例えば大学を卒業しても英語がしゃべれない。国際化の時代の中でいろいろな弊害があるわけです。そこで新しい教育スタイルとして、横断型の勉強であったり、アクティブラーニングや PBL が大事ではないか。そのような教育を受

けとめるのは、知識よりはモチベーションの高い生徒がふさわしい。そういう生徒を取るにはどうしたらいいか、ということで始めたのがAO入試です。ただ、さすがに入試を全部AO入試でやるというのは、教員のリソースの問題があり、面接試験等を考えると大体4分の1、25%ぐらいをAO入試で受け入れるのがよいだろうということで、先ほどの200名という数字が出てきます。

SFC Admission Policy

AO入試導入の意義：

① 入学以前の段階においてSFCが取り組もうとしている教育に必要な資質の一部を獲得した「モチベーション」や「ポテンシャル」の高い学生を積極的に受け入れていく

② 選考の過程において学生の入学以前の目標や構想を明確なものにし、動機付けを与え、「モチベーション」や「ポテンシャル」を更に高める

アドミッションポリシーがどうなっているかですけれども、まず、キャンパスをよく理解してくださいと、最初に受験生に必ず言っています。その上でもし入学したら何をやりたいか、モチベーション、ポテンシャルと言っていますけれども、そこを明確にさせています。それができるならば、先ほど言ったように学力が少しぐらい劣っていても受け入れるということです。

選考の課程としては、志望理由書を書かせて、面接をします。志望理由書では、何をやりたいか、今まで自分が何をしてきたか、そういったことがちゃんと書かれているかどうか。面接では、キャンパスに入ってからどういう学習をしたいか、どういうことをやりたいかが明確に言えるかどうか、ということがポイントですね。単に夢物語というのは一切受け付けていません。キャンパスで何かをやりたいと決めたときに、今まで何をしてきたか。そういったところを選考の基準にしています。

SFC 自己推薦

学業を含めたさまざまな活動に積極的に取り組み，その成果が次の一つ以上に該当すると自己評価できる者

- A 学術・文化・芸術・スポーツなどさまざまな分野において，研究，創作発表，コンクール，競技などの活動を通し，社会的に評価を得ている
- B 外国語能力やコンピュータ技術等の技能において優れており，高度な資格や技術を有している
- C 社会的な奉仕活動やその他の社会活動を通し，その成果や績業が認められている
- D 学業が優秀であり，創造的，積極的な学習姿勢を堅持している
- E 学業，人物ともに優れ，地域社会や高等学校等において指導的な役割を積極的に果たすなど，評価を得ている
- F 関心や興味を持ったテーマに関して自由研究や自主学習などの自発的な取り組みを開始し，成果をあげている

自己推薦の目安としてA、B、C、D、E、Fというカテゴリーを作っていますけれども、基本的には自己推薦ですから、何でもいいから自分でアピールしなさいです。最初のころは、A、B、C、D、E、Fなどとは何も書いてなかったのですね。とにかく自己推薦しなさいでした。ただ、そうすると、あまりにも漠然とした入試で、自己推薦自体が何なのかが分からないということもあり、今はこういったカテゴリーを幾つか明示しています。これに合わせる必要はまったくないのですけれども、これを参考に自己アピールをしてくださいということにしています。

SFC 選考プロセス-方式

選抜方法：5つの方式

- **A方式（標準）**
- **B方式（評定平均4.5以上）**
- **C方式（指定されたコンテストで活躍）**
- **IB方式**
- **グローバル (Admissions for Overseas Students - GIGA Program)**

先ほども述べましたように、A方式というのは昔から行われている最も標準的な自己推薦です。B方式というのは評定平均4.5以上、C方式はコンテストで活躍した人、IB方式というのは、いわゆるインターナショナル・バカロレアの資格を取っている高校生を受け付けています。これは前のA方式でも受け付けていて、過去には何人もA方式で受けています。文科省のほうからIBを積極的に進める方針が出ましたので、それに合わせて独立な方式として目立つようにしたということで

す。それから、最後の Admissions for Overseas Students というのは、今キャンパスでは英語だけしかしゃべれない学生も卒業できるようにと、英語での科目を用意しています。海外からネイティブ、あるいはずっと海外で生活している日本人で、英語で受けたいという人をこのカテゴリーで受け入れています。基本的には書類審査と面接なのですけれども、面接のために日本へ来るのはかわいそうだということで、面接の代わりにビデオアピールをする形でやっています。

SFC 選考プロセス-期間

■実施時期

	出願	1次合格発表	2次面接	2次合格発表
4月入学Ⅰ期	8月上旬	9月下旬	10月初旬	10月初旬
4月入学Ⅱ期	10月下旬	11月下旬	12月初旬	12月初旬
9月入学	6月下旬	7月中旬	7月中旬	7月中旬

※B方式は4月入学Ⅰ期のみ、C方式は1次試験免除
※グローバルは1月中旬～2月中旬に出願、3月下旬に合格発表。

AO 入試は年に 3 回やっていますね。4 月入学Ⅰ期、Ⅱ期、それから 9 月入学という形で 3 回やっています。一番志願者が多いのは 4 月入学の 1 期です。9 月入学も認めています。何回受けても構いません。落ちてしまったならば、次のときに受けることも可能ですし、浪人生で 9 月入学のところでチャレンジする人もいます。面接では先ほど言いましたポリシー、我々の考え方とマッチしているかどうかをチェックしていますが、例えば君の勉強はもう少しこうしたほうがいいのじゃないかとか、こうしたら合格するよとか、君のアピールだったらほかの大学に行ったほうがいいとか、そういう進路指導的なアドバイスもしています。このことから不合格になった学生の再チャレンジが多いです。最高でたしか 5 回チャレンジした受験生がいます。さすがにそうなるとこちらも根負けして、そのぐらい入りたいならもうそろそろいいかというぐらいになってきます。

SFC 選考プロセス-書類

■出願書類

【全方式共通】
<必須>
・志願者に関する履歴等
　氏名、写真、生年月日、住所、電話番号、性別、国籍、学歴、高校卒業後経歴、日本国外滞在・居住歴、高校在籍コース等
・志願者評価（2名分）
　二親等以内の親族を除く、志願者を客観的に知る立場の2名から、推薦書ではなく評価書として作成
・活動報告　※中学校卒業以降に取り込んだ活動やその成果等
・志望理由・入学後の学習計画・自己アピール（①文書および②自由記述）
・「調査書」等、成績・卒業に関する証明書類
・学校プロフィール（外国の教育制度による高校出身者のみ）

<任意>
・任意提出資料
　中学校卒業以降のさまざまな分野での取り組みとその成果、および大学入学後の目標や構想実現に必要な意欲や能力等をがすもの。
・国家試験等の統一試験の成績証明書（外国の教育制度による高校出身者のみ）

【C方式のみ】　対象コンテストで所定の成績を収めたことを証明する書面
【ＩＢ方式のみ】　ＩＢの成績評価証明書ないしはPredicted Grades
【グローバルのみ】　自己アピールビデオ（面接の代替の位置づけ）

（132 ページに掲載）

ちょっと細かくなりますけど、1 次審査の出願書類は活動報告と志望理由でこれを自分で書くことが大事です。ところが、今はウェブ登録して PDF ファイルで志望理由等を提出させることにしています。当然代筆は可能ですし、本人が書いたかどうかの確認はできません。それはしょうがないです。その辺は面接で確認するという形になります。活動報告では、例えば優勝したならばその賞状をちゃんと写真に撮って添付する形で証明を求めているのですが、志望理由書を自分で書いたかどうかは現在のシステムではチェックのしようがないというのが実情です。昔は手書きですけれども、手書きでもどっちみちチェックできないわけで、しょうがない。

SFC 選考プロセス-選抜

【A・B・C・IB方式】
＜1次選考（C方式は免除）＞
複数の審査員により、提出されたすべての書類を審査し、選考する。

＜2次選考＞
1次合格者に対して、複数の審査員により面接試験（約30分）を行う。

【グローバル】
複数の審査員により、提出されたすべての書類（自己アピールビデオ含む）を審査し、選考する。

SFC 選考後

■入学者へのフォローアップ体制

・自主課題研究
　入学までの期間に、興味や関心をもった事柄について自主課題（自由研究）に取り組ませ、レポートを提出させる。入学時に初期メンター（下記参照）がそのレポートを評価する。
・クラス担任／メンター
　（AO入試に限らず全ての学生に対して）入学すると学生一人ひとりに２名のクラス担任が指定され、学習・研究、学生生活についてアドバイスとサポートを行う。研究会（ゼミ）を履修すると、その担当教員がメンターとなり、同様のアドバイス、サポートを行う。

書類は複数の教員で審査し、2 次は面接になります。面接は 30 分です。Admissions for Overseas Students は自己アピールのビデオで判断します。これもなかなか難しくて、さすがに別人が映ることはないのですけれども、いろいろと周りを映していて、自分があまり映っていないビデオもあったりしてなかなか判断が難しいときがあります。撮り方をある程度指導しなきゃいけないのかなと感じています。

SFC 導入後の制度変更

- 募集定員（1991）
- 評定値基準（1991＋1999）
- 国内高校出身者の9月入学受け入れ
- 併願受付廃止（2000）
- プレゼンテーションの導入と任意化（2001+2014）
- B・C・海外出願・ＩＢ方式導入（2005～）
- 海外出願、GIGA Program導入→グローバルに一本化（2014）
- フルWebエントリーシステムの導入、要項Web化

AO 入試の基本は書類審査と面接ですが、常にいろいろな工夫が必要でした。評定平均を最初は見なかったのですね。それから 4.0 以上という基準を出願資格に入れたのですが、1999 年からまたなくしています。先ほど言いましたモチベーションとかポテンシャルのほうを成績より優先する考え方は終始一貫しているのですけれども、こちらが評定平均を見る、見ないというと、どうも受験生のほうがそれを深読みしてしまって、成績重視だとか成績軽視だとかに解釈してしまうところが非常に気になっています。出してもらった成績を高く評価する先生もいれば、モチベーションのほうが大事だという先生もいる。審査するほうも、非常に多様な先生方が多様に審査しているという状態です。

それから、9 月入学を受け入れることも工夫の 1 つです。

それから、環境情報学部と総合政策学部の AO 入試を一緒にやっていますので、昔は併願を認めていたのですけれども、ちゃんと学部を絞って受験してほしいということで、今は併願を認めていません。

それから、プレゼンテーションの導入と任意化ですね。

30 分の面接で上がってしまって自己アピールが十分にできないとかわいそうだ、ということから表現力を見るプレゼンテーションの時間を 5 分あげる制度を導入したのですね。最初のうちはなかなか皆さん頑張ってプレゼンテーションをいろいろと工夫してきたのですけれども、3～4 年たつとみんな紙芝居なのですね。志望理由書を絵に描いて紙をめくってプレゼンテーションをする。審査する先生は志望理由を読んでいますので、さすがに飽きてしまって、これはまずい、意味がないということで任意化にしました。とにかくこちらが何かをやると、必ず傾向と対策が練られるというのが AO 入試です。一種のだまし合いのような世界ですね。

フルウェブエントリー、全てウェブ上でエントリーするようにしたことも工夫の 1 つですね。

SFC 選考プロセス-期間

■実施時期

	出願	1次合格発表	2次面接	2次合格発表
4月入学Ⅰ期	8月上旬	9月下旬	10月初旬	10月初旬
4月入学Ⅱ期	10月下旬	11月下旬	12月初旬	12月初旬
9月入学	6月下旬	7月中旬	7月中旬	7月中旬

※B方式は4月入学Ⅰ期のみ、C方式は1次試験免除
※グローバルは1月中旬～2月中旬に出願、3月下旬に合格発表。

ちょっと戻りますけれども、4月 I, II 期の場合、合格が 12 月には決まるので、高校を卒業するまでにギャップタームがあります。その間に課題を課しています。入学するまでにもう一度考えを整理して、やりたいことをまとめなさい、という課題です。出されたレポートを担任の先生がチェックするという形で、モチベーションをキープし、問題意識を継続して持つようにさせています。ただ、入学した後、その学生が本当に AO 入試でアピールしたことを続けているかどうかのチェックはしていません。だから、ひょっとしたら入試だけのアピールというのもあるかもしれませんね。

SFCのAO入試の特徴

(1) SFCで学ぼうとする「意思」と「意欲」を持った人に「広く開かれた」入試

(2) 出願のプロセスにおける自己確認と自己表現の過程を重視

(3) 応募者個々の自由な創意工夫にゆだねる出願書類

(4)「欲しい学生であるか否か」の最終判断を行う面接試験

SFC の AO 入試の特徴なのですけれども、基本的には自己アピールだということです。自分で自分を表現できるか、自分のモチベーションをちゃんと表現できるかどうか、その辺を重視しています。大事なのは点数刻みの評価というのは一切行っていません。例えばこの受験生は面接で何点、書類で何点、活動歴で何点、合わせて何点だから合格とか、そういう評価基準は持っていません。

基本的には各先生方がその高校生を見て、自分のゼミの学生にしてみたいか、大学に入れてこの高校生を教育してみたいか、そういう視点でもって、本当に取りたい、まあ普通だろう、これは要らない、といった形で総合的に評価しています。個人の特性をばらばらにして、合わせて評価するのではなくて、各先生が個人全体を見て、この学生を教えたいか、この学生をゼミの学生として取りたいか、その辺を大事な基準としています。

AO入試に必要なもの

- ✓ 受け入れた学生の個性を伸ばすカリキュラム
- ✓ とくに多様な人材を受け入れるのであれば、カリキュラムや奨学制度の多様化
- ✓ AO生、AO入試に対する教員の理解

最後に、強調したいことがあります。モチベーションの高い学生を受け入れたからには、その学生を育てるのは大学の責任です。我々はカリキュラムを作り、そのカリキュラムに合った学生を取るのが入試です。SFC は多様な、横断的なカリキュラムを作っています。それに合った学生を取るための入試が SFC の AO 入試という形になっています。だから、例えば AO 入試のときに、実際の話ですけど、ある受験生が農業をやりたいとアピールしました。発想が面白いから合格。でも合格した学生は入学した途端に、畑はないですかと言ってくるわけですよ。そうしたら、キャンパスの隅を耕してごらん、とサポートする。それから、アフリカの文化を研究したいという受験生の場合、入った途端にアフリカへ行きたいと言ってくる。奨学金を出してサポートしました。要するにモチベーションの高い学生を受け入れたからには、それを伸ばすことをするのが大学の責任だと思っています。

そういった意味で、AO 入試等で個別入試を導入して、モチベーションの高い学生を受け入れる場合、入試制度やその学生に対する教職員の十分な理解が必要です。AO 生は学力が不足する場合があります。そういう学生に対しても、その個性を伸ばすという理解を持って接することが必要になるのではないかと思っています。

短い時間ですが、皆さんの何か参考になればと思っています。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会（大久保）

河添先生、どうもありがとうございました。では、続きまして、東北大学の倉元先生、よろしくお願いいたします。

(133 ページに掲載)

東北大学における入試のトータルプランニング

—AO入試成功のカギを握る一般入試個別試験の設計戦略—

東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元　直樹

○倉元准教授

河添先生に先ほどご紹介いただきましたけれども、15 年前になりますか、私どもが AO 入試を始めたばかりで、どういう方向性に足を踏み出していくのかということがまだ十分には固まってなかった時期に、・・・立命館大学の本郷先生に先ほどお目にかかりましたけれども・・・先達から学ばせていただこうということで河添先生や本郷先生をお招きしてシンポジウムをやりました。そのとき以来の再会ということになりますね。そのとき、とにかく私立大学の先行している大学のまねをしては、絶対にうまくいかないということで、東北大学は独自の道を歩んできました。そのお話をさせていただこうかと思います。

一番のコンセプトの違いは何かというと、飛び抜けた学生を取るということではなくて、普通の高校の普通の高校生がどうやって力を伸ばしてくれるのか、それをどういう形で入試と大学につなげていくのかというようなところを工夫してきたということになるのかな、と思います。

概要

- はじめに
- 教育再生実行会議と東北大学
- 東北大学型AO入試の仕組み
- 学力重視のAO入試
- 当面の方針
- 個別試験設計戦略
- 懸念材料
- 今後の展望

「はじめに」に概要の形で書かせていただきましたが、今計画されている高大接続改革というものの行方をにらみながらということも含めて、お話をさせていただこうかと思います。

はじめに（1）

- 東北大学における入試改革の経緯
  - 平成2年度
    推薦入学Ⅱ導入（工学部 [センター試験利用]）
  - 平成3年度
    推薦入試Ⅰ導入（工学部 [センター試験なし]）
  - 平成12年度
    AO入試 導入（工学部[Ⅱ・Ⅲ期]，歯学部[Ⅲ期]）
  - 平成21年度 ***全学部***にAO入試導入

東北大学における入試改革の経緯を紹介します。実は、AO 入試の導入というのはある意味で２番目のステップです。国立大学である東北大学として大きな改革であったのは、平成２年度の推薦入学の導入かと思います。推薦入試は工学部が先頭に立って行ってきたのですが、これを AO 入試に切り替えるという形で進めました。一つの特徴は、後でもお話ししますけれども、一律に全学でバッと AO をやろうという形ではなくて、準備が整ったというか、「AO が良い」と思った学部から順番に導入していって、結果的に、今、全学部がそろったという形になっているというところかと思います。

はじめに（1）

- 東北大学における入試改革の経緯
  - 平成2年度
    推薦入学Ⅱ導入（工学部 [センター試験利用]）
  - 平成3年度
    推薦入試Ⅰ導入（工学部 [センター試験なし]）
  - 平成12年度
    AO入試 導入（工学部[Ⅱ・Ⅲ期]，歯学部[Ⅲ期]）
  - 平成21年度 ***全学部***にAO入試導入

我々としては、早期から積極的に入試改革に取り組んできた大学であるという自負があるのですが、中教審の高大接続答申を受けて、「歓迎」ということは全くなくて、非常に困っています。今回、シンポジウムで一つ目的があるとすれば、私どもがあたかも今の改革の流れを主導してきたかのように思われる誤解だけは解いておこうということでしょうか。

教育再生実行会議と東北大学（1）

- 教育再生実行会議
  - 第2次安倍内閣における教育提言を行うために首相官邸に設けられた***私的諮問機関***
  - 第4次提言「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」
    （平成25年10月31日）

→ 中教審高大接続答申に***多大な影響***

と、申しますのは、この答申に大きな影響を与えた教育再生実行会議の第４次提言に際し、・・・一昨年の 10 月に出たものですが・・・私どもも慶応大学と同じように視察を受けました。

教育再生実行会議と東北大学（2）

- 大学入学者選抜を
  - 目的：***能力・意欲・適性***を***多面的・総合的***に評価・判定するものに転換
  - 方法：達成度テスト（仮称）「***基礎レベル***」，「***発展レベル***」

→ 中教審答申では（仮称）「***高等学校基礎学力テスト***」，「***大学入学希望者学力評価テスト***」

そこで非常に高い評価をしていただいたのですが、結局、その提言の中身というのは、目的として「能力、意欲、適性」を「多面的、総合的に判定するものに転換する」、その方法として「達成度テスト（基礎レベル、発展レベル）」というものを入れていくということでした。目的で挙げられている、「学力だけでは十分ではないよね」という見解は、30 年前から言われていることで、それにはある程度の部分、忠実に従ってきたところはあるんですが、その方法としてこの二つのテストを入れるというのは、どうしても理解できなかった。それが中教審答申では、基礎レベルが「高等学校基礎学力テスト」になり、発展レベルが「大学進学希望者学力評価テスト」になり、ということで、名前は変わっているんですけれども。まだよく分からない。

教育再生実行会議と東北大学（3）

- 平成25年8月1日視察
- 同10月31日提言発表
- 翌11月1日朝日新聞の記事
- ***人物本位の選抜***の参考として報道された

教育再生実行会議の提言が発表された次の日に、東北大学の入試は朝日新聞で取り上げていただきました。どんなふうに取り上げられたかというと、「新たな入試制度がイメージする人物本位の選抜とはどのようなものかと、教育再生実行会議が参考にしたのは東北大の AO 入試」だと。「募集人員の約 2 割、420 人の枠に 2～3 倍の受験生が集まる」というような形で報道していただいたのです。ところが、私どもは「人物本位の選抜」ということをやっているつもりは毛頭ないわけです。

教育再生実行会議と東北大学（4）

- 教育再生実行会議にご理解いただけなかったこと
  - 東北大学のAO入試は***学力重視***
    ← ***一般入試***の存在が前提
  - ***第一志望受験生***のための特別な機会
    ← ***人物本位の選抜***なのか？

教育再生実行会議に全く理解いただけていないことがあると思っています。それは、大久保先生にご紹介いただきましたように、東北大学の AO 入試は「学力重視」であるということです。これはどういうことかというと、東北大学の AO 入試は一般入試の存在が前提なのです。つまり、AO 入試がどういう位置づけになっているかというと、東北大学を「第 1 志望」とする受験生であれば、その人たちだけのための「特別な機会」を設けます、ということなのです。これは、私どものアドミッションポリシーに沿った学生を獲得したい、ということではありますけれども、あくまでも大事なのは「学力」です。「人物重視」というような看板を掲げているつもりはないのです。

そこで、次に、若干お時間をいただいて、東北大学の AO 入試の仕組みを説明させていただきます。お手元に大学案内、・・・これは、実はこの講演の資料としてお配りしようということでご準備いただいたんですが、意図がうまく通じなかったようです。取り置き資料になっていましたので、お持ちではない方もいらっしゃるかもしれません・・・48 ページ以降が入試にかかわるページです。時間が短いので十分にお話しできない部分は、その辺をご参照いただければと思います。

東北大学型AO入試の仕組み（1）

- ***大規模***：募集人員438名，全体の***約18%***
- 共通要素は***面接***，***志願理由書***
  - 多くの教員が関与 → 学生への関心
  - 受験生が***進路を考える***機会の提供
- AO入試のレベルの高さ
  - 多くの不合格者が一般入試で再挑戦
    ← ***一般入試前期日程個別試験***への準備が前提

まず、規模の大きさですね、これが一つの大きな特徴かなと思います。募集人員全体の約 18%、現在 438 名を AO 入試に割いています。共通要素は、・・・実はここは慶応大学のお話と同じなんですけれども・・・面接と志願理由書は必ず課します。面接には極めて多くの教員が関与します。ですから、面接は凝ったことはしません。特に慶応と違うのは、人によって評価基準が違うと不公平になるから「評価基準は合わせてください」とお願いしているところです。

それから、先生方が訓練を受ける時間はないので、ちょっと打ち合わせをしてぶっつけ本番、みたいなのが普通の感じなんですけれども、逆に言

えば、面接で合否が決まるわけじゃないから、打合せで話をさせていただくときには「そこは気楽に臨んでください」というようなことを言います。自分のところに来る学生を選ぶということに関して言えば、「大変だけれども、やってみるとおもしろいな」という感想をお持ちになる先生が多くて、それが、結果的に学生教育に対する FD のような効果になっているのかな、という感じがします。ざっと数えて年間 1,000 人ですか、受験生を面接することになります。そこに関与する先生方は非常に多くて、多くは毎年替わっていく、あるいは、２年ぐらい務めて替わっていくわけです。何年も続けていきますと、「自分のところに来る学生だから」ということで入試に関心を持ってもらえる先生が少しずつ増えていきます。

もう一つは、志願理由書、面接を付けることによって、受験生が自らの進路を考えるという機会を提供するということができているのではないかと感じています。只管、受験勉強をして、それで進学した先が点数で行ける大学であったということでも悪くはない、と個人的には思っているんですけれども、それ以上のことを考えてもらえる機会になっているのだと思います。

成功の一番の鍵は、「AO 入試のほうが一般入試より難しい」ということです。第１志望ですから、多くの不合格者が一般入試で再挑戦してきます。したがって、実は、AO 入試を受ける学生というのは必ず一般入試の前期日程試験、個別試験の準備をしています。これが前提となっている仕組みです。

東北大学型AO入試の仕組み（2）

- 選抜方法に含まれる***アカデミックな要素***
  - AOⅡ期では小論文，適性試験等
  - AOⅢ期では大学入試センター試験
- 第1志望の受験生を作る努力
  - 特色ある***オープンキャンパス***
  - ***広報に熱心な大学*** 第1位

それから、選抜方法には、・・・ここは細かくはお話しできないところなんですけれども・・・必ずアカデミックな要素が含まれます。52 ページにざっとごらんいただけるような表が載っています。

東北大学型AO入試の仕組み（3）

選抜区分	センター試験	選抜時期	現役限定 赤字は募集人員	浪人も受験可 赤字は募集人員
AO入試 Ⅱ期	不要	11月	文・理・工・農 10・44・104・15	―
AO入試 Ⅲ期	要	2月	教・法・医・歯 10・20・15・10	経・保・薬 40・25・15 工・農 115・15

東北大学では AOⅡ期とⅢ期という区分があります。Ⅱ期はセンター試験を使わない区分。これは独自に小論文、適性試験等を課します。それまで学んできたことで、研究の基礎となるようなアカデミックな要素を含む試験をやる。ここでがっちり見ていますので、面接の信頼性が学力試験ほどのものではなくても、全体としては大丈夫です。さらにⅢ期では大学入試センター試験を課します。それ以外にいろいろな選抜試験を課している学部もありますけれども、それは学部次第です。

もう一つ、「第 1 志望の受験生を作る努力」というのはかなりやっております。基本的には広報という言葉で表されるのですが。最後のページですね、88、89 ページをご覧ください。これはオープンキャンパスの様子です。東北大学のオープンキャンパスは極めて特色がありまして、昨年だと「大学ランキング」という朝日新聞出版で出している本で、全国で 3 番目です。名だたる私立大学に混じって 3 番目の規模が東北大学という妙なことになっています。さらに、「広報に熱心な大学ランキング」という項目があるのですが、ごめんなさい、私どもの 100 倍広報費を使っていると噂されていて、絶対に抜けないと思っていた立命館大学をついに抜いてしまいまして、第 1 位となりました。これは不思議な現象です。要は、高校側から見ると「見えることをやっている」と捉えていただけているのかなと思います。

東北大学型AO入試の仕組み（4）

学部	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
文学部										Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
教育学部									Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法学部				Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
経済学部							Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
理学部		Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
医（医）								Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
医（保健）									Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
歯学部	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
薬学部									Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
工学部	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ
農学部								Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ

（133 ページに掲載）

現在、それぞれの学部がそれぞれの考え方でAO 入試に加わっていますが、Ⅱ期、Ⅲ期のどこかに店を開いているという形です。歴史的に見ますと、まず最初に導入したのは歯学部、工学部なのですが、これを見ていて、「良い学生が取れるのかな？」というような判断で、理学部や法学部がぱらぱらと参入しました。経済学部の参加までが「発展期」かなと思います。この後、さらにばたばたと全ての学部が参入してくるんですけれども、これは後期日程廃止がきっかけです。国立大学協会の方針として、「分離分割方式の一部に AO や推薦のような特別選抜を入れても構わない」という通達が出されました。その際、先行している学部の動向を見ていた残りの学部が、正直、後期日程で点数は高いのだけれどもモチベーションが上がらない学生を取るよりも、AO 入試でとにかく「入りたい」と思って勉強してくる学生を取った方が良いだろう、という判断をしたということになります。

東北大学型AO入試の仕組み（5）

- 東北大学の入試改革に関する考え方
  - 改革理念を先取りした***先進的な入試改革***を行う
  - 急激な変化による受験生への悪影響を回避する***漸進的，かつ，不断の改革***
  - ***理念・方針は全学で共有***，改革時期・方法は***各学部の状況に応じた多様性***を確保

以上のように、東北大学は入試改革を進めてきたつもりです。当初から、改革の理念を先取りした先進的な入試改革を行うということを考えたつもりだったのですが。「入試改革」というのは何かと言うと、急激な変化を行って、バッと耳目を引いて、アピールをしてということではない。少しずつ、少しずつ、少しずつ、できるところを広げていくことです。理念や方針は全学で共有しているけれども、時期や方法は、ある程度の範囲の中で様々です。つまり、「東北大学の AO 入試」というパッケージの中での多様性を確保するようなやり方をしてきたと思います。

東北大学型AO入試の仕組み（5）

- 根底にある発想
  - 受験勉強を含む現在の***高校教育への支援***
  - 入試を通じて受験生を育てる
    ← これ以上，どのように転換？？？
- 現在，地方で行われている***高校教育が成立しなくなる***と***東北大学の入試は機能不全***に陥る

根底にある発想としては、正直、受験勉強も含めて、現在の高校教育への支援をする。入試を通じて受験生を育てる。昨日のセミナーでもあったのですが、高校教育に対して答申は全く理解がないと思います。ここ 20 年、30 年、高校教育はものすごく変わっていますし、点数だけ、受験だけを目標にして高校教育がなされているわけではない。そのことは、高校と接している者、それから、もちろん、高校の先生方はよく分かっている。これだけ努力をしながら転換してきたのに、さらに転換しろと言われても、「何をどうすればいいんだ？？？」という話になるんですね。私どもの入試、特に東北大学が地方の公立高校の出身者が多いという特徴もありまして、地方で行われている高校教育が成立しなくなると、東北大学の入試が機能不全に陥る、という構造になっています。そういう意味で、極めて強い危機感を、今、抱いているところです。

学力重視のAO入試（1）

- AO入試とは何か？
  各大学による***自由設計入試***
  東北大学型は***他大学と違ったコンセプト***
- 東北大学のAO入試の特徴
  1. 規模：選抜方法ではなく，***コンセプトに特色***
  2. ***一般入試と求める学生像に違いはない***
     → 高校教育のマネジメント，選抜のリスク管理

AO 入試とは何か。AO 入試というのは、最終的には各大学のアドミッションポリシーに沿った、自由設計による入試です。東北大学型は、・・・おそらく他大学と相当違ったコンセプトになっていると思う点は・・・一つは規模です。もう一つ、「求める学生像」について一般入試と AO 入試で違いを設けておりません。これについては先ほどの慶応とは考え方が全く違います。一般入試だろうが、AO 入試だろうが、大学に入ってからやることは一緒です。また、特別な扱いはしません。「入学時に必要なものは同じだよ、それは学力だよ」という話です。

もう一つ、受験生から見ると、十分にリスク管理ができます。AO に賭けようとしても、その後、一般入試で全然違うことを求められるのだったら、怖くて志願できないわけです。しかし、落ちても、

力があればまた一般入試で入れるチャンスがあるということであれば、どんどんチャレンジしていただいて構わないし、選ぶ側も、万が一、選び間違ったとしても、一般入試という次の機会で入ってきてくれれば、それはそれでいいわけですから。そこは、他大学の制度とは違うかな、と思います。AO 入試が最後の受験機会だと、ちょっとまた違ってくるとは思うのですけれども、そういう考え方です。

学力重視のAO入試（2）

- 東北大学型AO入試の共通部分
  1. 求める学生像：学力＋***意欲（第1志望）***
     学力：選抜資料にアカデミックな要素を含む
     意欲：面接を実施する
  2. ***第1志望の受験者***のための特別な機会
     → 一般入試受験までを視野に
  3. 書類だけの選抜はなるべく避ける
  4. ***高校教員の負担は最小限に***

もう一度まとめますと、「求める学生像」として、まずは高い学力を求めます。これは研究の基礎ということです。それは一般入試も同じです。それプラス、どうしても東北大学で、・・・勘違いでもいいから・・・やりたいことがあるというのなら、その人たちのためだけの特別な枠を設けますよ、ということです。繰り返しになりますけれども、AO 入試の志願者には一般入試までを視野に入れて受験をしてきてもらっています。これは、実はチェックしています。合格のレベルに達するような受験生が、一般入試も東北大学に出願してきているかどうかというのが、一つの指標です。そこは問題ないということです。

もう一つ、書類による選抜は、受ける側からしたら非常な不公平を感じます。ですので、書類だけの選抜はなるべく避ける。とりあえず「不合格」と言うなら、「実力を見てから」にしようという方針です。

AO 入試は高校側にも大きな負担をかける制度ですが、その負担は最小限に抑えています。高校から提出していただく書類は、本当に A4 判 1 枚の表側半分ぐらいの感じにしています。さらに、指摘されてしまったので、正直に言いますけれども、受験生自身が書くものも含めて書類はホームページにアップロードされていて、場合によってはそこにワープロで打ち込んでも構わないのです。要は、正直、誰が書いたか分からない。逆に言えば、書類はその程度の扱いです。ただ、それでも多くの受験生はまじめに考えてくれるので、その教育効果が大きいと思っています。全てを評価する必要はないだろう、ということです。

学力重視のAO入試（3）

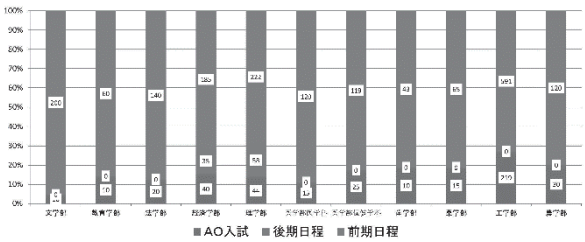
- ***第1志望受験生のための特別な機会***
  - 東北大学のAO入試で求められるもの
    学力 ＋ ***強い意欲***（第1志望）
- AO入試は***一般入試よりも難しい***
  - 一般入試再挑戦合格者が200名以上！
  - AO入試合格者は入学後の成績も良い
    ← 学力が同等なら，やる気の勝負

一般入試よりも難しいということが、AO 入試の成果を支えています。大学案内でもそのことを宣伝していまして、50 ページにも書いてあります。（135-136 ページに掲載）学力的に同等かちょっと上ぐらいでやる気があるのだったら入学後の成績も良い、というようなことで、うまく回ってきた、というのが今までの話です。

当面の方針（1）

（134 ページに掲載）

平成27年度入試における学部ごとの募集人員比率



私自身は、この構造を保つために、AO 入試はできれば定員を削減してほしい、これ以上増やしたくない、ということをずっと主張してきたのです。現在の募集人員の比率を学部ごとに見ますと、こんな感じです。一番熱心な工学部で 27%ぐらいですかね。後期日程が少し残っていて、8 割が一般入試で、残りが AO というところで何とかいいバランスだったのですが、これを崩さざるを得ないかな、という現状です。

当面の方針（2）

- 当面の方針:
  - 数年でAO入試の比率を***30％程度に拡大***
- 工程表
  - 平成28年度：合格実績を募集人員に反映等
  - 平成29年度：可能な学部から***募集人員拡大***
  - 平成30年度以降：新規の区分で***新たなAO入試導入***等

ここ数年で「AO 入試の比率を 3 割程度に拡大する」というのが執行部からの方針です。ひとつは、中教審答申の理念に沿っていくという改革をしなきゃいけないということで、その中で私どもができることといえば、今まで続けてきた、少しずつ拡大してきた AO 入試を、・・・これが限界ですね・・・限界のところまで持っていくというぐらいかなと。

平成 28 年度は、すぐ前の年度に合格実績を見ながら、「募集人員以上を取っていたところはその分を募集人員に加えてください、それ以上頑張れるところはもうちょっと上げてください」というようなことで各学部にお願いをしています。平成 29 年度は、多分、可能な学部、いろいろチェックしながら、「もう少し増やしてもいいかな？」というところが加わってくると思います。平成 30 年度以降は、今までⅡ期かⅢ期かどちらかというのがほとんどの学部だったんですけれども、募集人員だけ拡大していくのは難しいだろうということで、新たな区分の導入が始まる可能性があると思っています。うまくいけば、ですね。

当面の方針（3）

- 目的
  - 中教審答申の理念に沿う現実的入試改革の継続
  - 漸進的改革による激変の緩和
- 課題
  - 各学部の実施体制の整備
  - 急激な拡大による構造変化の回避
  - 丁寧，かつ，広範な入試広報活動の展開

本当に３割まで持っていけるかどうかは問題なんですが、まずとにかく中教審答申がああいう形で出てしまって、・・・理念に対して反対する人はいないと思うんですけれども・・・方法に対しては大いに疑問があります。その中で、とにかく現実的に取れる方法で改革を継続していこうという方針です。

また、一番受験生にとって迷惑だなと思うのは、ある年の受験生から前の年の受験生と全く違うものが求められることです。それを何とか緩和したいということがあります。先が、正直、見えないので何とも言えないんですけれども、とにかくこの方針に従って、今はそれぞれの学部の実施体制の整備ですね。簡単に 18%から 30%と言いますけれども、それは様々なところを見て、調整しながら整備していかなきゃいけないことになると思います。

一番怖いのは、一気に拡大することによって、AO 入試と一般入試のバランスが崩れることです。「AO 入試の方が易しい」となった時点で、一気に崩れる可能性がある。これは非常に怖いことです。他大学にもこれから AO 入試を始められるところがあります。私どもと似たような大学、と言うと失礼にあたるかもしれないんですけれども、京都大学や大阪大学、東京大学といったところでも、それぞれの特色入試であったり推薦入試ということを始められますので、高校側もそれを視野に入れざるを得ないでしょう。それも含めて、私どもの入試がいかに高校に負荷をかけない形で展開してきたかを理解していただくことによって、何とか危機を回避したいと考えているところであります。

個別試験設計戦略

- 個別試験設計戦略
  - ***作題体制の強化***
- 二つの目的
  - 一般入試個別試験の体制整備による***良質な入試問題の供給体制***のテコ入れ
  - ***AO入試の全学体制化***の促進
- ***作題能力向上***がH32年度以降成功の鍵

今後、結局、作題体制を強化するというのが AO 入試拡大にとって一番大事なことかなと思っています。ちょっと奇異に感じられるかもしれませんが。実は、何かというと、AOⅡ期ですね。センターを使っていない区分は、自分たちで自分たちの学生にふさわしい問題を作れるところはいいのですが、各学部にお任せにしてきたので、それができないところは参入できないんですね。ということで、AO 入試の全学体制化ということを執行

部にもお願いをして、話し合っていこうと考えています。それは、とにかく良質な入試問題を供給することが肝心ですから。

実は、午前中の議論を聞いていましても、新しいテストは私どもの大学では実質的に使えない可能性もあるかなと思っています。今のままだと。もしも、今のセンター試験より前の時期に試験をすることになると、高校教育のスケジュール、今やっておられることを破壊します。そういったテストを使うということになると、せっかく豊かな生活を送っている高校生が、受験勉強一色の高校生活を送ることになる。この片棒担ぎだけは避けたいと思います。そうすると、最終的には、もしかすると共通１次以前のように、自分たちで少なくとも知識の活用力のところまでを賄う覚悟でいないとだめかな、というようなことも考えています。AO 入試拡大は、実は、その備えの第一歩になってくる可能性もあると思います。とりあえず最悪のシナリオから考えると、そういうこともあり得ると思うのです。

懸念材料

- 大学入試にとって，***制度の変更***はどんなに大きな自然災害よりも***甚大な影響***を及ぼす
- 崇高な理念の下の改革でも，細部にわたる***詳細な検討***がなければ，***思わぬ結果***を導く
- 急激な改変は***格差を広げる***
- 今回は前例にないドラスティックな改革

懸念材料です。今、進んでいる入試改革、入試の制度変更というのは、実は私どもは東日本大震災で被害を受けたわけですけれども、それよりもずっと大きな影響を及ぼします。入試に対しては。いかに崇高な理念の下での改革でも、細かいところまで詳細な検討をしてケアしていかないと、多分、想定外の結果を招いてしまいます。さらに、急激な改変は確実に格差を広げるということが分かっています。今回は、おそらく前例にないドラスティックな改革が企図されているということで、このショックだけは何とかして避けなければならないと考えています。

今後の展望

- 現時点で具体的な展望を描くのは難しい
- 個別大学としてこれまでの***入試改革への姿勢***は継続する
- ただし，***高校教育を破壊***するものであってはならない
- 高校，大学関係者をはじめ，様々なお立場の皆様から***お知恵を授かりたい***

現時点で先の展望を描くのは非常に難しいのですけれども、個別大学としてはこれまでの入試改革の姿勢を継続していくしかないと考えています。ただ、それが高校教育を破壊するものであってはならないということで、今後、どう進めていくべきかということについて、高校、大学関係者をはじめさまざまなお立場の方からお知恵を授かりたいなと思っております。今日がそういう機会であるとありがたいと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会（大久保）

倉元先生、どうもありがとうございました。では、続きまして、九州大学の林先生、よろしくお願いいたします。

（136 ページに掲載）

KYUSHU UNIVERSITY 100th 2011
知の新世紀を拓く
入研協 企画討論会②（25分）
05/28/15 @東京電機大学(東京)

思考力・表現力・協働性の評価を目指して
――九州大学21世紀プログラムの場合――

林 篤裕
（九州大学 基幹教育院
& アドミッションセンター）
（21世紀プログラム主導教員）
e-mail: hayashi@artsci.kyushu-u.ac.jp

○林教授

こんにちは。九州大学の林でございます。私は壇の上を移動しながらしゃべるものですから、ピンマイクを用意していただきました。

前のお二人のご講演を拝聴しておりますと、非常に示唆に富んでおりまして、私がその上で何を申し上げれば良いかと悩むのではあるのですけれども、今回はこういうタイトルにしました。今日の午前中のお話ですと、山内先生から表現力なんていうものはそんな短時間に測れるものではない

んだというお話がありましたが……、山内先生はいらっしゃるんですかね、もうお帰りになられたのかもしれませんが。

参考資料

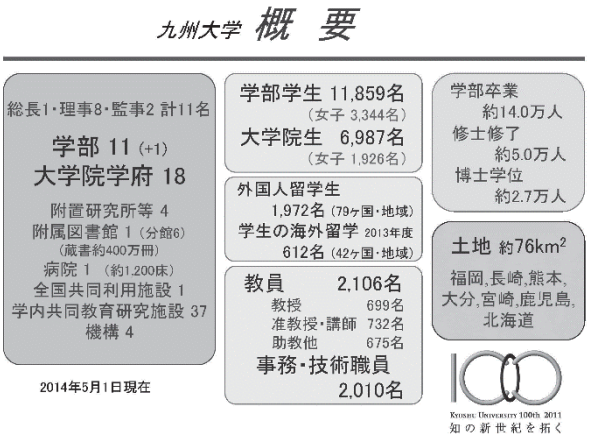
●中央教育審議会 高大接続特別部会 (第7回), 三田共用会議所(東京), 平成25年5月24日。
●「高大接続特別部会△第7回△議事録」で検索すると、「第7回」のところに議事録と配付資料へのリンクあり(5月20日時点では)。
●www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/giji_list/

文部科学省 教育課程課 編集
●『中等教育資料』平成27年5月号, PP20-25, 特集 高等学校教育と大学教育の円滑な接続,
実践研究
「思考力・判断力の評価に重点を置いた選抜試験 ～九州大学21世紀プログラムを例に～」。

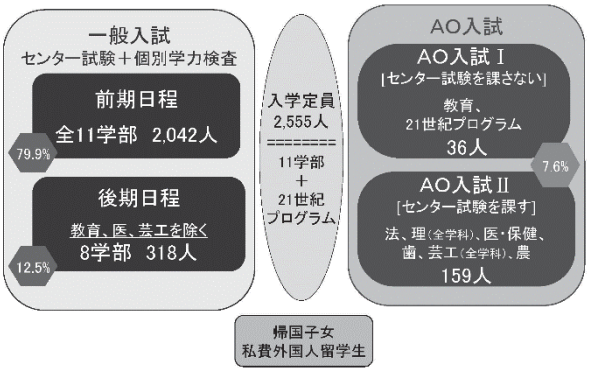
実は、この話は以前にも何回かさせていただいたことがございます。2 年ぐらい前の中教審の高大接続特別部会でも紹介させていただきました。先ほど調べましたら、この URL はまだ生きておりましたが、URL の入力が面倒であれば「高大接続特別部会　第 7 回　議事録」で検索していただいても URL が出て参ります。それと、最近であればこの 5 月に、今日は公開でございますので、高校の先生方はこの雑誌をよく読まれていると聞いておりますが、「中等教育資料 5 月号」の中の 20 ページから 25 ページにも書かせていただいております。ですから、これらでご紹介していることを 25 分でしゃべるんだというのが今日の私の役割ということになっておる次第です。

それと、予告でございますが、つい 2 週間ぐらい前に北海道でも紹介させていただけることになりましたので、北海道の方は 8 月の末に札幌の方に来ていただければ、また私に会えると、会いたいかどうかは別でございますが、ということにはなっております。

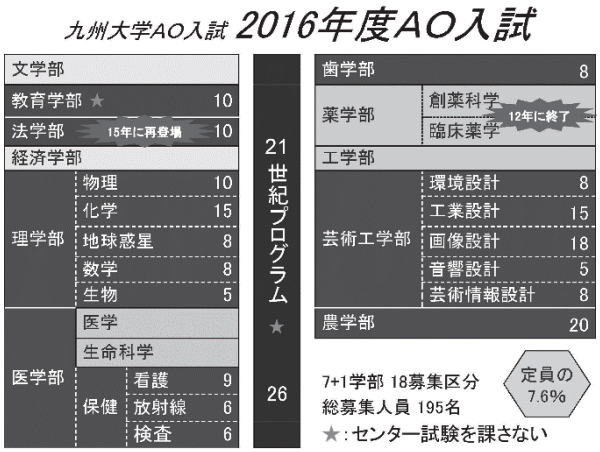
それで、まず九州大学を最初にご紹介しないといけないというふうに思っています。九州大学は、1911 年に設立されましたので、今年で 104 年目でございますか。それで、古い大学からすると 4 番目に設立された大学ということになります。昨日北千住の駅からこちらに向かっておりましたら、大発見がございました。皆さんはこの建物の上の方をご覧になったかどうか判りませんが、今回お世話になっている東京電機大学と東北大学はいずれも同じ年に設立されておりまして、河添先生の慶應義塾大学を含めるとこの 4 つの中では一番若い大学が九州大学だということになろうかと思います。



九州大学でございますが、学部が 11、学部生が 12,000 人、それから我々のような教員が 2,100 人いる大学でございます。定員が 2,555 名で、比較しますと東大の 8 割、京大の 9 割ぐらいのサイズということになります。あと、東京電機大学の 1.3 倍ですね、慶応はさすがに大きくて、慶応の 4 割ぐらいしかございませんが、東北大は大体一緒ぐらいのサイズの大学ということになっています。

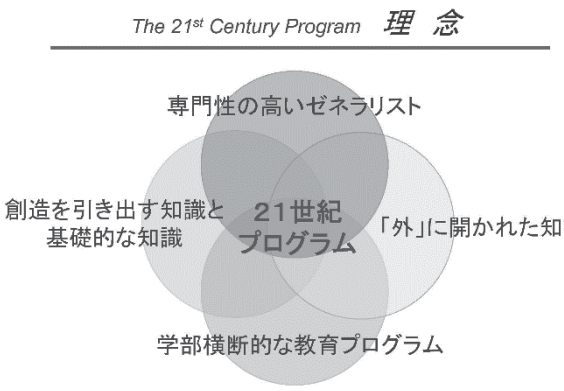


入試はどうなっているかというと、一般入試というもので92%ぐらいを取っていて、AO入試で7.6%を取っているというふうな規模の大学になっています。

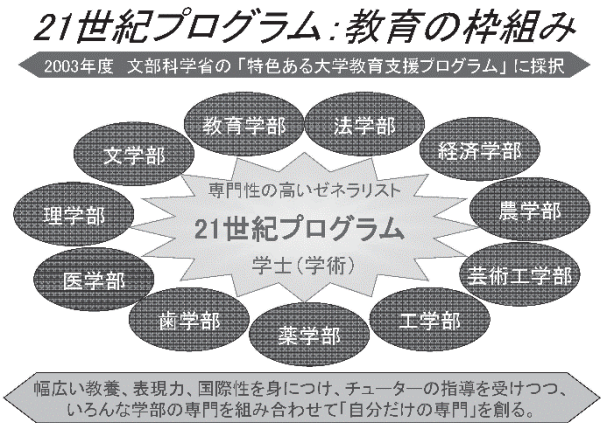


AO入試の中をもう少し細かく見て参りますと、東北大学とは全く逆でありまして、ちまちまというと言葉が悪いですが、小さな単位で195名、7.6%をAO入試で募集しているということになっております。

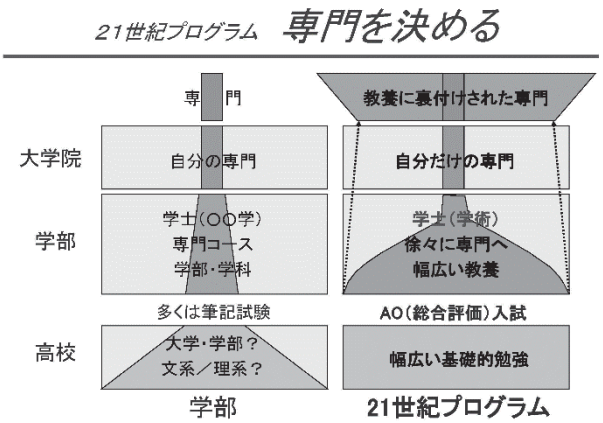
今日話題にさせていただくのは21世紀プログラムということで、26名、全入学定員の割合からするとほぼ1%、その入試をどうしているかということが今日皆さんのご関心事で、多少は参考にしていただけるのかもしれないというふうに思っている次第です。



入試の前に、まず21世紀プログラム、ひょっとすると2プロという風に略しているかもしれませんが、2プロの理念というものを最初にご紹介したいと思います。「専門性の高いジェネラリスト」というのが一番のキーコンセプトになっておりまして、それを支える3つの概念があって、全体として21世紀プログラムということになっております。



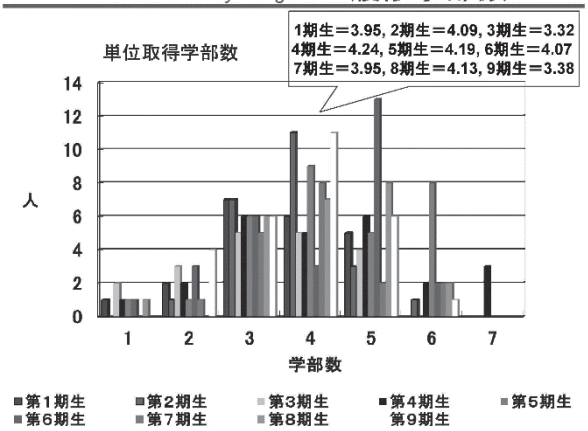
我々のところには、先ほどお示ししましたように11の学部があるわけですけれども、文系と言われている4学部、理系と言われている7学部、どの学部で履修した単位も卒業要件にしますよと。ある程度の条件はありますけど、ここに所属の学生は11の学部を自分の興味・関心に応じて履修に行くということになっています。



多くの大学生の場合は、高校3年生までに専門を決めて、それに基づいて大学に進学してくるわけですけれど、21世紀プログラムの学生は自分がやりたいことを最初の3年間は九大の中の11の学部で自由に履修してもらって、お椀の糸尻のようになっていますけれども、あそこが最後の1年でありまして、最後の1年間だけは自分の卒論を書くためにテーマを決めて、1人の先生に付いて卒論を書いてもらおうということになっています。ですから、多くの大学生の場合は高校3年生で専門が決まるのですが、2プロの学生の場合は学部の3年が終わった段階で専門が決まるということで、多くの学生よりも専門を決定する時期が3年間後ろになっていますから、大学院にも行って専門性を高めてほしいというふうに彼らには申し上げています。後で実績が出て参りますけれども、このような教育を行っているコースでございます。

（136 ページに掲載）

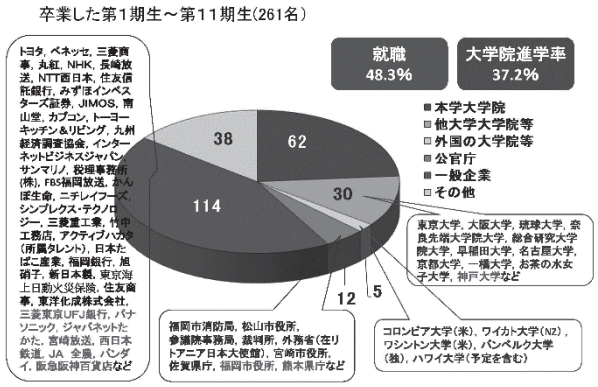
The 21st Century Program　**履修学部数**



学生がどのぐらいの学部で履修して卒業して行ったかというと、1 学部だけしか履修していない者、7 学部も履修した者等々がおりますけれども、大体平均すると 4 前後ですか、3、4、5 学部を履修して卒業して行っている者が多いということになっております。

（137 ページに掲載）

The 21st Century Program　**卒業生の進路**



卒業生は、先ほど大学院にも行ってねということを言っていると申し上げましたが、現時点で卒業している 261 名を見ますと、暖色系の色が大学院進学で全体の 4 割弱と。真っ赤っ赤(62 名)なのが九大の大学院、黄土色(30 名)なのが国内の皆さんのところの大学院のどこかに入れていただいている、また黄色(5 名)は国外、地球上のどこかの大学院に行っているということになっています。寒色系(12 名+114 名)で示した 5 割弱がどこかに就職をしているというのが卒業生の履歴ということになります。

The 21st Century Program　**課程現況**

	入学期	募集	合格者
卒業	1期	18	20 (5)
	2期		22 (6)
	3期	21	19 (5)
	4期	26	25 (5)
	5期		30 (12)
	6期		27 (7)
	7期		27 (9)
	8期		27 (10)
	9期		28 (7)
	10期		27 (6)
	11期		25(8)
在学	12期		28(10)
	13期		25 (9)
	14期		25 (5)
	15期		25 (7)
総計			380(111)
在学生数	103 (31)		

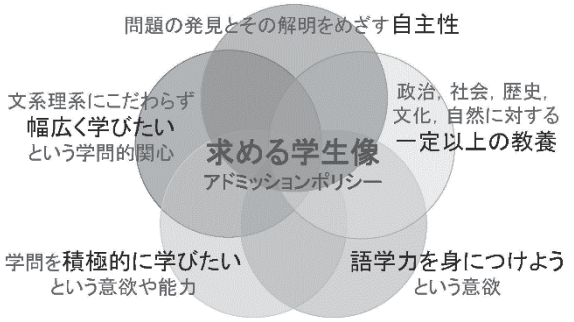
年度	入学者	転編程学部	交換留学	語学研修等	卒業者	うち大学院進学者
2001	20 (5)	1 (0)				
2002	22 (6)	2 (1)	7			
2003	19 (5)	0 (0)	8	20		
2004	25 (5)	1(1)	5	8	16	11
2005	30 (12)	1 (0)	2	4	25	12
2006	26 (7)	2 (1)	10	5	15	9
2007	26 (8)	2 (1)	10	2	20	9
2008	27 (10)	2 (1)	6	4	33	13
2009	27 (7)	1 (0)	9	4	28	7
2010	27(6)	1 (0)	10	6	19	9
2011	25(8)	0(0)	7	8	27	8
2012	28(10)	0(0)	6	17	30	11
2013	25 (9)	1(0)	13	10	24	4
2014	25 (5)	0(0)	9	18	24	4
2015	24 (7)	0(0)				
	376(110)	14 (6)	102	106	261	97

（カッコは男子で内数。2015/4/1現在）

これはご紹介という意味で、1 期生から順番に何人入ってきて、どういうふうな交換留学等をやって卒業していったかというふうなものをまとめたものですので、必要に応じてご覧いただければと思います。

【学生募集要項 P2】

The 21st Century Program　**求める学生像**



ここからが多分皆さんの今日のメインのお話だと思うのですが、我々のところで求める学生像というのはこのような 5 つのコンセプトを挙げております。自主性だとか、広く学びたいだとか、積極的に学びたいとか、語学を身につけようという意欲があるんだとか、当然一定以上の勉強をしてくることというふうなことを挙げてございます。これも募集要項に当然うたってあります。

The 21st Century Program　**選抜の流れ**

願書受付	9月下旬	9/22(月)～26(金)
	調査書，志望理由書，活動歴報告書	
第1次選抜	10月中旬　書類審査	10/17(金) 1次合格発表
第2次選抜	11月上旬	
第1日目	講義・レポート（3テーマ）	11/1(土)
第2日目	グループ討論，小論文，個人面接	11/2(日)
合格発表	11月下旬	11/25(火)　2次合格発表

選抜の過程が入学後の修学の過程

（日程は2015年度のもの）

試験日程でございますが、AO 入試でございますので 9 月の下旬に、この日程は今の 1 年生の日程でありますが、今の高 3 生対象の日程はまだ公開されていませんので、今の大学 1 年生の、要するに去年実施した日程が載っておりますけれど、9 月の下旬、あのぐらいの期間に募集をして、去年は 99 名が志願して参りました。書類選考をして、10 月の中旬に第 1 次合格発表をし、昨年は 73 名を合格にいたしました。11 月の初旬に 2 日間にわたる試験をすると。これは後ほど詳細を申し上げますので、ここでは述べませんが、そして、11 月の下旬に合格発表をするというふうな試験をさせていただいております。

第1次選抜

- ◆出願時提出資料
  - ◆志望理由書(2面)
    - ●志望する理由、自己の適性や抱負
  - ◆調査書等(内申書)
  - ◆活動歴報告書(2面): 中学からの活動を記載可
    - ●各種活動、表彰、資格等
- ◆書類審査
  - ◆「AP」や「求める学生像」との合致度合を評価
    - ●理念の理解度等
  - ◆試験場施設の関係から3倍程度に絞る
    (2015年度の例では73名。2.8倍)

まず最初に、第 1 次選抜の書類選考でございますが、これは先ほどから誰が書いたか分からないとかいう話も出ておりましたが、志望理由書に、何で 2 プロに来たいのか、大学に入って何がしたいのか、そういうことを 2 面、文字のサイズは問いませんが、罫線が入っていますけど、2 面で書いてもらうということになっています。また、調査書は高校から出てくるもの自身であります。それから、活動歴報告、これも中学校以来どの様な活動をしていたかを書いてもらう。例えば先ほどもありましたけれども、生徒会をやっていたとか、海外に行っていたとか、何とかコンクールで 1 位を取ったとか、そういうふうなことの事実を書いていただければ良いわけで、なければないと書いていただいて結構だと思っています。

我々が受け取った後の評価の仕方は後ほど申し上げますけれど、受け取った方としては、AP や先ほどご紹介したような求める学生像と照らし合わせて合致しているかどうかということを審査いたします。ですから、例えば F1 のエンジンが作りたいということであれば、それは工学部に行ってくださいということになりますし、薬剤師の資格が取りたいということであれば、それは薬学部ですし、21 世紀プログラムでは資格が取れません。薬学部の講義だけを集中的に受講したとしても薬剤師の資格は取れませんので、そういうご希望があるのであれば、それはもうそちらに行っていただくしかないわけで、内申書の成績云々以前に、あなたは何がしたいかということを見させていただいているわけであります。施設の都合上、80 人がマックスなのですが、昨年は 73 名ということにいたしました。

第2次選抜

第１日目（土曜日）

9:30–11:30	講義1・レポート1（120分）	軸が違う3テーマ 講義：約50分 レポート：約70分
12:30–14:30	講義2・レポート2（120分）	
15:00–17:00	講義3・レポート3（120分）	講義や資料に英語を含むことがある

第２日目（日曜日）

論題は当日朝に提示（“予習”を避けるため）

9:00–11:30	グループ討論（150分）	3つの講義から 2 つを選んで討論
12:30–17:00	小論文（270分）、個人面接	15分／人

3つの講義のいずれかに関連するテーマを設定して作成

随時別室で休憩可

さて、先ほどペンディングにしました第 2 次選抜ですが、これが非常に重いというか、多分皆さんのご興味の部分だろうというふうに思います。土曜日に 3 つのセットがあります。九大の教員が約 50 分間の講義をして、その先生が設定した問題を約 70 分でレポートという形で解いてもらいます。講義内容としては人文、社会、自然という昔の教養の 3 本柱に相当する内容で準備をしております。

翌日は、前日聞いた 3 つのうちから 2 つを各自で選んでもらって、自分の考えを他の受験者と意見交換しようと。グループ討論という言い方をしていますけれど、まず講義 1 について意見発表したい人に手を挙げてもらってしゃべってもらう。次に講義 2 について、というように必ず 2 つの講義で意見発表をするようにしてもらう形で午前中はグループ討論を行います。前日教員から意見を聞き、2 日目の午前中には同年代の受験生の意見を聞き、では君はどういうふうなことを考えたん

だということを、一つのストーリーにまとめてもらって小論文を書いてもらう。これは270分、紙のサイズは先ほどと同じですが、文字のサイズは問いませんが、3面であります。これと並行して、個人面接を 15 分ずついたします。ここでは、君は海外で活躍したいと考えているようだけど何をやりたいのかというようなことが志望理由書の記載事項との絡みで出てくるということですね。

1日目と2日目の間に夜がございます。当然今はインターネットとかが使えるわけですから、1日目の講義の内容に即した話題を仕入れてくるという受験生がいないとも限りませんというか、ある程度いると思っていますが、そうすると、夜中に調べてきたことだけを、自説として滔々と述べて意見発表をしたかのように振る舞われるのは、我々としては本望ではありませんので、昨日聞いた講義のこの領域で議論するんだよという話題にタガをはめるとでも言うのでしょうか、「論題」と言うものを2日目の朝に提示いたします。つまり、夜中に予習してもそれはそのままは使えませんよということで、朝に提示するわけです。

この入試の面白いところは、1つ目と2つ目の間で大体机の周りが友達になります。何で君は 2 プロに志願したの、私はこれがやりたいんだということを机の周りの受験生同士で意見交換していて、2つ目と3つ目の間になると大体教室中が友達になりますね。君がやりたいと言っていたことは、教室の後ろの方で同じことを言っていた人がおったよとかいうようなことで、休み時間が騒がしい入試で、1 日目が終了するとさようならと挨拶をして帰って行き、おはようと言って出てくるという、一種セミナーのような入試でございます。

これは新聞等にもいろいろとインタビュー、取材を受けるのですけど、あるときの新聞記事の見出しが「AO 型 13 時間かけ選抜」というタイトルになっていまして、私は実は駅で新聞を買ってこのタイトルを見た瞬間、自分で電卓をたたいて、120 足す 120 足す 120 足す 150 足す 270 割る 60 とやると 13 時間なんですね。やっている方としては、13 時間だというふうな認識はなかったのですが、13 時間だということになっています。

The 21st Century Program **講 義**

年度		題目
H23 (2011)	1	日本における死因究明制度
	2	おとぎ話とジェンダー
	3	学ぶことと働くこと
H24 (2012)	1	放射線と健康の科学
	2	歴史　学問と教科の間
	3	民主主義の根底にあるもの
H25 (2013)	1	「邪馬台国」と考古学 ―通説と考古学
	2	独裁体制はいかに維持されるのか
	3	The Wonder of Water（水の不思議）
H26 (2014)	1	心は物質に還元できるか？
	2	世界のイノベーション構造の変化 ―「リバースイノベーション」、「イノベーションの
	3	生物の自己複製 ―DNA複製からiPS細胞の作成まで―
H27 (2015)	1	身の回りの確率論 ― 確率を使って ―
	2	里地・里山の保全と農山村の持続性 ～人口減少社会と集中豪雨災害～
	3	古語は辺境に残る? ― 言語史研究の方法 ―

直近5年分。全部で15年分あり。

☞楽しく受験することができてよかった
☞いろんな方がいてとても楽しかった
☞心底惚れ込みました。絶対に来たい
☞大学の講義を聴けただけでも、受けた甲斐があった…
☞何の話があるのか興味津々だった
☞受験と感じないほど明るい雰囲気
☞初めて会った人とも気軽に話

ちなみに、過去5年間の講義テーマはここに掲げたようになっておりまして、直近であれば「身の回りの確率論」とか「里地、里山の保全」とか、古い言葉は田舎の方に残っているという事で「古語は辺境に残る?」等、教員がこれらの講義をして、受験生にこれらの講義に基づいていろいろな意見を述べてもらったり、議論をしたりというようなことになっています。

ちょっと小さく書いてありますから大きくしますけれど、彼らからアンケートも取っています。無記名で。そうすると、楽しかったとか、いろいろな人と議論ができて嬉しかったというようなことを言ってくれるのですが、下の方に書いてありますけれども、会場を設営してくれてありがとうとか、お忙しい中試験をしてくださってという、本当に運営していて涙が出るようなことを、もしくはわざわざ教卓の方に来て挨拶をしてくれる受験生もいたりして、やっている方としては本当にありがたい入試というんですか、ありがたい若者がたくさん日本にはいるんだなということを感じる次第です。

ここまでが受験生として分かることですね。

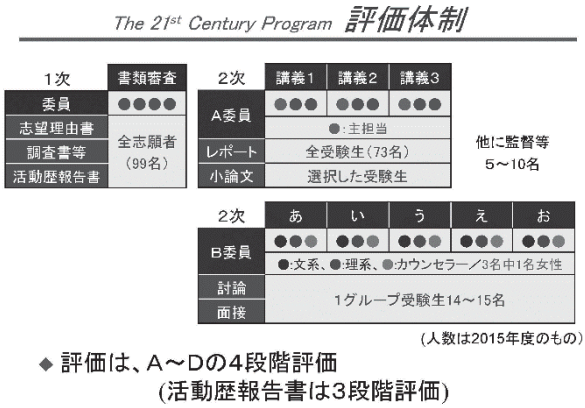
第2次選抜 グループ分け（討論、面接）

◆5グループ、各16名程度
◆第1次成績を均等化
◆右表をベースにし、加えて
　◆男女比が均等
　◆現浪比が均等
　◆地域性が均等
　◆同一高校別グループ
になるようにグループを編成

第1次成績

あ	い	う	え	お
1 →	2	3	4	5 ↓
10 ↓	9	8	7 ←	6
11 →	12	13	14	15 ↓
20 ↓	19	18	17 ←	16
21 →	22	23	24	25 ↓
30 ←	29	28	27	26

これからは裏側ということで、皆さんがお聞きになりたい部分だろうと思っています。残りが10分ぐらいだそうですが、それで、第2次選抜には80名と言いましたけれども、80名全員で議論はできませんので、第2次選抜をするときには5つの教室に分けます。分け方は、あ、い、う、え、おが一つずつのグループですが、なるべく第1次選抜の成績を均等化する以外に、男女の比だとか出身のエリアだとか、それから同じ高校の出身者がいては話がしにくいですので、そういうことをなるべく分けるようにしています。これは普通にシステマチックにと言ってもなかなか大変なのですが、割り振っています。



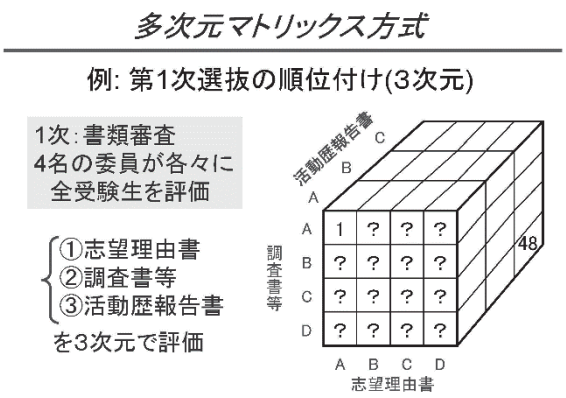
◆ 評価は、A～Dの4段階評価
(活動歴報告書は3段階評価)

評価方法

- ◆評価: A～D（活動歴報告書はA～C）
- ◆評価順位: 1位～48位:直方体のセル
- ◆評価(順位)点: 1位～受験者数
  - ◆同一順位の人数を考慮した順位
- ◆合計評価点: 評価者ごとの順位の総和
  - ◆値が小さい方が高順位
- ◆査定
  - ◆選抜に関係した35名程度で行う
  - ◆討論・面接時の対応、レポート・小論文の評価
  - ◆D評価を付けた理由について
  - ◆.....

問題はこの後でしょうね、多分皆さんがお聞きになりたいのは。第1次選抜の場合は、4名の委員が、去年であれば99名の全志願の提出書類を読んで、4段階で評価します。先ほど河添先生もおっしゃっておられましたけれど、自分としてはぜひ採りたい志願者をAとか、九大としてあまり取りたくないということであればDという形で4段階評価をします。ただ、活動歴報告についてはA、B、Cという3段階でありますが、いずれにしても段階評価を行うのが第1次選抜でございます。

第2次選抜は、講義、登壇する先生はお一人ですけれど、そのテーマを同じくしている先生をお二人付けていただいていますので、講義ひとつ当たり3名の教員がおられます。ですから、これら3名がそれぞれレポートとか小論文を読んで、A、B、C、Dという形で評価いただくと。それから、面接とグループ討論に関しては、各教室に3名ずつ教員がおりますので、彼らにもAからDの4段階で評価をいただくということになっています。



AからC、もしくはAからDをどういうふうに評価しているかというのが多分多くの先生方のご興味であろうと思いますが、つまり、AAA、これはトップだろう。これは分かりますし、第1次選抜の場合はDDCが一番ボトムでありますから、トリプルAはルービックキューブで言えば左上隅の1と書いてあるところが1番目で、DDCが48番目だろうと。AABを次にするのか、ABAを次にするのか、BAAを次にするのかは、ルービックキューブのどっち方向により魅力的な受験生がいるかということを考えて順に付置して順位を付けていきます。当然1つのセルに複数の受験生が入ってきますから、それは同位、同じ順位ということで、同位を加味した上での順位を付けて、前の方に位置している受験生から順番を振っていくということになる次第であります。

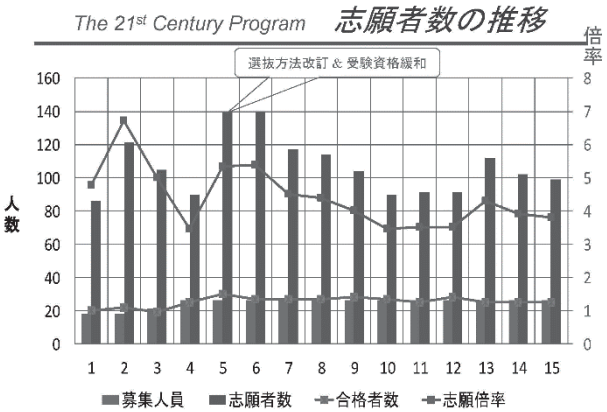
まとめ: 21世紀プログラム

- ◆九州大学独自の学部横断型教育
  - ◆「専門性の高いジェネラリスト」
  - ◆総合大学の利点を活かした教育: 全11学部を履修可
  - ◆アクティブな学生の効用:「カナリア効果」
- ◆「大学入試」というもの
  - ◆多様な学生の発掘を実現する手段の工夫・駆使
    - ●教科学力の担保は外せない
- ◆志願者を増やす方策を: 21cpの魅力を伝えねば
  - ◆より一層の広報が必要:進学説明会やOC等で
- ◆“AO入試”という呼称と、その理解のされ方
  - ◆この点の広報も

ということで、21 世紀プログラム、まずこのご紹介でございますが、「専門性の高いジェネラリスト」ということで、既に 15 期生までが入っております。11 学部ありますから、その中で自分の興味・関心に応じた教育を受けていらっしゃいという風なことで、よく皆さんからご質問を受けるのですが、彼らは自分一人で自分の興味・関心のある学部に行くわけですね。そこには、例えば物理のところに行ったら、本来の理学部物理学科の学生がたくさんいるところに一人で行って、自分がこれを受けたいんだと。周りにはそれを専門にしている学生がいるわけですけれども、一人で行って、どうしてもこれを受けたいと。そうすると、本来そこにいる学生は、あいつは誰なんだ、見たことないぞと言うことなのですが、何か質問が非常に鋭いとか、2 プロの学生は面白いぞということで、本来いる学生にも効果がありますし、当然単位を取りにその教室に行っているわけですから、彼ら自身はやる気があってそこの教室に行っているわけですから、相互にプラスの効果がある「カナリア効果」というふうな呼び方をしていますけれども、そういうふうな形で今我々は 15 期生までを受け入れている次第です。

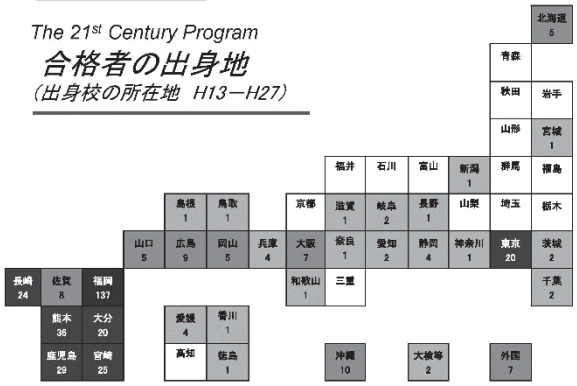
ここは入研協ですけれども、先ほど倉元先生もおっしゃっておられましたが、教科学力というのはぜひ我々も問いたいと思っていますから、試験の中に英語だとか一部いろいろなことを問う問題をレポートの一部に課しております。そこの中で、多様な学生を発掘する手段を何とかやろうといろいろ毎年工夫しながらやっておる次第であります。

(137 ページに掲載)



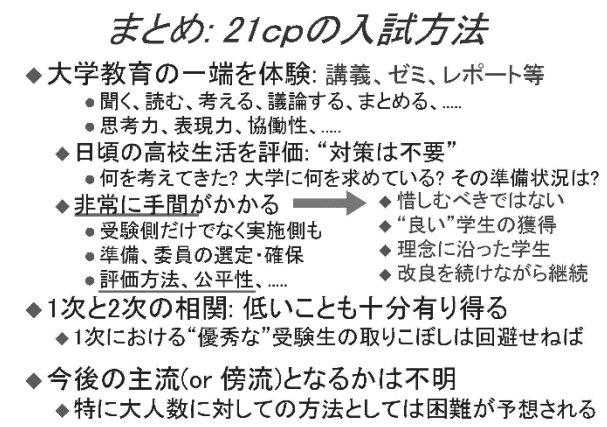
次のスライドにありますけれども、大体今 4 倍ぐらいの倍率の受験生に来ていただいています。前のところに改革と書いてありますけど、あれは 5 浪、5 年の浪人生までを受け入れるように変更したらちょっと倍率が上がったのですけれど、その後は大体 4 倍ぐらいになっていますけれども、私個人は 2 プロというのは結構面白いと思っていますから、まだご存じないエリアの方にぜひ受験していただきたいなと思っていますし、昨日のセミナーにもありましたけれども、AO 入試というのはなかなか皆さんにきちっとご理解いただけてない部分もあるように私個人は感じていますので、こういうふうな入試も AO なんだということをぜひ知ってほしいということで、AO 入試の広報もしたいなと思っています。

(138 ページに掲載)



これが合格者の出身エリアですが、九州アイランド、島の中が多いのですね。どうも海峡を渡った山口から向こうの方からはなかなか来ていただけてない。東北にちょっと学生を譲っていただければありがたいのでございますが、ただ、海外だとか大検等経て来ている学生も若干名いるのは事実でありますが、もうちょっと島の外にも広報を

しなければというふうに思っておる次第であります。



そして、まとめでありますが、先生方の大学でも提供されている学生への入学直後の第1日目の講義を高校生に提示して、こういう学問があるんだよということを彼らに振って、どう考えるんだということをゼミでやったり、それを文章にまとめてみたりレポートにしたりということで、大学の教育では普通に行われていることを試験として実施しているということです。中教審答申が昨日あたりからずっと話題に出ていますけれど、思考力、表現力、協働性ですか、これぐらいは少しは測れているのかなというふうに思って、今日のタイトルの一部にさせていただきました。

先ほど倉元先生のお話にもありましたが、高校の現場に対して過度なリクエストを出すというのは、私もあまり良いことではないと思っていますので、日ごろあなたは高校で何を考えているのですか、大学に何を求めているのですか、そういうことを彼らに問う。それは別に対策だとかそういうものじゃなくて、ですから、私は高校の先生方には、11月に2日間だけ生徒を我々のところに来させていただいて、同じようなことを考えている、同じように大学に夢を持ってくださっている受験生と一緒に話をして、君はどこまで彼らと一緒に議論ができるかを測らせてもらえませんか、対策は要りませんよというふうに申し上げております。なかなかその辺のご理解が、私の説明が下手なのかもしれません。

見ていただいて分かるとおり、非常に手間がかかります。受験生側が 13 時間缶詰めになっていますけど、我々は 13 時間どころではありませんで、相当前から準備を始めないといけません。当然ですが、委員の選定とかいろいろご依頼をすること等には非常に……、別にここで苦労と言っても仕方ないのですが、いろいろと工夫がございます。それから、今回の答申にもありましたけれど、不合格になった受験生に対しても、キチンと説明できないといけませんから、評価方法だとか公平性は非常に重要だろうというふうに思っています。

じゃあ、手間がかかるからやめるのかということになると、それは私は違うというふうに思っています。"良い"という観点は先生方それぞれによって違うので、ダブルクオーテーションで囲ってありますけれども、一教員である私が"良いな"と思う学生が来てくれているわけですし、一応理念に基づいて志願してくれているわけですから、そういう学生がいる限りは改良を続けながらこのプログラムを残していきたいなと思っています。

これも質問が出るかと思って先に書いちゃいましたけれど、第1次選抜と第2次選抜で成績に相関が小さいことが例年起こります。つまり、第 1 次と第2次で別の評価をしていますので、こういうことになるのだと考えているのですけれども、なかなかその辺のご理解がいただけていないように思っています。ですので、我々が絶対注意しないといけないのは、第2次選抜の成績を見るまでもないという形で第1次選抜の合否をラフにやってしまうと、第1次の成績は芳しくない受験生が第2次の方で良いパフォーマンスを示すという受験生もいますので、ぜひ第 1 次でも"良い"学生を決して逃さないようにということを念頭に合否を決めている次第であります。

今回の中教審答申の2年前に高大接続特別部会でご紹介したと先ほど申し上げましたけれど、今回の中教審答申の中でこういうふうな評価方法が良いんだというか、一つの例示で挙がっているわけですが、これが今後の主流……、傍流かもしれませんが、になるかと言われると、私は結構まだ検討する必要があるだろうなというふうに思っています。それはなぜかというと、もうお分かりの通り、上にも書きましたが、うちは定員が 2,555 名ですが、受験生は8,000名いますけれども、全員に面接・小論文を課すというようなことは全く普通には考えられませんので。今のままでは。ですから、その辺はどうなるのだろうというのは、現在私もここで申し上げられるような知見は持っ

ておりません。

ということで、皆様方にどの程度参考にしていただけるかは判りませんが、我々が 15 年間やってきたことの一端を紹介させていただいた次第であります。お役に立てる部分がございましたら幸いです。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会（大久保）

林先生、どうもありがとうございました。ご登壇の 3 名の先生方のご協力によりまして、ほぼ時間どおり進んでございます。これより休憩に入りますけれども、後半のディスカッションのほうは 35 分から始めたいと思います。お手元に質問票がございますので、そちらのほうにご記入いただきまして、係にお渡しいただければと思います。

－休　憩－

○司会（大久保）

それではこれから後半のディスカッションのほうに入っていきたいと思います。ちょうど 55 分ほど時間が取れると思います。その範囲で可能な限りやっていければと思います。ただいまお寄せいただいた質問票を真鍋先生に整理していただいていますが、その間に単純な事実確認の質問を二、三紹介し、それにお答えいただきたいと思います。

まず、倉元先生への質問でございます。AO の定員拡大は中教審の答申を受けているとのことでしたけれども、具体的に答申のどの部分に当たるのでしょうかということでございます。

○倉元准教授

なかなか答えにくい質問をいただきました。まず、今回の答申の理念と方法は、完全に分けて考えなきゃいけないと思っています。答申が掲げている理念そのものに関しては、おそらく、私どもだけではなくて誰も反対する人たちはいないのではないかと思います。ただ、方法として、入試を新しい二つのテストを中心に改変していくということに関しては、なかなか困ったものだと感じている次第です。基本的には、中教審の答申というよりも、国立大学協会で去年の 8 月ですかね、「国立大学の入試改革について」という声明文を出しています。その中で示されていた方向性に沿った改革、と私自身は理解をしています。ですので、中教審の精神を受けて、それに沿った改革をしていくという意味です。具体的に「どの文言・・・」ということは特に考えてないという回答になると思います。

○司会（大久保）

ありがとうございました。続きまして、林先生に 2 つ質問がございまして、1 つ目は 21 世紀プログラムの卒業要件を定めているかという質問です。

○林教授

今出てくると思うのですが、卒業要件はございます。出てきましたかね。ご質問の意味を取り違えている可能性もありますが、124 単位となっています。それぞれのカテゴリーで単位を必要とするというのは、ほかの多くのコースと同じでありますので、それぞれのカテゴリーの中で、例えば卒論は 4 単位とか、そういうふうな形の要件がある。これらを満足して 124 単位以上であれば卒業できるというのがご質問の意味かと思っていますが、これでよろしいでしょうか。

○司会（大久保）

あと、今の質問に関連しますが、必履修科目というのはございますか。

○林教授

もちろん必履修はございます。幾つか左側の基幹教育にもありますし、ここに挙げたものは大体必履修ですね。これ以上取りなさいということです。

○司会（大久保）

二つ目の質問ですが、不合格になった受験生に対して何か説明をしているということを伺いましたけれども、誰に対してどのような説明かという質問です。

○林教授

私の説明の仕方が悪うございました。不合格者からリクエストが来た場合には説明をしておるのかということは、実は詳細にはしてはおりません。おりませんが、我々は合格と不合格の間でラインを引く。皆さんも同じだと思うのですが、なぜ不合格にするのかというのは、我々は 40 名近くの教員が 2 時間以上の時間をかけて議論しているわけですけれども、その中で、この方には今回の選抜ではご遠慮いただこうということを、非常に熱心と私は思っていますが、議論して不合格ということにしています。

情報開示という形でリクエストが来ても、実は B という評価が返っていくだけで、正確に言うと、

A が合格であります。不合格の前半が B、後半が C でございますので、ボーダーのところにいる受験生に関してはBという評価が返っていくだけでございますので、なぜ不合格なんでしょうかというリクエストが来ても、それはお答えできませんというふうに入試課のほうで答えていただいているはずでございます。

○司会（大久保）

ありがとうございました。それでは、ここから司会を真鍋先生に引き継ぎまして、討論を進行していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○司会（真鍋）

香川大学の真鍋でございます。よろしくお願いいたします。今回は、パネルディスカッションの前半部分はパネラー、あるいは司会者、あるいはフロアの先生にもご意見を求めるかもしれませんけど､少々ディスカッションをさせていただいて、その後会場からの質問をご紹介したいというふうに思います。

そういう中でも、今会場からいただいている質問もあるんですけれども、そのことも含めて先生方にまず投げかけといいましょうか、お聞きしたいことが、中教審の答申は、先ほど倉元先生も書かれていましたように、非常にドラスティックな改革で、私たちにとって、大学教員も含めて、大げさに言うと日本国民に価値観の変貌、変容を求める、そういうふうなものになっているんですけれども、答申の中でも今後推薦とか AO、あるいは一般選抜の前期、後期というものが廃止になるということが書かれています。

そういうときに、量的対応というものがどういうふうに可能であるのか。例えば先ほど林先生の一番最後のスライドだと、量的な拡大というのは難しいよという、そういうこともありましたし、倉元先生のところは 30%ぐらいに増やしていこうかということもございました。また、河添先生のところは、一応 200 人を定員にしているんだけど､そのときの出来､不出来によって 150 とか 300 というような範囲もあるというようなこともご紹介いただきました。この 3 大学は、最初大久保先生も紹介しましたように、日本における AO 入試の先駆的大学なので、そういった大学で入試に携わっている先生方が、量的対応を今後どういうふうに考えられているのか、少しコメントをいただければというふうに思います。

○河添学部長

中教審の答申をどう読み解くかなんですけれども、1 つの大きなメッセージは、大学の質的変換というものが非常に求められていて、それに対しての入試改革だと思うのですね。大学の質的変換の中に、個性的な人材をどうやって入れていくかというところがポイントだと思っています。中教審の答申は安西元塾長が出しているので、それでは私学の慶応が従わなきゃいけないのかというと、そうは思っていません。私学は独自の入試制度でちゃんと教育理念に基づいて学生を選抜することを通していくと思います。国の言われたとおりにするとはどこも考えてないと思います。

でも、慶応全体の中で量的、そういったものをどうとらえているかですけれども、学部によって非常に違いがあります。SFC の総合政策学部と環境情報学部の 2 つは、先ほど説明したように 200 名を AO 入試で取りたい、できればもっと多く取りたい、これは全く問題ないです。でも、理工学部や医学部がそれを受け入れるかといったら、とても受け入れられないと思います。むしろ先ほどの東北大とか九大のような、学力を見るような形での AO 入試ということになるかと思います。つまり、入試はカリキュラムにあった学生をいかに量的に取っていくかというところがポイントだと思います。

もう一つは、我々は入学者の 4 分の 1 を取っているわけです。ということは、10 人いると 2 人か 3 人がそういう非常にアクティブな学生です。これは、残りの学生に影響を与えるのですね。だから、もうちょっと増やしてもいい、5 割ぐらいいてもいいのではないかぐらいに思っています。でも、AO 入試で 1 人、2 人取ったところで、多分数パーセントでもつぶれてしまうのですね。他の学生に影響を与える前に、モチベーションが高くても授業についていけないというケースが出てきたりします。つまりある程度の母数を取らないと、取った学生の個性を伸ばすことにつながらないのではないかと思っています。100 人のところに 1 人モチベーションが高い学生がいても、場合によってはちょっと変わった学生がいるよというぐらいにしか見てもらえない。100 人の中に 10 人、

20 人いると、残りの人たちが自分も変わろうかという意識が出てくるのだと思います。そういった意味で、量的な側面は大事な要素にはなってくるかと思います。入試をちょっと変えて、ちょっとの人数をとる AO 入試をやっても、それは受験生のためにならないと思います。ある程度の母数を確保して、その受験生たちが仲間になって、ほかの仲間に影響を与えるような、その仕組みがないと、入試としてはまずいのではないかというのが私の意見です。

○倉元准教授

まず、改革とはどういうものかということを考えてみます。ある転換点があって、そのときから一気に大きく変わるというのは、「改革」と呼べるのかどうかという疑問があるのです。つまり、前の学年の子供たちとその次の学年の子供たちに全然違うことを指導しなきゃいけない、やらせなきゃいけないような、そういう事態というのは受験生が一番迷惑を被る、被害を被ることだと思うのですね。

東北大学は非常に地味にやってきました。AO 入試導入のときも、筑波大学や九州大学はネーミングのところから工夫をされていました。たしか、九州大学では「AO 入試」ではなくて「AO 選抜」でしたっけ、たしか、そうやっておっしゃっていたし、筑波大学ではアドミッションセンターが行う「AC 入試」だと、「ほかとは違うんだ」と主張されていました。そういったところに関しては、ごくごく普通に「AO 入試」という言葉で実施しました。本当はそのときには「AO 入試」というものの定義を私どもがやっているようなものに変えていきたいという野望があったのです。残念ながらそういうふうには進まないで、独自の道ということになっていまったんですけれども。とにかく小さな歩みを少しずつ続けてきて、十何年間かかって、多分、その差分を見てみると、相当高校も違っているし、大学も違っているという形になっていると思うのです。

そういった意味で、例えば、東北大学の AO 入試は一般入試の存在が前提だと申しましたけれども、この構造自体は変えられない、変えてはいけない。その中で、適正規模がどのぐらいかと考えたとき、私は今でもちょっと多すぎるんじゃないかなと個人的には思っています。東北大学の AO は。それでも、AO 入試の拡大という方向性で改革するということになると、多分、実務的なぎりぎりの限界が 3 割という線なんだろうと思います。それ以上はまず無理だろうな、というようなところ出てきた数字だというふうに私は理解をしています。

○林教授

私の意見は先ほどスライドで申し上げた通りですから、あまり時間を使う必要はないと思っています。多分真鍋先生のご質問は全学的な意味でおっしゃっていて、2 プロだけの話ではないのだろうと思いますけれども、全学的に展開するのは、相当古い、歴史のある大学の場合は部局が強いですから、先ほどお示ししましたように、AO 入試も 10 人とか 5 人とか、一番多くても 26 人というふうな単位でやっている。先ほどちまちまという言葉をあえて使いましたけれども、そういうふうなところでやっているものですから、それを広げるのは、それぞれの担当の先生方は非常に時間を割いておやりくださっていますので、2 プロとはちょっと違うことをされている部局もありますけれども、いずれにしても非常に時間を割いてなされていますので、あれを増やすということは可能だろうかと相当に不安をお持ちだろうと思っています。

それと、中に 21 世紀プログラムを 26 人じゃなく 50 人にしては等のご意見というかご希望等も、私も九大に着任する前はそういうふうに思っていましたが、21 世紀プログラムというのは、学生がそれぞれ個性を持っておりますので、今 2 名の専任の教員がおりますが、在学生だけで今全体で 100 人ぐらいいると思いますけど、それを 2 人の教員で面倒を見ていますので、もちろん私も含めてサブを務めさせていただいてはおりますけれども、専任教員が 2 名というのは結構大変でございますので、じゃあ 4 名にしたら 50 いくのかというと、個性が強い学生をきちっと束ねるというのはそれなりの先生方の能力、スキルが要るようにも思っていますから、2 プロの定員を上げるのも結構大変かと思います。それ以外にも政治的な問題もありますけど、いろいろな観点で増やすというのは結構いろいろなところと折衝が要るだろうなというふうに思っています。2 点お伝えしました。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。多分フロアの先生方も、多くの大学で推薦入試とかAO入試とか、いわゆる多面的、総合的な入試というのは少なくともされていると思うんですけど、これが今行っている前期日程とか後期日程まで含めて総合的、多面的な評価を全て盛り込まないといけないというふうになると、多分多くの先生方は量的に対応できるのだろうか、あるいはどういうふうにしていこうとすればいいんだろうか、そのあたりの設計がすごく悩まれているのではないかなというふうに思いました。

そういう中で、時々話があるのが、今AO入試なんかでも志願者が多い場合、1次選抜、あるいは2次選抜といって、第1次選抜は書類で審査をして、実際の第2次選抜以降に進める受験生を絞り込むということをしているところもあると思います。今各大学の国公立大学をはじめとして考えてみますと、前期日程の募集人員が非常に多いわけでして、そこに多面的、総合的評価を取り入れようとするとするならば、そこで第1次選抜とか第2次選抜のようなものを組み入れるという可能性、あるいは是非といいましょうか、そういうことは先生方はどのようにお考えになりますか。もちろん制度設計というのはまた別の部会でされていると思うんですけど、今の現状で考えたときに、どういうふうにお考えになるかなというのをお聞かせいただければと思います。

○河添学部長

SFCの場合は、志願者が大体1,000から1,200いまして、そのうちの大体200名ぐらいが合格になるんですけれども、率でいくと6倍ぐらいです。1次の書類のところで3分の1ぐらいが合格、面接で半分ぐらいが合格、全体で6分の1になるというような感覚です。1次選抜は必要です。面接は時間がかかりますので、全教員が参加するということにしていますけど、面接の時間をちゃんと確保するために、1次選抜である程度選ばないと回らないと思います。

○倉元准教授

国立大学に限った話になるかと思いますけれども、国立大学において第1次選抜の問題というのは非常に大きな問題だと思います。共通1次が批判されたのは、受験機会が1回であるということで、それを複数回化するということで「A、B日程」という制度が導入されました。ところが、これが大混乱を起こししまして、多くの受験生がA日程、B日程両方ともいわゆる足切りを受けて受けられないという事態があったんですね。

私どものAOⅢ期というのはセンター試験を使う入試なんですけれども、センター試験で足切りをします。これは、センター試験で足切りをしても、もう一度、受験機会があるからです。最後の機会を奪ってはいけない、これはすごく大事なことなんじゃないかなと思います。ですので、たとえ新しい制度になったとしても、書類でですね、特に、書類だけで第1次選抜を行うようなことになってしまうと、おそらく今までの歴史から見ても、国立大学としての矜持が疑われるような事態に陥るんじゃないかなと考えます。それはすごく大事な問題だなと私は認識しています。受験生の最後の機会を足切りで奪ってはいけないと思います。

もう一つ説明が不足していたのですが、後期日程がかなりの部分で廃止になっていますので、実質的に前期日程が最後の機会ということが多い。そういうことを前提にしてお話をさせていただきました。

○林教授

私は、共通1次の1期生で、かつ2期生なのですが、それで私の年齢が判る方は入試通だというふうに思っておりますが、そういう意味で、私は1回しか受験機会がなくて非常に残念には思っておりました。

それは蛇足でございましたが、真鍋先生のご質問に対して2点お答えします。まず、21世紀プログラムに関しては、1次選抜で80名まで受け入れられるが、73名に直近の選抜ではしたというふうに申し上げました。つまり、7名を欠いた状態で進行させました。1次で奪うのはというふうに今倉元先生もおっしゃいましたが、我々はこの7名を入れるというか、2次に進ませるのかどうかは非常に議論を尽くしました。結局2次に進むというのは、1次と2次の相関が少ないからという意味もあって、非常に慎重にならざるを得ないのですが、たとえ2次でパフォーマンスが良かったとしても、この7名に関しては我々は取れないというふうなことを非常に時間を尽くして、お帰りい

ただくことにいたしましたので、書類といっても、その後のパフォーマンスを加味してもやはり取れないという部分はあったということです。

2 点目は、真鍋先生が前期、後期についてもということで、スライドの 4 番に我々のところの前期が 2,045 名、後期が 315 名とありますので、大体二千三百幾らですが、受験者数にすると 8,000 人になるのですが、8,000 人の書類ということになると、先ほどの話とリンクするわけですが、きちっと 2 次で来てもらっても取れないんだということが峻別できるだけの書類選考のシャープさというのですか、きちっと識別できるのか、弁別できるのかというのは、私はやや疑問というか、非常に危惧さえ感じておりますので、そういう意味で、大人数に対してお帰りいただくということは、相当大学側の見識が問われるというんですかね、責任を問われるというふうには思っていますので難しい。もちろんリクエストされている部分があるのは分かりますが、本当に受験生に対して、特に不合格になった受験生に対して我々はちゃんと説明できるのか、あなたはこういう点で私たちのところの大学には遠慮いただいたんだということが説明できるのかは、非常に厳しいように思っています。

あまり長くすると時間がもったいないので、この辺にしておきます。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。やはり量的対応というのはかなり難しいようなんですけれども、そこを多分今度の新入試は各大学どうにか知恵を絞りながらやっていかないといけないだろうなというふうに思っています。

実は四国の国立大学で今回新学部を作って、その新学部の募集を全て中教審の答申の理念に基づいて入試制度を設計した徳島大学さんがございまして、徳島大学の植野先生、ちょうどいらっしゃいます。植野先生に中教審の答申を含めた入試制度設計についてご説明いただければ、ほかの大学にも参考になるかなというふうに思いますので、お願いします。

○植野

すいません、座りながらで失礼いたします。徳島大学の植野でございます。

実は、このたび平成 28 年 4 月から生物資源産業学部が新しくできるんですけれども、第 6 次産業化の人材育成を目的としました学部なんですが、こちらは全くの新設学部になります。ちなみに、徳島大学はほかに理工学部と総合科学部でも学部改組をするんですけれども、こちらは届け出の対応になっています。生物資源産業学部は、一からの全く新設学部ということですので、今までの入試ということが全く存在をしていないというような背景があります。ですので、この答申を新しくちゃんと踏襲をして、それで新しく入試制度を作っていくということが可能だったというような背景もあるのと、あと、これは定員がトータルで 100 名になっています。定員が 100 名ですので、先ほど先生方からお話がありますような量的対応にも何とか耐え切れるのではないかなという考え方を軸にしまして、入試制度を設計しました。

お時間の関係もありますので、細かい点は省略させていただきますので、ぜひホームページを見ていただきたいと思うんですが、ポイントを 2 点だけご説明差し上げたいと思います。今回の答申では、アドミッションポリシーの明確化ということが非常に言われています。アドミッションポリシーの明確化とはどういったことを示すのかということを一から考えまして、受験生の視点で考えてみますと、アドミッションポリシーを見ないと試験をパスできない、要するにアドミッションポリシーを、試験科目がどうの、あるいは配点がどうのという以前に、これを見ないと、試験を受けて合格することができないような仕組みを作っていくべきではないかなということを念頭に置きました。

それで、アドミッションポリシーの中で特に力を入れて考えましたのが、求める人物像です。求める人物像については、学力の 3 要素をしっかり踏襲していきまして、6 つあるんですが、関心・意欲・態度、探究力、表現力、知識・教養、思考・判断力、協働力の 6 つです。一般前期、後期、推薦センターなし、センターありの 4 種類なんですけれども、その中で行われる選抜方法にその 6 つの求める人物像の評価をそれぞれ当て込んで、各選抜方法で最大 2 つの重点評価項目を設ける形で全て連動させました。例えば集団討論、集団面接、個人面接、今まで面接と言われるようなものをかなり細分化をしまして、集団討論では表現力と思

考・判断力、協働力、これを2つにまとめた上で評価をする。集団面接については、関心・意欲・態度、表現力、こちらの2つを評価していく。短時間ですので、全部をアドミッションポリシーの評価をしていくということは難しいですから、特にこの面接ではこの2つを評価するというような、そういった設計の仕方にしまして、丁寧な入試に近づけ、かつ、公正な評価をしっかりやっていくということが、これからしっかり詰めていくように我々は思っています。

こんなところでよろしいでしょうか。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。先ほどこちらに登壇されている先生方は、量的対応というのは少々難しいなという、そういうことではあったんですけれども、今ご紹介いただいた徳島大学だと、1 学部100 人ということなので、100 人であればどうにか対応できるであろうと。植野先生、今の100 人というのはどれぐらいまでだったら可能だと思いますか。もう少し増やすとするならば。

○植野

国立大学の一つの目安になりますのが、大体 3 倍というところのラインになると思いますので300 人、強いて言いましたら、一般の前期日程が一番定員が多くて 50 名なんですね。50 掛ける 3 で 150 名ぐらい、2 次試験の科目が総合問題と、あと集団面接を課す形になります。集団面接をグループ分けで何とか半日、もしくは志願者が多かった場合は、翌日も含めて考えていかなきゃいけないというような状況です。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。そういう一つの例もありますし、先ほど倉元先生の発表でしたか、ヒューマンリソースのこともあって、どうしても限度というものもあるだろうというふうに思います。各大学いろいろと今後入試制度設計も大変になってくるのかなというふうにも思います。

○倉元准教授

すみません。一ついいですか。

○司会（真鍋）

どうぞ。

○倉元准教授

私が人数の限度と申し上げたのは、大学としての実施体制のことも確かにあるのですけれども、もう一つは高校側に与える影響です。正直、試験として課されるものは全て解析されて、対応されると考えるべきです。慶応の湘南藤沢キャンパスのような極めて個性的な入試をやってもそうなってしまう。それを前提に考えると、面接の対応というようなところにエネルギーを割かせることがいいのか、それとも、できるだけ良質な問題を出していくのがいいのかというのは、考えどころかなとは思います。良質な問題というのは、しっかりオーソドックスに勉強しないと解けないような問題を出す、という意味です。

○河添学部長

多分いろいろとコンセプトの違いがあるのですけど、うちの AO 入試の場合はいわゆる問題を出すということは一切やっていません。面接はその場での質疑応答、それから書類審査も自分で書いてごらんなさい、となっています。そういった意味で、学力の不安は常に残ります。でも、それ以上にモチベーションの高さのほうを取ろうというふうに決めています。ですから入ってからのケアはそれなりに大変です。英語ができない学生、数学ができない学生も結構入ります。でも、その学生を卒業までに自分で勉強させることは、カリキュラムの中で工夫しています。我々は総合的な評価で取っているという言い方をしていて、点数刻みはしていないと言い切っちゃっていますね。

○司会（真鍋）

それでは、パネルディスカッションの後半に移らせていただきまして、会場からの質問に対してお答えいただければなというふうに思います。多数の質問をいただいていますので、全てを紹介できないかもしれませんけど、それはご了承いただければと思います。

まず、河添先生並びに全員にという丸が付いていますので、全員の先生にお願いしましょうか。AO 入試による入学者の構成といいましょうか、組成ですね、ローカル化というのが進んでいるのではないだろうかというご質問があります。ローカル化が進んでいるということがあるならば、それに伴う多様性、多様化というものを保つことと少々矛盾があるのではないかというご質問なのですが、先生方、いかがでしょうか。

○河添学部長

そもそも AO 入試を始めたきっかけが、多様性

を求めたいということで始まりました。予備校等がそれに常に対応するということで、高校生の多様性が縮まってきていることは事実です。でも、25年間やってきて、面接のときにその受験生が本当に潜在的な能力を持っているか持ってないかというのは、予備校の付け焼刃的な対応では無理だと思います。そういった意味で、多様性は常に保っていますので、うちのキャンパスは本当にありとあらゆることをやりたい学生が集まってきています。むしろ先生のほうが、多様性についていくのが大変です。学生といかに一緒にやっていくかという、そっちのほうが大変になるぐらいに多様性は保っています。

○司会（真鍋）

例えば同じ高校から毎年大量に入学してくるとかいうことは。

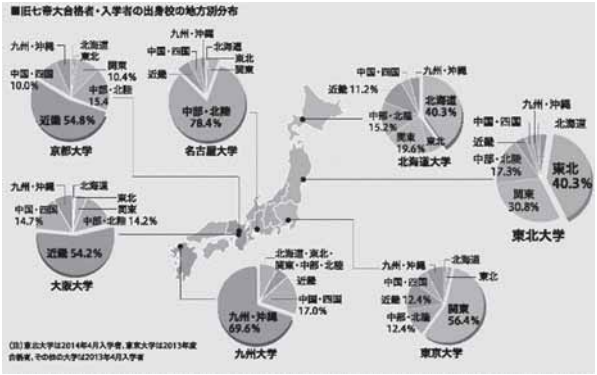
○河添学部長

あの先輩が受かったから私もというケースは結構あります。ただ、同じテーマは全くなくて、別のテーマで挑戦してきます。笑い話は、娘が受かったので父親が受けに来たとか、そういうケースもあるぐらいです。何かをやりたいことがある人は拒まずいつも受け付けているので、多様性はキープされていると思っています。

○倉元准教授

大学案内の13ページをご覧いただきたいのですが、さらっとデータだけを出しているんですけれども、実は、仲間でもありライバルでもある旧帝大と比較して、いかに東北大学が出身地の意味で多様な学生を抱えているかということをアピールしています。

（135ページに掲載）



他大学だと学生の出身地を表す一つの色が円グラフの半分以上を占めています。お隣の九州大学は、以前から比べると10%ぐらい落ちている感じがしますけれども。

その中で、東北地方は人口減もありまして、学力的には少々厳しいところがあります。AOを実施しますと、合格してくる学生の6割ぐらいが東北地方の出身になるんですね。これを「画一化」と言われると、ちょっとニュアンスが違っていて、私どもは「特色化」だと思っています。つまり、大学のブランドイメージにはどうしても地域性があるのです。先ほど21世紀プログラムで宮城県の出身者が1人だけということで安心したんですけれども（笑）。東北大学は特別な大学だと思ってくれる受験生というのは東北地方を中心に広がっています。東北大学に入りたいという学生は地元には多いですね。

AO入試というのは情報戦の部分があるので、どうしてもほかの地域からだとアクセスがしにくい。そういう制度自体の存在を知らないというようなこともあって、遠隔地の第1志望の受験生を拾い切れないところはあります。ただ、やる気がある、意欲がある学生・・・、何と言えばいいのでしょうか、「多様性、協働性、主体性」に富んだ学生というのは、それ自体を見ようとしなくても、やり方さえ工夫すれば自ずから集まってくると思っています

○林教授

なかなかよくお調べになっておられて、この13ページは今後使わせていただこうと思いますが、私も実は九州大学に来て6年が終わりましたけれども、九州大学の特色というのはどうも島の中に限定されている。明治期にあれだけ日本を騒がせてくれた人たちの末裔がこんなことで良いのかということを、よく高校で講演はさせていただいていますが、九州人よもっと大志を抱けというふうには思って発言しています。そうした中で、21世紀プログラムについても、同様の傾向はありますが、九大の他の選抜と比べて東京や海外から志願・入学してくる学生が多いのも事実です。

もう一つ、真鍋先生から先ほど単一の高校がという話がありましたけれども、初期のころは、ある一部の高校から比較的たくさん受けてくださったことがありました。今はあまりないのですが、その当時は21世紀プログラムというもののご理解がなかなか普及しない中で、ある一部の高校の校長先生がこれは面白いということで、その目にかなうだろうと彼が思った学生をワッと送り込ん

でこられて、それがものの見事にヒットしてという時期がございましたが、今はそういうふうなことにはなっておりません。そういう意味では、私たちの広報がまだ甘いのかもしれませんけど、今は結構多様な高校から来てくださっていることが多いということです。よろしいでしょうか。

○河添学部長

慶応も、地域的な意味での局所化というと、全体では関東周辺で6割、7割近くになっています。むしろSFCのAO入試と、それから法学部もFIT入試というのをやっているのですけれども、そういったほうが全国区の入試になっています。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。それから、次のご質問なんですけれども、現在AO入試に対してメディアから在学時の成績、GPAと留年とか中退率の検証が求められているように思います。それぞれの大学でどのように……、これは全員にご質問なんですけど、今言ったように、AO入試に対してGPAや留年、中退率の検証が求められているように思う。それぞれの大学でどのように入試制度の検証を行っておられますかというご質問です。

○河添学部長

多分そういう質問が来るだろうと思っていたのですけれども、一応我々もGPAは取っています。でも入試のときの切り口が既存の学問的な評価をはみ出たような学生を取ろうとしているわけで、その学生を入ってから科目のA、B、Cで評価するのは矛盾しているだろうというのが多くの先生の考え方です。したがって、きっちりとした追跡というのは行っていません。

でも、こういう質問が来るだろうと思って、何かデータがないかなと思って調べたところ、表彰学生、卒業式のときに代表となる学生が、この25年間で、2つの学部で44名いるのですけれども、そのうちの4割以上がAOの入学者です。4分の1で取っていますから、パーセンテージとしては高いのかなと思います。それから、3.5年で早期卒業できるのですけれども、3.5年で卒業した学生のGPAを見ると、トップ10のうち7名がAOで入った学生です。必ずしもAO生の成績が悪いとは言えません。留年率は多分一般の学生もAO生も区別ないと思います。慶応はむしろ留年することに意義があるとするぐらい大らかな大学ですので、先生によっては留年を勧めるようなケースもありますので、必ずしも留年が悪いという認識は全く持っていないので、その辺のデータはないです。全体としては、活発にキャンパスライフを送っているのかなと思います。

○倉元准教授

いわゆる追跡調査に関しては、4～5年前に一度かなり苦労して情報整理をして、全体の分析をやったことがあります。ただ、これは本当に大変なんです。成績の付け方等は、学部でいろいろと違いましたし、また、途中で変わったりとか、いろいろなことがあります。それでも、その結果に基づいて、本当にざっくり比較できる形で平均値に直したところ、AO入試の圧勝です。AOで入った学生の成績は平均的に高い。それ以上の苦労をしてAOの学生の優位性を探すようなことをする必要もなかったのですね。

もちろん平均ですから、中にはいい学生もいて、中には成績の振るわない学生もいるわけですけれども、おおむね退学率も少ないですし。AO入試で入学した学生の適応状況がいいということになって、反応が鈍かった学部も少しずつ歩みを進めたという形です。ただ、教務情報の作成の方の整理だとか、いろいろな変更がありましたので、ものすごく大変な追跡調査を、また、すぐにできるかどうかよく分からないですけれども、少なくとも数年前まではそういう結論だったと言えます。あと、学部によっては、独自の追跡調査を熱心にやっているところもあります。

○林教授

AO学生のGPAというのは、当然入選研で各国立大学はやっておられると思いますけれども、九大もやっておりまして、決してどちらかに、つまり、トップばかりとかボトムばかりではありません。選抜単位なり学生の素質によって違うわけで、だからこそ195名がいまだにAOを続けているというわけですね。

つまり、大変に失礼な言い方ですが、世間でAOがというふうな議論をされるのは、私は非常に憂慮しております。先ほども挙げましたけれども、ここには私立大学の方もいらっしゃいますので、丁寧にご説明申し上げますが、我々国立大学は12%しかAOの学生はおりませんで、そこは非常に丁寧に見させていただいています。私立大学の

割合はここでは申し上げませんが、そこはきちっと分けていただかないと、もちろん私立にもいろいろありますから、これ以上言うと墓穴を掘ることになるのであまり言いたくないのですが、我々は追跡調査をした結果として、AO 入試は続けて大丈夫なのだという結論を得て続けているということでご理解をいただけるのではないかと思っております。

ですから、AO 入試という一括での議論というのは非常に危ないというか、関与している教員としては非常に情けないというか、寂しいという気持ちを多分このフロアの何人かの先生方は共有してくださるのではないかと思っていますが、AO 入試という言い方、AO 生という言い方は、もうそろそろ皆さん脱皮していただけませんでしょうかという気がしております。ですから、うちの AO 195 名はそれぞれ良い面も悪い面も当然あります。学生ですから、全部良いなんていうことは、本当は良い面だけを言っておくと後々私は褒められるかもしれませんが、もちろん悪い面も当然あります。だけど、彼らは 2,600 名ぐらいの学生の中の一個人として活躍をしてくれているということです。

それとあと、21 世紀プログラムは 26 名おりますが、4 年間で百何名おりますけれども、トビタテ！ジャパンというのが始まりまして、今 3 期の募集を終わったと思いますけれど、1 期、2 期でそれぞれ 3 名、百何人のうちの 3 名ずつが 1 期、2 期で出ていきまして、3 期で報告を受けているところでも 3 名だと思いますが、つまり、毎期 3 名ずつ出ていっているというふうなことにもなっていますし、九大の中には、山川健次郎というのが初代総長の名前ですが、山川賞という年間相当なお金がもらえる賞が九大生に対してアプライできるのですが、その権威ある賞を年に複数人がもらっていて、良いなと個人的に思うぐらいの学生も 21 世紀プログラムにおりますので、繰り返し申し上げますが、AO という言い方での議論はもうそろそろ終えたいというふうに思っておる次第です。失礼がありましたらお許しいただければと思います。以上です。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。それにも関連してのことになるかもしれないんですけれども、今は大学で学生の評価というと、すぐにある意味手軽に使える GPA というものを使って学生の評価をしようという、あるいはしているという状況があると思うんですけれども、今回の中教審答申の内容を踏まえると、今後大学の教科、学力といいましょうか、GPA を使った学生評価だけではだめで、ほかのいろいろな評価の指標といいましょうか、評価の方法を考えていく必要があるだろうというふうに思うんですけれども、そのあたりは各大学は何か検討、あるいはチャレンジ、将来こんなことをやるというような計画はございますでしょうか。

○河添学部長

慶応の場合、学部によって随分差があると思うのですけど、一応 SFC の２学部では、先ほど申しましたように GPA にはあまり重きを置かないと思います。もちろん今回文科省が GPA 等の導入を云々という以前から GPA 制度はちゃんとはやっていますけれども、それで学生個人を評価するということはほぼしてないです。もっとも評価の対象にしているのは、卒業制作と言っていますけれども、卒業論文、あるいは作品を作る人もいますけど、そこの評価で、優秀な学生に対してアワードをあげる制度を設けています。アワードをもらうと、学部長から表彰される、4 年生であれば卒業式のときに表彰するという形です。4 年間の成果物を担当の先生が評価し、良ければアワードに推薦して、審議を受ける。受賞することは学生にとってもっとも名誉なことという位置づけになっています。

○倉元准教授

うまくニュアンスを伝えられるかどうか分からないのですけれども、「評価のための評価」にあまり大きな労力を注ぐのはどうかな、と個人的には思います。とにかく、学生の人数も 1 万人を超えるだけいるわけなのですし。ざっくり考えるとすると、ほかには大学院進学率という指標が考えられますね。これも学生の入学区分がどうであるのかということを比較して、研究室で評価をやったりとか、学部によってはそういうようなことも試みています。

学部ごとでやっている追跡調査の例では、例えば細かい話になってすみませんが、最後、農学部が推薦入学を残していました。GPA だけで見ると推薦の学生は非常によかったんですが、どうも大

学院の進学率が悪いということが分かりました。調べてみると、推薦では英語を課していないので、英語の成績が悪くて、その後、研究の方向に進まない、というようなことが分かって、選抜資料として独自の英語の試験を入れたAO入試に変えました。そういった例はありますが、評価のところだけに労力を注ぐのはどうなのかな、と個人的には思っています。

○林教授

非常に難しい質問でございまして、GPAがちゃんとした学生の評価になっているのかというのは、非常に私も懐疑的には思っておるのですが、ただ、私はもう一方でAPプログラムの委員もしておりまして、あの申請書の中には、GPAの導入状況を記述する部分があって、そこをちゃんと記載しなさいというふうに。だから、あの会議で、これもうちょっとちゃんと説明したほうが良いんじゃないのというふうに言ったのは、実は私なのですけど。

うちの大学に話を戻しまして、GPAは評価の仕方を若干変えるというのはありますけれど、古来からの優、良、可とそれほど、グレードのサイズが違ったぐらい以外の違いはないように思っています。ただ、現状だけ申し上げますと、21世紀プログラム以外の多くの学部は、研究室だとかコースを選ぶ際、例えば農学部の場合はコースを選ぶわけですが、その際の指標に使われていますし、研究室選抜のための指標にも使われているのは事実です。唯一21世紀プログラムの場合だけは他流試合をしていますので、αの学部のAとβの学部のBをどういうふうに評価するかがなかなかGPAだけでは見えないものですから、そういう意味で、GPAが唯一外れてしまっているというか、実質的に機能しないようになっているのが21世紀プログラムで、先ほど4年目に卒業研究のために先生のところに行きなさいと言いましたが、我々のところは2,100名教員がおりますが、その先生に対して私の卒論を見てくれというふうに行きなさいといったときに、もちろんGPAを示して行きなさいと。このGPAじゃダメという先生がいるかもしれないし、あなたはここの部分を熱心にやったのならうちに来ても良いよという形で説明材料にすると。26人の学生は全員研究を見ていただく先生を自分で2,106名の中から選ばないといけない。だから、彼らには相当苦しい試練が待っているわけでして、そのために、私はこういう成績を収めて、この部分ではAですよ、だけどこの部分はBですよということをきちっと説明できる体力を持って、自分が魅力を感じる先生を見つけていらっしゃいという言い方をしていますので、ちょっと話がずれましたけど、GPAの利用の仕方というのはまだ道半ばのような気はしています。すいません、ちょっと長くなりました。

○司会（真鍋）

ありがとうございます。あと、質問によりますと、これも全員の方に質問ということなんですけれども、志望理由書の提出というものがあるけれども、選抜するためにどういう観点で評価しているかということをお尋ねになっておりますが、いかがでしょうか。

○河添学部長

志望理由書は、うちでは1次審査という形でチェックするわけですけれども、大学に入って何をしたいか、今何をしているか、要するに個人が見える文章かどうかというところが一番ポイントになります。いわゆる憧れ文と言っていますけれども、大学のすばらしさに憧れて、入学したらこういうことをやりたいというだけでは0点というか、誰も評価しません。でも、自分の高校時代の体験に基づいて、こういうことをやってみたい、高校でここまでやったけれども、その続きを大学でやってみたいとか、そういう個人にしか書けない志望理由というのが一番高い評価を得ます。そういった意味で、志望理由書は非常に大事だというふうに位置づけています。

○倉元准教授

志望理由書そのものを評価している学部もあるにはあるのですが、「面接の参考」にするという程度のスタンスを取る学部が多いと思います。正直、事前に作られる書類は、誰が書いたか分からないという前提です。場合によっては、高校の先生方の熱心さと作文力を評価しているようなことになりかねないですので。全体としてはそんなに信用してないよ、というのは様式の出し方で分かると思います。インターネットに上げてありまして、ダウンロードして打ち込みでもいいよ、という学部さえあります。ただ、面接をすると、少なくとも本人が書かれたこと、内容を把握している

かどうかは分かります。書類を評価する場合、面接と組み合わせるのが絶対条件かな、と思います。

あと、日程の問題もあって、特にセンター試験を使うⅢ期なんかだと、出願期間がタイトで慌ただしいものですから、「事前に書類だけは準備をして、センター試験の自己採点を見ないで第1志望だったら出して」とは言ってはいるのですが。その辺の限界も私どもの仕組みだとあるかなとは思っています。

とにかく、志望理由書、私どもは志願理由書と呼んでいますが、それは書いてもらうことに意義がある、それを考えてもらうことに教育的な意義があるというところが一番大きいかなと思います。

○林教授

私のところは、シートの 14 枚目に書いた通りでありまして、AP や求める学生像との一致度ということで、先ほど申し上げた通り、資格は取れないよ、あなたのやりたいことは1学部で閉じているよということであれば、それは高校の成績その他に関係なく、彼らの夢が実現できないわけですから、お帰りいただくしかないということですし、もう一つは、海外で活躍したいと言いつつ、その英語の成績はいかがなものかという場合には、それも帰っていただくしかないのは事実であります。

もちろん今お二人の先生がおっしゃった通り、誰が書いたか分からないということは私たちも実は頭の片隅に置きつつ拝読させていだだき、なおかつそれでも2次選抜に高いパフォーマンスを示したとしても取れないという方に関してのみ、今の人数であれば、99名程度の志願者であれば、何とかできているということで、先ほどから広報でたくさん受験者を集めたいと片方で言っていますが、例えば500人も来た日にはどうなるかは。だから、ほどほどに来ていただくのがよろしいかなと個人的には思っております。失礼しました。

○河添学部長

先ほど言いましたように、うちの場合は志望理由書というところで3分の1ぐらいの選考をしているので、非常にウエートが高いです。そういった意味で、しっかりと見抜かなきゃいけないのですけれども、25年間やっていると、大人が書いた志望理由書か本人が書いた志望理由書かはすぐ分かるのですね。よく高校の進路指導の先生から、何で落ちるのか、あんなにいい文章を書いたのにと言われることがあるのですけど、そういうときに、添削したでしょうと聞くと、しましたと言うのですね。

私がいつもアドバイスするのは、とにかく大人の添削はやめてくださいと言います。国語の試験じゃないので、あまりにめちゃくちゃな文章は問題外ですが、粗削りの文章でも伝わるものがあれば伝わるのですね。それを大人が添削してきれいな文章にしちゃうと、全く個性のない、きれいな文章だけど、つまらない文章になる。志望理由書を書くのは、一つは動機づけで非常に大事であると同時に、個性を見抜けるのかなと思っています。

○司会（真鍋）

ありがとうございました。ちょうど時間にもなりましたので、私の担当の分を終わらせていただきまして、この企画討論会の趣旨が、大学の主体性と個性をいかに反映させた個別選抜の制度設計になるかということで、今日先駆的な大学の先生方のご意見、ご発表並びにフロアからの質問をいただきました。つたない司会ではありましたけれども、どうもありがとうございました。

では、締めを大久保先生のほうに。

○司会（大久保）

この企画討論会では量的な対応の問題についていまだ未知数ということは確認できたのではないかなと思います。そして、これから各大学がそれぞれ答えを見つけていかれることと思います。一方、今日のお話を伺っていまして、実は気が付いたことがございます。それは、3 大学それぞれの意図を持って AO 入試をやられております。モチベーションを重視したり、あるいは学力を重視したりというようなことがございますが、共通しておりますのは、入学後のカリキュラムと選抜とをきちんと対応させていることです。このことは、非常に注目すべきところではないかと思います。また、今後このような問題を解く鍵になるのではないかと感じております。

長時間と申しましても、2 時間半十分議論が尽くされない部分もございましたが、またこのようなテーマで継続的に入研協の場で話し合いをしていければと考えております。

最後になりますが、今日ご登壇いただきました 3 名の先生、並びに、実は今日のこの会を設定し

ていただくに当たりまして、東京電機大学のスタッフの皆様、それから大学入試センターのスタッフの皆様のご協力をいただいております。また、このような立派で、素敵な会場をご提供くださいました東京電機大学さんに対して併せまして、お礼を込めて拍手を送り、締めさせていただければと思います。それでは、どうもありがとうございました。（拍手）

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成２７年度入研協大会（第１０回）「企画討論会②」

「各大学の個別選抜改革・再考」

― 大学の主体性と個性をいかに反映させるか―

当 日 ス ラ イ ド （ 抜 粋 ） 拡 大 版

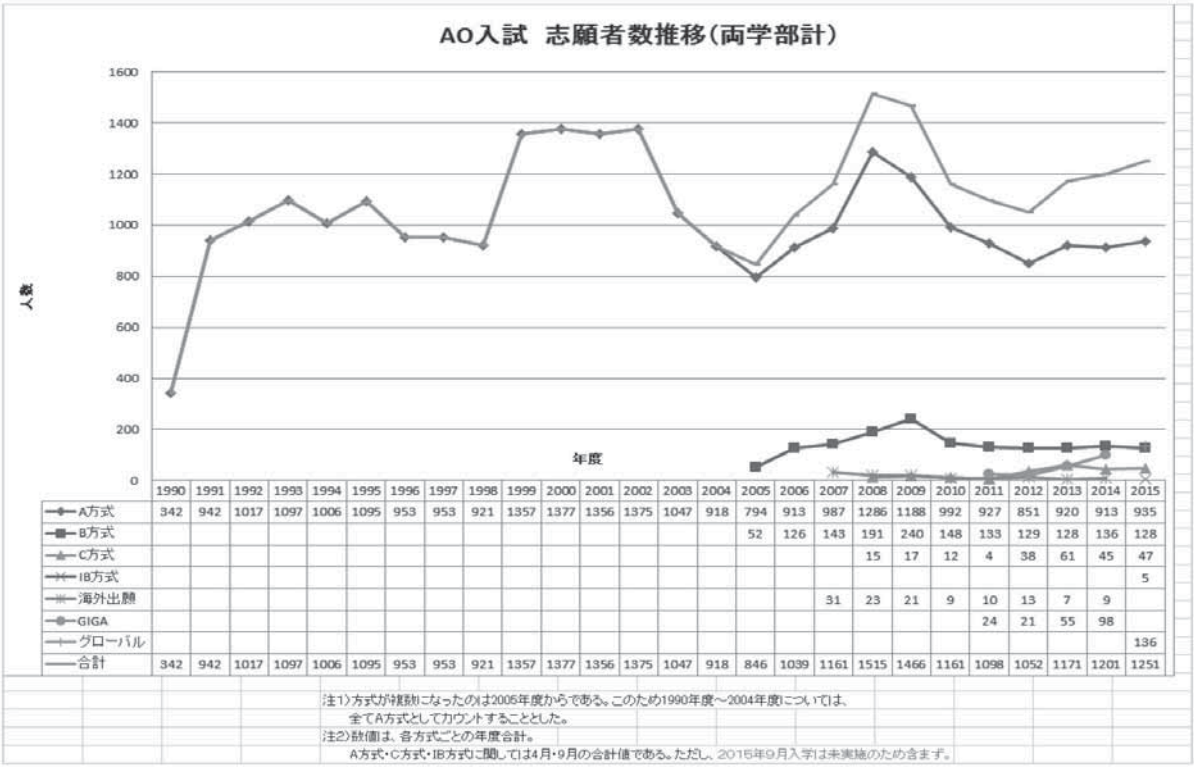
河添　健（慶応義塾大学教授総合政策学部長）

倉元　直樹（東北大学准教授高度教養教育・学生支援機構）

林 篤裕（九州大学教授基幹教育院）

SFC

志願者数推移



	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
A方式	342	942	1017	1097	1006	1095	953	953	921	1357	1377	1356	1375	1047	918	794	913	987	1286	1188	992	927	851	920	913	935
B方式																52	126	143	191	240	148	133	129	128	136	128
C方式																			15	17	12	4	38	61	45	47
IB方式																										5
海外出願																		31	23	21	9	10	13	7	9	
GIGA																						24	21	55	98	
グローバル																										136
合計	342	942	1017	1097	1006	1095	953	953	921	1357	1377	1356	1375	1047	918	846	1039	1161	1515	1466	1161	1098	1052	1171	1201	1251

注1）方式が複数になったのは2005年度からである。このため1990年度～2004年度については、
全てA方式としてカウントすることとした。
注2）数値は、各方式ごとの年度合計。
A方式・C方式・IB方式に関しては4月・9月の合計値である。ただし、2015年9月入学は未実施のため含まず。

出願書類

【全方式共通】

＜必須＞

・志願者に関する履歴等

氏名、写真、生年月日、住所、電話番号、性別、国籍、学歴、高校卒業後経歴、日本国外滞在・居住歴、高校在籍コース等

・志願者評価（2名分）

二親等以内の親族を除く、志願者を客観的に知る立場の2名から、推薦書ではなく評価書として作成

・活動報告　※中学校卒業以降に取り込んだ活動やその成果等

・志望理由・入学後の学習計画・自己アピール（①文書および②自由記述）

・「調査書」等、成績・卒業に関する証明書類

・学校プロフィール（外国の教育制度による高校出身者のみ）

＜任意＞

・任意提出資料

中学校卒業以降のさまざまな分野での取り組みとその成果、および大学入学後の目標や構想実現に必要な意欲や能力等を示すもの。

・国家試験等の統一試験の成績証明書（外国の教育制度による高校出身者のみ）

【C方式のみ】　対象コンテストで所定の成績を収めたことを証明する書面

【ＩＢ方式のみ】　ＩＢの成績評価証明書ないしはPredicted Grades

【グローバルのみ】　自己アピールビデオ（面接の代替の位置づけ）

東北大学における入試のトータルプランニング

―AO入試成功のカギを握る一般入試個別試験の設計戦略―

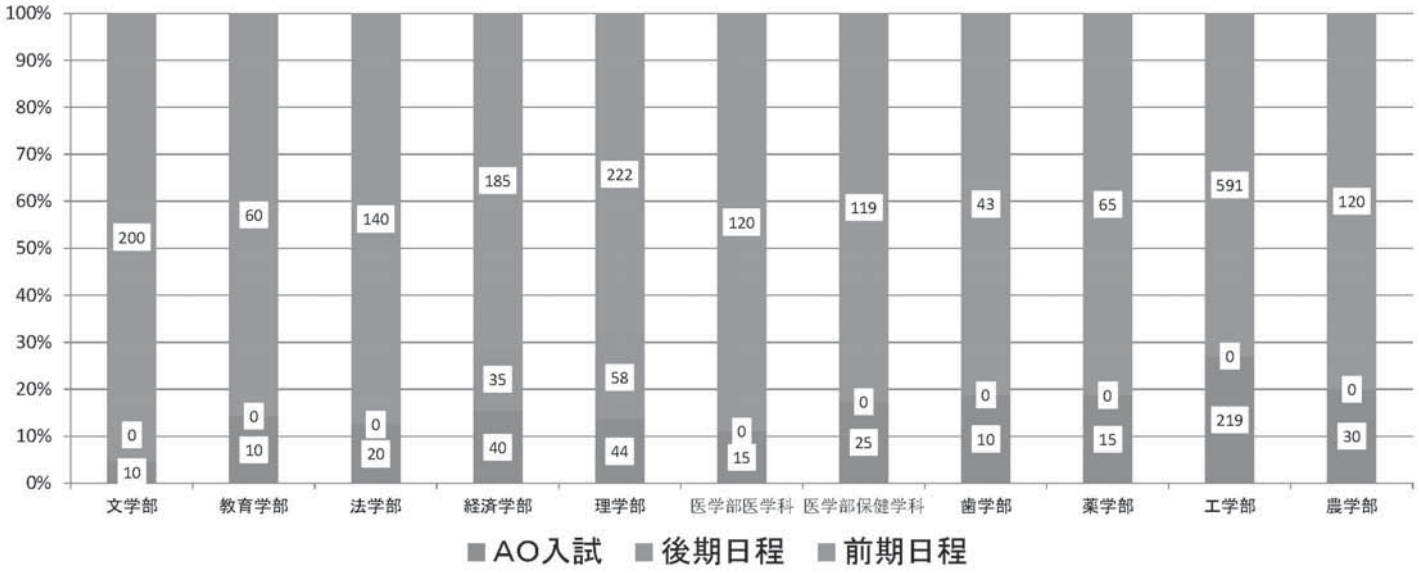
東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元　直樹

東北大学型AO入試の仕組み（4）

学部	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
文学部										Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
教育学部									Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
法学部				Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
経済学部							Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
理学部		Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
医（医）								Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
医（保健）									Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
歯学部	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
薬学部									Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
工学部	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ
農学部								Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ，Ⅲ

当面の方針（1）

平成27年度入試における学部ごとの募集人員比率



東北大学の理念 2
門戸開放

学びたい全ての人の学舎

日本最初の女子大学生は、東北大学で誕生しました

1913年(大正2年)、東北帝国大学に、日本の大学として最初の3人の女子学生が入学しました。黒田チカ(佐賀県)、牧田らく(京都府)、丹下ウメ(鹿児島県)です。彼女たちは、化学、数学を専攻して日本初の女性学士となりました。さらに、黒田は二番目の女性理学博士、丹下は日本初の女性農学博士となりました。

試験管を持った女性が理学部化学科入学の2名(黒田、丹下)を象徴し、七曜紋(しちようもん)が数学科入学の1名(牧田)を表現。全体の紅色は、黒田が博士号を取得した折りに「紅(くれない)の博士」と呼ばれたことに因んでいます。

日本初の女性学士誕生期の写真

医学専門学校に在学した魯迅、ナチスから逃れて教壇に立ったカール・レーヴィットなどの事例もあります

東北大学は、外国人、社会人にも門戸を開いてきました。

たとえば、1904年に医学部の前身である仙台医学専門学校に留学してきた周樹人は、中退して後に文学者となり、魯迅として知られるようになりました。魯迅は、医専時代に師事した藤野先生のことを著作の中に書き残しています。これを記念して、東北大学では附属図書館に魯迅と藤野先生の胸像を設置し、成績優秀な中国人留学生に「藤野先生賞」「藤野記念奨励賞」を贈るようになっています。

また、第二次大戦中の1936～41年には、ナチスの迫害から逃れてきた哲学者カール・レーヴィットを受け入れました。彼はドイツ文学と哲学の講義を担当しました。

魯迅

藤野先生

カール・レーヴィット

(魯迅の写真は東北大学史料館魯迅記念展示室サイトから転載、藤野先生とレーヴィットの写真は東北大学史料館のアーカイブから転載)

女子学生によるサイエンス・エンジェル活動など、女性研究者の育成にも力を入れています

昨年、女子学生入学100周年を迎えた東北大学では、「門戸開放」の理念のもと、女性研究者の育成や男女共同参画の推進に、積極的に取り組んでいます。

一つの試みに、理学、工学、農学、医学など10ある自然科学系大学院に所属する女子学生による次世代の女性研究者育成を目的としたサイエンス・エンジェル活動があります。これまで、母校をはじめとする小中高校出張セミナー、オープンキャンパスでの女子高校生向けセミナー、企業との共催イベント、科学イベントへの出展などを行ってきました。これらの多彩な活動を通じて、研究分野を超えた女子学生同士の交流や、企画力、調整力の向上など学生自身の可能性を大きく広げるものとなっています。

また、女性研究者育成を目指してさまざまなサポート体制を整備しており、女性研究者のキャリアの軌跡をインタビューした『東北大学女性研究者ファイル』の発行、ウェブサイトでの「女性研究者コラム」や「サイエンス・エンジェルコラム」などで、成果を公表しています。

サイエンス・エンジェルによる科学イベント

世界へ開く、時代へ開く

◀東北大学は、全国から入学し、全国へと巣立っていく大学です

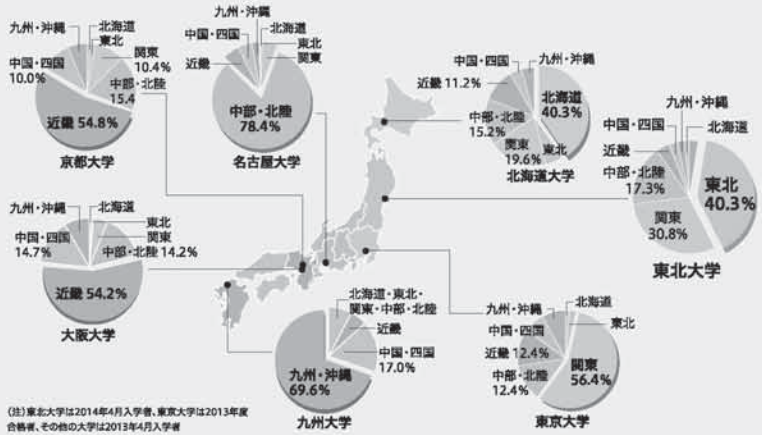
広く門戸開放している東北大学は、全国の高校から入学者があり、全国へ、世界へと巣立っていく大学です。

そして、卒業とともに全国の企業、自治体、学校、研究機関等へと就職していった同窓生は、新制大学になってからだけでも12万人を超えています。

企業に就職した卒業生は、毎年10月の「ホームカミングデー」において、在学生との懇談会などで、貴重なアドバイスを送ってくれます。

ホームカミングデー

■旧七帝大合格者・入学者の出身校の地方別分布



(注)東北大学は2014年4月入学者、東京大学は2013年度合格者、その他の大学は2013年4月入学者

◀2014年3月、国立大学初の「入学前海外研修」を始めました

2014年3月、東北大学に「門戸開放」の新しい歴史が加わりました。

「門戸開放」の精神には、世界に目を開き、時代が求めることに柔軟に対応するという意味もあります。

東北大学では、国際教育の強化という大きな目標のため、全国の国立大学で初めて「入学前海外研修(High School Bridging Program)」を始めました。

AO入試Ⅱ期、推薦入試、科学オリンピック入試により東北大学入学が決まり、早く東北大学で学びたいと奮い立っている高校生を対象に募集(17名参加)し、アメリカのカリフォルニア大学リバーサイド校(UCR)で3月の2週間、研修をしてもらうというものです。いわば、「国際教育への一足早い門戸開放」です。

ホームステイし、英語での授業を受け、UCRの教員からアメリカの多文化社会について学びました。

なお、参加費用の一部は東北大学基金が支援しています。

第1回「入学前海外研修(High School Bridging Program)」の募集要綱

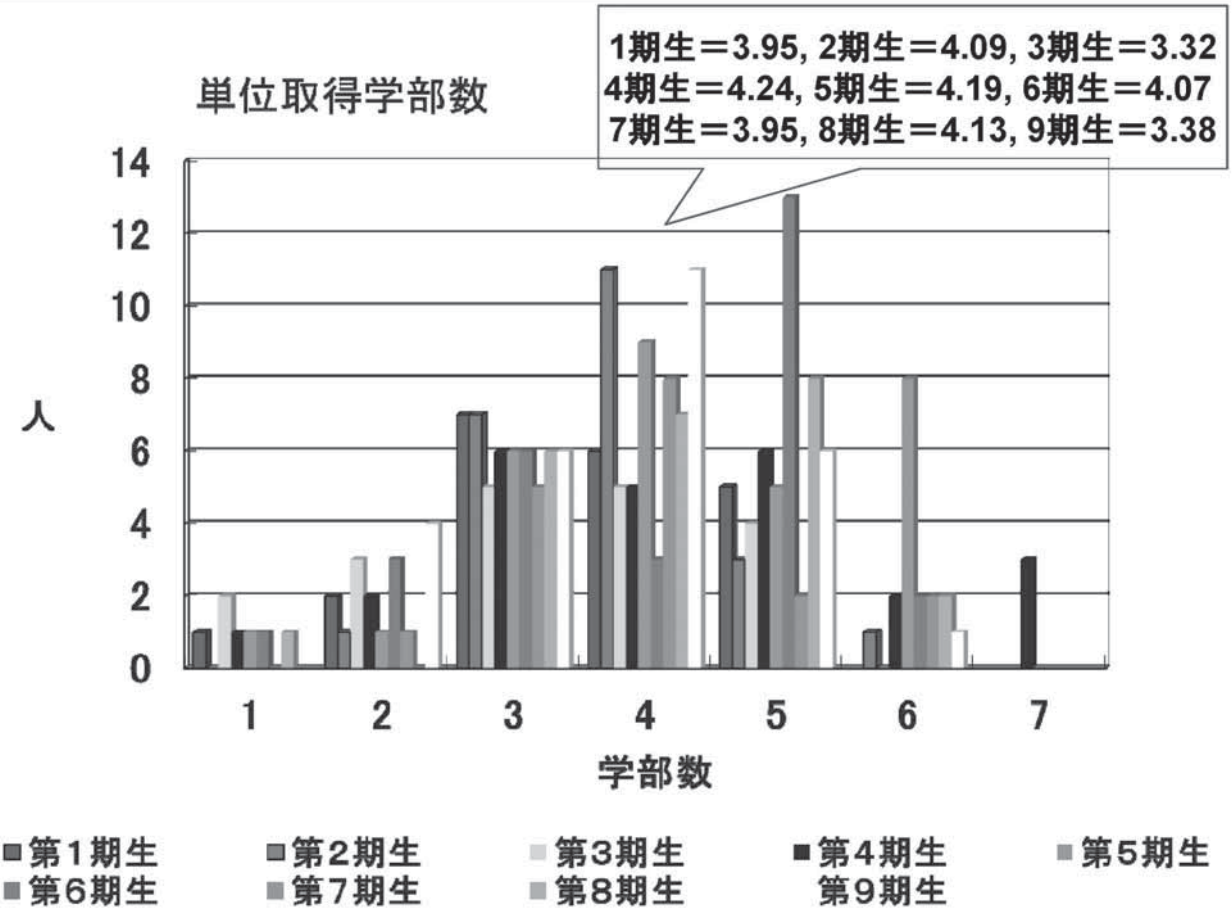
参加者は、入学前からワールドワイドに学ぶ雰囲気を体験することができました。

入研協 企画討論会②（25分）
05/28/15 @東京電機大学(東京)

思考力・表現力・協働性の評価を目指して
——九州大学21世紀プログラムの場合——

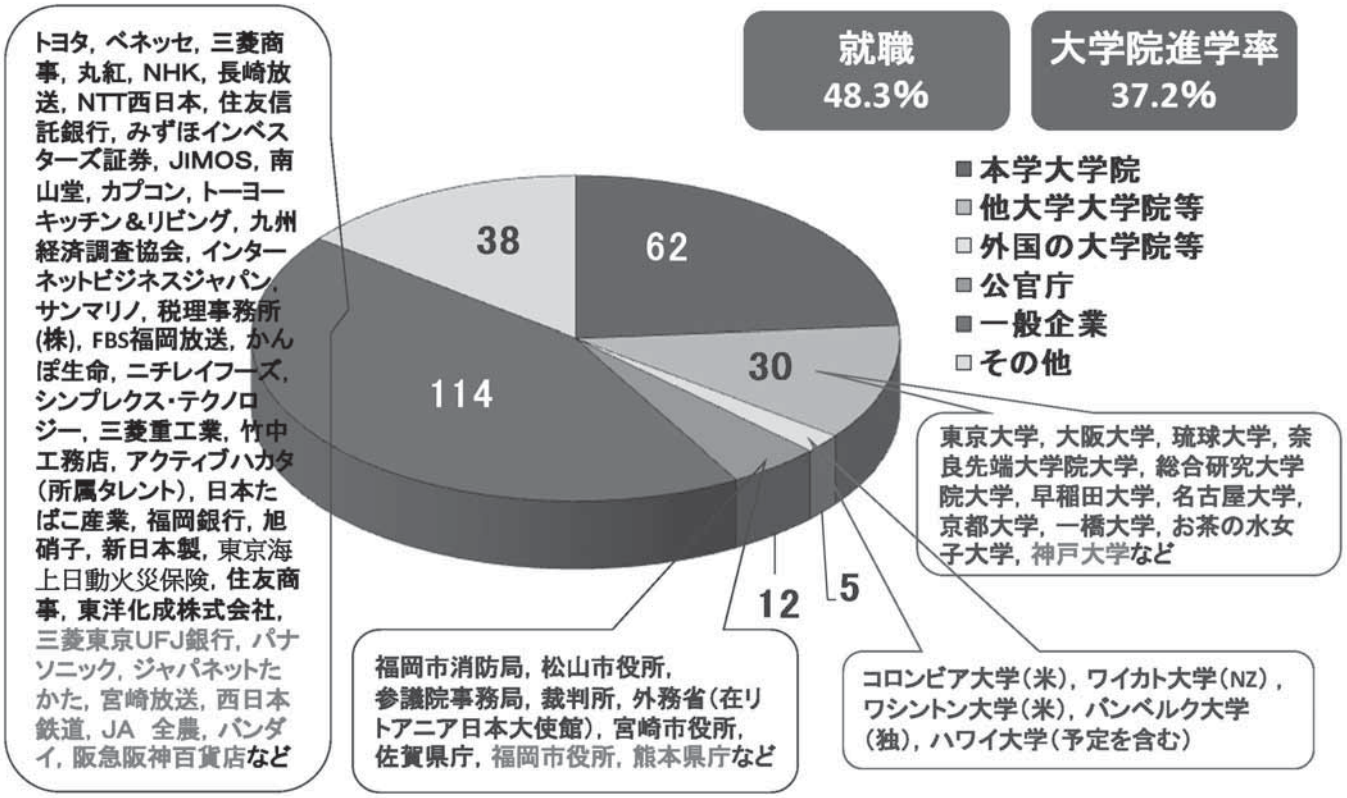
林 篤裕
（九州大学 基幹教育院
& アドミッションセンター）
（21世紀プログラム主導教員）
e-mail: hayashi@artsci.kyushu-u.ac.jp

The 21st Century Program 履修学部数

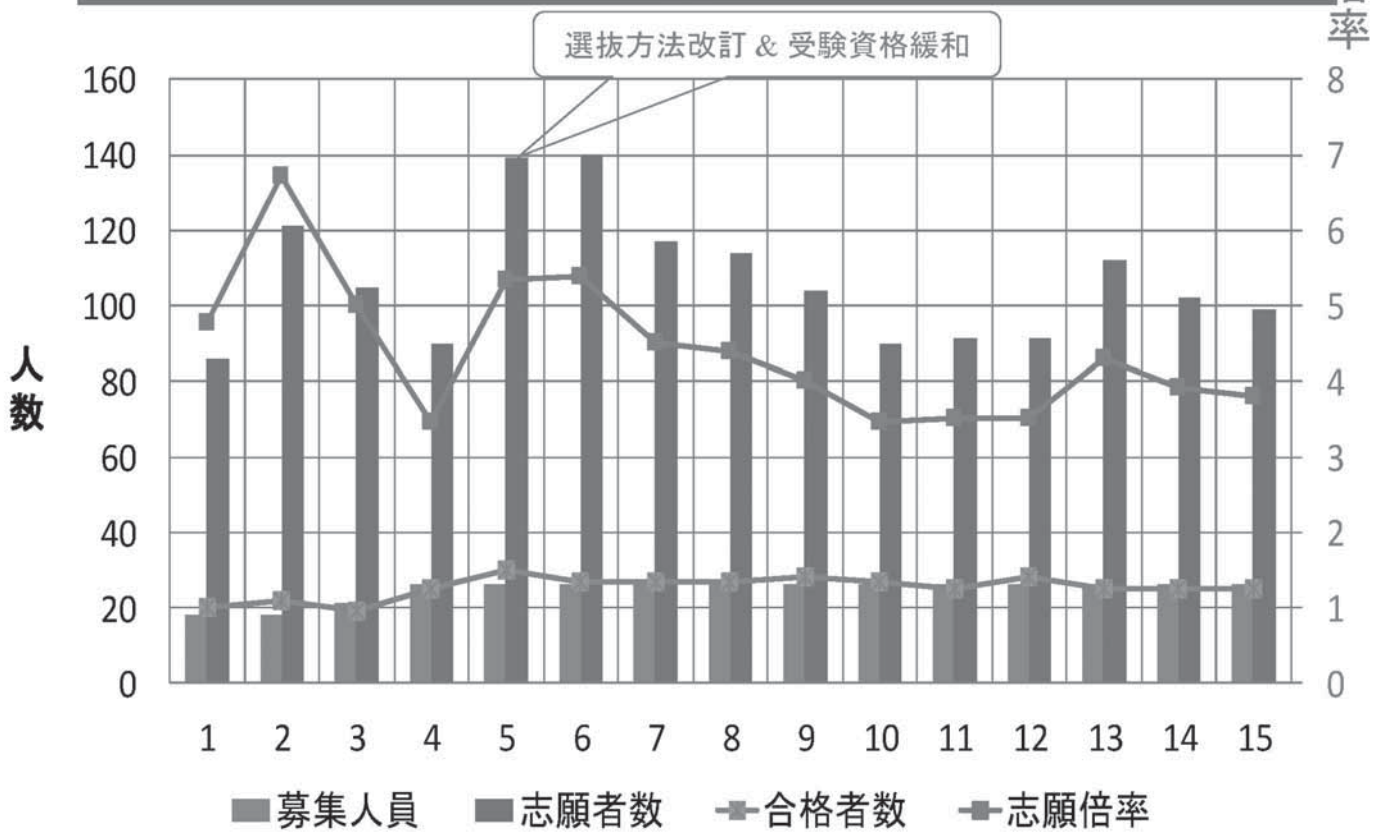


The 21st Century Program　卒業生の進路

卒業した第1期生～第11期生(261名)



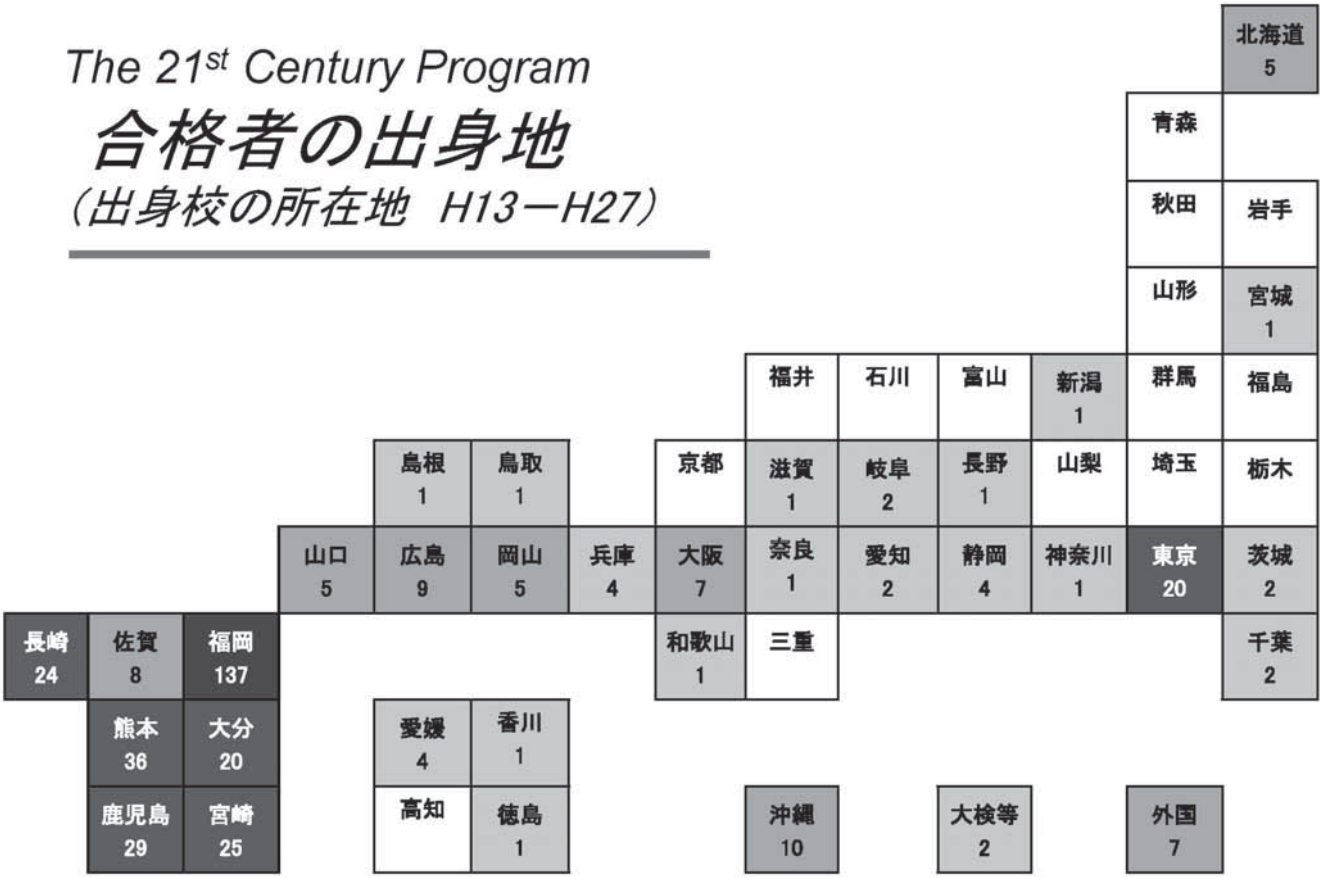
The 21st Century Program　志願者数の推移



The 21st Century Program

合格者の出身地

（出身校の所在地　H13－H27）



特集３

平成２７年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第１０回）
大会関連行事「大学入試センターセミナー」

「大学入試と高校生の学習行動」
日　　時：平成２７年５月２７日（水）１５：００～１７：００
会　　場：東京電機大学東京千住キャンパス１号館　丹羽ホール

司　　会：山村　滋（大学入試センター研究開発部・教授）
報 告 者：濱中淳子（大学入試センター研究開発部・准教授）
ゲ ス ト：水石明彦（埼玉県立いずみ高等学校・校長）

第 10 回全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会
大学入試センターセミナー

大学入試と高校生の学習行動

2015.5.27　於：東京電機大学

プログラム

1. セミナーの趣旨説明
2. 調査結果の報告
3. 報告者とゲストによる討論
4. フロアとの質疑応答

１．セミナーの趣旨説明（担当：山村）

内容

- 入試改革をめぐるどのような問題を取り上げるのか？
- 大学入試センター研究開発部で企画した調査研究プロジェクト
- H24～H26 年度高校生学習行動パネル調査の概要
- 本セミナーの論点

２．調査結果の報告（担当：濱中）

内容

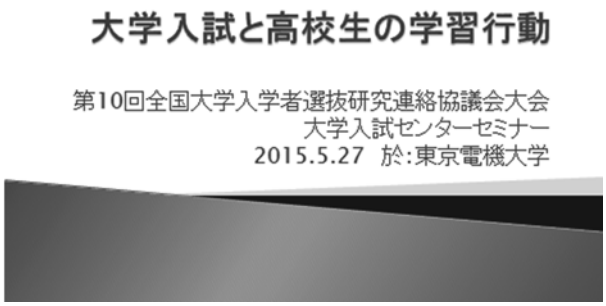
- 問題視されている高校生の学習時間
- 学習時間の推移：正しい理解へ
- 入試へのかまえは学習にどのような影響を与えているか？
- ひとまずの結論：近視眼的な進学中堅校の高校生

３．報告者とゲストによる討論（担当：濱中×水石氏）

内容

- 進学中堅校生徒のどのような特性が学習時間の少なさに関係しているのか？
- 部活動の影響はどう理解されるか？
- 高校時代前半期における学習の意味を見直す
- 教育機能を高める入試に必要な条件

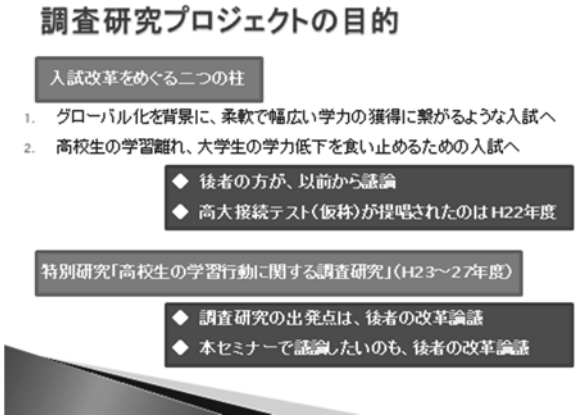
４．フロアとの質疑応答



○司会（山村）

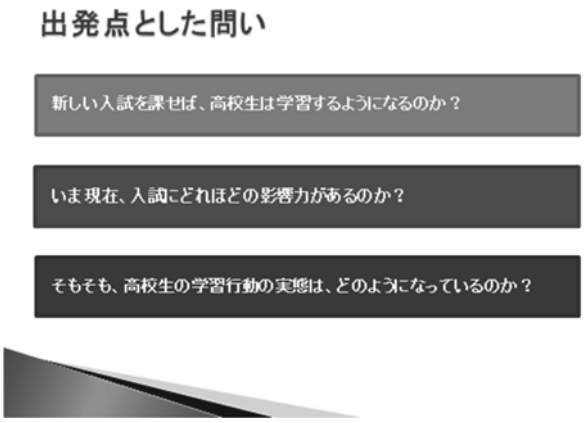
ただ今から、大学入試センターセミナー「大学入試と高校生の学習行動」を始めたいと思います。

報告ですが、まず、大学入試センターの濱中淳子、それから次に、ゲストを今回お招きしまして、後ほど改めてご紹介申し上げますが、埼玉県立いずみ高等学校の校長の水石明彦先生に来ていただきました。司会は、私、山村が担当いたします。

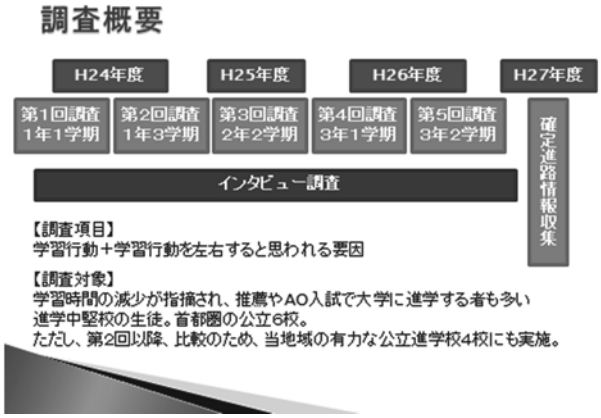


本セミナーは、高校生の学習行動に関する調査研究というものに基づいております。その調査研究プロジェクトの目的ですが、昨今の入試改革をめぐる議論は大きく分けて2つの議論から成っていると考えられます。一つは、グローバル化を背景に、柔軟で幅広い学力の獲得に努めるような入試へということ、もう一つは、高校生の学習離れ、大学生の学力低下を食い止めるための入試へということが柱になっております。

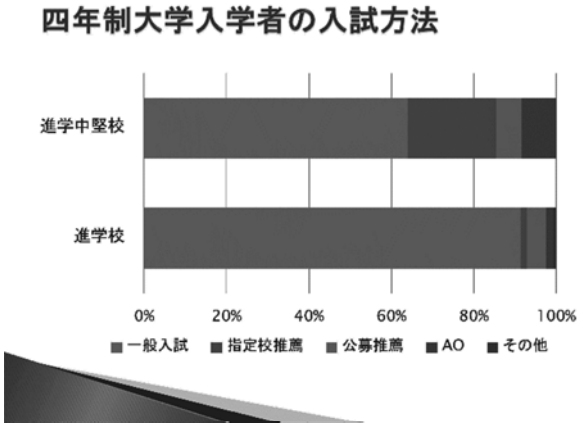
それで、議論の経緯ですけれども、こちらの学習離れ、学力低下ということのほうは以前から議論されておりまして、このあたりは皆さんよくご承知かと思いますが、平成22年度に高大接続テスト（仮称）というものが、当時北大の佐々木先生を中心とする検討委員会から報告が出ております。私たちが高校生の学習行動に関する調査研究、これは平成23年度から5カ年計画、今年が最後になっておりますが、これをやり始めたのは、高校生の学習離れ、大学生の学力低下、こちらの改革論議が一つの出発点となっております。今回のセミナーで議論したいのも、こちらの改革論議にかかわることです。



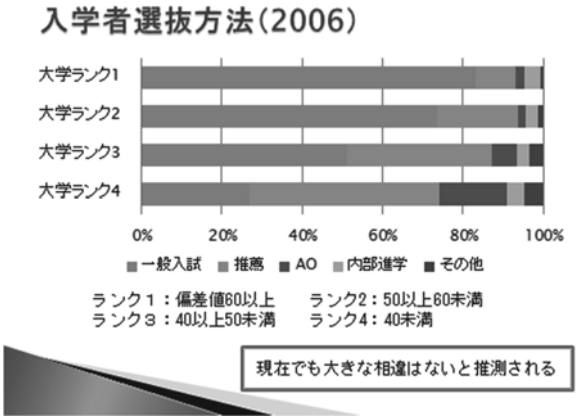
では、出発点、スタートについて簡単に説明いたしますけれども、新しいテスト、高大接続テスト、それから今ですと高等学校基礎学力テストとかありますけれども、そういう新しい入試を課せば高校生は本当に学習するようになるのでしょうか。また、もう少し視野を広げて考えてみますと、大学入試というものに今の高校生に対してどれほどの影響があるのでしょうか。それから、さらに根本的な問いとして、高校生の学習行動の実態はどのようになっているのでしょうか。この辺については、後で濱中からも説明があると思いますが、こういうことを今回の調査研究の基本的なスタート点としております。



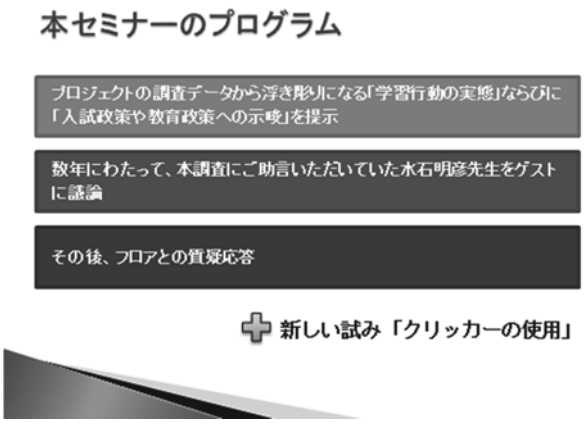
それで、どんな研究をやったかということですが、5 カ年計画ですけれども、具体的には平成 24 年度から 26 年度まで、平成 24 年度に高校に入った 1 年生を追っていく、その間に 5 回調査をする、それから、インタビュー調査を行うということです。対象としているのは、学習時間の減少が指摘されて、推薦や AO 入試で大学に進学する生徒も多いような首都圏の公立 6 校です。それと、比較のために、第 2 回以降ですが、同じ地域の有力な公立の進学校 4 校にも調査をお願いして、研究を進めております。今年が最終年度ですが、進路確定情報の収集を行っている段階です。



では、それらの高校については、どのような高校でしょうか。皆様にイメージを持っていただくために、大学進学のための入試方法について集計してみました。すると、上は進学中堅校、それから進学校ですが、これを見ていただくと分かるように、いわゆる進学校というところは 9 割ぐらいが一般入試で、その他の入試は本当にわずかです。それに対して、進学中堅校ですけれども、64%が一般入試ですけれども、指定校推薦が 2 割少し、それから公募推薦が 6%ですね、それから AO が 8%ぐらいと、大体このような構成になっております。



では、全体で見ると、大学から見たらどのような入試方法が使われているかということですが、これは大学ランク別に見たものですけれども、大学ランク 1 だと一般入試で 8 割以上ですね。それが、一般入試の割合がどんどん減ってきまして、入学偏差値が下がりますと、大学ランク 4 ですけれども、一般入試は 3 割に満たないと、このような状況になっております。これは 2006 年でやや古いデータですが、現在でも大きな相違はないと推測することができます。



以上を踏まえまして、私どもの実施しました調査データから浮き彫りになる高校生の学習行動の実態、並びに入試政策や教育政策への示唆を提示したいというように考えております。また、大学への情報提供としてですが、今回データを提示します進学中堅校、それから進学校の生徒たちがどのように学習に臨んでいるのか、こういうことは高大接続の問題を考える上で重要な情報になると考えております。それから、

もう一つの狙いですけれども、入試改革論議、これは政策側の議論を待って、それを受け入れるという性質のものではないと私どもは考えております。大学関係者自身が現実を知り、適切な判断をして、大学のほうからこういう入試が必要なんだと、そういうことを発信する必要があると考えております。今回提供できる情報というのは、当然限りがありますけれども、フロアの皆さんにそういう情報を提供することで、改めてあるべき姿の入試というものについてお考えいただければと考えております。

それから、今回ですが、数年にわたって本調査にご助言いただいた水石明彦先生をゲストに議論いたします。水石先生は、埼玉県の公立学校 9 校をご経験され、ただいま埼玉県立いずみ高等学校の校長先生をされておられます。3 月までは埼玉県の浦和高校の教頭先生をされておられました。非常にいろいろな、多種多様な高校をご経験されて、非常に高校教育に精通している方ということで、私どもはたいへん多くの助言をいただきました。

それから、その後ですが、フロアと質疑応答を行います。今回新しい試みとして、クリッカーというのを使ってみたいと思います。それでは、初めに練習も兼ねまして、クリッカーを使ってみたいと思いますが、すいません、クリッカーの初めの問いを出してください。

＜クリッカー①＞

ご所属は？
① 大学教員
（入試委員、アドミッション・オフィス等）
② ①以外の大学教員
③ 大学職員
④ 高校関係者・企業関係者・その他

1 つ目の問いですけれども、ボタンがありますので、ボタンを押していただければと思います。皆さんのご所属ですが、大学教員、入試委員、アドミッションオフィス等の教員の方、それからそれ以外の大学教員の方、職員の方、それから高校関係者、企業関係者、その他ですけれども、どうもありがとうございます。これを見ますと、大学、入試委員、アドミッションオフィス関係の教員の方、それから大学職員の方がかなりの部分を占めているということになるのが分かりました。パーセントは、母数が 600 でしたっけ。ですので、パーセンテージが、母数が 600 ですので、数字はこれを足しても 100 になりません。そこはご了承ください。

＜クリッカー②＞

出身高校のタイプは？
① 進学校
② 進学中堅校
③ 専門高校・専門学科
④ その他・わからない

では、もう一つ、次にお聞きしたいと思います。皆さんのご出身高校のタイプですが、進学校と思われる方、それから進学中堅校、それから 3 番はちょっと質が違いますが、専門高校とか専門学科の方、それからその他、分からない方。どうもありがとうございました。これを見ますと、進学校の方が割合としては一番多い、その次が進学中堅校ということになるようです。どうもありがとうございました。

ちなみに、押し間違えたら、正しいと思うボタンを押すとそちらに変わるそうですので、そんなにややこしい操作ではないと思います。

それでは続きまして、まず濱中から報告をいたします。

報告

分析からみえてくる 進学中堅校生徒の実像

大学入試センター研究開発部
濱中 淳子

○濱中准教授

大学入試センターの濱中でございます。山村から、今回のセミナーの趣旨説明、目的について説明がございましたけれども、ここからは私が報告をさせていただきます。

なお、今回は、新しい試みとして、ゲストとしてお越しいただいた水石先生と対談形式で議論を進めてみたいと思います。この対談形式は、私にとっても初めての試みで、うまくいくか分からず緊張していますが、水石先生は、現在、いずみ高等学校という職業系高校の校長先生をしていらっしゃいます。その前は、ご存じの方も多いかと思いますが、進学校として有名な浦和高校の教頭先生というお立場でいらっしゃいました。本日は、いずみ高等学校、浦和高等学校はじめ、これまでお勤めになってきたさまざまな学校の状況を踏まえながら、現場ならではのご意見をお聞きしながら、話を進めていきたいと思います。

では、早速パネル調査の分析結果、この後の対談のたたき台ともなる報告を始めたいと思いますが、せっかくですので、私もここでクリッカーを使用したいと思います。話を始める前に、皆さんの立ち位置といいますか、状況というものを知っておきたいといいますか、皆さんとも共有をしておきたいということもございまして、3つほどご回答ください。

＜クリッカー③＞

あなたが大学進学の際に利用した
入試方法は？
① 指定校推薦・公募推薦
② AO入試
③ 一般入試
④ その他
（留学、内部進学、大学に進学していない等）

こちらに質問が書かれています。「あなたが大学進学の際に利用した入試方法は何だったでしょうか」。「1 番、指定校推薦、公募推薦」。「2 番、AO 入試」。「3 番、一般入試」。「4 番、その他」。留学、内部進学、大学に進学していない、短大とか専門学校をご卒業された方とか、そういったケースと捉えていただければと思いますが、それでは状況を教えていただけますか。私も押してみます。ありがとうございます。分布をみると、皆さん一般入試で大学に進学された方がほとんどというような感じです。

さて、今からお話しします進学中堅校の生徒さんたちは、指定校もしくは AO 入試を使う方も多い学校で 3 年間を過ごしています。そういう世界での学習行動がどういうものになっているのか。こうしたお話しするということを念頭に置いておいてください。

＜クリッカー④＞

高校2年生頃のふだん（平日）の学習時間は？
① まったくしなかった
② 30分程度
③ 1時間程度
④ 2時間以上

あと 2 つ、質問をさせてください。2 つ目の質問は「皆さん自身の高校時代を振り返ってみてください。特に高校 2 年生の真ん中ぐらいのときのことを思い浮かべていただきたいんですけれども、皆さんのふだんの学習時間はどれぐらいでしたでしょうか」。私も押してみます。大きく分かれますが、一番多いのは 2 時間以上。皆さんさすが一般入試で入られただけあって、すごく勉強熱心な高校時代を過ごされた方がとても多いということを、まず私も頭に入れておきたいと思います。

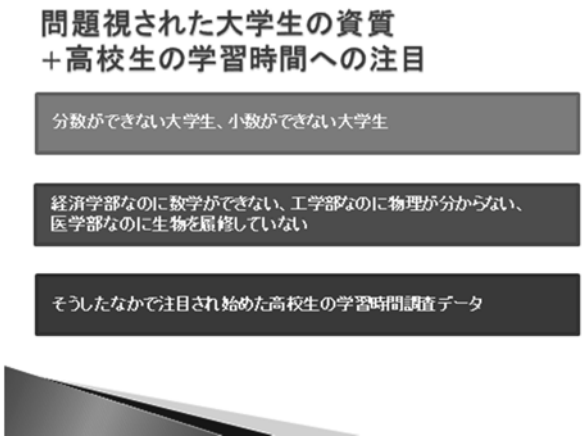
＜クリッカー⑤＞

高校2年生頃、大学入試の存在は勉強の動機
づけになっていた？
① 非常になっていた
② ややなっていた
③ あまりなっていなかった
④ まったくなっていなかった（その他含む）

では、最後に 3 つ目の質問にいきたいと思います。「高校 2 年生のとき、大学入試の存在は皆さんご自身の勉強の動機づけになっていたでしょうか」。ありがとうございます。非常になっていたという方がとても多いということがよく分かりました。ややなっていたを足し合わせても 150 人ですから、「なっていた」という方が 6 割、7 割ぐらい。では、これからお話しするのはちょっと違う世界だというようなことを頭に入れておいてください。

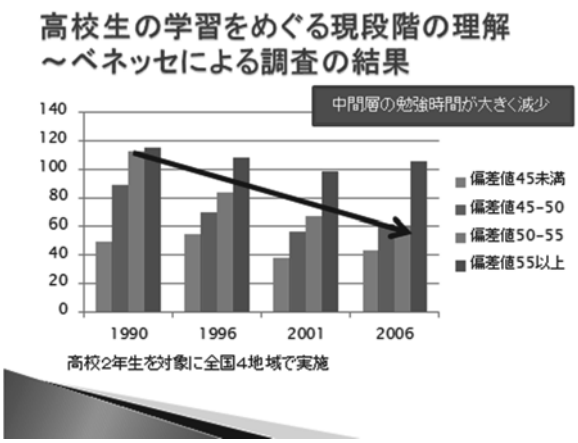
では、現代の高校生の学習行動、特に進学中

堅校の学習行動なんですけれども、先ほど山村からも説明いたしましたように、対象となっている学校の生徒さんは、およそ6割弱が一般入試で進学をして、2割強が指定校で進学します。1割前後が公募とAOといったような状況です。そのような生徒さんたちがどのような学習行動を取っているかということを報告したいと思いますけれども、まずその前に、高校生の学習行動についてどのようなまなざしが現在向けられているのか、その点を確認するところから始めていきたいと思います。スライドを戻していただいてよろしいですか。ありがとうございます。

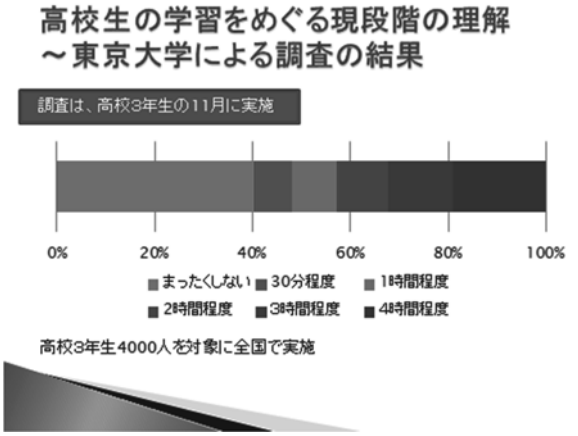


今から大体15年ほど前、2000年ぐらいのことになると思うんですけれども、大学生の資質を問題視する声がとても大きくなりました。とても象徴的だったのが、分数ができない大学生、小数ができない大学生――こうしたタイトルの本が出版され、話題になりました。また、経済学部なのに数学ができないとか、工学部なのに物理ができない、医学部なのに生物を知らない、そういった人たちも増えてきた。そのように、今の大学生は大丈夫なのかなということが言われるようになったわけなんですけれども、こういった大学生の資質が問われていく中で、だんだん高校生たちの学習がどうなっているのかと、そういったことが注目されるようになりました。

そして、代表的な2つの結果がよく政策論議の場で用いられるようになりました。



まずは1つ目、こちら、ベネッセさんの調査です。ベネッセさんの調査は、高校2年生、先ほども皆さんに高校2年生の状況をお聞きしましたけれども、高2の6月時点でふだんどれぐらい学習時間を取っているかということをまとめた結果になっています。時系列で1990年、1996年、2001年、2006年と追えるようになっていて、全国4地域で実施した調査になっているんですけれども、特に注目されるのはオレンジのところです。要は中間層と言われるようなところの学習時間がわずか15年間で半減しているという結果であり、かなり注目されました。これはどうにかしなくちゃいけないんじゃないか。そういった気持ちとか焦りをかきたてるようなデータになっています。

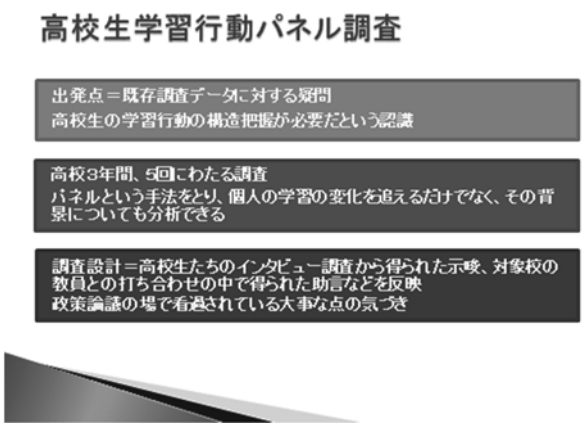


もう一つよく使われるのが、こちらの結果になります。こちらは、東京大学が2000年代に実施しました高校3年生への調査です。高校3年生の11月時点で、あなたはふだん授業以外でどれぐらい勉強していますかというような質問に対して、こういった分布が出てきました。これでよく注目されるのが、全くしないが4割

というところです。高３の秋という大事な時点で全くしないのが４割なんて驚きだ、これもどうにかしなくちゃいけないんじゃないかという主張へと結びつくわけです。

調査データが教えてくれることは、とても大きいものがあります。高校生の学習時間というのは確かに少なくなっていると思われますし、改革の議論を起こしたくなる気持ちも分かります。ただ、注意しなければならないのは、ベネッセさんの調査も東大の調査も、現状の一側面にすぎないということです。言ってみれば単発の調査であって、学習時間が３年間でどういうふうに変わっていくのか、そういったような全体像をつかんでいないという問題があります。

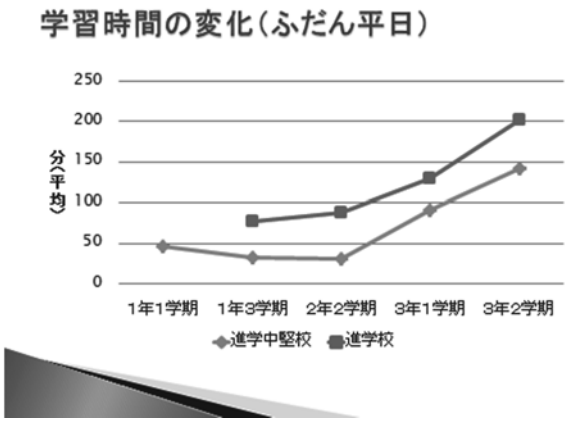
また、こうした実態をベースに入試改革論へといくのは､やや短絡的に過ぎるとも言えます。高校生が学習しなくなっているにしても、何でそういうふうになっているのか、入試を変えたところでどれぐらいの影響力があるのか、高校生の学習行動の構造把握、それをした上で、何をすべきなのかということは議論すべきではないかと思われるわけです。



私たちのパネル調査の出発点は、なにより高校生の学習行動について、もう少し広い視野から把握し、そのうえで必要な施策を考えたい、というところにありました。そして、高校３年間、５回にわたる調査を実施。追跡調査というかたちをとりましたから、たとえば、ある A さんについて、高校１年生１学期、１年３学期、２年の２学期、高３の１学期、高３の２学期、この５時点においてどのような学習行動を取っているのかが分かるような調査になっています。パネルという手法で、個人の学習の変化を追えるだけではなく、どうして学習するようになったのか。そういったことも分析できるデータになっています。

あともう一つ私たちが強調しておきたいのが、調査設計の改良作業についてです。高校１年生のまず１学期の第１回目の調査をするときは、いろいろ先行研究を踏まえながら、私たちなりに枠組みをつくったわけなんですけれども、私たちの知っている世界というのは限りがあります。そうした中で、パネル調査では、高校生たちのインタビュー調査もやってまいりました。５年間で合計百数十名の高校生の話を聞いています。こういった高校生の声から得られた示唆、あと、対象校の先生方との打ち合わせの中で得られたご助言を反映しながら、他方でキーとなる項目は変えないまま、調査を改良していきました。生徒や先生方からは、私たち自身、そして政策論議の場で看過されている大事な点を気づかせてくれたと思っております。

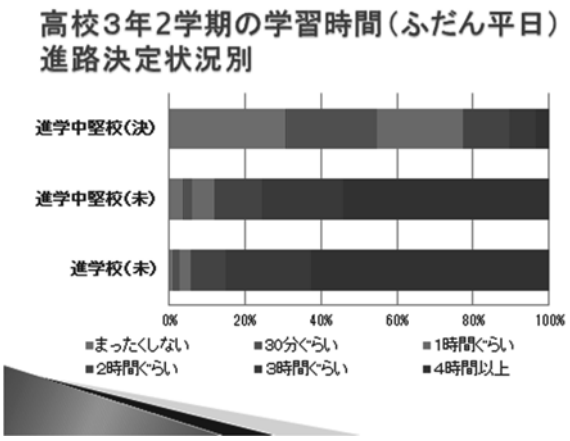
では、このパネル調査データからどのような学習実態が見えてくるのか、いよいよ具体的な結果の報告に入りたいと思います。「学習時間の推移　正しい理解へ」と小タイトルを書きましたけれども、首都圏のデータという限界はありますが、データから見えてくるのはこういったことです。



こちらは学習時間の変化で、ふだん、平日の推移になります。水色が進学中堅校、赤色が進学校の推移になります。まず、1 年の 1 学期は、皆さんまだ入学して間もなく、高校生になって頑張ろうという意欲が持続していると言いますか、平均にして 1 日 50 分勉強しているというようになります。しかしながら推移を追っていきますと、1 年の 3 学期にその学習時間は減ることになります。そして 2 年の 2 学期は減ったまま。3 年の 1 学期になって、ようやくまた学習時間が増えるというような推移になります。3年の2学期になると、さらに学習時間は増え、ただ、これはあくまで平均値なので、もうちょっと分布というような情報をご提供したほうが分かりやすいかもしれません。

1 年の 1 学期は、全くしない、もしくは 30 分ぐらいしかしないという進学中堅校の生徒さんは 5 割です。それが、1 年の 3 学期になると 7 割に増えます。進学中堅校の生徒さんの 7 割が 30 分以下、もしくは全くしない、そういった勉強時間になります。それが、2 年の 2 学期になっても同じような状況が続きます。3 年の 1 学期になるとさすがにみなさん学習に時間を割くようになり、3 年の 2 学期になると学習する生徒の比率はさらに伸びていくというような状態になります。

そして、このグラフでもう一つ指摘しておきたいのが、進学校との差です。2 つのグラフはずっと平行して推移しておりまして、差が縮まる傾向は見出せません。ただ、3 年の 2 学期、進学校と差がある状況が見受けられますけれども、進学中堅校は指定校推薦や AO で決まっている人も含んだ数字になっていますので、ここで進路未確定者だけに限定すればこのような分布になります。



一番上が進学中堅校で決定した人です。全くしないという人たちが 3 割ぐらい、30 分ぐらいという人も同じぐらいになっていて、大体 5 割強ぐらいが 30 分以下という高 3 の 2 学期になっています。それに対して、進路が未定の生徒さんはさすがにまだ勉強しています。進学校ほどではないんですけれども、4 時間以上という人たちが進学中堅校でも 5 割を超えている。さすがに切羽詰まった状態では勉強するというような状況が見えてきます。

さて、このように 3 年の 2 学期には進学校の生徒にかなり近い状況で学習はするんですけれども、ただ、先ほども申し上げましたように、基本的に学習時間は多くなく、30 分以下が 7 割という高校前半期を過ごしているのが進学中堅校の生徒さんになります。

＜クリッカー⑥＞

進学中堅校生徒の学習時間を伸ばすために、
有効な方法は？

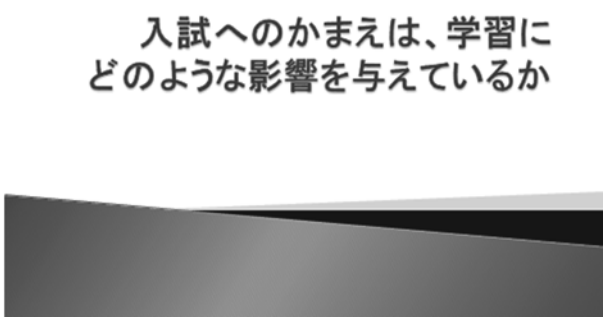
① 進路指導・キャリア教育の強化
② 定期考査の改善
③ 協同学習のための場づくり
④ 大学入試改革

この事実を見た上で、さらに議論を進める前に、皆さんに一つご意見を伺ってみたいと思います。「こうした進学中堅校の生徒さんの学習時間を伸ばすために、有効な方法は何だと思われますか」。ここでクリッカーの出番です。「1 番、進路指導・キャリア教育の強化」。「2 番、定期

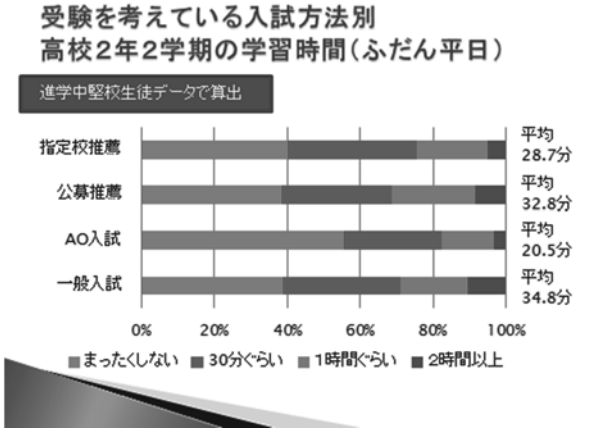
考査の改善」。「3 番、協同学習のための場作り」。「4 番、大学入試改革」。では、押してみてください。

ありがとうございました。大学入試改革はあまり人気がないですね。入試改革しなくていいんじゃないかというような気になる分布ですけれども、この 4 番目の選択肢、大学入試改革とかかわる話として、現在の大学入試が進学中堅校の生徒の学習時間にどのような影響を与えているのか、この点を確認する分析結果をご紹介したいと思います。

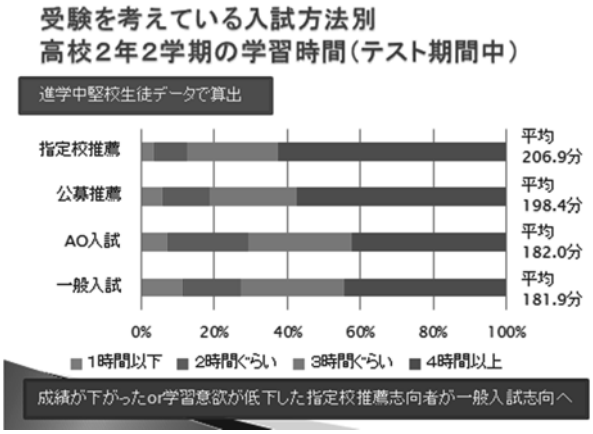
いま少し具体的に申しますと、学力不問入試、推薦とか AO とか、そういった入試は学習時間を少なくさせる原因になっている。だからこそプレッシャーとなる何らかの学力試験を課すべきという議論を、会場の皆さんも一度は聞いたことがあると思います。実際、すごくよく聞かれる議論なんですけれども、では、データからはどういうことが見えてきますでしょうか。スライドを元に戻してください。



入試へのかまえは学習にどのような影響を与えているのか。



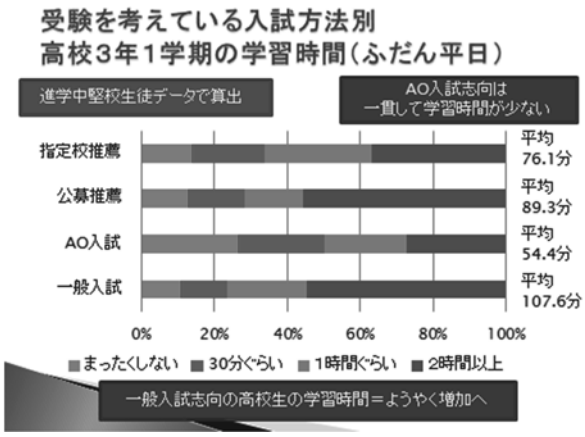
まず、2 年の 2 学期までどの入試での進学を考えているのか、こういったことは、ふだんの学習時間にほとんど影響を与えていません。指定校推薦で進学を考えていようと、公募で考えていようと、一般入試で考えていようと、いずれにしても皆さんあまり勉強はしません。高校 2 年生まで、どのような入試で進学しようと考えているのか、このことと学習時間とのあいだにはほとんど関係がありません。唯一関係があるといえるのは、AO 入試でしょうか。AO 入試での進学を考えている人たちは、とりわけ学習時間が少ないという状況が見えてきますが、AO 入試を除けば、多くの生徒が想定している一般入試と指定校推薦の 2 つに関して言えば、ほとんど学習時間に影響を与えていないということになります。



ただ、これがテスト期間中になると少し状況が変わります。テスト期間というのは定期考査のことなんですけれども、同じ 2 年の 2 学期、テスト期間中のグラフはこうなります。どのように関係しているかといえば、こちらのグラフにあるように、指定校推薦での進学を考えている者のほうが多くの学習時間を割いているという傾向が出てきます。20 分ぐらいの差ではあるんですけれども、統計的にも有意な差が出てきまして、指定校推薦のほうが一生懸命勉強する。定期考査で常にいい成績を取らないと、指定校枠をもらえないというようなプレッシャーの効果だと思われますけれども、とりあえず一般入試の人たちは、定期考査中であろうと、指定校推薦の子たちよりは勉強しないというような状況も見えてきます。

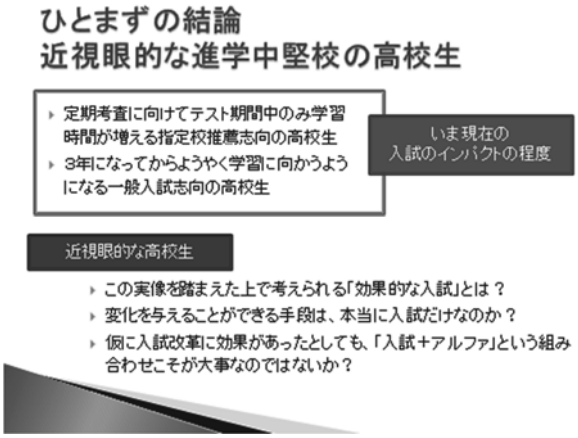
そして、入試志向の変化、指定校推薦でいこ

うかな、一般入試でいこうかなという、こういう揺らぎなんですけれども、下にも書きましたけれども、まず一般入試は、勉強を頑張って一般入試でいこうというような人たちが狙うというよりは、どちらかといえば成績が下がったとか、学習意欲が低下した、そういった指定校推薦志向者が、指定校の枠を取るのが無理だから、一般入試への進学を考えるようになるといった変化の方が、高校前半期では主流になります。これが進学中堅校の特徴だというようなことも、データからは見えてきました。



なお、一般入試での進学を考えていることがより多い学習時間に結びつくようになるのは、3年の1学期になるとみられるようになります。ちなみに、この時期についても指定校の人たちは相変わらずテスト期間中だけ勉強するという結果です。そして、3年の2学期になりますと、先ほどのグラフでお見せしましたように、進路未定者は進学校と大差がないぐらいに勉強する。まとめれば、一般入試という受験が学習の動機づけになるのは、高校3年生になってからです。そして、高校3年の1年間で徐々に勉強する意欲が強まっていく、動機づけとして強まっていくというのが実態です。

そして、先ほども少し触れましたけれども、もう一つ指摘できるのがこちら。AO 入試志向の生徒さんは、一貫して学習時間が少ないです。同じ AO でも、選抜性の高い大学の AO 入試を受ける人たちは事情も異なるのでしょうが、少なくとも進学中堅校で AO 入試を狙っているという生徒さんたちに関しては、ずっと勉強していないというような傾向がうかがえます。高校3 年間のどの時期であろうと、ふだんであろうとテスト期間中であろうと、AO の人たちは学習しない。これは堅い結果として得られる事実です。



こうした結果を踏まえた上で、まずひとまずの結論として、「近視眼的な進学中堅校の高校生」ということを提示したいと思います。定期考査に向けてテスト期間中だけ勉強するようになる指定校推薦志向の高校生。3 年になってようやく勉強するようになる一般入試で進学しようと考えている高校生。今の中堅校の生徒にとっての入試のインパクトというのは、やや大胆にいえば「その程度」のことだといえます。こうした近視眼的な高校生なんですけれども、こうした高校生に効果的な入試というのはどのようなものなんでしょうか。1 つ言えるのは、まず入試改革の構想、これは、高校生がなぜ近視眼的になっているのかという点を踏まえた上で考えるべきではないかということです。そして、同時に、近視眼的な状況を改善するための手段は本当に入試なのか。入試だけなのか。仮に入試に効力があったとしても、入試プラスアルファといった組み合わせこそ大事なのかもしれない。そうした視点を持ちながら議論していくことが大事だということを、まず今回の結果から見えてくるインプリケーションとしてご提示したいと思います。

討論

分析結果を踏まえて

埼玉県立いずみ高等学校　校長　水石明彦氏
×　大学入試センター　濱中　淳子

さて、ここまで報告申し上げたところで、いよいよ水石先生にご登場いただきたいと思います。改めて水石先生をご紹介しますと、埼玉県のさまざまな高校でご経験を積んでいらっしゃって、今はいずみ高等学校という職業高校で校長先生を、その前は浦和高校で教頭先生をされていました。これからは、水石先生のご意見を伺いながら、対談形式という方法でさらに議論を進めていきたいと思います。

さて、水石先生、まず、以上の報告をお聞きになって、どのようなコメントをお持ちになったのかお話しいただけますでしょうか。

〇水石校長

改めまして水石でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、今日の私の役割は、進学中堅校や進学校の生徒たちがどのように学習に臨んでいるかというところについて、経験を踏まえてコメントさせていただくことだと思っています。それが今日ご来場の皆様に何らかの形で参考にしていただけるとすれば、今日お邪魔した甲斐があるなというふうに思っています。

早速ですけれども、お話しの近視眼的というところについては、そのとおりだと思います。まず、進学中堅校といったときの経験上のイメージですけれども、例えば入学するに当たって中学校時代どんな感じだったのかというと、成績は中の上、あるいは上の下、いいほうということでまず間違いない。ですから、ふだんの中学校の授業、それからテストもそこそこでき、成績もそこそこいい。まずまずという、生徒が多いと思います。ですから、最近の中学校の授業内容であれば、大体分かっていると本人は思っている、そんな感じです。

ただ、じゃあ本当に、本気で難題に取り組んだとか、本気で勉強面においてチャレンジをした経験をたくさん持っているかというと、多分少ない。まあまあ、まずまずのところできていて、別にサボる気もないし、逆に非常にまじめな生徒が多い、そういう層なんじゃないかなと思います。でも、チャレンジして勝負して、それで何か達成したとかいった、自分に学習面で自信が持てる経験は少ない。つまり成功体験が少ない。したがって、自分に自信があまりないという生徒層です。

入学段階でも、本人なりに一生懸命やって入学してきて、高校時代は楽しい高校生活を送りたいと思っているわけです。そうすると、その時点から3年後の大学入試に対するイメージはほとんどないだろうなと思います。ですから、3年後よりもずっと近いところでの価値判断をしてきている可能性が高い。

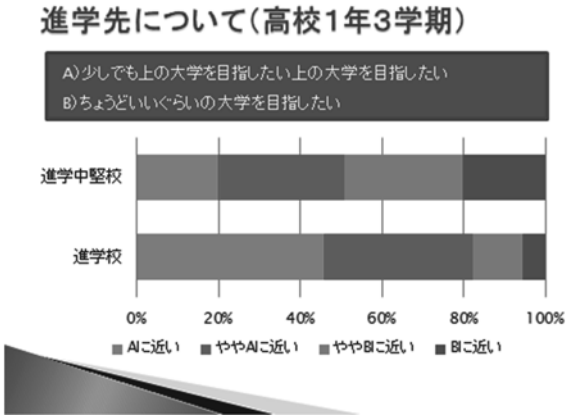
ついでながら、進学校ならどうかというと、例えば私の経験から浦和高校をイメージした場合には、やはり入ってきた段階で自分は周りからできると思われている、自分でもトップクラスである自分を演じてきている、という自負があるし自信もある。浦高に入ったんだ、浦高生なんだというプライドがある。ですから、当然入った時点では何となくだとしても、3年後にしかるべき大学、それなりの大学には行くつもりではいるはずです。ですから、3年後の入試をそんなに意識するというわけではないけれども、常に念頭にはあって、日々の生活の中でも、学習しようという意識を間違いなく持っています。

ここで申し上げられることは、まず自分に対する評価という部分で、進学校の生徒は自分のそれまでの経験から自信を持っている。学習においても自信がある。それに対して、進学中堅校ぐらいの生徒だとその自信がない。だから、自己評価がやや低い生徒が多いということになります。

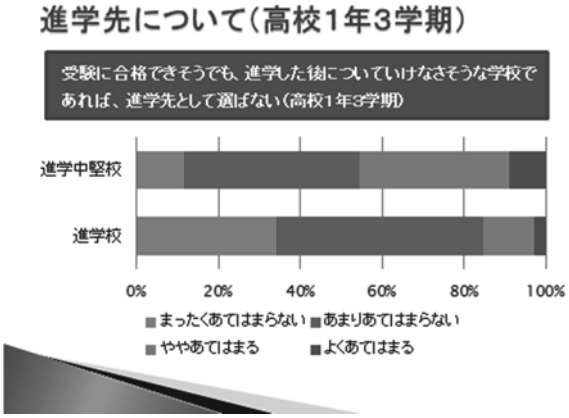
〇濱中准教授

ありがとうございました。水石先生がおっしゃるように、確かに進学中堅校の生徒さんというのは、学習面における自己評価を低く見積もっ

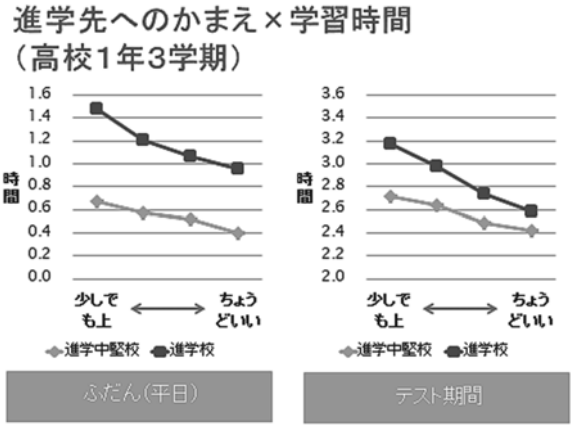
ているところがあります。調査では百数十人の高校生にインタビューをしたと申し上げましたけれども、そのインタビュー調査のとき、ちょっと質問してみたんです。「もし毎日 1 時間勉強すればこうした大学に入れるよというようなことが分かっていたとしたら、どうするか」と。そうすると、大体生徒さんたちはどう答えるかといえば、「そんなことないです」とか、「そこまでして行こうとは思いません」とか、大体そういうような答えが返ってきます。自分の力量に合った、自分が何となく勉強して、何となく毎日楽しみながら生活していく中で学習時間をつくって、そうして進学できる大学に入りたいと答える生徒さんがほとんどでした。そういった傾向は、この結果にも見ることができます。



私たちの調査では「(A) 少しでも上の大学を目指したいか、もしくは (B) ちょうどいいぐらいの大学を目指したいか」といったことを 1 年の 3 学期の時点で聞いてみたんですけれども、そうすると、進学校の人たちは (A) に近い、要は少しでも上の大学に行きたいという人たちが 8 割以上なんですけれども、他方で進学中堅校はちょうどいいぐらいの大学でいい、(B) に近いという人が 2 割、やや (B) に近いという人を足し合わせると 5 割というような、そういった分布になります。既にこの時点で 3 割の差が開いているということになります。



さらに言えば、学習面での自己評価の影響というのは、こういった入学難易度の次元にとどまりません。こちらの結果をごらんください。調査では、「受験に合格できそうでも、進学した後についていけなさそうな学校であれば進学先として選ばない」。入学することができても、その先大変そうだったら行かないというようなことを聞いてみましたら、進学校の人たちは、入れるのであれば行きますと答えるんですけれども、中堅校の生徒たちは、5 割ぐらいが進学先として選ばないと回答するわけです。このように、大学入学後もそこそこの路線でいこうとする進学中堅校さんの生徒の姿を見ることができます。



そして、こうした自己評価に基づく学習へのかまえみたいなものは、やはり学習時間にも影響してきます。こちらは、先ほど用いました「少しでも上かちょうどいいか、どうか」といった質問の回答を用いた結果になるんですけれども、左側がこうしたかまえの別にみたふだんの学習時間、右側がテスト期間の学習時間になります。1 年の 3 学期のデータになりますが、どちらに

しても、「少しでも上」という人のほうが学習に時間を割いていて、「ちょうどいいぐらい」という人たちは、勉強もそこそこというような状態が見えてくるグラフになっています。

要は、右下がりのグラフというふうになるわけなんですけれども、ただ、このグラフを見てみますと、かまえの影響が強いのはむしろ進学校のほうにも見えます。赤のグラフのほうが傾きが大きいわけです。他方で進学中堅校は、関係は認められはするんですけれども、どちらにしても結局勉強しないというような特徴のほうが目立っているようにも見えるわけなんですけれども、こうした結果を踏まえつつ、改めて水石先生のご意見を伺ってみたいと思います。

○水石校長

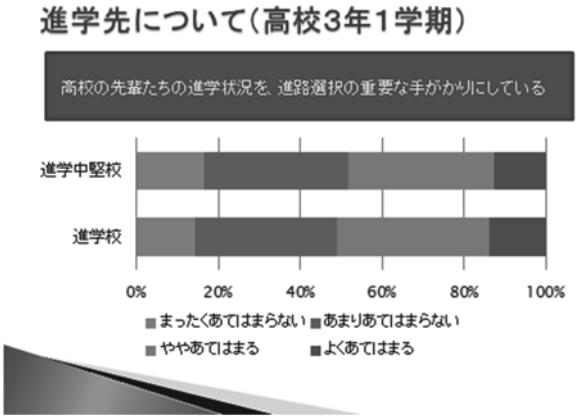
先ほど言い忘れたのですが、今回の調査結果から私が個人的に一番興味深かったデータをご紹介します。進学中堅校の生徒の1年生のときのアンケート調査結果で、勉強を頑張っているかどうかに、頑張っていると9割の生徒が答えている。一方で、その後の学習時間をたずねる設問で、1時間以上やっていると答えた生徒は5割いないんです。この2つの設問は同じ時期のものですから、9割の頑張っているという生徒の中の4割以上は、自分では1時間未満しか勉強してないと答えていることになる。それでも、自分は頑張っていますという、そういう回答なんです。

これを進学校のほうで見てみると、逆に1時間以上やっている生徒の割合よりも、頑張っていると答えた生徒の割合のほうが少ない。つまり、1時間やっていても、自分は頑張っているとは思っていないという生徒が進学校だと出てくるということです。

つまり、進学中堅校の生徒の場合、1時間はやってないんだけど、でも、自分は自分なりに頑張っているんだよ、というようなことになる。それが自分としての能力いっぱいなんだ、といっているわけです。まさに自分に自信がないということを如実に示した結果である、そんな印象を受けた、非常に興味深いデータでした。

そういうわけですから、全ての生徒がそうだというわけではないとしても、やっていけるかどうかに関して、それほど自信が持てない。でも、行けるならばいいところには行きたいと当然思ってるし、まじめで、勉強しなければいけないと進学中堅校の生徒は間違いなく思っている。でも、自信がない。そうすると、ちょっと上ぐらい。ですから、先ほど濱中先生がおっしゃったように、その学校で完全に頭1つ抜けた、ワンランク上の大学となると、自分で受かるとは思えない生徒がほとんどだろうと思います。それがそのままアンケート結果になっているのではないでしょうか。

少しでも上にというアンケート回答も、この上がどのぐらい上なのかというところで、多分進学中堅校と進学校の生徒では認識が違います。進学校では、周りからこれじゃ絶対無理だと言われるような高いレベルのところでも、いや、やる、受かってみせると必死になって勉強している生徒層が確実にいます。でも、周りが無理だというところを、進学中堅校の生徒は最初から考えない。周りが行けると言っても、いや、自分はとても無理ですと、むしろそちらのほうに動いてしまう。つまり、チャレンジする気持ちが弱い生徒層になってしまっているのだと思います。



○濱中准教授

ありがとうございます。いま先生がおっしゃってくださった「周り」というキーワードを踏まえながら考えてみると、一番身近な「周り」の情報として出てくるのが、「先輩たちがどのような進学を遂げているか」ということだと思うんですよね。

そこで、ここからは「先輩たち」という要素を軸に話を進めていきたいと思いますが、私たちの調査では、高校3年の2学期の時点で、「高

校の先輩たちの進学状況を進路選択の重要な手がかりにしているか」ということも尋ねました。そうすると、進学校も中堅校も5割の人たちが「当てはまる」と回答しています。要は、自分の知っているあの先輩がああいうところに行ったから、自分もそれぐらいかな、と。実績があるところに、同じように後輩たちが入っていく。進学中堅校の先輩たちが入らないような上のランクのところには手を出さない。クラスの半分がこのような進路選択をしています。ただ、こういった周りの影響は確かに感じられるのですが、一方で、インタビュー調査で多くの生徒さんが言及していたのが、部活動のことでした。つまり、部活動があって勉強まで手が回らない、という話です。ここで話を変えまして、部活動をめぐる分析結果をご紹介しまして、水石先生のご見解を伺ってみたいと思います。

部活動の学習時間に対する影響がどのようなものか、そもそもどれぐらいの人がどれぐらいの日数と時間をかけて部活動に取り組んでいるのか。この点から見ていきたいんですけれども、まずその前に、皆さんの部活動はどうだったのか、そろそろ眠くなっているころかもしれませんので、ここでまたクリッカーを使ってみたいと思います。

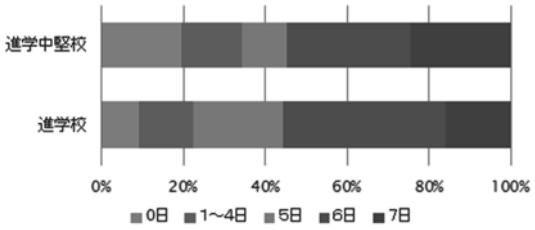
＜クリッカー⑦＞

高校時代、部活動と勉強の両立は？

① 部活動○ 勉強○
② 部活動○ 勉強×
③ 部活動× 勉強○
④ 部活動× 勉強×

こちらが質問です。「あなたは、部活動と勉強の両立をめぐって、どのような生活を送っていましたか」。「1番、部活動もばっちり、受験勉強もばっちり、現役で志望校合格」。「2番、部活動をやり過ぎてうまくいきませんでした、志望校を下げるか浪人しました」。「3番、部活動に手を抜いて勉強中心の高校生活でした、高校の思い出といえば、受験勉強です」。「4番、部活動も勉強もいまいちな高校時代だった」。これだとどうなるでしょうか。私も押してみます。ああ、皆さん謙虚ですね。4番目が一番多いとは少々驚きです。皆さん進学校ご出身者が多いので、せめて勉強は○のところが多いかと思っていましたけれども、このようなことになったというのはおもしろい結果だなと思います。

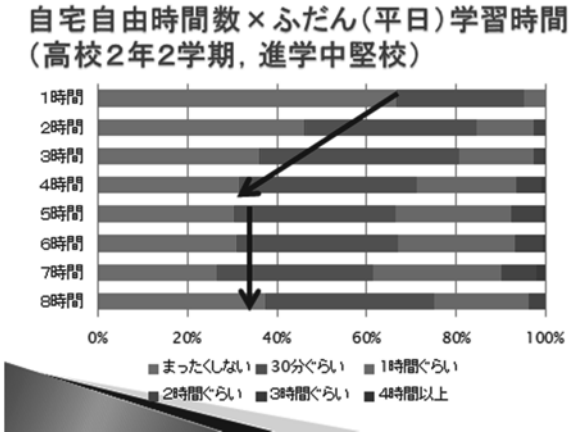
部活動日数／週（高校2年2学期）



では、現代の進学中堅校の人たちの部活動と勉強の両立がどうなっているのか、それを見ていきたいと思います。まず、部活動の参加状況を先にお伝えしておきますと、高校2年生の2学期、さっきの一番勉強してない時期にあたりますが、部活動に参加している人たちは進学中堅校で8割、進学校で9割、ほとんどの人たちが部活動をやっています。このように、ほとんどが参加している部活動なんですけれども、部活動参加者について週当たりの参加日数を見るとこのようになります。週6日、週7日という人の数がとても多い。6日以上という条件で計算すると、5割以上の人が該当するというような状態になっています。

そしてこの部活動は、生徒さんたちの具体的な声となってあらわれているように、時間を制約するもの、学習時間を減少させる影響力を持っています。まず、帰宅時間が遅くなります。そうすると、就寝までの時間、自宅自由時間とでもいいましょうか、そういった自由時間が3時間もないというような進学中堅校の生徒は3人に1人です。その中で、ご飯も食べなきゃいけないし、お風呂も入らなきゃいけないという3時間です。

そして、この「自宅自由時間が3時間以下」というのはとても重要な意味を持っています。というのは、進学中堅校の生徒が一定の学習時間を確保するためには、4時間以上自宅の自由時間が必要だという傾向が見出せるからです。これがそのことを意味しているグラフになります。



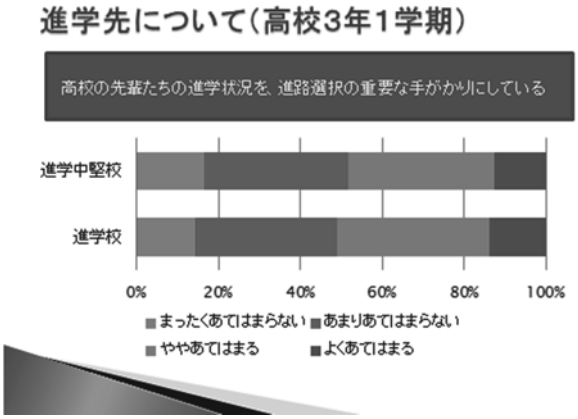
左の1時間、2時間、3時間、4時間、5時間、6時間、7時間、8時間というのは、自宅での自由な時間です。これが1～4時間までは、自由時間に比例するような形で学習時間が伸びていっていることがわかるでしょうか。自由時間がない生徒ほど勉強はできておらず、その傾向が顕著なのは、自由時間4時間の層まで、という結果です。4時間以上あれば、そこから先は、自由時間が増えようと、学習時間は増えない。「自由時間4時間の壁」とでもいいましょうか。

20年ほど前までは、特に進学校などでは、今の浦和もそうなのかもしれませんけれども、部活動に大いに取り組んで、浪人して、志望校に進学したということはよく見られました。92年当時、浪人と現役の比率というのは1対2です。浪人が1、現役が2だから、3人に1人が浪人時代の1年間に思い切り勉強し、それなりの基礎学力を身につけてきたわけです。けれども、2011年の時点でそれが1対6になっています。7人に1人しか浪人をしていないというような状況、逆に言えば、7人に6人が現役で入っているというような状況になります。

高校生の学習時間というのは生活時間問題だということも、政策論議の場では自覚すべきではないかなと思えるわけです。ただ、同時に、現場では部活動万歳といえるような風潮は根強いのではないかと思うのですが、現場にとっての部活動の位置づけについて、水石先生のご判断を伺ってみたいと思います。

○水石校長

重く受け止めなくちゃいけないと思っているのですけれども、その前に、今示していただいたデータの中で、私なりに思ったことだけ補足させていただきます。先輩たちの進学状況を進路選択の重要な手がかりにしているかという質問のところで、結果をさっき出していただいていました。



○濱中准教授

これですね。

○水石校長

そうですね。これに関しては進学校も進学中堅校も同じようだというふうにここだけ見ると思われるのですが、私の認識だと、進学中堅校での進路選択の手がかりは、その学校でどこの大学に行っているかです。例えばこの大学には何人行っているかという資料を見て、この大学には先輩が行ってるんだから頑張れば行けるかも、という見方、参考の仕方じゃないかと思います。

一方で、進学校はというと、例えばその大学を受験した何人もの先輩の中で、高校の成績がどのぐらいまでの先輩が合格しているかを見ています。それと今の自分の成績を見比べて、何とかなるか、このままじゃだめか、自分の合格可能性についてや状況把握のための資料という見方をします。つまり、資料の見方、使い方がこの2つは違うと思います。

それから、自由時間のところの図ですが、ここで学習時間が4時間以上とあって、その自宅自由時間が4時間未満とはどうなっているのだろうと思われるかもしれません。念のために申し上げると、今は自宅以外で勉強する高校生が非常に多くなっています。予備校、塾へ行っている進学校の生徒の中には、自習室利用が目的という生徒もいます。ですから、そこで勉強してきたり学校に残ってやってきたり、あるいは

実際に塾、予備校での講義を受けてきた時間が学習時間に入っているということだと思います。

さて、部活動です。部活動で忙しすぎて、勉強しようと思うんだけれどもできませんというような進学中堅校の生徒のコメントも見せていただきましたが、部活動に時間が取られすぎているというご指摘を高校の現場は真摯に受け止める必要があります。ただ、だからといって、部活動をどんどん制限していっていいかというと、ここからは進学校での経験を踏まえて申し上げますが、何で部活動をやるのか、その意義は、効用はといったときに、先ほども言いましたが、高校生ぐらいまでの生徒にとって、何事でも本気でチャレンジする経験が間違いなく重要だという認識を高校では持っています。それが、例えば学習だけが評価尺度になってしまうと、ほかのところで幾らいろいろ興味、関心を伸ばそうとしていても、ここでしか見てもらえなければ学習に自信のない生徒はそれでおしまいです。つぶれてしまいます。そうじゃなくて、学校というところは勉強がメインではありますけれども、部活動ですとか、あるいはクラスや学校行事等で、様々な活動の場があります。そこで自分なりに一生懸命やって、本気でいろいろやって、何かを作り出していって、あるいは何かの目標に向かってチャレンジしていってという、そういう経験が人間として成長する上で極めて重要になります。そういうところでの成功体験が、例えば部活動での一つの成功体験が、その生徒の自信につながる。その自信が、勉強面でもやってみようという気持ちになったりと、様々な場面でプラスに作用する。高校では、そう信じているところがあります。さらに言えば、集団としての仲間同士のつながりとかいろいろなものもあります。

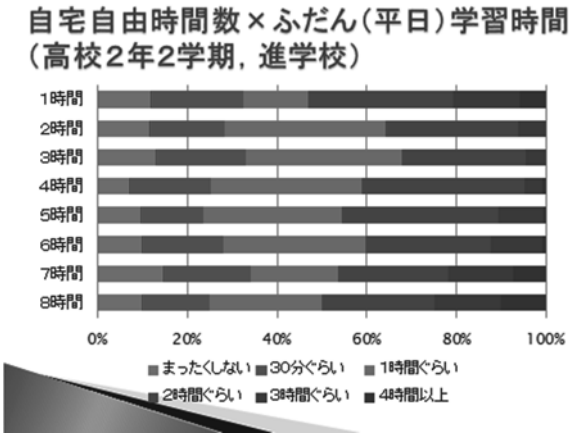
一方で、ほかのことはやらなくてもいい、部活動づけにしていいなどということでは決してありません。どの高校もどの顧問も、ほかのことにも配慮しながら指導しているはずです。ただ、そこでの軽重のバランスについては、高校も今一度しっかり考えていかなければならないと思います。また生徒も、あれもこれもとやることがあるときの時間の使い方を身に付けなければなりません。そのあたりで、進学中堅校の生徒だと、部活動で目いっぱいになってしまい、ほかが頑張れなくなってしまっているという調査結果になっていると考えられます。

進学校の生徒はどうかというと、進学校も部活動は非常に盛んで、全国レベルの大会に出ている学校もいっぱいあるわけですから、時間の拘束も、それなりにはあると思います。でも、最初に申し上げたように、生徒はどこかで勉強しなくてはという意識を持っていますから、1日の中のどこを勉強時間に割り振るかを生徒は考えています。ですから、家に帰ったら疲れてできないとなると、例えばある生徒は朝早く登校して、始業前に1時間ぐらい作り出してみたり、通学時間の長い生徒は電車の時間を有効活用してみたり、放課後部活動が終わってからさらに学校に残って時間を作ってみたりとか、とにかく時間を作り出そうと、1日1時間でもいいから作り出そうと意識しています。

進学中堅校の生徒は、そうやって作り出すだけの気力というか必然性というか、そこまで受験のため、勉強のためという気持ちになっていないということになります。

○濱中准教授

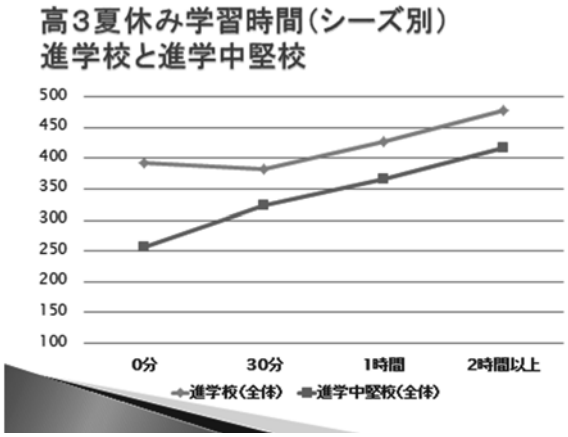
ありがとうございます。浦和高校の生徒さんはどこかで時間を見つけて学習している、これは確かにご指摘のとおりだと思います。さきほど、進学中堅校では4時間の壁があると申し上げましたけれども、進学校のデータになるとこのようになります。



要は、あまり自宅の自由時間と学習時間との間に関係がない。自宅自由時間が1時間の人でも2時間の人でも、どこかで時間を見つけて勉強しているという状態が確かに見られます。言

い方を変えますと、進学中堅校の特質は自宅自由時間の確保に応じた学習時間の伸び、それから一定の学習時間の確保。進学校の場合は、自宅自由時間が少なくともある程度は確保というのが特徴になってくるかと思います。

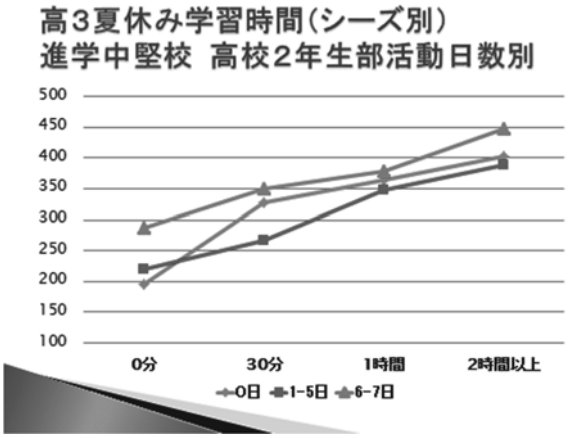
水石先生が、「進学校の生徒は、1日1時間でもいいから作り出そうとしている」とご指摘くださいましたが、この捻出された学習を学習の「種」、もしくは学習の「シーズ」というふうにこれから呼ぶとすれば、データからは、水石先生がおっしゃったように、シーズがあるということはとても強いというようなことが見えてきます。



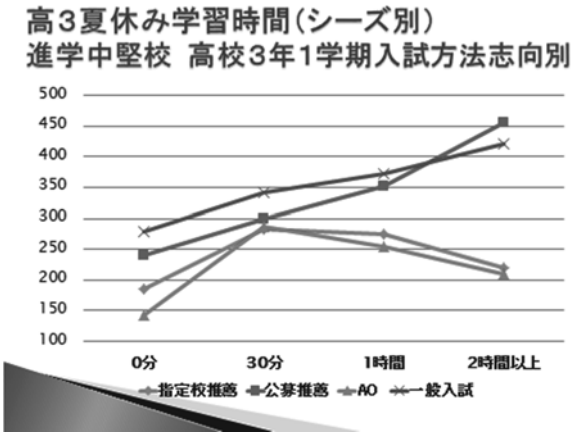
どういうことかと申し上げますと、このグラフを見てください。高2のときからどこかで時間を見つける。高1のときからでもいいです。これは高校のシーズ別と書いてありますけれども、高校の2年生の2学期の学習時間をそのように名づけてみました。高校2年生の2学期のときの学習時間が「0分」「30分」「1時間」「2時間以上」の別に、いわゆる天王山とも言われる高校3年生の夏休みの学習時間がどういうものなのかということを見たグラフになります。

まず、進学校と進学中堅校の差というのは明らかです。明らかなんですけれども、ここでむしろ強調したいのは、グラフが右上がりになっているという事実のほうです。つまり、進学校であろうと進学中堅校であろうと、高校2年生の2学期の時点でたくさん学習していた人、何とかシーズを見つけてきた人、大きなシーズを育てていた人のほうが、高校3年生の夏休みに勉強できているという傾向が見出されます。

なお、進学中堅校の中での多様性というものに目を向けてみますと、いくつか興味深い結果も見えてきます。2つほどご紹介すれば、まず1つめは部活動とシーズ効果との関係です。



さきほど、部活動に時間がとられ、学習時間が割けない中堅校生徒の話をしましたが、他方で部活動を週6～7日やっている人にとってのシーズの効果というものは、とくに大きいことがわかりました。つまり、部活動で忙しいにもかかわらず、どこかで学習時間をみつけようとしていた人、大きなシーズを育てていた人ほど、夏休みの学習時間は伸びる。これが、いわゆる部活動の集中力向上効果と捉えることも可能なのかもしれません。



もう1つは、入試方法志向に関する多様性です。つまり、シーズの効果があるのは、公募推薦か一般入試での進学を考えている層のみであって、指定校推薦かAO入試での進学を考えている層にはみられませんでした。

ただ、こうした多様性を指摘したうえで、話を戻して重要な点として強調しておきたいのは、指定校とかAOとか例外もあるんですけれども、いずれもグラフは右上がり、シーズの効果はあ

るということです。進学校であろうと中堅校であろうと、部活動日数がどうであろうと、高校の前半期にシーズを育てていた、学習時間を割いていた、学習習慣を身につけていた者ほど、高3になって学習に力を入れやすい。

さて、こうしたシーズ、学習の種の役割が見えてきますと、学習に時間を割く人が多くない高校1年生から高校2年生、要は前半期にいかにシーズ、種を育てるかということがとても大事だということが見えてきます。そこで、学習の種を高校前半期にいかに育てるか。今度は、この点について水石先生のご経験を伺ってみたいと思います。

○水石校長

まず、おっしゃるとおり、日々少しでも勉強しようという習慣づけができていれば、まず学習するというところまではすっと入っていけます。それで、時間を割いて頑張るだけの目的・目標が強く意識できれば、勉強時間も増えていくという結果に当然なるだろうと思います。

学習習慣についてですが、私の頃は、勉強は孤独に一人でやっているというパターンが多かったと思います。でも、自分一人でやるには、気力がないとだめですよね。ちょっとでもめげてしまったらば、もうそこで終わり。くじけそうになったときも、自分が持ちこたえられなければ、今日はやめたと、こうなりますよね。

最近の高校、今の浦和高校で痛烈に思ったことですが、周りの仲間の存在がものすごく大きくなっています。男子校と先ほど紹介していただきましたが、公立高校なのに男子校なのかと思われるかもしれません。でも、男子校の存在にはそれなりの意義があります。

それは、本気の姿、必死になっている姿は決してきれいなものではありませんが、それをさらせる環境が学校の中にある。というのは、ある意味異性の目を気にしなくて済むというところが大きいといえます。そうすると、周りの仲間が頑張っている姿を日常的に見ることになります。さまざまなところであいつやってるとか、あいつすごいなとか。

しかも、それが勉強だけじゃなくてさまざまな価値観の中で、例えば趣味の領域で、男子同士だったらマニアックな話でも、その内容がものすごく高いレベルだとなれば、周りが素直に「お前すごいな」と褒める。ところがもし女子だったら、「何それ、そんなのに興味あるの」とか一言言われてしまうかもしれない。そうすると、もう二度とその話はできなくなってしまうかもしれない。

つまり、本気になってのめり込んでいることを周りが認めてくれるし、しかも、周りも本気の姿を見ることになる。そうすると、学校の中で勉強していてふと気がつくと、クラスでほかにも勉強している仲間がいるというようなことになる。眠くて仕方がないとかやる気なくなってきたというときに、ふと見るといるわけです。あいつまだ頑張ってるとか、そういう存在は非常に大きいと思います。

ですから、最近自習室を用意している高校が増えていますが、そういう周りの仲間の存在が、その生徒にとってはある意味励ましにもなるし、お互いに助け合う、お互いに切磋琢磨する存在としてプラスに作用する。ですから、勉強するに当たっては、個々にただ黙々とやっているわけですが、周りでやっている仲間の存在がある空間というのは、非常に有効だと思っています。

その点でもう一つ。非常にすばらしい実績を上げている学校というのは全国にもいっぱいあるわけですけれども、ともするとそれを教員の指導、全て指導ででき上がっている成果と世間では取られる方も多いかもしれませんが、そうではありません。実際には、教員対生徒の関係性の中での指導の成果は、いいところ半分ぐらい。残りの半分は、生徒の間の関係性の中で、それぞれの生徒集団としてみんなが高め合っていくという、そういう場によるものだと思います。

私は今年から専門学科の学校にいますが、ひとつ思ったのは、工業系だと検定資格についてです。そういう資格を取ることを学校で奨励しているのですが、そのための朝学習会をしようと職員が呼びかけるときに、1年生で100人ぐらいが集まってきます。入学式の次の日から。朝早く来て、意識のある生徒が同じ部屋に集まって、最初講義をやるわけですけれども、定期考査が近づいてくると、英語や数学などを各自で勉強する空間になります。たかだか朝1時間

弱ではありますが。

2～3 年生になると別に講義などないのですが、隣の部屋が用意されている。そうすると、2 年、3 年になっても、人数は少ないにせよずっと毎日やってくる生徒がいるわけです。各学年 10 人弱でしょうか。各自がやることを自分で用意して勉強しているという、そういう空間があるというのは、非常に大きいと思います。

進学中堅校でも、そういう仕掛けをいろいろな高校が用意していると思います。例えば放課後に勉強会、あるいは補習、補講というような形で生徒が集まってくる。あるいは部活動でも、例えば雨の日や朝に部の活動として勉強する。顧問は一番前に座っているだけなのですが、みんなしーんとして勉強する。それが習慣づいてきて、成績の上がる生徒が出てくると、その生徒はもちろん周りの生徒も自分もやればできるかもしれないという気になっていきます。

また、例えば難関大学を目指そうという生徒がいるとして、でも数名しかいないという場合があります。そうすると、特別に何か指導しようとなるわけですが、なかなかそういう意識を維持させるのは難しいとなったときに、そういう大学を志望している何校かの生徒たちを、例えば月に何回か集める。そうすると、同じような志望を持っている仲間が集まる空間が定期的に用意できて、自分と同じように頑張ろうと思っている人たちがいることを意識させることができたりします。

○濱中准教授

ありがとうございました。勉強会を例えば「場」と表現しましょうか。友人たちの姿を見ながら勉強をしていく。浦和高校のような進学校だけでなくて、工業系や農業系の、そういった資格系のところで資格の試験に向けて勉強する。それが 1 学年で 100 人、今ちょっと減ったとしても、それでもすごい数の人たちが集まってきて学習をする習慣をつけるというようなことは、私も驚きながら聞いておりました。そういった「場」のようなものがシーズに結びつくのかなというふうに思います。

ここで、物理的な「場」ということに限定すれば、そうした「場」を持っているかどうかというのは、私たちの調査でも実は聞いておりました。今は中堅校でもそういったことを試みているというようなお話もありましたけれども、じゃあ、中堅校で実態はどうなっているのか。

ただ、ここで、せっかくクリッカーがあるので、最後ですけれども、久々にクリッカーを利用したいと思います。

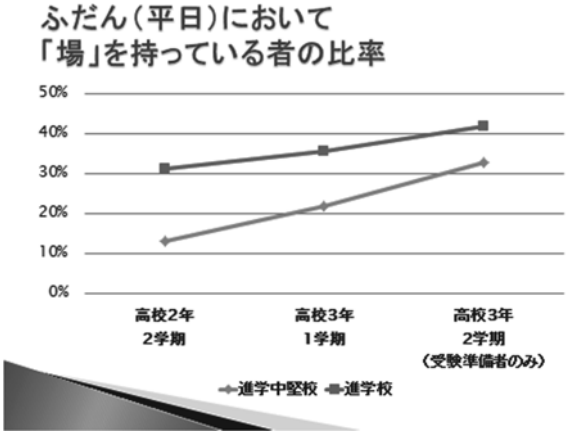
＜クリッカー⑧＞

高校2年生頃、「場（授業以外に集まって学習する場）」のようなものは？

① 日常的にあった
② たまにあった
③ あまりなかった
④ まったくなかった

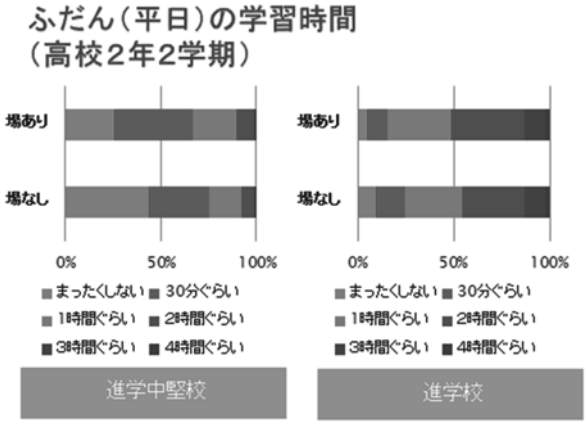
「高校 2 年生のころ、授業以外に集まって学習する場のようなものはあったでしょうか」。日常的にあったのか、たまにあったのか、あまりなかったのか、全くなかったのか…。ありがとうございます。全くないというのが多いですね。皆さん全くない中、さきほど水石先生も、昔は一人で孤独に勉強していたみたいな感じのことをおっしゃってくださいましたけど、時代が変わりつつあるいま、「場」というものが一つのキーワードになっているのかもしれないという問いを設定しつつ、話を進めていきたいと思います。

今の高校生の状況がどうなっているのか、「場」を持っているかどうかというのは、高校 2 年生の 2 学期から 3 時点にわたって繰り返し尋ねました。画面を戻してもらっていいですか。



こちら、ふだんにおいて学習する「場」を持っているか、友人たちが集まって、もしくは学校の先生たちがそういった「場」を提供して、とりあえずみんな集まって、「ここは学習する『場』です」みたいなところがあるという人の比率を聞いてみたところ、こういう推移になりました。

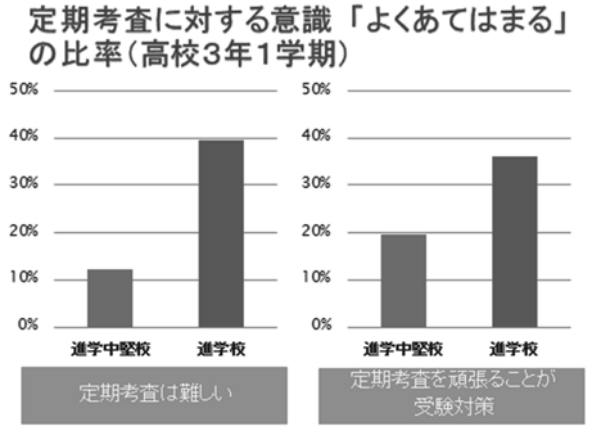
指摘しておきたいのは次の2つです。まず第1に、中堅校でそういうことを試みているところも確かにあるんだと思います。あるんだと思うんですけれども、データで見る限りいまだ「場」は形成されていないというのが大勢のようです。シーズ、学習の種の形成期として注目した高校2年生の2学期では、「場」を持っている進学中堅校生徒の比率は1割ちょっと。高校3年の2学期の時点でも3割強しかありません。これは、進学校の高校2年生の2学期と同じぐらいの水準になります。



もう一つ指摘しておきたいのは、こちらのグラフになりますが、これは、高校2年生の2学期の場の有無別に学習時間を見たものです。これを見ますと、左が進学中堅校なんですけど、場があると言いながら「学習を全くしない」という人たちがいる、さらに「30分ぐらいしかしない」という人を足し合わせると6割、7割といった比率になるという、そういったものになっています。要は、「場」があっても勉強していない。「場」がない上に、「場」があっても機能していない。そういった実態が見えてくるわけです。「場」が形成されず、形成しても機能しない。

そうした背景をめぐる仮説として、ここで2つほど提示してみたいと思います。1つは、皆さん最初クリッカーで定期考査というのを入れたのはここの話につなげたかったからなんですけど、定期考査に関するものです。

そもそも生徒たちを学習に向かわせる大事な鍵になるのは、入試以前に定期考査だといえるようにも思えるわけです。しかしながら、進学中堅校の定期考査というのは、そのようなものになっていないところがあります。



こちらは、高校3年の1学期の調査のところで、定期考査に対する意識、「よく当てはまる」の比率を出したものです。左側は、「定期考査は難しい」。これに「よく当てはまる」と言った人は、進学校では4割ですが、進学中堅校では1割ちょっとという結果になっています。インタビューで実際に聞いた声なんですけれども、「教科書を三回読めば大体8割ぐらいは取れますというような定期考査が実施されている」という生徒さんもいました。その生徒さんは頭がよかったのかもしれませんけれども、そういった定期考査への評価があるのも確かです。もう一つ、「定期考査を頑張ることが受験対策になる」と考えている人も、進学中堅校では少ないという結果も得られています。定期考査というものの存在がふだんの「場」の形成を生み出す。そういうことが起きていないのが進学中堅校なのではないか。こういった定期考査をめぐる一つの仮説をまず提示したいと思います。

もう一つは、ここで再び入試の話に戻したいと思うんですけれども、入試の現状が「場」の形成を阻止している可能性があるということです。進学に力を入れている学校の先生のお話を伺っていますと、よく受験は団体戦というような言葉を伺います。けれども、中堅校の生徒さ

んに、インタビューの場で「受験って団体戦ですか、個人戦ですか」と尋ねると、皆さん「個人戦」だとおっしゃいます。その生徒さんの話を聞く限り、受験の多様化ということと大いに関係しているんじゃないかなと判断されるわけです。

といいますのは、例えば「A さんは指定校推薦狙いなので、一般入試狙いの私にとって一緒に勉強するという話にはなりません」というような話だったりとか、「仲がいい B さんは英語と国語が必要です、私は英語が必要だけど基本的に理系なので数学と物理です、なので一緒に勉強しようという話になりません」というような話をよく聞きました。受験教科の軽減化は、以前から問題になっています。学力が低下するんじゃないか。狭い範囲の学力しかつかないんじゃないか。そういったことに結びつけられて批判されてきたわけですけれども、他方であまりにも必要な要件がばらばらになりすぎると、「場」の形成へのインセンティブがなくなってしまうということが生じている。いわゆる受験勉強の孤立化というものが生じているのではないかと思われるわけです。

このように、定期考査と入試の 2 つをめぐって仮説を申し上げたところで水石先生のほうからご意見をお願いしたいんですけれども…。

〇水石校長

定期考査ですが、悩ましく厳しい問題です。まず進学校ですが、意欲も目標も高い生徒たちですから、教員は日々の授業で生徒と勝負しています。当然テストでも勝負をすることになりますから、問題作成には非常に時間をかけています。

必然として、問題は決して易しくはありません。そうすると、中には全然できなかったという生徒も当然出てきます。ただ、進学校の生徒だと、それを教訓に自分の勉強のあり方を見直しながら、今度は勝ってやろうと頑張れるわけです。ですから、常に定期考査で勝負ができるわけです。

授業の内容についても、学習指導要領に沿いつつ、受験の内容も加味してプラスアルファの内容も入れながら授業を行うことができます。ですから、ふだんの授業をベースに勉強すれば、受験に向けての準備も当然できるわけです。

一方で、進学中堅校はとなると、先ほど申し上げたように自信がない生徒が多い。でも、頑張らなくてはとは思っているといったときに、授業で一生懸命やったらできたとか、分かったとかいう成功体験を学習でも積ませたいと教員は思うわけです。そのときに、テストでも、ふだんの勉強はできていなかったが、試験前にはやれるだけのことはやってテストに臨んだ生徒に、やっただけの成果が多少なりとも実感できるような形に、少しでもやったことの成果が見えるようにしてやりたいと思ったりします。

逆に、やったけれどもだめだったとなってしまうと、その生徒はやってもだめなんだとあきらめてしまうのではないか。ですから、そういうことも踏まえながら、どんな問題を作ろうかということになります。

授業も同じで、高校の授業を多くの生徒が難しいと思っていると思います。できる生徒も、中学とは違って早いな、内容も難しいなと。その中で意欲を持ってやり続けるように仕向けていくために、ちゃんと考えたら分かるように授業を展開していこうとします。そうすると、結果として、授業で受験レベルまではなかなかいけなくなります。

定期考査の問題や授業のあり方については進学中堅校の先生方はいろいろ努力されてやられるわけですが、悩ましく難しいところであると思います。

あと、受験の孤立化というところですが、指定校推薦を狙うような非常にまじめな生徒は、1 年生のうちから定期考査を頑張っていい成績を取り続けていけば入れるというモチベーションで頑張るわけですが、裏返すと、推薦で入れるその大学に一般でも入れるという自信はないというケースがほとんどです。

一方で、一般受験の生徒は自信はないが、もうそれしかない、頑張らなくてはということで、頑張るわけですが、例えば 3 年生になって一般受験で頑張ろうと、2 学期ごろ一生懸命勉強している。その時期に、指定校推薦なり推薦の生徒たちと一緒に勉強する場を設定するのは、やっている中身も違うし無理があります。だから、お互いに教え合うということもなかなか難しい

ということになります。

カリキュラムも、進学校のカリキュラムは昔のカリキュラムに近いといいますか、必履修科目が比較的多くて、1 年から 3 年まで例えば 5 教科は必ず取らせようという学校が比較的多いのかと思います。センター試験もほとんどの生徒が 900 点満点で受験します。

一方で、進学中堅校は、センター試験を 900 点満点で受験する生徒は少数です。だから、全部やるのではなく、特定の教科・科目だけに絞って勉強する。そういうニーズが多くなれば、その学校のカリキュラムも特定の教科・科目に手厚くなっていきます。そうすると、理系と文系で全然違うカリキュラムになっていったりするわけで、昔のカリキュラムと比べて、今はかなり複雑になっています。

そうすると、勉強するといっても、理系と文系じゃ全然中身が違っていて、片方がやっていることをもう片方は全然分からない。同じ教室で自習しているような場で、お互いに先ほど言ったように黙々とやっていて、頑張っている姿をというところでは全然問題ありませんが、具体的に勉強している内容については、それぞれ全く違ってしまっているっていうことにもなるわけです。

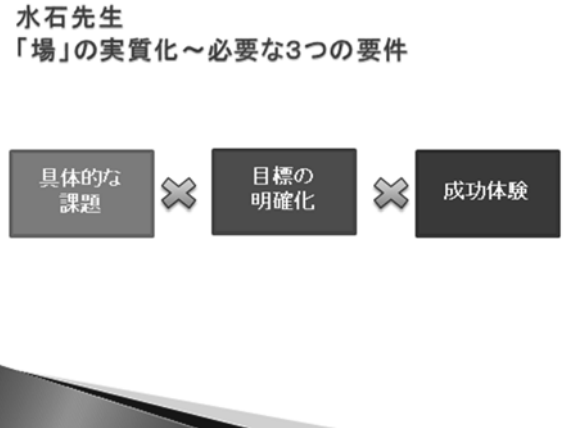
進学中堅校では先ほどの場についてもかなり意識して設定されたりていますが、そこで生徒たちがやるときには、自発的に集まってきて、やる内容も自分でちゃんと用意ができて、どんな勉強をするかもちゃんと組み立てられるというのが本来前提です。自習であれば。講義であれば、集まれば聞けますが、本来的に勉強の場となれば、自発的にやるものです。そのときの、勉強方法とか、具体的中身が明確になっていないと、なかなかそういう場があるならぜひ参加しようとはなりません。

だから、場が設定されていても、結局のところ具体的にそこでやる課題が明確になっているとか、目標がはっきりしていないといけない。つまり、自分でチャレンジしようと思えるだけの経験を、それまでに積めているか、成功体験ですね、そういう部分が必要だという気がします。場があって、そういう場があるなら利用しようと自発的に思えるだけの意識が生徒側にあるかどうかというところが、次に問われてくる。だから、学校は場だけ提供すれば、生徒は大丈夫なんて全然思ってはいません。

○濱中准教授

ありがとうございます。今、水石先生がおっしゃったことを踏まえますと、「場」というもの、「場」があれば勉強するというような話が見えつつも、でも、「場」というのはなかなか機能することが難しいんだな、という感想を持ちました。

水石先生は、「場」が実質化するためには 3 つの要件が必要だとおっしゃっていたように思います。

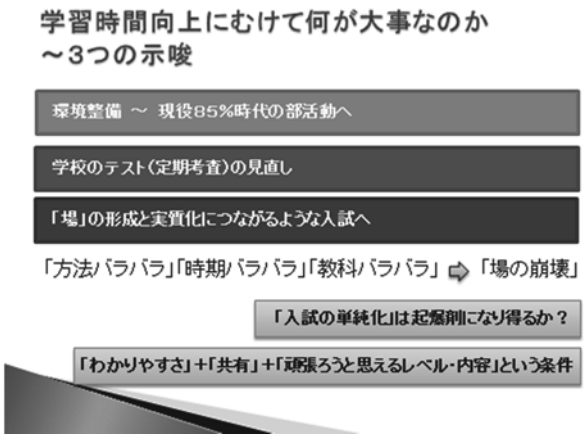


つまり、第一に具体的な課題があって、第二に目標の明確化というものがきちんとなされていて、そして第三に、成功体験というものが用意されている。こういうものがそろうと、場というのは見えてくるのかな、実質化してくるのかな、と。とても示唆的だと思うんですけれども、本セミナーの冒頭で申し上げました「近視眼的」な高校生を学習に向かわせるためには、こうした「場」をいかに作っていくのか。特に高校前半期のシーズを育てるような場をどういうふうに作っていくのか。入試改革を考えるにしても、こういった「場」というものを意識しながら検討するのがポイントではないかと思うわけです。

さて、そろそろ時間も迫ってきましたので、結論に入りたいと思いますが、結論に入る前に、きっとフロアの方々の中には予備校とか塾って一体どうなっているのかなと思っていらっしゃる方もいると思いますので、補足しておきたいと思います。

私たちの調査の対象は首都圏の高校生です。フロアの中には首都圏の高校生は学校ではなくて予備校や塾で勉強しているはずだと思う方も多いのではないかと思われますが、実態としてシーズ育成のための重要な時期、高校１年生とか２年生、そういったところの時期の予備校とか塾の利用率をみますと、実はわずか２割ほどでしかありません。高校生は基本的に部活動と学校、これの繰り返しの中で生活をしているというような状況になっています。この中で、シーズをどう作っていくのか。何よりも金銭的な問題を考えると、学校こそが学習の中心の役割を果たすべきだとも思われます。

こうしたことを前提とした上で、どうしたら「近視眼的」な高校生たちが学習に向かうようになるのか。どうしたら前半にシーズを育てることができるのかということを改めて考えていきたいわけなんですけれども、最後に３つほど今までの分析結果を踏まえた案を示しておきたいと思います。



まず１つ目は環境の整備です。部活動は確かに意味があるんだと思います。私も成功体験というのはとても大事だと思うし、それが部活動で養われるということもよく分かります。ただ、それでも現役 85%時代の部活動ということを改めて考えてみてもいいのかなと。部活動自体は確かに重要ですが、週６日から７日プラス朝練というようなものが、時間配分が苦手な高校生たちも本当にそれで大丈夫なのかどうなのか、そういったことを考えてみる必要があるのかなというふうに思います。生徒さんたちに実施した質問紙調査では、理想の部活動日数についても聞いてみました。そうすると最頻値は週５日というようなデータが出てきます。インタビューでも話を聞いてみますと、大体ウィークデーの１日、そして週末のどちらかは休みが欲しい、その間にちゃんと復習だったり予習だったり、試験の対策をしたい、そういう生徒さんはとても多かったです。そういったデータも含めながら、シーズの形成を阻まない部活動のあり方ということは、考えてみてもいいんじゃないかなと思います。

２点目は、学校のテスト、定期考査の見直しです。水石先生もおっしゃったように、中堅校の定期考査というのはとても難しいと思います。水石先生のお話を伺っていてもそうですし、生徒さんのお話を聞いていてもそうですし、対象校の先生方のお話を聞いていても本当にそう思いました。でも、どこか改善の余地は本当にないものなのかどうなのか。今のままでしたら、とても簡単なレベル、下のレベルに合わせたようなものが作られているケースも少なくないので、そうすると、上位層の伸びを押しとどめてしまう。こんなものかみたいな感じのイメージを抱かせてしまうことにもなりかねないわけです。そういった現状をどういうふうに変えていくのか、これはとても難しい問題なんですけれども、一つの課題として挙げられると思います。

その上で、３点目として、入試の話に入りたいと思います。「場」の形成と実質化につながるような入試へということです。より具体的に言えば、共通の目標を持てるような、言ってみれば単純な入試というものも考えていいのではないか。昨今の入試というのは、学力不問入試や、アラカルト方式による学力の軽量化ばかり指摘されてきたんですけれども、おそらく問題はほかにもあったんです。その問題とは、「場」の崩壊です。方法ばらばら、時期ばらばら、教科ばらばら。進学校だったら、先ほど水石先生もおっしゃったように、みんな 900 点のセンター試験を大体受けますので、国立志向が強いというところもありますので、共通の目標が持ちやすいというところもあります。なので、「場」の形成もされやすいですし、入試に吸引力がある。しかし、それが今の進学中堅校にはあまりあてはまらないと言えるのではないかなと思います。

「場」をめぐる課題というのは、実は大学関

係者の先生方、職員の皆さんも抱えていらっしゃることだと思います。つまり、学習しない大学生というのも、いまはとても重要な問題として捉えられています。学習しない大学生、その対策の一つとしてのラーニングコモンズというのは、皆さんの大学でも作られているところが多いかと思います。ラーニングコモンズ、要は、「場」作りです。そして、ラーニングコモンズをいかに実質化するかということが、今、課題になっているのではないかと思います。ある意味、高校も大学も同じ課題を抱えているといえるように思えるわけです。

ただ、高校の場合、大学とちょっと違うのは、入試の単純化というのがもしかしたら「場」の実質化のための一つの鍵になるかもしれないと考えられるところです。もちろん入試改革というのは魔法の杖でもありません。入試改革をすれば全てがよくなるということは想像しにくいところがあります。ただ、入試改革は、そのありようによっては一つの起爆剤ぐらいにはなり得るかもしれません。起爆剤になるためには、水石先生がお話しされたいずみ高校の生徒にとっての資格試験、そのための勉強会というのもモデルにするところは多いのではないかなと思います。つまり、資格試験というのは、要は分かりやすさ、そして共有、そして頑張ろうと思えるレベルと内容、これを備えた試験ということです。

こうした路線で単純化した入試、こういったものは、今、基礎編として議論が進んでいるわけなんですけれども、もし仮に本当に基礎編という新しい入試を導入するのであれば、こうしたことも大事な必要条件になるのではないかなというふうに思えるわけです。少なくとも学習のマイルストーンみたいな感じでやっていくのであれば、こういった条件というのは考えてみる必要があるのではないか。加えて、いつ実施するのかというのも、「近視眼的」な高校生の場合はとても大事なポイントになるのかもしれません。

とくに、今申し上げた「頑張ろうと思えるレベル・内容」に関しては、強調しておきたいと思います。というのは、昨今の入試改革論議でごそっと抜け落ちている観点であるというふうに思うからです。今議論しているのは、おおよそ大学に入るまでに最低限身につけてきてほしい学力という点についてですが、同時に学習のマイルストーン、学習に誘導するということであれば、高校生たちが頑張ろうと思える、そういったものでないといけないのではないか。

ただ、お気づきになっている方も多いと思いますが、入試の単純化というのは、再び序列化の時代に導くということにもなりかねません。その危険性は多分にあると思いますけれども、ただ、「序列化をもたらす入試は悪である」という主張も極端だということは申し上げておきたいかなと思います。個性を生かすとか、学習意欲を高める入試ということがどれだけ高校生をさまよわせてきたのか。これは、高校生 1 万 5,000 人を対象にした別の調査から見えてきたことなのですが、多様な入試を目の当たりにして、すごく戸惑っているのがいまの高校生です。そういったところも自覚すべきではないかなと。分かりやすい目標というのは、ひとつの選択して「あり」ではないかと思います。

さて、私からの報告は終わりにしたいと思いますけれども、最後に申し上げておきたいのは、入試改革というのは大きく分けて 2 つの次元があります。

1 つは技術改革、要は測定法の向上です。もう一つは教育改革、教育機能の変更もしくは強化みたいなものです。教育機能の強化というのはとても複雑な問題で、複眼的に考える必要がある上、学習行動を知らずして議論しても不毛な議論に陥ってしまいます。今回のセミナーの意義を説明しますと、皆さんとこの問題の悩ましさを共有したいというところがありました。高校にも大学にも、先ほどもラーニングコモンズの話を言いましたけれども、同じところが多分にあるという視点を共有したいというところがありました。そして、どこに希望の光が見えるのか、その一つの可能性を示したいというふうに思いました。

本来セミナーというのは、皆さんに役立つ知識を提供する場という位置づけなんですけれども、今回はこちらの力量不足の関係もありますし、問題の複雑さもあって、その点の課題は多く残っていることはお詫び申し上げたいと思い

ます。残りの時間でぜひ皆さんのご意見も伺ってみたいと思います。

とりあえずはここで、水石先生にバトンタッチしたいと思います。

○水石校長

今日の話題から明らかになってきた部分も含めて、高校として取り組んでいかなくてはいけない課題を提供していただきました。

その視点で確認させていただくと、今の高校生といったときに、本当に成績上位の一部の生徒を除くと、自分に自信がない生徒が非常に多いというのはほとんど間違いありません。そうすると、成功体験をたくさん積ませるところからスタートすることになるのだと思います。

濱中先生から先ほど言っていただいた、いずみ高校を含めた専門高校の検定資格云々というところも、あの短いサイクルで明確に検定に合格する、資格を取るという目標があって、そのためにやることもはっきりしている。だから訓練をしていく。今までやったことがないけれども、内容的には決して易しくないけれども、でも、一生懸命やって受かったとなると、その生徒にとっては非常に大きな自信になります。そうすると、次も頑張れるかもとなるわけです。それが3年後だと先が長くてだめなんですけれども、数カ月というスパンだとそれが回る。だから、それでどんどん自信をつけていく。

個々の知識はピンポイントのところをやっているのですが、いろいろとやっているうちに、意識のある生徒はその知識を統合した形で全体像をつかもうと自発的に勉強し始める。そういう生徒は、その後大学に進学していきます。ですから、とにかく成功体験を積ませる。そうすると、やれるかもと思えてくる。つまり、チャレンジしてみようという気に生徒たちがなってきます。さらに、本気でチャレンジするという機会を、できればたくさん、学校の中でもそういう仕掛けを作りたいと思っていますし、実際全国の高校はいろいろな仕掛けを作っているはずです。

もう一つ、場という話は先ほどあったとおりで、学校生活は一人でやっているわけではありませんし、いろいろなことをチャレンジしたりするときに、常に仲間の存在が前提としてある。それが学校というところです。ですから、一人だと頑張り切れないところも、仲間の存在があって頑張れる、やり通せる、やり遂げられる。その経験が生徒の成長を促すというところが高校教育の場としての効果だと思っています。ですから、ご指摘のテストについても、授業というところを高校はもう一度考えていかなくてはいけないと思います。

○濱中准教授

ありがとうございました。じゃあ、司会の山村先生、お願いします。

○司会（山村）

残り時間あとわずかとなってしまいましたが、残り時間を使ってフロアの方と少し議論をしたいと思います。何か質問などのある方。

○質問者Ａ

僕自身進学校、東大に200人入る高校出身なんですけど、6年間の私立というのは大分感じが違うと思うんですね。実は3分の1ぐらいは話にならない。学習時間なんか0に決まっているし、部活動もやってない。逆に、うちの研究室に来ている学生で、進学中堅よりもうちょっと下ぐらいの私立の6年一貫の女子高から来た学生のほうがむしろしっかりしているんですね。だから、シーズという点で、6年一貫と高校生だけのやつとで大分違うんじゃないかと思うので、その辺は何か調査とかされているのかと、あと、水石先生のほうで、6年一貫というのはまたちょっと違うとか、そういうようなご意見はお持ちなんでしょうかという点です。

○水石校長

高校の3年間といったときに、高校が今苦労しているのは、中学校までに自分の勉強スタイルを身に付けていない、つまり、全て与えられる勉強の仕方をしてきているというところです。これはトップの進学校でも多分一緒です。

今は塾にほとんどの中学生が通っています。そこでの勉強方法というのは、結局授業があって、それを復習してというスタイル。最初に授業で与えてもらって、その復習をして理解して、次の授業にまた行ってという、そういうサイクルの勉強です。つまりまず自分からスタートしてという勉強ではなくて、あらかじめ与えられて、それをやってくるというスタイル。それで

一生懸命やってきている。だから、与えられたことはきちっとやってきますが、自分でどうやって勉強していくのか、自分でどういう時間を作り出していくのか、授業が例えば難しいなと思ったときに、それをどうやって予習と復習で克服するかというところから本当は自分で考えてもらいたい。

昔は多分そんなことは当たり前にやっていたと思うのですが、今はそれができないものですから、多くの公立高校が入った生徒にまずは自分で勉強できるようにというので、学習のためのガイダンスをやったり、学校によっては入学してすぐ勉強合宿をおこなったりしています。中学までとは違うぞ、勉強はこうやってやるんだぞと。

そういう意味では、昔はなかった指導が入ってきている分だけ指導時間がとられますし、生徒も3年間の中で自発的にやっていく期間が短くなってしまうというようなことがあって、それが中高一貫校だと、ちゃんと中学生段階で指導されているのではないかとは思います。

○濱中准教授

実は私、別件の仕事で、開成と灘の卒業生調査をさせていただきまして、そのデータをみますと、同じ私立の中高一貫校、進学校でも状況は全然違うようですね。女子高も、女子高ならではのやり方というのがあるようにも思います。ただ、今回の対象は「公立」の高校です。今回公立に焦点を当てたのは、入試政策への示唆、というところを強く意識したからというのが一番大きな理由なのですが、私立というのは、それはそれで違ったおもしろい世界が繰り広げられていると思います。また、機会があれば、ぜひ取り組みたい課題です。ありがとうございます。

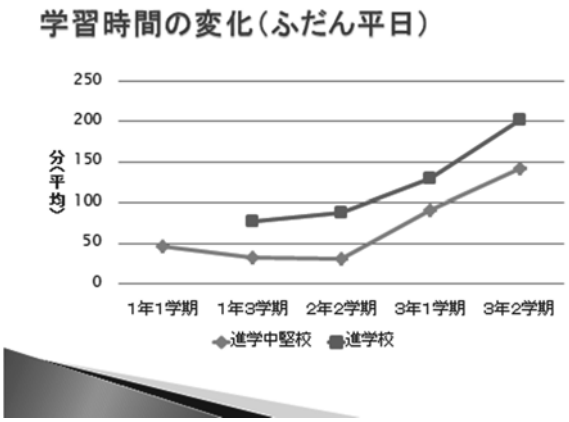
○司会（山村）

それでは、ほかにご質問などありましたらお願いいたします。

○質問者B

濱中先生の2つ目か3つ目のスライドをもし可能でしたら出していただければ。勉強時間で、同一の高校生を4回ぐらい追跡調査しているということですよね。

最初にプロトコルがありましたよね。



○濱中准教授

これですか。

○質問者B

はい。そうです。これは、1年生の1学期から同一の子供たちに3年の2学期まで、勉強をどれぐらいしていますかと聞いているわけですよね。

○濱中准教授

そうです。

○質問者B

そうすると、進学校と進学中堅校は絶対値が違いますけれども、伸び率がどうなっているのか。例えば1回目と2回目の変動は上昇した、減った、変わらない。これを4回やるわけですから、3の4乗分のパターンですよね。そうすると、先ほどからシーズとか部活とか、そういうお話が出ていらっしゃいますけれども、その質的なものの組み合わせでも幾つかのパターン化があって、そうすると、実はこのデータとは全然違った形の質的な調査で追跡していくと、違う形になる。特に伸び率が、いわゆるシーズとかそういうのを持っている子たちは、切り替わってぐっと伸びるのではないかというようなことになってくる。多分ディスカッションの質としては変わらないとは思うんですが、客観的なデータとして絶対値で出してくるよりは、相対的な変動で出されると、より明確なディスカッションがしやすいかなと思って、もし変化率でパターン化するというようなことがあり得ますでしょうかと思いまして。

○濱中准教授

ありがとうございます。先生がおっしゃったことはごもっともだと思います。

このパネル調査のデータですが、３回目までのデータを用いて変化のパターンをみる、ということは試みたことはあります。その経験から１つ､間接的なお答えであるように思いますが、申し上げますと､まず中堅校の生徒さんたちは、高校前半期、7 割が 30 分以下しか学習しない。そして、学習時間をほとんど割いていない生徒さんたちが、いきなり２時間とか、そういう長時間の学習する状況になるということはない、ということです。

ただ、3 年生のこれだけぐっと変わった時期に、改めて今先生がおっしゃったようなことを確認すれば、とても重要な示唆が得られるように思いますので、引き続きやってみたいと思います。

○質問者Ｂ

冒頭のディスカッションのところで水石先生がおっしゃったとおり、中学校のときに同じ時間量勉強していた A 君と B 君が､結果として A 君が進学校へ進んで、B 君が中堅校へ進んだとか、そこのところからの初期値がもし違っていれば、もともとの初期値が違っていれば、今おっしゃったように変化率だけでは多分解決できないだろうと｡むしろ､閾値が多分あるんです。もともとのスタート地点で１時間とか１時間 30 分とか、そういう質を持っている子たちの伸び率、60 分未満とか 90 分未満の子たちの質的な変化率みたいなものが、もしかしたら閾値がある。

だとすると、進学と中堅というのは後から付けたラベルというようなことになりますので、伸び率のところで見ていくと、ぐっと伸びた子たちは、あるいはシーズとおっしゃっていたとおりで、そういうことを持っている子たちはぐっとすごく伸びていくのではないか。だから、一般入試を選んでいくんだというような、ディスカッションする材料としては非常におもしろいんだと思って楽しみにしております。

○濱中准教授

おっしゃるとおり、とても興味深い点だと思います。また引き続きよろしくお願いします。

○司会（山村）

どうもありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

○質問者Ｃ

初めて参加しますので、本当に素人質問で恐縮なんですけれども学習時間というのを一つの指標として、これに対して場の話とかクラブ活動の話とかいろいろなパラメータのご説明があったんですけれども、例えばいろいろなパラメータを組み合わせて、学習時間を一つの目的変数みたいなものと捉えて、何ていうんでしょうかね、変な意味でのベストモデルみたいなものを作られるみたいな、ごめんなさい、そんなような攻め手というのがあるのかないのかというのがまず１つと、それからあと、学習時間は一つの大きな要因ではあると思うんですけれども、すいません、本当に素人質問で恐縮なんですけれども、成績がよくなるというところが一番いい目的であって、長ければ長いほどいいわけではないかなという気もするんですけれども、例えば２時間ぐらいのモデレートな時間があって 4 時間ながら勉強するんだったら、2 時間集中勉強したほうがいいですよ、こういうこともあると思うんですけど、もしこれも例えば過去のデータとかで､いやそんなことはありませんと、長ければ長いほどいいっていうことがあるんだったらば、それを教えていただきたいということと、それからあと、サンプリングデザインなんですけれども、公立校６校でされているかと思うんですが、6 校で十分なサンプリングかどうかって僕そこが最初引っかかって、後から伺ってくると、場みたいなお話が出てくれば、なおさらクラス全体の雰囲気の中でみんなが勉強なんてしちゃってると、相当バイアスがかかってくるんじゃないかなという気がするんですよね。すいません、その 3 点を教えていただければと思います。よろしくお願いします。

○濱中准教授

ありがとうございます。まず１点目、ベストモデルみたいなものが作れるかどうか｡これは、ベストモデルというふうに表現していいものなのかどうなのかよく分からないですけれども、山村の調査設計のところの説明で申し上げましたように、いま、それぞれの生徒さんたちの進路状況を確認している状況にあります。大学に現役で合格したかどうか、一般入試で合格したかどうか、それぐらいのレベルのデータにしか

なってはいないんですけれども、どういった進路決定をした人たちが、どういう学習行動をたどってきたのかということは、幾つかケースとしてパターン化することはできるとは思っています。ただ、これはまだ今情報を収集している段階ですので、今後の課題というふうになるかと思います。

2 点目は「勉強の質」の話ですよね。勉強の質の話は、以前、大学入試センターが開催したシンポジウムで、このデータから高校前半期の学習について話をさせていただいた経験があるのですが、そのときも出た質問でした。「量よりも質ではないか」という質問です。そういう疑問を持つお気持ちはとてもよく分かります。そしてなにより私たちのパネル調査でも、「質」に関するようなものは聞いています。もちろん成績もずっと聞いていますし、あと、勉強方法としても、分からなかったらとりあえず暗記するかどうかとか、分からなかったらまず自分の勉強方法について深く反省してみるとか、考え直してみるとか、そういったようなことも含めて、質を検討することができる項目はいくつか含めています。では、何で今回扱わなかったのかといいますと、とりあえず 7 割が 30 分以下しか勉強しないというような状況で、毎日 1 時間ぐらい勉強するためには、という軸でまず議論をしてみたいと考えたからというところがあります。あと、質を入れると、議論が複雑になりすぎるという問題もありました。ただ、「質」の話はとても大事だと認識しておりますので、改めて「質」に注目したストーリーというのを、いずれ描き出したいなと思っています。

あと、サンプリングは 6 校で大丈夫なのかというお話ですが、これもごもっともなお話です。それぞれ 300 人から 400 人が 6 校で、しかも首都圏というようなところで、地方も含まれていませんし、そういったところでかなりバイアスがかかっていることは確かだと思います。ただ、1 つ言いたいのは、まず、ここまで高校生の学習行動をしっかり追った調査としては、初めてのものだと理解しております。まずその点を強調しておきたいのと、もう一つ、何分この調査は 3 人で回しているということ、それでも高校生のインタビューを入れたいという強い思いがありました。そうすると、高校の数というのも限られてくることもありまして、首都圏 6 校という対象になったという経緯がございます。今後、このパネル調査がどういうふうに発展できるかどうかというのも、申し訳ないんですけれども、今後の課題とさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

○司会（山村）

よろしいでしょうか。既に少し時間が過ぎておりますので、もう一方ご質問、ご意見等ございましたら賜りたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、本日はどうもお忙しいところ本当にありがとうございました。ここで、今日ゲストとしてお忙しい中貴重なご意見をいただき、いろいろお教え下さいました水石先生に、改めて拍手をお願いしたいと思います。（拍手）

それから、クリッカーですが、くれぐれもお持ち帰りにならないようにお願いいたします。なくなると弁償しなくてはならないので、よろしくお願いいたします。

それから、本日のセミナーに用いました資料ですが、出口のところに用意してありますので、よろしくお願いいたします。また、アンケートもよろしくお願いします。

Presented by
山村滋・濱中淳子・立脇洋介（大学入試センター研究開発部）
水石明彦先生（埼玉県立いずみ高等学校・校長）

問い合わせは、下記にお願いいたします。

独立行政法人大学入試センター研究開発部　試験基盤設計研究部門
調査担当：濱中淳子

〒153-8501　東京都目黒区駒場 2-19-23
電話：03-5478-1289　FAX：03-5478-1297　E-mail：chousa@rd.dnc.ac.jp

【編　集　専　門　委　員】

委員長　大　津　起　夫（大学入試センター）
委　員　鈴　木　　誠（北海道大学）
　　寺　下　　榮（静岡大学）
　　川　嶋　太津夫（大阪大学）
　　真　鍋　芳　樹（香川大学）
　　中　島　範　行（富山県立大学）
　　大久保　　敦（大阪市立大学）
　　広　野　修　一（北里大学）
　　小　山　裕　徳（東京電機大学）
　　本　郷　真　紹（立命館大学）
　　言　美　伊知朗（立命館大学）
　　村　上　　隆（中京大学）
　　大　塚　雄　作（大学入試センター）
　　山　村　　滋（大学入試センター）
　　石　岡　恒　憲（大学入試センター）

大学入試研究の動向 第３３号
平成２８年２月 発行

全国大学入学者選抜研究連絡協議会
独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23
独立行政法人大学入試センター総務企画部総務課
電話（03）5478－1216（直通）